

少年成長記

あずき屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦火に全てを焼き尽くされた少年の成長物語。

如何なるものが待ち受けていようと、少年は挫けることなく、その歩みを重ねていく。

全てを失ってしまった彼が求めるものは。

皆さん、お初にお目にかかります。

あずき屋でございます。

今回思い切つて執筆してみました。

正直勝手がイマイチ分かつておりません故、その都度指摘を頂けたらありがたいです。

書いたからにはなるべく続けたいと考えてますので、よければ付き合つて下さいな。

※諸注意として、色々他作品の書き方や表現を参考として使わせてもらつています。尚、私はダンまちは好きですが、はつきり言つて原作知識が曖昧な節があります。おかしな点があつた際はやんわりと、それとなくオブラートに包んでマイルドに言い換えてもらえるとうれしいです。

・ こんな根暗主人公やダワー

・ 文法表現めちやくちややーん

・ 有り触れてるわー

などと思つた方は戻つてくだされ。

難癖や誹謗中傷等の発言はお控えくださいませ。

こんな私でも付き合つてやるかという方に見ていつて欲しいです。

よろしくどうぞ。

P
S

お便りお待ちしておりますよ

目次

序章 | 1

第一章

第1話 少年、オラリオへ到着

23

第2話 少年、記憶を辿る | 43

第3話 少年、女神と出会う | 60

第4話 少年、温かみを知る | 82

第5話 少年、己を示す | 95

第6話 少年、支度する | 109

第7話 少年、買い物をする | 133

第8話 少年、入口に立つ | 154

第9話 少年、叱られる | 175

第10話 少年、命を救う | 201

第11話 少年、標的にされる

222

第12話 少年、邂逅を果たす

242

第13話 少年、決意を顕わにする

267

第二章

第14話 少年、歩み寄る | 294

第15話 少年、欠片を拾う | 314

外伝 新たな年に向けて、尋ね人

来たる | 340

516	第22話	少年、魔の手忍び寄る	496	第30話	少年、彷徨く	723
	第21話	少年、姉と散策す	486	第三章		
	箸休め	少年技録 其の壺	462	第29話	少年、首を啜えられる	674
	れる			第28話	独白と宣誓	
410	第19話	少年、心を溶かす	436	644	第27話	顕現するは憎悪の人格
	第20話	少年、知らぬ所で話題にさ		618	第26話	少年、絶望と再会する
	第18話	少年、甘やかされる	387	590	第25話	少年、絶望に踏み入る
	第17話	少年、思わぬ形で再会する			第24話	少年、揺れる
360	第16話	少年、炎を思い出す			第23話	少年、呼応する
						542
						564

まん									
	916	第38話	我が憎悪は地獄をも飲み込						
		891	第37話	少年、修羅の道へ					
			第36話	少年、一新する	866				
		844	第35話	少年、自覚を深める					
			第34話	少年、渴望す	820				
		797	第33話	少年、その2つ名は					
			第32話	少年、口が回る	775				
			第31話	少年、鳥と戯れる	748				

序章

夢を見た。

家族四人が、楽しそうな笑みを浮かべて過ごしている。

なんてことないありふれた光景。

少年少女が追いかけてっこをしていて、両親と思わしき2人がそれを優しく見守っている。

ありふれてはいる光景だが、それは同時に掛け替えのない情景である。

夢を見た。

彼らの過ごす村が、戦火に包まれていく光景を。

誰も彼もが倒れ伏せ、生気を感じさせない。

人も家屋も家畜も尊厳も自由も思い出も生き甲斐も生命も焼かれていた。

無慈悲に全てが焼き尽くされた。

活気があったと思わしき跡は、血と死体と炎で埋め尽くされた。

醜悪だった。

男はみな無残にも殺され尽くされていた。

焼かれ、斬られ、刺され、殴られて殺されていた。

女はみな悲惨にも陵辱され尽くされていた。

美しかった者はみなその身を汚され、最終的には殺された。

老人も子供も一切の容赦なく、全てが夢だったかのように散っていった。

もう誰かの顔も声も思い出せないが、あの光景だけは鮮明に目に焼き付いている。

全てのきつかけを作ったあの夜の、夢を見た。

かつて、師に聞いたことがある。

神の恩恵を受けた冒険者と呼ばれる者達が、集まって暮らすその街のことを。

集まる理由は様々なのだという。

資金を稼ぎに来たもの、力を求めてくるもの、女を侍らせようとするもの等だそうだ。

欲深いことこの上ないと当初は思った。

夢物語にでてくる英雄たちに近しき力を得ていながらも、そのような下世話な話に転がっていつてしまうのかと。

人間は欲深い故に罪深いと聞いたことがある。

まさにそれを体現したかのような街なのだと、当初は思った。

だが、結局のところ、物事を動かすのは全て欲である。

初めは蠟燭のごとくか細い火のような欲望。

それは、新たな欲望^新を焚べる^新ごとに大きくなり、次第にそのあり方は膨らませていく。

師は言った。

欲望に忠実であることを卑下してはならないと。

我々知性ある生き物は、身に余るものを欲する生き物なのだ。

汚いと思った。

下らないと思った。

気持ち悪いと思った。

なるほどと思った。

その言葉に、抵抗を覚えなくなった自分がいた。

きつと、これから先そういった問答が無数に現れるのだろう。

重要な選択肢を迫られる日が、オラリオを目指す関係なく、等しく誰の身にも降り掛

かってくるのだろうか。

「坊主、そろそろ着くぞ」

「……うん、ありがとう」

馬車に揺られること2日、目的の街が見えてきた。

迷宮都市オラリオ。

神々が住まう都市にして、選りすぐり冒険者たちが集う大規模な街である。

中でも、特徴的なのが巨大迷宮ダンジョンだ。

そこには多くのモンスターが跋扈し、高価な魔石が多く採掘できる場として有名だ。ダンジョンには大きく分けて三つの断層が存在する。

比較的危険度の低く、駆け出しの冒険者たちの鍛錬の場として使われる上層。

中級者から挑んで、帰ってこられるか分からなくなるほど難易度が上がる中層。

モンスターの強さから、一級冒険者たちでも網羅しきれないほどの難易度を誇る下層

と言った具合に分類されている。

そのあまりにも魅力的な場所であるため、多くの冒険者たちが夢を追い、多くの命を散らしてきた魅惑的魔窟。

曰く、何が起きるかは分からない。

曰く、一攫千金も夢ではない。

曰く、鍛錬を行う場所としてことを欠かない。

そのリスクを十二分に理解した者達がこぞつて挑むのが、ダンジョンである。

「しかし坊主よ。

年端もいかんお前さんが、何でまたオラリオへ？

その格好からして冒険者になるつもりなんだろうが……はつきり言つて全然おすすめできねえぞ？

あそこにや命が幾つあつたつて足りやしねえ」

「…まあ、色々じじよがあつてね」

顎鬚をふんだんに蓄えた初老の男性から告げられた言葉は、10歳をすぎた頃の少年に告げるべき言葉としては最もだった。

ダンジョンだけでなく、このご時世子どもの身一つで街に繰り出すだけでもおかしな話なのだ。

「ワシとしちゃあ世話になった上に仕事で立ち寄るから別に送るのには構わんが…。

まあ、坊主の腕なら早々死ぬこたあないだろう。

すまん、老人の戯言として流してくれ」

「うん、ありがとうおじいさん」

オラリオへ向かう道すがら、一つの村に辿り着いた。

泊めてくれるところを探していたところ、何やら慌てふためく村人の姿に出くわした。

話を聞くとところによると、何でもこの男性の孫が森に入ったまま帰ってこないのだという。

その森には鹿や猪だけでなく、熊の体格を優に超える怪物が住んでいるというのだ。大人数人がかりでようやく撤退できるレベルで、子どもが迷い込んだともなれば、結

末は最早絶望的に近い状況だった。

少年は知っていた。

この身で搜索を引き受けようとも、子どもにそんなことを頼み込むやつはそうはいない。

よつほど切羽詰まった状況であつたとしても、大の大人は簡単に首を縦に振らないことを、少年は知っていた。

故に、誰にも告げず単独で搜索に繰り出すことにした。

その方が自分にとって、明らかに行動しやすいことを既に少年は知っていたのだ。

——何故助けよう等と思つたのか

しかし、闇雲に動いては時間を無駄に浪費するだけ。

動く前に、使える情報はないかと思ひ、無作法と思いつつ聞き耳を立てることにした。

「頼む！ワシの孫を共に探しに来てくれんか!？」

ワシにはもうあの子しか……!」

「とはいってもよお旦那、探そうにもどつから手えつけていいか分かんねえぜ。

知ってんだろ？

あの森には猪が可愛く見えるほどのバケモンがいんだぜ？

手っ取り早く探すためにも、何か心当たりはねえのか？」

「……森の入口から右へ迂回していった先にワシしか使わん道筋がある。

以前あいつをそこまで連れていったことがある。

もしかすると……そこから入ったのやもしれぬ……」

「ホントかいそりゃ？」

行くにせよ急いで準備しないと手遅れになっちまうよ！」

「行くやつはすぐに支度しろ！」

松明と猟銃、槍を人数分用意することを忘れるな！」

どうやら、森に入るルートを孫に教えてしまっていたらしい。

幸か不幸か断言は出来ないが目星は立った。

侵入ルートが分かっただけでも僥倖。

早速行動することにした。

——何故他人のために命を危険に晒す行動を起こしたのか

森は不自然な程に静まり返っている。

鳥の囀りも、動物から発せられる草音も何も聞き取れないほどに沈黙している。

まるで何かの機嫌を損ねないようにジツとしている。

この森は、そのバケモノとやらを恐れているように感じる。

物音がない分索敵はしやすい。

だが、こちらの物音も筒抜けであるため一概に楽という訳ではない。自然の中において無闇な行動はご法度。

動物はあらゆることに関して敏感な感覚を持ち合わせているため、自然に慣れていないものの行動にはいち早く察知し、上手く身を隠すか、獲物として捉える。

一方少年の方は完全に自然体となつて注意深く動いていた。

以前村にいた時の狩りの動きを覚えていたのが幸いとした。

極力草むらを避け、動物が辿つたとされる獣道を探しつつ、初老の男性の孫を探していた。

バケモノの痕跡は意外にも早く見つかった。

熊を優に超える体格と噂されるだけあつてか、獣道はほかの動物と比べると大きかつた。

その道中に大きな血溜まりを見つけた。

乾ききっていないところから察するに、まだ時間はそれほど経過していない。

出血量の多さからと辺りへの暴れた痕跡から見て鹿以上の動物のものようだ。

故に、迷い込んだ孫のものではないと判断した。

——何故安心しなかったのか

これを辿っていけば一番の障害をすぐに見つけられる。

相手の行動さえ先に注視していれば、こちらは常に先手を取れる。

思いがけない痕跡を見つけたが、少年は眉一つ動かさず、細心の注意を保ったまま動き続けた。

常に油断はするな。

自分の屍を晒したくなくば常に意識を周囲に張り巡らせろ。

「……………」

故に一切の声を出さない姿勢を貫くことにした。

師の言葉を思い出しつつ、辺りへの警戒は怠らない。

そして、ついに見つけた。

アレが件のバケモノとされるもの。

体格は確かに噂通り熊の比ではなく、明らかにモンスターに分類されるものであった。

熊を3倍ほど大きくした体格に頭に内側へ歪曲した一对の角。

体毛ではつきりとは見えないが、前足は、後ろ足ほど発達していないように思える。

二足歩行を中心として活動するタイプであると簡単に推測することにした。

見つからなければそのまま何事もなく回避できる。

見つかったとしても、その後の対処はなんとでもなる。

バケモノはどうかやら捕らえたばかりの獲物の肉を食っている最中のようだ。

目は血走り、一心不乱に肉に歯を突き立てていくその様は、少なくとも少年の心当たりにはなかった。

野生の動物は、獲物を捉えても決して警戒は解かない。

常に意識を周囲に配りながら捕食するのだ。

だが、あのバケモノには一切のそれがない。

何故なら、この森には、あのバケモノに害をもたらすものがないからだ。

奴もそれを感じ取っている様が、あの大胆な行動から察せられる。

「……（今はおしよくじ中か、よかった）」

これまた好都合な出来事だった。

周囲に気を配っていない相手ほどやりやすいことこの上ない。

それならば、早々にその孫を探し出してこの森を抜けた方がいい。

少年はバケモノの位置をある程度記憶してからその場を離れようとした。しかし、唐突に自然音ではない音が鳴り響いた。

パキッ

何者かが枝を踏み潰した音だ。

それは閑散とした森に響かせるには十分すぎるほどのものだった。

「……ッ?!」

バケモノが捕食する口を止め、周囲へ意識を張り巡らせ始めた。

害するものがないとはいえ、食べられるものであるならば片っ端から頂こうとする算段らしい。

何かが駆けていく。

恐らく件の孫も近くに潜んでいたのだろう。見つかったと思いつぐにこの場を離れようとしたのだ。

だが、それはこの森では悪手。

常に音を放ち続けながら動き回るのは、自分の居場所を伝えながら移動しているようなものだ。

その上に孫は少年の歳と大差ない。

迷い込むような判断能力から推測するに、恐らく向こうも子どもなのだ。

体力に乏しい体では、疲れ果てて動けなくなる時間はそう長くない。加えて緊張と不慣れた足場等の要素を鑑みるに、走れてせいぜい数十メートル程度しか走れないだろう。

「(いそいだ方がいいかもしれない…)」

極力物音を避けるため、少年は木を駆け上り、太い枝から跳び移っていく。

これならバケモノの視界から外れつつ、先回りすることが可能だ。

移動を続けると、少し拓けた場所に出た。

辺りには草木があまり生えておらず、不規則な円を描いたような広場を少年は捉えた。

同時に孫らしき子どもが転がり込んでくる。

途中根にでも足を引つ掛けたか、勢い余って盛大に飛び込んできた。

「キャッツ!!」

女の子が、身体中を土まみれにしながら飛び込んできた。

少年の中では男だろうが女だろうがどっちでも良かった。

ただ、搜索対象が見つかったという気持ちしか浮かばなかったからだ。

「……いいたいみんぐ、なのかな?」

バケモノの先回りに成功し、孫とされる女の子の間に立ちはだかることに成功した。

どれほど迫っているのかは、草木のカーテンで見えにくいだが、大きな足音からすぐ近くまで来ていることは明らかだった。

「え……えっ?」

「いいから、そのまま動かないで」

女の子には、突如現れた少年に対してどのような反応をしたらいいのか戸惑っているようだった。

少年としては、そのまま動き回られるよりかは幾分かマシだった。

「すう……はあ……」

少年は深呼吸をし、深く腰を落として構えを取った。

実を言うと少年は武器と呼ばれるものを一切装備していない。

とある事情により、剣や槍などといった武器を持つことが出来ないのだ。

しかし、少年に対して余計な心配は無用。

この身一つあれば、如何なる相手であろうが必ず斃す。

そう自身に刷り込み、師のもとで懸命に鍛錬に励んできたのだ。

そしてそれは、決して慢心からくるものではない。

培った経験が、少年の心を奮い立たせ、己が力を証明してきたのだ。

「……………くよ」

「■■■■■■■■■■——ツツ!!」

轟音が一つ、鳴り響いた。

「……………あれ？」

そして、少女の反応の後に、もう一つ轟音が響く。

見ると、バケモノの巨体は地に倒れ伏しており、身動き一つ起こさなかった。

あれほどまでに周囲に殺気を振りまいていた元凶は、完全に沈黙を貫いていた。

少年は悟る、仕留めたと。

「……………えっと、ケガは、ない？」

少年から放たれた言葉は、大人たちからよく使われるありふれた言葉だった。男にしては艶のある少し長めの髪型。

少女と変わらない身長に、透き通った蒼い瞳。

黒で統一された衣類の上に、旅人がよく使う外套を纏っていた。

表情に変化を及ぼさず、ただその都度の結果のみを淡々と語るような雰囲気。特質すべきはその両腕に付けられた革製の籠手。

派手な装飾は施されてはいないが、無骨が故に惹き付けられるものがある。

「う……うん。」

大丈夫、だよ？

あなたが助けてくれたの？」

「そうなるのかな？」

まあ、大したケガがなくてよかったね」

「ありがとう、おかげで助かったわ」

少女は最初は吃りつつも、少年に対して感謝の意を述べた。

つい先程命の危険に晒されたというのに、この程度の狼狽えで済むとは、この少女はなかなか肝が据わっているのかもしれない。

「とうか……アレ、もう動かないの？」

「うん、かくじつにたおした。

もう起きないよ」

バケモノは相も変わらず沈黙を保っている。

最早先程までの暴れ様はみられることはないだろう。少年が行ったことは至極単純。

不意打ちがてらの全力の突きを、バケモノの頭に打ち込んだのだ。

どれほど身体が頑丈な作りになっていようが、脳を物理的に鍛えることはできない。

生物は脳を破壊すれば、大概の相手は瞬く間にその命を終える。

この突きがなぜ成功したのかは、バケモノの体重と移動速度によるものが大きい。

早い速度で移動するものが、壁や障害物に直撃した場合どうなるか。早い話、その速度十体重の比率が移動物に全て跳ね返ってくるのだ。少年がしたことはその突き当たるべき壁を小さく、尚且つ自身の力を上乘せして当てたのだ。

一撃で仕留めた理由は挙げればいくつか出てくるが、結局のところそれは、ただの推

測にしなければならない。

バケモノを下したのは少年であるという事実が全てだ。

「さ、帰ろう。」

差し伸べられた少年の手を、おずおずとしながらも受け入れる少女。

バケモノが倒れた理由にはつきりとは分からないものの、少女にとつては助けに来てくれたという理由が分かっているだけで十分なのだ。

そこからはあれよあれよという形になった、と表現する他ない。

無事少女を村まで連れ帰った少年は、村人達から手厚い歓迎を受けることとなった。

食事から寝床まで無償で提供してもらったのだ。

初めは少年が連れ出したなどという疑問が浮いたが、少女の証言によりそれは杞憂に終わった。

そして、オラリオオへ向かうという言葉聞いた村人達は、数日間分の食料と気持ちばかりの謝礼をもらった。

少年には金勘定に関してはさっぱりだったため、その辺はちゃんと説明してもらった。

それが、数日前の話。

「じゃあな坊主。

本当に世話になったな。

これから先は着いて行つてはやれんが、お前さんの武運は祈つとるよ。

達者で暮らせよ？」

「ありがとうおじいさん、元気でね」

「おっと、ちよつと待つとけ。

御守り代わりに、こいつをやろう。

魔除の首飾りだ。

あの子がお前さんにと作つたものだ。

大事にしてやってくれんか」

「……………きれい、だね」

男性、もとい少女から贈られたものは魔石を小さく削つたものを加工した首飾りだつ

た。

光に当たると淡く発光している。

「ははっ、そいつが聞けて十分だ。

ワシは時折仕事でここまでやってくるからな、見かけた時には色々頼ってくれ。お前さんには返しきれん大きな恩が出来たからな」

そういつて男性は乱雑に少年の頭を撫で回した。

丁寧ではないが、それ以上に男性からの親愛が心底強く感じ取ることができた。しかし、少年はどういう反応をしたらよいのか分からずただ、身を委ねた。

「おっとそうだ坊主よ。

最後に名前を覚えてくれんか？」

いずれ、世界に名を轟かすことになるだろう。

未だ幼い少年も、世界も、神ですらも予想し得ない功績を残すことになる。

まだ見えぬ艱難辛苦を前に、少年は答えた。

「ラジエル……。」

名前は、ラジエル・クロヴィス」

第一章

第1話 少年、オラリオへ到着

「ここが……オラリオ？」

門を潜った先に現れた光景は、ある意味壯観言えるほどに見えた。

所狭しと設置された屋台に、人間と獣人が共存している様に、綺麗に裝飾された武器や鎧があちらこちらに展示されている。

もちろんラジエルにとってオラリオのあらゆる側面も初めて見るものばかり。

頭は忙しく揺れ、目も耳も総動員させて辺りの情報を得ようと動きを止めない。

分かりやすく表現すると、初めて遊園地に来た子どもの挙動そのものなのだ。

村で育ち、師の下で娯楽など無縁の生活を10年も続けてきた少年にとって、オラリオは目を惹かれる対象となって当然である。

「ええーつと、まずどこで何したらいいんだろ？」

ねるとこ？

食べるところ？

それとも別の場所かな……」

そして、目的を見失うのも当然である。

雑多とした街中で世間知らずの子どもが入り込んだところで、多くの選択肢を見せつけられて迷う子どもはいない。

宛を見つけれずフラフラと彷徨うばかりである。

「その黒髪の貴方、止まってください」

「……………？」

後ろからはつきりと凜とした声がラジエルの耳に心地よく響いた。

辺りを見回してみても黒髪の人物は存在しない。

後ろの人は誰に話しかけているのだろうか。

それよりも、これからどうするかを順序立てて考えていかねばならない。

不意に肩を叩かれた。

「貴方の事ですよ。」

黒髪は、今この辺りでは貴方しかいませんから」

「あ……俺のこと？」

敵意を感じなかったため、ラジエルは緩やかに振り返る。

そこには、妖精が立っていた。

薄緑色のセミロング、白いシャツにハーフパンツ。

その上にローブを羽織り、茶色のブーツを履いた女性が、透き通るような空色の瞳でこちらを見下ろしていた。

「はい、先程から辺りをキョロキョロしているようですが、どうかしたのですか？
まさか、親御さんとはぐれたりしたとか」

「？」

俺に親はいないよ。

ここまで1人……おじいさんと来たんだけど、もうおじいさんは仕事で帰るって言うてた。

だから、俺はこれから1人だよ？」

「そう……ですか。

……すみません、失礼なことを聞きましたね」

「んーん、気にしないでいいよ。

俺はラジエル・クロヴィス。

よろしくね」

「これは……申し遅れました。

私はリユー・リオン。

よろしくお願ひしますねラジエル」

リユー・リオンと名乗った彼女は、こちらが歳下にも関わらず、姿勢を少年の目元まで落とし、丁寧なお辞儀で佇まいを直した。

とても真面目な性格なのだろう。

先程から少年の身に対しても敬語を使うあたり、その性格が感じ取れるだろう。ところで、彼女は何故ラジエルに話しかけてきたのだろうか。

「リユーは俺に何か用かな？」

「いえ、挙動不審な貴方を見て気になったもので」

「きよどーふしん？」

耳慣れない言葉にラジエルは首を傾げる。

師から武術の教えは受けていたが、学問に関する教えは時間の関係上深くは教えて貰えなかった。

つまるところ、ラジエルは年齢に沿った学問を受けていない。

世間知らずのみに留まらず、かなりの物知らずでもあるのだ。

「それは……えっと、そう。」

ラジエルがキョロキョロしていたので気になったんですよ。
行く場所が分からないのかと思ひまして」

「リユーは優しいんだね」

「……………っ！」

子どもに指摘されたことが恥ずかしかつたのか、ラジエルの一言でリユーの顔は果物の
のように赤くなった。

感情の起伏が乏しいラジエルはあっけらかんと言ひ放つ。

リユーの反応に、ラジエルはまたも首を傾げてしまう。

子どもにして物事をよく知らない少年は、彼女の反応の意味がわからない。

謎は深まっていくばかりだ。

「そうだ。

俺、行きたいところ思い出した」

「そ、そうですか、どこに行くのですか？」

よかつたら私がそこまで案内しましょう。

ここで会ったのも何かの縁でしょうし」

どうやら、リユーはラジエルの世話を焼いてくれるらしい。

親身になってくれる人がいるということは、どうやらこの街はそんなに警戒すべき所ではないのかもしれない。

師は、街は悪意に溢れており、世間知らずはあつという間に彼らの餌食になってしまふのだとか。

因みに、その際にどのようなことをされるのかは教えてくれなかった。

師はいつも通りの柔和な表情を崩さず、それ以上その話題に対して触れることはなかった。

もちろん、ラジエルにはどういう意味があつたのかは理解出来ていない。

ただ、そうなんだと流してしまっていたからだ。

「ねえリユー。」

ダンジョンに行くにはどうすればいいの？」

ラジエルの放った一言により、リユースの表情は一転し、その美しい顔を凍りつかせた。

場所は変わり、喫茶店の中にいる。

この建物の中で一体何をするのか分からないラジエルは、キョロキョロと辺りを伺いながら、暇を持て余した両脚を意味もなくプラプラと揺らしている。

リユースは席につかず、すぐに人が並んでいる列に並んでしまっていた。

ここに連れて来られる前に、リユースはこんなことを言っていた。

『ゆつくりと、お話出来る場所に行きましよう』

手を引かれ、何とも言えない圧力に気圧され、ラジエルはされるがままの格好となった。

何かまずいことを言ってしまったのかと思つた少年は、思い当たる節がないかと思案する。

しかし、学の足りない少年の頭をいくら捻つたところで、明確な答えなど出るはずも

なく、フラフラと頭を揺らし続けている。

丁度煮詰まって来ている最中、ようやくリユールが戻ってきた。

「お待ちせしました。

まずはご飯にしましょう。

お腹が空いているでしょう？

いっぱい食べてください」

「うう………ありがとう。

いただきます」

「はい、頂きます。

つてこら、そんなに口に詰めてはいけません。

もつとよく噛んで食べなさい。

喉を詰まらせても知りませんよ？」

「んー、らごじゅん」

「口にもものを入れたまま喋らない。

お行儀が悪いですよ」

「んー」

リユーが持つてきてくれた食事は、どれもこれもラジエルにとって物珍しいものばかりだった。

ミートボールがゴロゴロと入ったパスタに、山盛りのサラダ。肉汁が跳ねる程に熱せられたハンバーグ。

温かく、甘いコーンスープなど、どれもこれも初めてだった。

初めての美味しそうな香りが鼻腔をこれでもかと刺激してくるため、ラジエルは何の警戒もなしに食べた。

食べに食べた。

その口を目一杯の食べ物で詰めて、ラジエルはオラリオで初めての食事を、見目麗しい女性、リユーと過ごした。

表情の起伏が乏しい少年も、この時ばかりは幸せそうな顔をしていたように見える。

「ん……んっ、ぷはあ。

ごちそうさまでした。

お腹いっぱいになった」

「随分と涼しい顔をしていたように見えましたが……まあいいでしょう。

はい、ごちそうさまでした。

気に入ってくれたようで何よりです」

締め水を飲んで食事を済ませた少年は、パンツと手を合わせて食べ終わった挨拶をした。

声に抑揚があまり感じられなかったラジエルも、満腹になった時の声は、幾分か弾んでいるかのように聞こえた。

「それ……で、リユール？」

「お話ってなに？」

「はい。」

初めに貴方は、ダンジョンに行きたいと言っていましたね？」

「うん、そうだね。」

それがどうかしたの？

何かいけないこととした……のかな？」

「最初に聞きましたよ。」

ラジエル、貴方はダンジョンがどういふところなのか知っていますか？」

「……うん？」

改めて見直してみると、どこからどう見てもただの子どもにしか見えない。

ぱっちりとした子ども特有の大きくなりつつとした瞳は、しっかりとこちらを見つめている。

それにしても、私も人のことは言えないが、私以上に感情に起伏が少ない子だ。

両親がいないと言っていたが、感情の変化が薄れてしまったのは、もしかするとそれが原因なのだろうか。

ラジエルが何を考えているのか分からない。

それを確かめるためにも、ゆっくりと話せる場所に連れてきたのだ。

「知ってるよ。」

モンスターがいつばいいて、ませき？ってというのがいつばい取れるんだよね？」

「まあ…間違つてはいませんが、それだけではありません」

それを聞いた時、私はますますどういった目的で彼がオラリオまで来たのか分からなくなつた。

成熟した者が同じ言葉を口にすれば、一攫千金を夢見た愚かな新参者なのだろうと心の内で一蹴しただろう。

しかし、彼は違う。

ラジエルは金勘定も出来ない上に、言葉も流暢に話せない。

加えて、ダンジョンに次いで有名なバベルの塔には一切興味を示さなかった。

この世界で最も高く、多くの神々が住まう塔に関しては全く興味を示さなかったのだ。

彼が目指している場所はただ一つのみ。

巨大迷宮、ダンジョンだ。

確かにラジエルの言ったことは、大まかではあるが間違っではない。

あの穴の中には無数のモンスターたちが蔓延っており、高値で取引される魔石をチラつかせて、それに惹かれてきた冒険者の命を幾つも飲み込んできたのだ。

そして、気をつけるべき点はモンスターだけではない。

そこに関与してくる冒険者たちもまた危険な対象として見られることが多いのだ。

邪な思惑を持つものは後を絶たず、人目に触れにくいことを逆手に取って、下衆な考えを持つ輩がいる。

そういつた冒険者が、ある意味モンスターよりも危険なのだ。

モンスターに気を取られている際に手荷物を盗まれることなど日常茶飯事。

加えて冒険者同士の諍いもよくあることだ。

ダンジョン内は人目が少なく、冒険者を殺めても死体の処理はモンスターたちが勝手に食い荒らしてしまうため、誰が殺めたか分からず、事を有耶無耶に出来てしまう。

つまるところ、暗殺にはうつつつけの場所といってもいい。

手を下した犯人は、意気揚々とした感情を秘め、人前では力が足りなかったから助けることが出来なかったと嘯くのだ。

そんな悪意渦巻く穴蔵に、年端もいかない子を送り込むわけにはいかない。

「貴方はお金を求めて来たのですか？」

「んーん」

「では、名声を求めに来たのですか？」

「めーせー？」

「違いますよね……」

念のため確認を取ったが、間違いなく嘘を付いていない。

私も神ほどではないが、人の嘘はある程度看破できる。

この少年にはそういった邪念が全く見えない。

子どもならではの純新無垢さというのがあるせいだろう。

そして、確信した。

この子は恩恵はおろか、ファミリアにすら所属していない。

私は自己紹介の際、自身が所属するファミリアの名前を公言しなかった。

初めに名乗った彼が名乗らなかつたからだ。

当初は素性を隠すためなのかと疑いの目を向けたが、彼は私の所属するファミリアの名に關して一切触れてこなかつたばかりか、何も不審がる様子もなかつた。故に確信に至った。

また、こちらの言葉を何となくだが理解はしているのだろう。

分からない単語には首を傾げるが、何となく雰囲気のようなものは感じ取れると思われる。

ここまで話をしている、ラジエルという少年の仕草が分かつたような気がする。

彼は自分の考えと一致しないような言葉に対して、首を傾げる癖があるようだ。

大きい瞳は少し狭められ、私が何を言っているのか考えている。

「なら、貴方はこのオラリオに、一体何を求めてきたのですか？」

「……俺にも、よく分からないんだ」

「……どういふことですか？」

貴方はダンジョンが危険な場所であることも理解せず、むざむざ命を危険に晒しに
来たと、そう言うのですか？」

「……………」

厳しく叱りつけるかのように、ラジエルを諭した。

どうやら、彼は自分の行動に関してはあまり深く考えを持たないらしい。
自分が選んだ行動がどういった結末を辿るのか、想像はしないのだろう。
私にここまで彼の行動に関して突つくと、途端に黙り込んでしまった。
ラジエルはシユンとして俯いてしまった。

その姿に胸が痛むものの、ここは引いてはならないと思いき心を鬼にする。

「……私には、貴方がどういう思いを持ってここまで来たかは分からない。

知り合ったばかりなのですから、当然といえば当然です。

以前にも貴方のように自分の考えをハッキリさせないままダンジョンに潜り、死んでしまった冒険者を、私は見てきました。

決して、少なくない数を……。

ラジエル、私は貴方を知らない。

だからこそ、貴方を理解したい。

貴方の気持ちの方が本当にダンジョンに潜るだけの価値があるのだとしたら、何も言いません。

だから、話してくれませんか？

貴方の今までのことを」

「俺の………はなし？」

「はい、覚えていることだけでいいですよ。

このオラリオへ旅をしてきたことより前の話を、私はラジエルから聞きたい。

人の心に土足で上がるような真似も、余計なお節介であることも理解しています……。

ですが、私は、リユー・リオンはラジエル・クロヴィスを放っておけない。

さあ、教えて下さい。

貴方をここまで動かしたその理由を」

「うん、いいよ」

私は、ラジエル・クロヴィスのこれまでの話を聞いておきたかった。

例え傷つけることをしたとしても、小さな子どもの命には替えられない。

辛いことを話させるかもしれない

傷を掘り返してしまうかもしれない。

悲しませてしまうかもしれない。

無論、私もタダでは引き下がらない。

この少年の力になるまで、私もとことん付き合います。

そして、私はこの話を聞いて後悔することになる。
この少年の抱えるものが、想像を絶するものであることを、私はまだ知らない。

第2話 少年、記憶を辿る

どこから話したものかと視線を宙に泳がせるラジエル。

彼は年齢に沿った学問を受けていないということもあつてから、あまり言葉を流暢に話せない。

文法の基本も修めきれていないのだろう。

不慣れでたどたどしい言葉だが、伝えようと必死に紡ぎあわせていく。

「んー……でも、あんまり俺もよく覚えてないんだよね。

今より、すつごく前だから……。

でも、一つだけ、よく覚えてるよ。

真っ赤なけしき」

「真っ赤な景色……ですか？」

「うん、すつごく赤くて熱かった。

みんな燃えちゃった。

みんな死んじゃった。

みんな、真っ赤になっちゃった。

それしか、見えないくらいに」

「それは……………」

それは間違いなく、故郷が戦火に包まれたということだろう。

ラジエルの話はあやふやで、言葉足らずで、とても現実味が薄い。

少年の顔は、先程同じように表情に変化がない。

無表情から淡々と告げられる、彼の故郷の結末を。

恐らく、それは全て事実なのだろう。

全て燃えた。

全て死に絶えた。

全て赤で埋め尽くされた。

全てを失った。

文字通り、何もかもを失った。

家族、家も友も思い出も故郷すらも、一夜にして全てを失くしてしまったのだ。

ラジエルは、何もかもに置き去りにされて、ある日唐突にありふれた日常を奪い去られたのだ。

まだ、幼かったであろうその小さな体を、世界という果てしない空間に放り投げて、非情な現実を叩きつけた。

それが、どれほどの悲しみや痛みになったのかは知る由もない。

その幼い身では到底受け入れられるものではないからだ。

成熟した者であっても、長い年月をかけてようやく向き合う事が出来るものだ。

恐らく彼自身にも分からないだろう。

だが、恐らく受け入れようとしたのだろう。

しかしその結果、幼く未成熟なラジエル・クロヴィスという器では耐え切れず、感情と記憶に鎖を繋ぐことで、辛うじてその小さな理性を保ったのだ。

推測ならどうとでも挙げられる。

少年を突如襲った災厄は、故郷や家族だけではなく、彼の記憶と感情をも奪い去ってしまった。

「……………」

端的に表すのであれば、これで事足りてしまう。

リユーからしてみれば、もうその言葉だけで全てを察してしまった。

淡々と、世間話の内容のように告げられた話に、リユーは言葉を失くした。

僅かな沈黙が何倍にも引き伸ばされたかのような錯覚に陥った。

掛ける言葉が、見つからない。

何を言っても綺麗事や侮辱の意味になりそうになることを恐れて、リユーは言葉を発せられない。

リユー・リオンは、誇り高き賢人の血族、エルフ一族のうちの一人だ。

エルフはその気高い血族であることから、他種族を見下しがちになる傾向にある。

純血に近ければ近いほど、その傾向は強く表れ、自分たちの一族以外交流を絶とうとする集落まである。

故に他種族との肌の接触すら嫌悪し、軽蔑の視線や拒絶による敵対行動など、突発的

に行つてしまふ者も少なくない。

高い知性に男女問わず他種族を魅了する美貌。

その全てを兼ね備えていると言つても過言ではない一族を、リユーは心の底から嫌悪していた。

自分たち以外の種族を下に見るその姿勢にリユーは耐え切れず、集落を飛び出した。

肌の接触による嫌悪感は、親密を持った相手以外は持たなくなつた。

だが、魂にまで染み付いたようなエルフ特有の傲慢な姿勢を、リユーは長年経つた今でも切り離せないでいる。

それを抜きにして、リユー・リオンという女性には心優しい性格をしている。

ラジエルのように困つた者を見れば放つておけず、手を差し伸べたくなる優しい心を持つている。

弱きを助け、強きを挫くその在り方である故に、正義のファミリアの代表格、アストレア・ファミリアはリユーにとつてこれ以上ない居場所となつている。

正義のファミリアに所属しているからではない。

リユー・リオンという存在だからこそ、捨て猫のようになってしまつたらラジエルを放つておけなかつたのだ。

「もうみんなの顔も思い出せないけど、あのコーキーだけは、はっきり覚えてるよ」

「……………分かりました」

「おとーさんもおかーさんもいもーとも、みーんな燃えちやった」

「……………もういいです」

「みんな真っ赤な水だらけになって、外でねて」

「ラジエル!!」

「……………えっ?」

彼女からしたら、有り得ない行動だっただろう。

エルフからしたら、考えられない事だっただろう。

周囲からしたら、理解できない光景だっただろう。

少年は、エルフに包まれた。

そこには微かな震えがあった。

少年のものではない。

リユー・リオンの悲しみ故の感情。

同情や共感によるものもあつたかもしれない。

だが、そこには確かに、ラジエルに対する慰めと賞賛の意が込められていた。
こんな小さな子が多くの人の死を間近にするなんて。

よくここまで頑張つたねという優しさの形を、リユーは少しでも示したかつた。

「……リユー？どうしたの？何か悲しいことでもあつたの？」

「……………よく、ここまで頑張りましたね。偉いですよ、ラジエル……」

「えらい？」

でも、なんか……あつたかいな」

きつと、両親の愛情を満足に受けていない。

人の温もりも優しさも、ラジエルは何も知らずに今まで生きてきたのだろう。

今日という日まで、子どもとしての在り方を享受することもできず、ただひたすらに耐え抜いて生き残った。

ここまででも充分頑張ったほうだ。

だが、やはり少年が一体何を求めようとしているのか尚更確かめねばならない。

苦痛伴うこれまでの短い人生を辿ってきて尚、どこへ向かおうとしているのか。

これからも深く傷つくその茨の道を選んで尚、何を目指すのか。

少年への抱擁を解いて、互いの眼をしっかりと合わせながら向き直る。

「ラジエル、改めて聞きます。

貴方はダンジョン……いえ、オラリオに何を求めに来たのですか？

もう一度、貴方の口から答えが聞きたい」

「……………分からない。

俺は、それを探しに来たんだ」

「……探しに、来た？」

「ししよーが言ってた。」

答えをもとめるならオラリオへ行きなさいって。

きつとそこに、大切なものがあるって」

「そういうことだったのですか……」

少年は、これから自分が一体何をすべきなのか、何を求めるべきなのかを探しに来たのだ。

果てのあるか分からない複雑怪奇な数式の先に、解を求めてここまでやってきたのだ。

それは、ある意味途方もない旅路になる。

その生涯を賭しても見つからないかもしれない大航海に身を縋り出すというのだ。

答えは見つからないかもしれないし、手に入れた答えが自分の望んだものではないかもしれない。

見つかる保証も何も無い、全てが手探りの途方もない所業。

この歳にして既にその気構えがあるというのか。

若過ぎるが故の無知というやつではないのか。

「見つけたいんだ」

「……………なんて」

なんて、曇りのない眼なのだろうか

答えが見つかる保証がないのはこの子だけではない。

皆それを承知の上でこの街にやって来たのだ。

ラジエルに限った話ではない。

幼過ぎる身であるが故の偏見を持ってしまったことに、リユーは深く反省した。

そういうった想いを持つことは悪いことではない。

ただ、その想いを抱くには早過ぎたということ。

まだ、彼には経験が足りなさ過ぎるからだ。

故に、リユールはある決断をとった。

「貴方の気持ちは分かりました。

なら、私がお手伝いをしましょう。

その大切なモノを、私も一緒に探します」

「てつだって……くれるの?」

「はい、ウソじゃありませんよ。

指切りしますか?」

「……うん、しよっ?」

「ユービきりげんまん、ウソついたらはりせんぼんのーます。

ゆびきった」

勢いで提案したはいいが、いざやるとなると気恥ずかしくなる。

リユーは頬を赤らめつつも、少年と約束を交わした。

子ども同士が約束の証として行う指切りげんまん。

子どもっぽいものではあるが、本人達にとってはとても大切な一つの儀式のようなもの。

その繋いだ小指に、目に見えない絆の糸を繋げて、交わした相手と信頼を預け合うのだ。

「もう、ひとりぼっちじゃ、ないんだね……」

「……………ええ、ラジエルはもう独りじゃありませんよ。

約束ですからね」

「うん……ありがと、リユー」

今一度少年を温もりが包む。

リユーは、胸に埋められている箇所、何やら温かい雫が滲んだ気がしたが、気のせいと思いついで見て見ぬ振りをすることにした。

ふと、盗み見る少年の姿は、この時ばかりは歳相応の子どもに見えた。

ある程度時間が経った頃、2人は喫茶店を後にし、これからすべきことを順序立てて考えることにした。

「ラジエル、ダンジョンに入ることでより先に、やらなければならないことがあります。何か分かりますか？」

「えーつと……じゅんびうんどー？」

「そういうことではないのですが……いえ、ある意味準備運動で間違っていないかもしれませぬ」

「むー？」

屈んでいたリユーは、それも一理あると考え頷いた。

確かに、準備運動のようなものをしておくのもいいかもしれないと考えた。

この少年がどれほどの力を現段階で修めているのか知る必要があるため、事前に少し手合わせをすることを念頭に入れておく。

だが、順番的に恩恵を受ける手筈を先に済ませた方がいいだろうと結論付けた。

その方が、ラジエルにとって混乱しない道筋になる。

故に、今とるべき行動は一つだった。

「ラジエル、まずファミアリアを探しに行きます。

そこで、貴方の家を確認……見つけます。

ご飯を食べて眠れる場所を見つけるのが今一番にしなければならぬことです」

「ふぁみりあ？なに、それ？」

「それは歩きながらお話ししましょう。

もうお昼過ぎになってしまった。

時間も惜しいので、目的の場所へ行くまでの間にお話しますから」

「うん、わかった」

「では、行きましょうか」

ごく自然に、リユーは手を差し伸べる。

何故だかラジエルと触れ合うことに嫌悪感を覚えることはなかった。

彼の過去を聞いた後で抱いたものではない。

彼が子どもだからという事でもない。

何故か、彼にだけは最初から平気なのだ。

リユーは、それがとても嬉しかった。

ラジエルという子に対して気軽に触れ合い、互いの気持ちを確かめ合うような感覚に、忘れかけていた心地良さを思い出したからだ。

彼を助けたいと思い、手を差し伸べたつもりだったが、先に一つ助けられたのは自分の方だった。

人間や他の種族の者達が当たり前に行っていることを、自分も出来て嬉しかったのだ。

やはり彼には、どこことなく不思議な印象を感じる。

周りをやんわりと包み、人を惹きつけるような何かを持っているのだ。

凄惨な過去から、記憶や感情が薄まったとしても、その在り方は変わっていないのだらう。

この少年は将来、大きな偉業を成し遂げるかもしれない。

リユーは考え過ぎと思いきや軽く頭を振り、すぐ隣で歩いている少年に目を向ける。

「んー？なにに？リユー」

「……いえ、何でもありませんよ」

何のことだか分からないラジエルを脇目に、微かに破顔するリユー。

その時の顔は、何人もの通行人が振り返るほどに美しかった。

エルフとしてのものではない。

純粹な嬉しさという感情を、1人の女性として浮かべたその表情が、多くの者の心を魅了した。

しかし、彼女はそんな彼らには一瞥もくれない。

ただ表情を見ただけで全てを分かっただかのような素振りである者達には何の気持ちも抱かない。

この日、リユーはオラリオで最も輝いていただろう。

その手に握る小さな手が、彼女の笑顔を引き出している。

その理由を知るものは、リユーをおいて他に知り得なかった。

第3話 少年、女神と出会う

ファミリアとは、神を中心に冒険者達が集った一つのグループのことを指す。

頭目であり、ファミリアの象徴たる神を「主神」と呼び、そのファミリアに所属する冒険者達のことを「眷属」と呼ぶ。

眷属である彼らには、主神から「ファミリア神の恩恵」呼ばれる神直々の恩寵が与えられ、それを数値化し、可視化したもの「ファミリアステイタス」を取得する。

恩恵は、刻まれた者の経験値にエクセリア応じて刻印者の能力を向上させる特殊な力をもたらす。

恩恵によって与えられる力は多岐に渡る。

まず、刻印者の基礎能力といえる「基本アビリティ」と呼ばれるものから始まる。

単純な力を指し示す「力」、身体の頑丈さを指し示す「耐久」、素早い行動を指し示す「敏捷」等といった、冒険者の持つ潜在能力を飛躍的に向上させる。

これらは、それぞれに当てはまる能力をどれほど行使したかによって上昇率は異なっ

てくる。

重い物を持ち上げ続けていれば「力」が上がり、攻撃を受け続ければ「耐久」が上がるといった具合になる。

これはその個体の持つ能力を数値化し、向上させるものに過ぎない。いつてしまえば、神が手を加えたことで本人が持ち得る能力の可能性の開花をを引き出している。

次に、ある特定のを対象とした際に大きな力を発揮する特殊なアビリティ。

長い経験や濃い密度の経験をした際に発現するものがある。それが「発展アビリティ」というものだ。

ランクアップ時に一つ発現され、刻印者がよく使うものに対してアビリティ上昇補正がかかるものが現れる。

例えば剣をよく使用する者に対しては、剣を用いた際に能力向上の補正がかかる「剣士」として示されたり、自身の拳や身体を行使するものには「拳打」などといったようになる。

いふなれば、刻印者の好むスタイルに沿った形で発現していくものである。

このアビリティは未だに限りが存在しないらしく、年々僅かではあるが他者とは異なったものも発現するそうだ。

冒険者の数だけその可能性があるため、不変不滅にして年中娯楽に飢えている神たち

からすれば垂涎のものとなる。

ここまでが戦うための地盤作りに過ぎない。

冒険者には、己の存在を誇示し、世界に示すべき固有の能力が必要だ。それを「スキル」と呼ぶ。

これこそ、冒険者の努力の結晶であり、己の命運を左右させる固有の能力である。

発現した刻印者の行動や能力に対して、限定的にステータスに補正をかけるものであったり、ある特定の条件下で発動するなどといった具合に内容は様々だ。

前提として、冒険者全てに対して発現するものではない。

冒険者の中でも、特筆した者たちが発現させる特殊なものなのだ。

いくなれば、^{危険}冒険に踏み入れたものでなければ発現せず、中には目覚めない者も存在する。

基礎アビリティや発展アビリティのように、何かを使い続けた結果発現するといった具合に、一概には断定は出来ず、発現した理由は様々なため、こういった条件下で目覚めるかはハッキリしていない。

ただ、発現したうえのもたらす恩恵は凄まじく、時には窮地を脱する手段ともなり得る。

活かすも殺すも冒険者次第になるが、発現した時点で間違いなく、有象無象のうちの

1人から逸脱することになる。

スキル名は異なるものの、内容が似通ったものも報告の中では少なくないため、多くの者の根底はほぼ同一のものが多い。

最後に、超常現象を引き起こす奇跡を持つ特殊な力がある。

言わずと知れた「魔法」だ。

火を巻き起こすものもあれば、対象者を治癒するもの、時間限定ではあるがステイタスに補正をかけるものと様々である。

文字通り奇跡を引き起こすものであるため、これを保有する者はスキル保有者を下回るほどに貴重な存在である。

そして、中にはどの報告にも属さない特別中の特殊なスキルやアビリティが存在する。

それらを「レア」と呼ぶ。

レアアビリティやレアスキルにはどの性質とも異なるものとされるため、発現の確率は非常に低い。

故に、それが発現し、周囲に露見した場合、オラリオ中の者達から好奇の目で晒され、挙げ句の果てに追い回されるといふ情報も存在する。

そうした状態を避けるため、冒険者の中での共通による認識が、ステイタス秘匿姿勢

である。

所謂個人情報として認識され、冒険者たちの間ではプライバシーのうちのひとつとして、各々踏み込むことのないように遵守している。

「……………」と言ったように、冒険者には色々な力が与えられ、色々なことが出来るようになります。

簡単に説明したと思いますが…………大丈夫ですか？

理解できましたか？

説明が長くなって着いていけない部分などありましたか？」

「んーん、おかげでよく分かったよ。

いろいろなスキルがあつたり、色々なまほーとかがあつて、それをほかの人に見せちゃいけないんだよね？」

「その理解で大丈夫ですよ。

偉いですね、口で説明しただけでこうも理解が早いとは恐れ入りました。

怪しい点や細かい点は、後でテストなりすればいいでしょう。

それに、情報は知れるだけ知っておいて損はありません。

まだまだ知るべきことが山積みですけれども、冒険者になる上には決して無視できないことばかりです。

私も一緒ですから、頑張りましょう?」

「うん、リユーが教えてくれるからがんばれる。

もつと色々教えて?」

「ええ、お安いご用です」

まるで仲睦まじい姉弟の代表のようなやり取りを見せつけるラジエルとリユー。

不器用ながらも弟の身を案じ、甲斐甲斐しく世話を焼く姉。

物分りがよく、素直に姉に応える弟。

手を繋ぎながら明るいやり取りを行う2人は、周囲からの視点では、まさしく仲の良い姉弟の画であった。

しかし、楽しい会話とは裏腹に、ファミリアへの入団進行状況は芳しくなかった。

『すまん！』

入れてやりたいのは山々なんだが、うちにはそこまで余裕がなくてな……』

『ああ、いいぞ。』

入団試験は1ヶ月後にやるから日取りは……』

『え？オラリオに来たばかりの新参者？』

おいおい勘弁してくれよ、流石にそこまで面倒は見きれないぜ……』

『うちは商業系よ？』

その子には合わないんじゃないかしら……』

理由は様々であったが、皆遠回しに入団を断る姿勢でいた。

中でも、ダンジョンに潜る際、自分たちにも危険が及びかねないという理由が数多く見受けられた。

だからこそ、少しずつ親睦を深めて一致団結していくはずなのだが、一理あることは確かだった。

戦闘センスがないものや臆病な者、変に自己中心タイプを万が一にでも引き入れてしまった際は、後々手痛いしつぺ返しを被る可能性も否定はできない。

ラジエルが表情に変化を見せずに、めげないで健気に歩き回る横で、リユーは僅かな怒りと焦燥感に駆られていた。

何故今にでも少年の力を確かめようとしなのか。

何故見た目で判断しようとするのか。

誰一人としてラジエルに歩み寄ろうとしない者たちに向けて、リユーは軽蔑と失望感を帯びた眼で見ている。

そんなリユーの心情をいざ知らず、件の少年は極めてマイペースだった。

凶太いと言うべきか、変に打たれ強いのだ。

「そっか、ありがと。

じゃあ次行こ？」

断られる度、ラジエルは決まってそう口にした。

悔しがっているのか残念がっているのかは顔を見る限り断言出来ないが、一つのファミリアに対してそれ以上踏み込むことはせず、食い下がろうという姿勢も見せなかつ

た。

これまで入団希望をしてきたファミリアの数は軽く見積もっても二十余り。それ以降、リユーは数えることを放棄した。

いつの時代でも、独り身に対する風当たりは厳しい。

リユーは自分が一緒に着いて行かなかつたら、この子はどうなっていたのだろうかとな想像してしまい、ゾツとした。

路地裏で力尽きている少年の小さな姿の幻想を頭を軽く降って振り払い、これからどうするべきかについて考えを改めた。

沈んでいる時こそ、前向きになろうという気持ちが大切だ。

何とかなるといふ無責任な姿勢をリユーは好きではないが、如何せんそうでもしないと気が滅入ってしまいそうになることは確かだった。ふと、空を見上げると夕焼けが爛々と輝いていた。

時期に夜の帳が落ちようとしているのだ。

これ以上の散策は効率が格段に落ちると判断したりユーは、ラジエルに問いかける。

「ああ、もうそろそろ夜になってしまふ。

ラジエル、宿の宛はありますか？」

「んーん、まだ見つけてない。

でも、俺はどこでも寝られるから別にいつかなって」

リユートのファミリアに厄介になるという選択肢は最初から持っていなかったのだらう。

そこまで世話になるつもりはないという彼なりの強がりなのかどうかは分からないが、放っておいたらどこへ行ってしまうのか未知数なため、リユートはそれを恐れた。

旅好きの野良猫のように、辺りをフラフラと歩き回り、常に寝床を転々とする姿勢。つまるところ、ラジエルは根無し草なのだ。

それを聞いた後に宿の確保もせずに入団できるファミリアを探しに連れ回してしまつた手前、野宿させるのは心苦しい。

それほどまでに、リユートはいつもの冷静沈着な姿勢を崩してしまっていた。実に彼女らしくなかった。

リユートの性分として、目を離れた際に厄介なトラブルを引き起こされるよりも、目の届く範囲に自分がいた方が良いと考えた。

「ラジエル、私にいい考えがあります」

「むー？」

光指すところには闇が忍び寄る。

正義あるところに悪がある。

世界には必ず対となる概念、二項対立が存在するという。

遙か極東の異国にて発祥した陰陽というものがその代表的なものとして挙げられるだろう。

つまるところ、世界には二項対立が存在し、日々終わりのない対立を繰り返しているといった話があるのだという。

この迷宮都市オラリオにおいても、その対立が行われている。

この都市内にあるファミリアは性質的には善がその大部分を占めている。

進んで周囲に対して害を与えるような行動を起こすものはこのオラリオ内にはほとんどいない。

しかし、物事には例外が存在する。

この街にも闇が潜んでいるということ。

それは空気であり、意識であり、また全でもある。

多くの者は、その心の内に闇を宿す。

大半の者は、その闇と日々戦いながら、日常を送っている。

しかし、中にはその誘惑に乗ってしまった者、育った環境によりそれが善と思いついてしまった者などがある。

その心の大半を闇に支配されてしまった者達が集うファミリアが「^イ闇派閥^ス」である。

邪神と呼ばれる神を中心に悪に取り憑かれた冒険者たちは、他の冒険者や一般人に対して非道な行いを繰り返す過激派として危険視されている。

ギルドの警告すらも跳ね除け、手当たり次第に周囲を傷つけていく。

都市そのものに対して猛威を振るう彼らの所業は決して無視できるものではなく、彼らに対しての抑止力的存在が、傍若無人にして危険極まりない冒険者たちの行動を抑制することとなる。

その中の一つがアストレアファミリアだ。

神アストレアは正義と秩序を司る存在であるため、彼らの所業に対して異を唱え、闇派閥壊滅に対して日々尽力している。

リユーもまたそのファミリアの中で、日夜活動し、今や新たな第一級冒険者候補とされ、期待を集めている。

身の丈程の木刀《アルヴス・ルミナ》を用いて、誰よりも速く駆け巡り、どんな強敵をも粉碎する風魔法を操る戦いぶりから、オラリオにおいて数人しかいない魔法戦士の役職を持つ。

そして、視認出来ないほどの速度で敵を翻弄する様から「疾風^{リオン}」の二つ名を有する実力者。

それほどまでに有名な彼女は、あらぬ噂を立てられたとしても不思議ではない。やれ恋愛に興味はない、やれ冷徹女など散々な物言いを陰から言われてしまっている。

有名になっていくにつれてそういった物言いは避けられないのが世の常である。いまの今まで男性が絡む話は全く関わってこなかったリユー。そんな彼女が子どもとはいえ、男の子を連れていけばどうなるかというところ。

「リユー！その子誰?!」

「アストレア様ああ!!リユーが男の子連れてきた!!」

「うわあ……ちっちゃくて可愛い……」

「……………ハア」

「リユー、このひちやちじやれ？」

アストレアファミリアヘラジエルを入れ、一分も経たないうち黄色い声が建物中に広がっていく。

何を隠そうアストレアファミリアの眷属の全てが女性なのだ。

恋愛の話に関して興味津津なのは、どれだけ年齢を重ねようとも変わることはない。

一瞬で質問攻めに遭うリユー、姿が見えなくなるくらいの数の眷属たちにもみくちやにされるラジエル。

正義と秩序を掲げるアストレアファミリアのホームが、リユーとラジエルの組み合わせを見た途端に混沌とした状況を作り出してしまった。

ある程度予想はしていたが、予想が的中したからといってなんの気休めにもならない。

精々多少の気構えが出来た程度だ。

「その話は後で聞きますし答えます。

リーヴァ、アストレア様に話があるのですが、今どちらに？」

「えへへー、キミはリユーとどういうカンケーなのかなあ……え？

ああ、アストレア様はちよつと大事な話があるって応接間にいるよ。なんか最近現界してきた神様と話してるんだって」

「……前半部分は聞かなかったことにします。

ありがとう、では話は後にしましょうか。

今はこの子に夕飯をと思って連れてきたのですが」

「ああ夕飯ね！

このリーヴァさんにまっかせなさい！

とびきり美味しいの作ってあげるから！

ヨルネ、アルフ手伝ってー」

「は、はい！がんばりまふ！」

「とりあえずジャーキーが食べたいなあ……とりあえず山盛りで出そう」

リーヴァと呼ばれた女性はやる気を十分に漲らせて夕飯の支度に取り掛かる。

リーヴァ・フロイツはこのアストレアファミアにおいて団長代理を任せられるヒューマンだ。

赤い長髪にエメラルド色の瞳を持ち、快活に振る舞うムードメーカー。

フワフワとした空気からは想像もできないほどにしつかり者。

団長不在の多いファミアの統率を受け持ち、書類業務や攻略指揮などを息をするようにこなしてしまう。加えてホームを持ち前の明るさでいつでも賑やかにしてしまう強かな女性だ。

その他にもいつも喋る度に嘔むハーフエルフのヨルネ、ジャーキーをこよなく愛するシアンスローブ犬人のアルフ、噂や都市伝説が好きポアズな猪人のクモリ等と、実に個性豊かな人種が集うアストレアファミアの面々。

そんな一緒にいて飽きない賑やかなホームが、リユウの帰るべき場所なのだ。

「みんな紹介します。今日知り合ったラジエルです。

とある事情でありあまり感情が出せませんがとてもいい子です。

みんな仲良くしてあげて欲しい。

ほらラジエル、みんなに自己紹介して？」

「うん、ラジエル・クロヴィスです。

よろしくおねがいします」

「「よろしくお願います!!」」

まるで託児所の光景の一部のように、ホームには元氣な挨拶が響き渡った。

リユーが何故少年を連れてきたのか、どういう関係なのか、そもそも親しい者以外肌の接触を嫌うリユーが少年と手を繋いで来たのか等、皆口々に質問するが、リユーは性格からそれを適当に返すことも出来ず一人ひとり丁寧且つやんわりと誤魔化した。

誤魔化した理由は、思い返すと単に恥ずかしいからだ。

「あらあら、随分と賑やかねえ。

一体何があつたのかしら？」

ふと誰かが呟いた言葉に、全員が振り返る。

「あら、可愛いらしい子ですね。

どこから来たのかしら？」

「ただいま帰りました、アストレア様」

その発言者こそ、このファミリアの主神、神アストレアだ。

穏やかな雰囲気^{デウスデア}に慈愛に満ち足りた表情、柔らかな印象を持ちえながらも決して揺らぐことのない芯を持つ超^{デウスデア}越存在のうちの一神。

その佇まいからして、正しく女神と呼ぶに相応しい。

賑やかな声音に気づいて出てきたのだろう。

「おかえりなさいリユ。」

その子は?」

「彼はラジエル・クロヴィス。

今日このオラリオに来て、行き場がなかったものでここに連れてきました。

実は、この子が入れるファミリアを探して歩き回ったのですが、結果が芳しくなく、宿もなかったため私が面倒を見ようと思つて連れてきました」

「あらあらそうだったのね。

いいわよ、一晩だけなんて小さいこと言わないから好きナだけここにいなさいな」

「……い・ありがとうございます。」

良かったですネラジエル。

貴方もお礼と挨拶をしなさい?」

「うん、ラジエル・クロヴィスです。

あすとれあ様、ありがとうございます」

「はい、どういたしまして。

それよりリユー？

この子、ラジくんはファミリアが見つからなかったと言ったわね？」

「はい、それがどうかしましたか？」

「いいタイミングかもしれないわね。

ラジくんが入れるファミリア、紹介できるわよ」

「ほ、本当ですか!？」

「でも、どういう事なのですか？」

ラジエルとリユーにとって、アストレアの一言はまさに朗報であった。

主神直々の紹介ともあれば信頼度は跳ね上がり、眷属であるリユーにとっては最も信頼できる存在からの申し出だったのだ。

「最近現界してきた神友がファミリアを持ちたいって相談しに来ててね、主神をしてい

る身として色々レクチャーしてあげてたの。

それで、もしよかったらラジくんをどうかなくて」

「それは願ってもないお話です。

アストレア様の紹介なら、私からの心配もありません。

良かったですねラジエル、貴方のファミリアが見つかりそうですよ」

「ありがとうあすとれあ様。

その神様って？」

コツコツと靴音を鳴らし、悠然とこちらに歩みを運んでくる気配を感じた。

主神のものとは違う凛と張り詰めたような空気。アルカナム神氣の使用を禁じられていても分
かるほどの神独特の雰囲気。

それは近づくにつれて辺り一帯を包み込んでしまうほど。

眷属たちも初めて感じる新しい感覚を覚えた。

「紹介するわ、私の大切な神友。

守護の女神アテナよ」

「紹介に預かった、アテナという。

よろしく頼む」

それは、守護の女神にしてオリュンポス十二神の一柱、知恵と戦略を司る神アテナであつた。

第4話 少年、温かみを知る

「そ、そんな悲しい出来事って……有り得るの？」

「残酷過ぎまひゅ……」

「それは、ジャーキーも喉を通らない……」

「ラジエルの記憶が曖昧になってしまっているんで、聞いた限りではこれが全てです。

そして、彼の師よりこのオラリオへ向かうよう言いつけられたようで、今に至るみたいです」

夕餉を済ませ、リユーはラジエルの過去を眷属全員に話した。

少年から許可は貰っているものの、悲惨な過去を語るのはあまり気分の良いものではない。

リーヴァたちは少年の話を悲痛な表情を浮かべながら聞いていた。

「彼の本当の目的は分からない。

それを探すためにここまでやってきたと言っていました。

信用するには難しいかと思われても仕方がない。

でも、決して悪い子じゃない。それは私が保証します」
「だいじょぶだいじょぶ。」

他でもないリユーが信じてるなら私達はなにも疑わないよ？
安心して、ラジくんは存分に可愛がってあげるから！」

皆は一同に頷いてくれた。

これまで決して少くない時間共に生活し、背中を預けあつた仲だからこそ、胸を打つものがある。

「ありがとうリーヴア、みんな。」

話した通り、彼は人の優しさや温もりに満足に触れてこなかった。

だから、出来るだけ気にかけてあげて欲しい。

どうも見る限り危なっかしくて……」

「……………につひひ」

「な、なんですかリーヴア。」

そのきも、厭らしい笑みは」

「今気持ち悪いって言いかけたよね!？」

いやね、あのリユーが子どもとはいえ、人ひとりにここまで心配するなんてなーって思ってたさ。

なんて言うか……そう！

お姉ちゃんみたいな空気出してよ？」

「姉……私が？」

「うん、リユー本人も無自覚かもしれないけど、それぐらいあつたかい感じだったかな。早速なれたじゃん、ラジくんにとって寄り添える人のうちの1人に。ほーんと、あの頃ツンツンしてたリユーからしたら考えられないよ」

リーヴアはケラケラと笑いながらリユーに対する感想を述べていた。裏を感じないのは、それが彼女の紛れもない本心だからだろう。

他の皆も同様に賛同しながら、リーヴアの言い分に対して笑みを浮かべていた。

「……後は、どれだけ本人が変われるかが勝負」

「そうですね」

私も全力で援助はしますが、それだけは本人次第ですから。

後は信じます」

結局のところ、これからを変えていくのは本人の気持ち次第。

周りはいくまでサポートの枠を越えることはできない。

リユータちはそのことを承知していたため、ただ単純に甘やかそうとする気は無い。ただ、少年が頑張ったことに対してはしっかりと褒める。

間違ったことをしようとしていたのなら諫める。

過ちを犯したのなら叱る。

リユータちは、この三つを重点的に行えば良い。

子どもを正しく導くための必須事項を行うことが、周囲の者達にできることだろう。

「まあ、それもこれも、まずはラジくんの住むところから確保しておかないとダメでしょう？」

「はい。初めてオラリオに来るんだから、宛も何もないんだよね？」

野宿すればいいとか言っていたので、まず間違いなく決まった寝床は持っていないでしょう。

「どうすれば……」

「え？簡単じゃない。

うちのホームに泊めちゃえばいいのよ。

それこそずつとね。

部屋は余ってるし、何よりアストレア様もそう言ってたしね」

「それはそう……なのですが……」

アストレアは好きだけここに居てもいいと先程そう明言した。

確かにホームの部屋に空きはある。

入浴に関しては時間をずらせば問題もない。

そう、アストレアファミリアのホームに住むことに関しては、理解してくれた眷属たちの手前可能であった。

しかし、リユアの懸念はそこではない。

アストレアファミリアは閥派閥に対する抑止力のうちのひとつ。頻繁に対立することはないが、ある日唐突に襲撃なんてことも珍しくない。

この街に来て日の浅いラジエルでは対処が困難と思える。

故に、彼を危険域に置くことになってしまう。

リユアの一番の心配どころはそこであった。

「リユウの考えも分かってるつもりだよ。

だからさ、早めに判断させてもらおうよ。

ラジくんが、どれほど出来るのかさ」

「……分かっていきます。

予定より早いですが、仕方ありませんね。

彼の力を試させてもらいましょう」

リーヴァは時に冷酷とも呼べるような態度を取る。

もちろんそれは、家族に対して被害が及ぶような懸念材料があった場合に限る。

団長代理を任せられているだけあり、団長は自分たちの眷属の命を預かる。

家族を無事にホームに帰すため、周囲に対して非情な感情を持たなければならぬこともある。

彼女の言葉は正論だ。

この街で自衛の手段を持たない冒険者など、あつという間に命を落としてしまう。

モンスターのような直線的な敵意なら対処もできる。

しかし、敵はモンスターだけではない。

悪意を持つ冒険者こそ最も危険だ。

害をもたらす存在は、時として味方の振りをしつつ、いつの間にか懐に入りこむ。

問題に直面する前において、トラブルに直面してしまった際に自分でどう切り抜けるかが求められる。

「まあ、今は待ちましょ。

リユールの認めた弟クンが冒険者になる時をね」

「では、始めようラジエル」

「うん、始めようあてな様」

アストレアファミリアのホームのとある一室にて、神フの恩恵ルナの継承は行われた。神は自身の眷属となる者の身体の一部に「神血コル」を用いて「神聖文字ヒエログリフ」を刻む。

それは、眷属の証であると同時に冒険者の証でもある。

ラジエルの了承を得ると、うつ伏せになった少年の背に跨り、恩恵を刻む準備を整え

る。

アテナは自らの指に針を突き立て、その指先に赤い雫を膨らませる。極小の赤い風船を少年の背に押し当て潰し、古の文字を描いていく。

（小さな背だ……）

だが、これは本当に人間の子どもものなのか？

子どもの体格であるため、成熟した者と比べて随分と小さな光景だ。未熟なためそればかりは致し方がない。

しかし、アテナの疑問はその小さな身体に付けられた無数の傷跡。

跡はどこどころ薄くなっている目立ちにくくなっているのはいたものの、到底子どもにくようなものではない。

（特筆硬いという訳ではない）

確かに硬いが、それ以上に目を引くのがこの柔軟な筋肉だ。

この身体で子どもとは……）

少年の身体は、一般の成人男性より遥かに強靱な肉付きをしていた。

無駄を一切なくしたかのようにたるみがない。

細いように見えるが、筋肉ですら無駄に付いていない。

少年には体づくりの指導者でもいたのだろうか。

彼には師がいたと聞いた。

恐らくその者の指導故の賜物と言ったところだろうか。

指先がまるで筆のように、滑らかに文字や図形を形作る。

そして、この行為は特に時間を欠けることなく終了する。

全てを描き終えたと同時に、刻印は淡い赤の煌めきを放つ。

神の恩恵の授与が完了した証だ。

「うん、初めてだったが故に緊張したが、やり終えてしまえば存外呆気ないものだな。

これで恩恵の授与は終了だ。

おめでとうラジエル。

お前は私の最初の家族となった」

「かぞく？」

「そう、新たな家族となったのだ。

お前には、私という主神の血を直接刻んだ。

まあ、実際に私から産まれた訳では無いが、冒険者としてのラジエル・クロヴィスは

私から生まれた。

これからは私がお前の親となろう。

存分に甘えるが良い」

「……………かぞくつて、よく分からないよ」

「アストレアの子から話は聞いた。

お前はどうかやら記憶と感情に明らかかな欠如を持ってしまったと。

だが心配するな、私にもよく分からん！」

「そーなの？」

アテナは高らかに、隠すことなく告げた。

自分にも家族の意味は分からないと。

少年は、純粹な疑問を親に投げかけた。

「ああ、本当だとも。

私もお前と同じ、家族というものがよく分からん。

つい最近オラリオに来たばかりだから、眷属もお前以外いなければホームもない。

私もまた、ゼロから始める者のうちの一人という訳さ」

「じゃあ一緒？」

「そうだ、これからよろしく頼むぞ」

そういつてアテナはラジエルの頭を撫でた。彼女は決して慈愛の女神ではないが、その手には確かに慈しみがあつた。

神だからではなく、誰かに対して思いやりを持つ心があるからこそ示せるものである。

その手はとても、温かかった。

手が離れても仄かに熱が残っていると錯覚するほどに。

入浴に駆り出されたラジエルが去つた部屋に一人残つたアテナは、彼のステイタスを写した羊皮紙を見ながら考えていた。

「……うん、これで問題は無いはずだ。

アルカナム

神気も込めていないし、何の不備もなかったはずだ。だが、これは本当に恩恵を与えたばかりの者のステイタスなのか？アストレアはそんなこと言っていたかな……。

ステイタスに関する情報は誰であろうと漏らすことは出来んし……困つたな」

プライバシー保護のため、ステイタスに関しては機密事項扱いになっている。

故に、主神と恩恵を与えられた者以外、その情報を知ることが出来ない。

基本アビリティは誰であろうと基本的にはゼロからのスタートとなる。しかし、アテナは知らない。

少年が誰にも想像出来ないほどの鍛錬を積んできたことを。

その結果、初期段階の基本アビリティに影響を与えていたことを。

この事実は誰にも分からない。

アテナはおろか、少年ですらも知りえない。

誰かに話すつもりもなければ、神気も使っていない。であれば、他の神たちも変に騒ぎ立てることはないだろうと思った。

後に、大変な騒ぎになるとも思わず。

ラジエル・クロヴィス

Lv. 1

種族：ヒューマン

所属：アテナ・ファミリア

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

第5話 少年、己を示す

太陽が姿を見せる。

対峙する二人の影法師は大地へ伸び始め、穏やかな風が髪を揺らす。

一方は木刀を携え、黙して静かに時を待っていた。

一方は武器を持たず、革製の籠手と足具を身に纏い、相対する女性を眺める。リユーは、熱が籠った息を吐き出すと、対峙する少年へ呼びかける。

時が近づいたのだ。

「ラジエル、本当に大丈夫なんですかね？」

ナイフの一つも持たずに私と戦って」

「うん、いらんよ」

少年はあっけらかんと言い放った。

ラジエル・クロヴィスは武器の類を一切使わない。

使わないのではなく、扱えないと表現したほうが適切だ。

振るうことはおろか、その手に持つことすら困難を極める。

模擬戦前に、リーヴァが鍛錬用の武器をラジエルに貸し与えようと目の前に持つてきた時、初めて少年の顔に陰りが指した。

『……………なんか、イヤだ。

それ、すごくこわいよ』

ラジエルは武器を持つことに対してひどく拒絶的な反応を示した。

正確には、使用者が存在しない武器に対して恐怖を覚えるのだ。

誰かが携帯し、明確に所持している様を見る分には何も思わない。

そもそも、武器とは命を奪うことに対して特化したものである。

より効率的に命を奪うにはどうするべきか、より殺傷能力を高めるにはどうするべきか、より膂力を発揮するためにはどうするべきか等、製作者は試行錯誤して様々な形態の武器を作り上げてきた。

そして、それはいつの日か誰かの手に渡り、持ち主と共に長い時を過ごしていくこと

で、武器特有の感情を形作っていく。

正義感の色を強く示す者に渡れば、敵味方の分別が付けられる獲物に。

悪徳感の色を強く示す者に渡れば、見境なく命を奪い去る獲物に。

武器は謂わば人殺しの道具と表現したほうが的確なのかもしれない。

どれだ製作者が丹精込めて作り上げようとも、この事実は変えようがない。

武器を扱うことで最も大切な要素が使い手である。

先にも述べた通り、道具は使い手の思惑次第で何色にも染まる。

そして、持ち主によって武器の在り方も異なってくる。

如何にして扱うか、何の目的を見出すか、そこに正しさを示せるか。

己にとつての邪念を打ち払い、人と武器が一心同体となり、一つの理念のために振るうこと。

それこそが道具にとつての本懐。

どんなになろうとも、決して曲げることのない確固たる信念の元で振るわれることこそが、武器の真価を発揮させる。

ラジエルは、ある種の想いを感じ取ることに對して特化している。

人やモノに関係なく、そこに意思があれば肌でそれを感じ取ることができる。

理屈で理解するのではなく、そこにあるものをありのままに受け入れる。

故に、何の想いも込められていない武器に対して恐怖を覚えた。持ち主が存在しない武器には感情がない。

まるで子どものように純真無垢で、悪戯に命を奪ってしまう。

魂の入っていない入れ物のような感覚を感じたからこそ、ラジエルは忌避したのだ。ならば、少年に残された武器はただ一つ。

「それを使わないよーに、俺はししよーの元でしよぎよーした。

戦い方も、あいての見方も学んだ。

この体ぜんぶが、俺のぶき」

「……………」

なればこそ、少年に残された武器は己の身体ただ一つ。

己を一つの武器とし、師の元でそれを磨き続けた。

リユーに対して驕りや侮辱の意は感じられない。

彼女もまた感じ取る。

これは本心からの言葉だ。

であるならば、これに応えない方が無粋。

子どもであるが以前に、ラジエルもまた男の子。

ひたすらにただ一つを極めんとして励んできた日々を聞いて、一体誰が笑おうか。故にリユールの眼に力が籠っていく。

少年の過ごしてきた日々の成果を見極めるため、自分の甘さを取り払おう。

「じゃあ、やろうリユール。」

俺の今まで、ぜんぶぶつける」

「分かりました。」

そこまでの覚悟が貴方にあるというのなら、これ以上は何も言いません。

では、始めるとしましょうか。

リーヴァ、開始の合図と立会いをお願いします」

「おっけー、本当にいいんだね？」

ラジくんは大丈夫だと思っけど、リユールは特に気をつけてね。

何事もやり過ぎる事なかれ、殺す気で挑まないこと。

それじゃあ、いざ尋常に」

対峙する二人は共に武器を構える。

目の前の相手のみ意識を集中させ、余計な雑念を切り捨てていく。

相対するは準一級冒険者にしてアストレア・ファミリア一の強さを誇るリユー・リオ
ン。

相対するは駆け出しの冒険者にして徒手格闘で世界に挑まんとするラジエル・クロ
ヴィス。

これが、世界へ踏み出す一步となる。

「始め!!」

「シッ!」

「なっ……!!?」

開始の合図が告げられた刹那、数メートル先に居た少年との距離がなくなっていた。
瞬間移動のごとく眼前に現れた少年は、知覚ギリギリの範囲で攻撃を仕掛けてきた。

なんてことはない、ただの突き一つ。

リユーには、それが鋭利な槍に感じられた。

ただの打撃では済まないと直感で感じ取り、身を横に逸らして回避し、再び距離を取
りに図る。

今回の模擬戦の目的はただ闘うことに在らず。

ラジエル・クロヴィスという少年が、どれほどの力量を有しているのか、ダンジョンで戦い抜ける意思を持っているのかどうかを測るためである。

故に全力で打ち合うことを、ここにいるリユーとリーヴァは望んでいない。

リユーは回避と防御に主軸を置いて、分かりやすい攻撃を仕掛けて身を護る術を引き出させる。

これが本来の目的だ。

しかし、目の前の少年の動きを見てどうだ。

明らかに子どもの持つ力の範疇を越えている。

常人ならば対応できない突きの踏襲。

突きの一つひとつが純粹に早く、狙いも急所を的確に狙っている。

受ければ即座に戦闘不能にさせられる顎や鳩尾はもちろんのこと。

敵の機動力を奪う両肩や太腿、四肢の関節部等を執拗に狙ってきている。

技の全てが年齢の割に洗練されていて、無駄がほとんどない。

L.v. 4 のステイタスを持つリユーであっても、急所を狙われる感覚に危険を感じずにはいられない。

そういつた恐怖は、幾万のモンスターと対峙してきても慣れるものでも消えるわけで

もないのだから。

ジワジワと獲物を追い詰めるが如く滲み寄ってくる少年の姿は、これまで見てきたどの冒険者にも当てはまらない恐ろしさを感じた。

敵を倒すことに特化した動きは、正に武器そのもの。

自分の体をこうも突き詰めることは、熟練した者であっても多くの歳月を費やさなければ至れぬ境地。

この若さでそれを体現してしまうほどに、この少年の技量は飛び抜けていたのだ。

「くっ、ハア！」

全力ではないにせよ、リユーもまた少年に対して防御から攻撃へ姿勢を移していく。

彼女の戦い方は力で押し込むものではなく、手数が多さで攻めていくスタイルだ。

それこそラジエルのように隙を見せず、相手に反撃の暇を与えない勢いで攻め込み、行動を徐々に封じていくのがリユーにとっての戦闘スタイル。

威力と速度を半分以下に設定し、的確に首や腹を薙ぎにかかる。

「なっ……」

Lv. 1なら間違はなく反応できずに当たる。

彼はその予想を軽く飛び越えた。

籠手で受け、衝撃が腕に行き渡る前に軌道を逸らし、身体への負担を極小で凌いだ。続けざまに木刀を振るおうとも、全ていなされる。

手加減を施したリューの攻撃は、この少年に対して有効打にはならない。

その眼が、耳が、肌が全てを感知する。

まるで水に打ち込んでいるかのように、手応えを感じられないのだ。

そして風のように木刀の猛襲を掻い潜り、距離が詰められる。

首元を薙ぐかのような足刀が迫る。

すかさず木刀の腹を立てて防御する。

その回転による遠心力を殺すことなく後続する後ろ回し蹴り。

これもまた腹で受けて受ける。

押し込めないと悟った少年は、木刀を足蹴にして鋭角に地面へ身体を落とす。

防御の構えにより、リューの動きが若干遅れる。

「行くよ、リュー」

少年の一息の後に続くは、先程とは比べ物にならないほどの高速連打。受ける度に回転数を増していく連打の嵐は、二人の眼を釘付けにした。

攻撃の速度が上がっても落ちることのない精度、敵に何もさせない圧倒的な手数得多さ。

その姿に、戦慄を覚えずにはいられない。

駆け出しにしては、明らかに他の冒険者たちよりも技量が飛び抜けている。

幾ら恩恵によって基礎能力が常人に比べて成長しよう、技量の差を埋められる訳ではない。

こういった技の一つひとつは、多くの時間を掛けて研鑽させ、積み上げていくものなのだ。

冒険者の強さは恩恵だけに留まらない。

より強い力を出せる筋肉の動かし方、負担を避ける動作、相手の動きを先読みする観察眼、戦闘を優位に進めるための立ち回り。

全てをひつくるめて技となっていくのだ。

ラジエルは、技量に関して他の冒険者より逸脱した領域にある。

「(本当に子どもですか貴方は!?)」

しかし、例え幾百幾千の連打を放とうとも、L v. 4にまで上り詰めたりユーに對して決定打はおろか、ただの一撃すら入ることはない。

L v. 4によつて積み上げられたステイタスは、そういった要素を覆すほどの力を持つ。

どれほど背伸びをしようとも、身の丈以上の壁はそうそうに越えられるものではないのだから。

「ハッー」

「っ!？」

打ち合いを始めて、初めて少年は眼を見開く。

嵐のような高速乱打を抜けられ、胸に迫る一閃を瞬時に感じ取った。

単純に見えなかったのだ。

五感を全開にし、自身の周りに神経を張り巡らせても尚知覚できない。

直感が告げる。

殺られる。

防御が間に合わないことを感じ取った少年は、直ぐ様後方へ飛び退く。リユーによる一撃を受けるものの、後方へ飛ぶことで衝撃を緩和させ、致命傷を避ける。

それでも流しきれるものではなかった。

彼女の細腕からは想像し得ない重撃がラジエルを襲ったのだ。

右脇腹から左肩に登っていく痛みは、幼い身体の行動を大きく削るには十分過ぎるものだった。

「(これに……反応しますか)」

未恐ろしい。

彼女が胸中に抱いた感想は単純だった。

単純が故に恐ろしい。

これほどの才覚を持った子が、今の時点でこの力量を有している。

一撃一つひとつを再起不能にさせる領域にまで押し上げる技量、攻撃を受け流して反撃の機会を常に見計らう姿勢、引き際を見極める鋭敏な勘。

どれを取っても、幼い身にしては余りにも不釣り合いな力。

リユーは闘う術を知る少年に対して複雑な気持ちを抱いた。

それは安堵であり、悲しみでもあり、怒りでもあった。

まだ幼い身であるのに、既に死を身近に感じさせてしまうその姿に、リユーの表情に翳りが指した。

倒れてもおかしくない一撃を見舞って尚、膝を着こうとしないラジエルの姿が、それを如実に表していたからだ。

「確実に失神させる勢いで打ち込みました。

ですが、それでも貴方は倒れることはしないのですね。

いえ、それを許さないと云ったほうが正確なのでしょうか。

その眼には何か、本人も自覚し得ない鬼気迫るものを感じます。

そんな歳で、身につけるものではないでしょうに………」

最後まで、少年は膝を折ることをしなかった。

痛烈な一撃をその身に受けようとも、視線をリユウから逸らそうとはしなかった。戦いにおいて動けなくなることは、死を意味させる。

どんなになろうとも、戦う意思を捨てない姿勢を確かにこの眼で見届けた。

地力の差は歴然。

少年は奮闘するも、最後まで一撃を入れることは出来なかった。

この日、少年は世界の一端を垣間見たのだった。

「それまでっ!!」

第6話 少年、支度する

ダンジョンに潜るためには、事前に入念な準備を重ねる必要がある。

何故ならば、ダンジョンには予期しない出来事に遭遇することがざらにあるからだ。

上層には低レベルなモンスターしか現れない、ある個体は群れで遭遇しないから安全、倒してしまえばしばらくは問題ない等といった話が広がることがある。

それは、ダンジョンに潜っている期間が長ければ長いほど。

冒険する上で知識を得ていけば得ていくほど。

モンスターを倒す感覚を知れば知るほど。

冒険者たちは、次第に“慣れ”を知っていく。

そして、それは後に“慢心”や“驕り”に繋がっていく。

ダンジョンに常識は通用しない。

それらは全て結果論に過ぎない。

多くの人たちがそう見てきたから、そう言っていたから。

百聞は一見に如かず。

遠巻きに聞いたからといって、それをダンジョンの実態として捉えるのは愚か者のすることだ。

全ては、自身の眼で見て判断する必要がある。

モンスターを倒すことを流れ作業と認識している者は、小さな変化を見落としやすい。

故に、その変化は冒険者の中で徐々に影響していく。

過去の情報のみ踊らされていた者は、あっけなくその命を散らす。

動物とは、本来変化に対して適応していく生き物だ。

誤った情報のみを拠り所にし、それが通用しなくなった途端に対応が遅れ、無様にも死体を晒す者は後を絶たない。

そういった存在は掃いて捨てるほど存在する。

たった一つの選択を誤っただけで、簡単に命を落としてしまうような魔窟がダンジョンなのだ。

油断など以ての外。

満身など論外。

物見遊山など埒外。

ダンジョンは生きているという話がある。

何でも、ダンジョンは存在した時から神を憎み、いずれその高みに牙を突き立て、世界にとつて驚異とならんと復讐に燃えているという。

こういった昔話にも言い伝えられていることから、相応の覚悟と準備の元挑むのが当然といえる。

故に、ダンジョンに潜るためには、常に万全の状態を整えてから潜るのがセオリーだ。アイテムの種類としてはいくつもある。

怪我の治療する必要不可欠の回復薬ポーションや状態異常を回復させるアイテム、武器の整備をするための道具、水や食料など挙げればキリのないほどだ。

「とは言つても、ラジエルには本当に必要最低限で済みそうですね。

体術のみの戦法だから整備用具は必要ありませんね。

心配ですけど」

「んー、かいふく薬ぐらいでいいかな。あとご飯だね」

「状態異常回復のアイテムは必須ですね。」

毒や麻痺は本当に厄介ですから。

ええ、心配です。

本当に」

手合わせから数日後、リユーとラジエルはダンジョンに向かうために必要なアイテムの調達のために街へと赴いた。

最初の手合わせ以降、何度か手合わせを行った。

だが、少年は最後まで、彼女に一撃一つ入れることは叶わなかった。

そしてまた、少年も最後まで膝を着くことはなかった。

それは強迫観念に似た何かであった。

どれほど打ちのめされようとも決して視線は落とさず、眼前の相手への警戒は怠らなかつた。

まるで、無防備な姿を晒した途端死ぬと思ひ込んでいるかのような。

鍛錬として考えるならば問題ない。

実践として仮定するならば上々。

多くの冒険者たちにとつて良い見本となるべき姿勢であることは間違いない。敵に背を向けず、集中力を切らさず、引き際を弁える等の姿勢を長時間持続させることは、そうそうできることではないのだから。

以前、少年の師の教えの一つを聞いた。

鍛錬といえど、常に実践を意識して振舞うべし。

「……………」

「くっすりくっすりおっくすりー」

隣を歩く少年が持つには余りにも早すぎる感情だった。

リユーは率直に思った。

身体や精神、言動や行動はまだまだ子どもの域を出ない。

普段の生活から見て取れるのは、子どもらしい一面ばかり。

だが、事戦闘面に関しては突出している。

敵を視界から離さない集中力、相手の行動に即座に反応する瞬発力、攻めるか否かを

選り取る判断力。

そのどれもが、子どもの体からは想像し得ない。

何を取つても不釣合いなのだ。

考えても答えは出てこない。

生い立ちからこれまでの過程から鑑みても、謎は尽きない。

むしろ、新たな情報が出てくる度に謎もまた湧き出てくる。

だが、そんな謎を多く持つラジエルに対して、断言できることはある。

「ねーねーリユー。

アレはなに？」

ふと、手を引かれた。

何度見直しても、目の前にいる少年は年相応の子ども。

忙しなく動き回る大きな瞳、表情にでなくとも隠しきれない興奮、何にでも興味を示す好奇心は、ラジエル・クロヴィスを少年たらしめる証拠になっている。

彼の根底にあるものは、他の子どもと相違ない。

そんな無邪気な少年の動向を見ていると、リユーの懸念も霧散してしまう。

「アレはじゃが丸くんという食べ物ですよ。」

安い割に美味しいので、女性にも人気が高いようです。

そのおかげで多くの味付けが考えられたみたいですから」

「ふーん、そーなんだ」

「……食べてみます?」

「うん、食べてみたいな」

「素直で結構です。」

では、ちよつと寄り道して行きましようか」

子どもには不思議な力がある。

その無邪気な姿を見ると、小さな悩み等は吹き飛んでしまう。

あらゆることに興味を示し、不器用ながらも一生懸命に物事に取り組む姿勢は、見ていて微笑ましい気持ちになる。

そして、大人たちはこぞって過去に思いを馳せるのだ。

どんな気分だっただろうか。

どんな夢を持っていただろうか。

どんな力があつただろうか。

どんな思い出があつただろうか。

意識せずに過去を思い直そうとするのは、きつとそれが子どもだからだろう。

それは自身も辿つたことのあるものだから。

リユートの隣にいる少年もまたその一人。

その挙動一つひとつを目で追うだけで頬が緩む。

話をするだけで目尻が傾く。

一緒に歩くだけで気分が高揚する。

様々な人と触れ合うことや街並みが新鮮と感じる少年のように、リユートもこの状況にいることに新鮮味を感じているのだ。

異性や他種族を避けてきた自分が、今や男の子と手を繋ぎながら歩いている。

隣にいる少年にだけは、触れられても嫌悪感を感じないなんて。

それこそ、過去の自分が知つたらどんな反応をするだろうか。

有りもしない状況を想像して、少し笑みが零れ出てきてしまう。

きつと、ラジエルがいなかったら、そんなことは生涯考えなかつただろう。

じゃが丸くんを販売している屋台までたどり着くと、ラジエルはメニューを背伸びしながら興味津々に覗いている。

顔を半分だけ覗かせ、順々に商品の項目を見流していく。

彼はまだ読み書きや言動が定まっていない。

恐らく、文字はほとんど読み飛ばし、分かりやすいイラストのみを注視しているのだろう。

「いらつしやい！何にします？」

「ここは、プレーン味が妥当でしょうか……。」

下手に変わり種に手を出して口に合わなかったら可哀想ですし……。

ラジエル、どれか気になるものはありましたか？」

「んー、このチョコクリームっていうの。

なんか美味しそうだよ？」

「どれどれ、うん美味しそうですね。

ではそれにしましょうか。

すみません、このチョコクリーム味を二つ貰えますか？」

「あぁごめんなさいお客様さん！」

チョコクリームは人気があつて、もうこの一つしか在庫がないんですよ…。

他の味でしたらまだ余裕があるんですけど」

「そうですか、困りましたね。」

他に目星をつけていなかったもので」

お目当ての品が一つしか残っていなかったのは誤算ではあつたが、別に差して問題があるわけでもない。

代わりの品を見繕えばいいだけの話だ。

たかだか同じものがなかっただけで愚図るような歳でもなし。

全く問題はない。

胸中に、初めて二人で買い物に来た特典として、同じものを食べたかっただけという思いがあつたとしても、それを表面に出すほどリユーは子どもではない。

平静を装い再度メニューを見直していく。

時に、子どもは大胆な発言をすることがある。

さも当たり前のように、こちらが恥ずかしいと思える行為を平然とやってのける。

「じゃあ、半分こしよう。」

「……っ!？」

純粹さにおいてこれほどの存在は他にいないだろう。

そういった無垢なる心を持つ子どもが発言は、時としてとてもない破壊力を備える。

羞恥心の境界が曖昧な年頃の子のやることであるため致し方ない。

相手が相手ならば、その威力は異なる。

例えば、異性に対して免疫がゼロに等しいリユールが相手ならば、その破壊力は想像を絶するだろう。

一言で表すならば、リユールはとても初心だ。

「そ、そうですね！」

それなら半分こにしてしまえばいいんですよ！

私としたことが盲点でした！

ええ、そうですね、そうしましょう！

という訳で店主！チョコクリームを一つお願いします！」

「あらあらうふふ。」

それじゃあちよつとお待ち下さいな」

「リユー、どしたの？」

お顔が真っ赤だよ？」

「……………な、なんでもありません」

「むー？」

下手に発言すれば、際限なく問い詰められる。

そう思ったのか、リユーは必要最低限の返答の後、少年の頭を撫でて有耶無耶にして終わらせる。

「はい、チョコクリーム味お待たせしました！

お詫びのサービスとしてクリームだけ多めに持つておいたので、これでどうかご勘弁を！

40ヴァリスになりまーす」

「……………どうも」

「はい、丁度頂きました！またのご来店をお待ちしてまーす」

緩んでしまった顔を俯いて隠し、代金を丁度支払いお目当ての商品を受け取る。揚げ物一つを購入するだけで赤面させられてはたまつたものではない。

リユーは、怖さを全く感じさせない半目で少年を睨む。

その顔は赤く火照っており、いくら睨みつけようとも少年は全く意に介さない。彼女なりのささやかな抵抗だった。

「はい、どうぞラジエル。

ちよつと熱いので気をつけて下さいね」

「うん、ありがとう」

じゃが丸くんを二人並んでベンチで食べることにした。

近くを通りかかる通行人が来る度に、微笑ましい表情を向けられているのが嫌というほど伝わってくる。

恥ずかしさの余り、今すぐにもここから走り出したい気持ちが湧き出るが、リユー

はぐつと堪える。

しかし、じゃが丸くんのチョコクリーム味というのも存外悪くない。

油で揚げた芋にチョコクリームで味付けしたものが、これほどマツチするとは思わなかった。

こうした時を過ごすのも存外悪くないと思い始めていた。

ふと、隣でじゃが丸くんと頬張る少年を見やる。

この状況、確かに気恥ずかしさを覚える。

だが、それ以上に充実した何かをリユーは感じている。

リーヴァには弟が出来たみたいだと言われた。

これまでの所業から、一概に割り切ることはできないものの、リユーの置かれている状況に対して、なるほどと納得できるものは確かに感じ取れている。

今の今まで、子どもとはいえ異性と時間を共有したことがなかった。

ラジエルと共にいるこの時間がとても新鮮で、楽しいと思えている。

親愛とはこういったものなのかと考える中、この少年がこれから立ち向かうことになる困難を前に、複雑な心境を抱かずにはいられなかった。

ラジエルは、例えリユーや周りの方が何を言おうとも、その歩みを止めることはしないだろう。

そうでなければここまで鍛錬を積まず、単身でオラリオを目指して旅をすることもなかつたはずだ。

きっと、無自覚の中で、自分にとって譲れないものが根底に定まっているのだろう。

いずれ、血を流す結果を目の当たりにする現実に突きつけられる日が必ず来る。

少年に関する謎も疑問も、いずれは分かる時が来るだろう。

それまでは、どうかこうしてありたい。

そう彼女は、願わずにはいられなかった。

「美味しかったね」

「そうですね、とても美味しかったです。

まさか、油物にチョコクリームが合うとは思いませんでした」

「リユーはりょーりしないの?」

「わ、私はその、料理は得意では……………ないといふかなんと言いましようか。

……………はい、苦手ですね。

正直に言えば」

「ふーん、そーなんだ」

「何故、そんなことを聞いたのですか？」

「リ्यूが作ったご飯、食べてみたいなって思ってたさ」

「そ、それは……………」

返答に窮したのは、リ्यूが料理が苦手だからということだけではない。

ふと、最初に出会った頃の会話を思い出す。

ラジエルの家族は既にこの世を去っている。

少年が遠巻きに何を伝えたいことは一体何なのか。

考え込むまでもない、愛情を欲しているのだ。

触れられることではなく、ただ自分に向けた思いを受けたいだけの表現。

それを求めているに過ぎない。

この年頃であるならば何ら不思議なことはない。ただ、飢えているのだ。

つぶらな瞳から感じ取れる訴えは、痛いほど突き刺さった。

リユーは料理を作ることが苦手である。

火を必要としないサンドイッチを炭に変えた過去を持ち、自他ともにどうしてこうなったのか分からないまま時が過ぎてしまった。

それ以外のものも、ホームで何度も挑戦した。

しかし、完成したと思われるものは、いずれも料理と呼べるものではなくなっていた。その全てが、原型が分からないほどのものに成り果ててしまったのだ。

ある日を境に、リユーは調理に関しては触れなくなった。

どれもこれも自分流に作ってしまったことが原因と誰も伝えられないまま、料理に触れることから遠ざかった。

それも、彼女のシヨックを受けている悲哀の姿を見れば、伝えられないのも無理はないだろう。

ただ、久々に聞いた純粹な懇願から、消えかけていた気持ちが再燃したことを感じる。以前、リーヴァはこう言った。

『料理はね、誰かのためを思って作れば自然と美味しくなるもんだよ。

こういう味付けをすれば喜んでくれるかな、この食材を足したら喜ぶかなとかいう気持ち。

それで一緒に食べてくれた尚美味しいね！

美味しいから喜んでくれるんじゃない。

喜んでくれたら美味しくなるの。

あはは、リユーにはまだ難しかったかな？

私はリユーたち家族のためについて思って作ってるから美味しく作れているんだよ。

リユーも心から誰かのために作ってあげたいって気持ちを込めて作れば、美味しくなるコツが掴めるかもね』

そう言つて彼女は微笑んでくれた。

リーヴァはいつも明るく笑つて、家族のために料理を振舞っていた。

その姿はとても眩しく、いつでも自分たちを思つてくれている。

彼女は、正しく我が家の太陽だった。

真摯な笑顔だからこそ、自分たちの心に寄り添ってくれていると感じずにはいられなかった。

そうか、これがきつかけだ。

「いいですよ」

強がりからの返答ではない。

自分の心の在り方に従ってみようと思ったのだ。

この時の彼女は、間違いなくリーヴァと同じ雰囲気を纏っていたに違いない。誰かのために、心から思った笑顔なのだから。

「……ほんと?..」

「ええ、約束しましょう」

再び交わされる指切り。

それは、初めて少年と邂逅した日の再現。

それが互いに希望となるのなら、どんな小さなものであろうと構わない。

繋いでいけば、きっと温かく大きなものになるのだから。

願わくば、その希望の火が消えないように。

自分たちが、次の希望を託せるための盾となれるように。

場所は変わり、バベルの塔内部。

二十階まで公共施設や各ファミリアの商業施設が並び、冒険に向かうための装備一式を揃えることのできる場として人々に利用されている。

また、駆け出しの冒険者たちにとっても都合のいい場所でもある。

上層で通用する武器を主軸として取り扱われているため、レベル1の冒険者たちには力量的、懐事情的にも悩まなくていい。

そして、武具を取り扱う上で最も注目を集めているファミリアが存在する。

ヘアアイス・ファミリアとゴブニュ・ファミリアの二つである。

どちらも一級品の武具ばかりを取り扱うが、バベルの塔の中には掘り出し物もあつたりする。

その実態は、レベル1の眷属たちが打った商品が多く取り揃えられているからだ。

L.v. 1の鍛冶師たちは皆ここから自身の名を売り、顧客を掴むことに躍起になって

いる。

つまるところ、アイテムや武具に関してはこの塔の中でだいたい揃う。

下手に街中を歩き回る必要もなく、自分の目的を絞って渡り歩くことが出来るため、誰でも平等に見回れる。

「えっと、アイテムの補充は完了しましたね。」

ポーション
回復薬に水や携帯食料、解毒薬などのもの購入しました。

本来ならここでお買い物は終了です。

ですがラジエル、装備は見なくていいのですか？」

「ぶきはいらない」

ラジエルは頑なに武器を購入しない。

元々視野にすら入れていなかったのだろう。

リユアの眼を見ずに答える辺り、いいことをしているという自覚はないのだろう。

しかし、武器は最悪除外したとしても、防具に関してはなんとか関心を持つてもらいたいというのが本音だった。

身を守ることに關して生命線とも言える防具だけは、なんとか購入して欲しかった。

「分かりました。

武器は必要ないと百歩譲って流しましょう。

で・す・が、防具に關しては別です。

ええ、これだけは譲れませんとも」

「ぼーぐ？」

「はい、貴方の手に身に付けているその籠手や、足に付けている足具のことです。

これらは装備している者の身を守るために作られたもので、ダンジョンに潜る際に必要なモノのうちの一つです」

ラジエルが最初から装備していた革製の籠手と足具を今一度確認する。

確かに立派な作りだ。

籠手は指の骨や甲、肘までを覆っており、全てが繋がっている構造となっている

足具は脛から膝下まで覆っていて、膝を曲げる際に肌に食い込まないよう、前膝から

ふくらはぎにかけて斜めに下る作りとなっている。

よくよく見ると、革と布のようなものが何層も重ねられており、使用者の衝撃を緩和させる細やかな作りとなっている。

そして極めつけが彫られた紋様。

どうやら、低レベルの魔法や呪術を跳ね除ける退魔の印が刻まれているようだ。村で作られたものだとなれば間違いなく一級品だろう。

僅かな資源、決められた材質のみで構成されたにしては精巧な作り。

これらの製作者は、さぞ腕の立つ鍛冶師だろう。

「そうですね……籠手と足具は上層ならば壊れることはないでしょう。

なら、手に入れるべきは胴の防具ですね。

こう胸やお腹を守るためのものことです。

軽装備にすれば、ラジエルの動きを邪魔することはないはずですから」

「うん、じゃあそれ見に行こ？」

「ええ、行きましょう」

次の目的は決まった。

武器を戦いの道具として扱えないのなら、身を守る防具を武器としてもらう他ない。幼い徒手空拳使いの少年は、人生初の大きな買い物に出かける。

第7話 少年、買い物をする

「そういえば、ラジエルに聞いてみたかったことがありました」

「うん？」

リユーは、予てからラジエルに聞いてみたかったことがある。

少年の修めた武術に関してのことだ。

組手の最中に、何度も目の当たりにしてきたものの数々。

彼の師によって伝授されたとされるものとされるが、その実態等について興味があったが故に、リユーは聞いてみたかったのだ。

「私の目の前まで一息で移動した動きや、攻撃の仕方とかのことです。

貴方の武術全てが、私が今まで見てきたものに該当しませんでした。

言い換えると、ラジエルの力に興味があります」

「あー、あれねー。」

ししよーは“縮地”って言ってたよ。

こーう、俺がびゅーんって走ってきたやつなことでしょ?」

「はい。」

そうですか、縮地というのですか」

「うん、この本にだいたい書いてあるよ。」

リユーにだけ見せてあげる。

ほかの人に話しちゃダメだよ?

ししよーがあんまりほかの人に見せないよーについて言ってたから」

「……ありがとうございます。」

はい、絶対誰にも言いませんとも」

それは、少年からの信頼の証とも言えるものであった。

自身の秘密の内を明かすことは、誰彼構わず出来ることではない。

それは、最も信頼できる相手だからこそ打ち明けられるもの。

単なる羞恥心からくるものということではない。

自身の弱さに通じるものであるが故に、それを他言して欲しくない。

知って欲しいが、知らせて欲しくない。

はつきり言って、理解が及ばない内容だった。

例えるなら、古い物語の架空技術を説明しているように、この書物に書かれていることは現実味を欠いていた。

確かに、あの動きは口で簡単に説明できるものではない。

気づいたら目の前に現れる動き。

誰もが口をつけて間抜けな説明だと笑うだろう。

しかし、実際問題それ以外の説明が思いつかない。

この書物に書かれていることは、正直に言えば信頼性に欠ける。

最初に見ていれば間違いないと信じなかつただろう。

目の前の少年が実践していなければ。

武術に精通していないリユーからしたら別次元の話を見ているようだった。

理屈は突飛過ぎて理解は及ばないものの、他にも興味をそそるものがあるのも確か。

リユーが特に気になったものは技の型。

即ち、最終的に技に繋げるための予備動作のようなものことだ。

その在り方、正しく野生の獣の如く。

荒々しくはあるがその実、極めて合理的に敵の首を刈り取る技。

戲拳
弔獸戲我ちようじゆうぎが

あらゆる動作を動物の動作をもとに編み出された無名の拳技。
発祥も伝承も何もかも不明にして未知の拳技。

技には動物の特徴や象徴するものをベースにされている。

馬の強靱な後ろ蹴りを連想させるもの、猛々しく暴れまわる虎を連想させるもの、不動にして堅牢なる守りを持つ亀を連想させるものなど、種類は実に多岐にも渡る。

これらは奥義にして普遍のもの。
奥義にだけに非ず。

しかして確かに極地のうちの一つ。

当然の如く振舞つてこそ、それは必然の結果を齎らす魔拳。

子どもの戯れあいのように躊躇いなく相手の命を奪う絶技。

人を殺すことに特化した武術。

しかして、少年の心にはこれを振るうことに関して迷いはない。

命を奪う武器に関して忌避する反応は見せるが、自信が扱う身体ぶきに関しては迷いを抱かない。

これは、果たして自覚していない矛盾なのだろうか。

子どもにしてこれほどまでの技術を有している事実を、こうして目に見える記録を前にすれば絶句は必至。

リユーは不謹慎にも、これらの技を見てみたいと思ってしまった。

以前から見ている彼の動きの根幹であるものの集大成。

あの技量からすれば、これらのほとんどが絶技であることは明白であろう。

「ラジエル……貴方、もしかしてこれを全部？」

「うん、もちろんぜんぶできるよ。」

「ししよーに何回もためしたからだいじょーぶ」

「そ、そうですか……」

「これほどまでの技を極めて来たのであれば、あれほどの自信が垣間見えるのも納得できさる。」

「さぞ険しい道を辿ってきたのだろう。」

「だが、これらの技を振るうには、やはりそれ相応の装備が必要になってくるはずだ。」

「身体を武器にするということは、敵から負う傷だけでなく、拳を振るえば振るうほど徐々に損傷していく。」

その負担を極力減らすための頑丈で柔軟性のある防具が必須だろう。

「なら、尚更いいものを見つけないといけませんね。」

改めて防具探しに戻ることにする二人。

籠手や足具は今のままでいいとして、やはり胴の部分を保護するものが望ましい。身体の動きを阻害しない柔軟な素材をベースに作られたものが良いだろう。

となれば革製のものが一番かもしれない。

頑丈さにおいては金属製のものに劣るが、その反面として、使用者の動きを阻害しない、衝撃を受け流すなどの長所を併せ持っている。

自在に動き回る遊撃タイプに好かれる素材のうちのひとつだ。

何より肌に馴染みやすいのが一番だろう。

元々動物の身体の一部であることから、肌の接触にはさほど不快感を覚えにくい。今回求めるべき代物としては、最有力候補として挙げられるに違いない。

「しかし、簡単にいいものには巡り会えませんね。」

どれもこれも質はいいのですが、正直イマイチと言わざるを得ません

高すぎて周囲から反感を買うのもいけませんし、かといって安価すぎるのも危険です。

それに……」

「ねーねー見て見てリユー。」

あつちのキラキラしたよろいすごいね。

なんであんなにキラキラさせるのかな？

あんなに目立つちやうと殺されちやうのにね」

「……私がしつかりしないといけません」

少年は完全にお気楽に観光に徹している。

これほど品数が多いのだから無理もないが、もう少し自分に関心に向けて欲しい。

技量に関してはリユーとしても舌を巻くほどだが、それ以外は完全にお子様だ。

危機感がまるで無さ過ぎる。

しかし、この少年に対して注意をしても、おそらくこのスタンスは崩しそうもない。

リユーは直感で気づいていた。

周りから何を言われようと、一度自分で決めたことは簡単には曲げない。

それは長所でもあるが、短所にもなり得る。

今この状況のように。

「そろそろ宛がなくなってきましたしまいました……。

バベルの塔以外初心者向けの装備は置いてないというのに。

これは困りました」

「そこのお嬢さん？

何か装備のことでお困り？」

「えっ……？？」

「むー？」

困り果てていた時、後ろから声を掛けられた。

炎のように煌く赤い髪に赤い瞳。

右目を覆い隠す黒い眼帯。

その姿を見れば誰もが視線を釘付けにされる美貌。

それは女神。

数多いる神々の中で最も鍛冶に秀でた神。

神匠と謳われる女神、神へフアイストスだった。

「奇遇ねリユー。」

そして驚いたわ、貴方がこの塔で買い物だなんて」

「ご無沙汰しております神へファイストス。」

私人の買い物ではなく、この子の買い物です

ラジエル、この方は神へファイストス様です。

このオラリオでとてもすごい武器や防具を作れる神様なんですよ」

「そーなんだ。」

こんにちはへファさま、ラジエル・クロヴィスです。

よろしくお願ひします」

「へファ?!」

「あははっ!」

随分と可愛らしい名前をどうもありがとう。

ラジエル・クロヴィスくんね?

私はへファイストス、よろしくね」

「うん、よろしく」

「(こ、こ)らラジエル!」

ヘファイストス様に向かってフランク過ぎますよ！」

「いいのいいの、気にしないの。」

こういう接し方をする子が少なくなってきた私も寂しくなってきたからね。

むしろ嬉しいわ。

それより、この子どうしたの？」

「実は……」

ヘファイストスはリユーにとって数少ない顔馴染みの神のうちの一人であり、遠征の際に彼女の眷属を同行させるほどに友好関係が築けている仲である。

リユーの木刀の手入れも彼女の眷属が受け持ってくれているため、個人的にも敬意を最大限払うべき相手なのだ。

そんな尊敬する神相手にフランクに接するラジエルを見て肝を冷やす。

子どもならではの無知というべきか、少年は全く遠慮することなく神ヘファイストスと談笑していた。

あまりの出来事に放心しかけるものの、ヘファイストスには大まかにこれまでの経緯を説明した。

「そう、そんなことがあったの……。」

貴方もとんでもないことに巻き込まれてしまったのね。

まだこんなにも小さいのに……」

「はい、彼たつての希望から、ダンジョンへ向かうことになりました。

力量や戦闘経験からして問題ないと判断したので、上層限定で許可を出しました。

今は、探索前の買い出しでこの塔に来たということになります」

「……あのリユーにそこまで言わせるの？」

貴方、結構掘り出し物だったりする？」

「あの、神へファイストス？」

「あはは、ジョーダンよ。

私は他の神たちと違って強引な勧誘なんてしないから。

それで？残りは何が足りないの？」

「あ、はい。

最後は彼の防具についてです。

彼は珍しいことに徒手空拳で戦うタイプなので、軽装備の革製の防具がいいかと

……」

「無手?!」

貴女今徒手空拳って言ったわよね!？」

「は、はい。」

私としても、とても珍しい技の数々でした……」

「そう……これは、本当に掘り出し物かもね……」

ヘアアイストスは一人そう呟くと、何か思案するように手を顎につけた。

やはりこのオラリオにおいて無手で挑む者は珍しい。

彼女の反応を見れば明らかだろう。

ダンジョンにおいてどのような目的があろうとも、皆必ず武器の類は常備するものだ。

鉱物や薬草の採取にしても、必ず護身用のナイフなりを装備する。

であるため、武器の未携帯は本来ありえない。

また、冒険者たちは、基本自らの情報を秘匿する。

これは自身の安全につながることから暗黙の理として互いに関与することがない。

しかし、中にはそれを伝える必要がある特例が存在する。

その中の一つが鍛冶師である。

限定的にはあるが、冒険者の情報を開示し、装備に関して助言をもらう等の目的で

話すこともある。

双方の信頼関係が成り立ったことを前提とするが、相手が大きなファミリアであればあるほどその重要性を理解してくれる。

鍛冶師には共通する三つの規則があるという。

理解しなければならない。

機密にしなければならない。

信じなければならない。

武器を生み出す鍛冶師として、相手の情報に対して適当なことは決して言わない。

それは各々がもつ鍛冶師としてのプライドがあるからだ。

自分たちが丹精込めて打ったものを簡単に壊して欲しくない。

その武器を最大限に生かせる道をしつかりと吟味して模索するのだ。

そして、その情報については決して双方だけの秘密として取り扱わなければならない。
い。

仮にその情報が漏洩した際、真つ先に疑われるは鍛冶師の方であるからだ。

故に、自分たちの信用を失墜させないためにも、情報に関してどこも徹底されている。

最後に、その冒険者を信じなくてはならない。

自分たちの魂の一部を託すに値する者か見極めることが求められる。

ただ金があればいいという話ではない。

彼らは職人。

一つのことに対して妥協は許さず、自分が持ちうる技術を全て使い、一つのを生み出す者。

武具の完成度について手を抜かないことはもちろん。

中には自分の武具を使うに値する者かどうかも採点する鍛冶師も存在する。

プライドが高いからということもあるが、結局のところ、自分の打った者を大切にしたいと願うからこそなのだ。

そうした志を持った者が、鍛冶の最先端をゆくへファイストス・ファミリアの門を叩きにくる。

「ふむふむ、じゃあ私が今一番期待してる子を紹介してあげるわ。

恩恵を与えてからまだ日は浅いけど、間違いなく光るものを持つてるの。

ラジエルくんも丁度同じように駆け出しなんだし、うまくいけばお互いに高め合えるかもしれないわ。

私も可能な限りはサポートしてあげるし……どう？」

「神へファイストスの推薦なら間違いないでしょう。」

ラジエル、その人に会ってみましょうか」

「うん、行ってみよう？」

駆け出しの眷属のみならず、恩恵を受けた者にとっていつまでも必要とされるのが
経験である。

経験を積み重ねていくことで自信へと繋がり、やがてはあらゆる困難に直面した際
に、それを乗り越えるための重要な下積みとなるからだ。

へファイストスからの申し出は実に渡りに船だった。

恩恵を受けた時期に差が開きすぎていなければ通じ合えるものも期待できる。

「と……すみません。」

先にお手洗いを済ませてきます」

「ええ、急がずに行ってくださいなさい。」

私はこの子と談笑でもしているから」

「よろしくお願ひします」

リユーが席を外すと同時にヘファイストスはラジエルに向き直る。

見えている左目から爛々とした何かが見え隠れしており、彼女自身もウズウズとした様子だった。

「ねえ、ラジエルくん？」

「なーに？」

「貴方、本当に素手で戦うの？」

「うん。」

手っていうか、からだぜんぶつかってたたかうの。

そんなにヘンかな？」

「いいえ、変じゃないわ。」

変というよりすごく珍しいのよ。

そうね……何故かは分からないけど、貴方には期待してしまう何かが見えるわ。

ただの神としての直感だけだ」

「きたい？」

「そう、期待よ。」

………これくらいならギリギリセーフの範疇かしら？

多分大丈夫でしょう………」

「むー？」

神匠たるヘファイストスはラジエルの顔を見つめながら、しきりに何かを考え込んでいた。

神は不変にして不滅の存在。

それはどんな神であろうと変わることのない世界の定めた規律にして原則。

変わることのない自らの価値観やものを見る目線は、幾百幾千の時を過ぎしても変化しない。

神々は生まれた時より完成された存在なのだ。

故に多くの神々は自分のこと以外に目を向けるようになっていった。

変わらない自分より、短い時を懸命に生き、日々変化する小さな存在に焦点を合わす。

そんな神の唯一の娯楽が、知性を持った存在の成長だった。

その者の変わりようを眺め、同じ時間を共有して成長の実感を得る。

自身の絶対の権能を捨ててまで地上に降りてきた神たちは、それほどまでに刺激を求めていたのだ。

ヘファイストスもまたそのうちの一神。

他の神々たちとベクトルは異なるものの、自身の性質を子どもに擦り寄せ、その後の結果を想像し、望んでしまう。

職人とは、時として病的なほどの執着を見せる時がある。

それが、まだ試したことのないものに対してなら尚更のこと。

神ヘファイストスは、自身の内から湧き出る思惑を試してみようと思った。

「ねえ、ラジエルくん。

私と一つ約束をしない？」

「んー？」

何のやくそく？」

「そんな難しい話じゃないわ。

私をアツと驚かせるようなことをして欲しいの。

これは、ダンジョンに潜っていればいずれは出来ること。

その時に出てくる結果を私に知らせて。

もし私を驚かせることができたら、貴方にご褒美をあげるから」

「よくわかんない。

「へファさまをおどろかせるよーなことを、ダンジョンでしてくれればいいの？」
「そう！」

これは貴方と私だけの秘密。

約束できるかな？」

「うん、いーよ。」

「ゆびきりしよ？」

「ふふっ、懐かしいわねそれ。」

「いいわ、約束しましょう？」

少年と神との間に交わされる指切りという名の誓い。

これはいつか、少年にとって掛け替えのないものになるかもしれない。

神匠は期待する。

この少年がとてつもない偉業を達成することを。

少年はまだ知らない。

この神との約束が、自分にとってどんな意味をもたらすのかを。

こうして、記念すべき第一回のお買い物は終わりを告げた

リユーからの期待の証である、黒革の胸当てを贈られ、この日は仲睦まじく、手を繋

いでへフアイストスとバベルの塔に別れを告げた。

第8話 少年、入口に立つ

「……………」

日の出前の早朝、少年は既に入口に立っていた。

怪物の口が広がっている。

獲物を誘う食虫植物のように、光源で虫を待らせるように捕食対象を待っている。

これより先は魔窟。

引き返すは勇氣、進むは蛮勇と呼ばれる果ての見えない深淵。

数多の冒険者たちがその命を落としていった地獄へ通ずる通路。

そんな危険極まりないダンジョンの前に、少年は相変わらず表情のない顔で見つめていた。

ふと口から出た言葉は何の変哲のない感想。

眩かれた感想は怪物の口に吸い込まれ、果ての無さを主張してくる。

その反面、少年は何処吹く風といったスタンスを崩さない。
深淵の胃袋を持つ怪物。

蠱惑的に獲物を誘う魔窟。

死線満ち溢れる危険地帯。

それが、どうしたというのだろう。

大きく見開かれた瞳には、ここを死地と見てはいない。

ただそう恐れられているというものとしか認識していない。

ここは怖いところなのか、死んでしまうようなところなのか、危ないところなのか。

少年に去来する認識としてはその程度に過ぎない。

ダンジョンだけに限った話ではなく、全ての物事に対する姿勢がそう定まってしまう

ているのだ。

——死地など既に見てきている。

一面に燃え盛る炎。

助けを請う見知った人の声。

身内が事切れていく虚しい感覚。

慈悲など微塵も感じさせない侵略者たちの嘲笑い。

自分のどこかが死んでいく不快感。

あれが現実という絶望。

全てのきつかけとなつたあの夜こそが、少年にとつての原点。

生涯自分自身を苦しめ続ける悪夢。

何年経とうと消えることのない、鮮明に焼き付いてしまった光景。

殴られて、蹴られて、絞められて、突かれて、切られて、蹴られて、抉られて、犯されて、踏み躪られて、貶されて、汚されて、燃やされて、潰されて、殺されて死んだ。

男、女、子ども、老人、友人、知人、両親、妹はみんなそうだった。

少年の心も、どこか死んでしまった。

そんな世界はもう見てきた。

見てきたが故に今の自分はここにいる。

結果として自分はこうなってしまった。

この先に似たようなものが待っていないようが関係ない。

少年にとつての地獄は、あの夜をおいて他に存在しない。

忌まわしい過去が、皮肉にも恐怖を麻痺させる。

この程度、地獄とすら呼べない。

「……………」

少年の纏う空気から、余計なものが削ぎ落とされていく。

戦う意思、折れない鉄心、殺す覚悟。

それさえあれば少年は戦える。

雑念は霧散し、ただ眼前のものを排除する無機質な意識へと切り替えていく。

これより先は、いつか夢見た希望の光景^{ぜっぽう}。

己の身体を武器として携え、最低限のアイテムのみを携帯。

防具は籠手、胸当て、足具のみ。

全てが革製で統一されている。

万人にとって万全ではないが、当人にとっては間違いなく万全だ。

感傷には十分浸った。

感慨には耽るまでもない。

さあ、答えを探しに行こう。

その歩みは、まるで散歩のようだった。

街を初めて見たときの反応は欠片も存在せず、ただ眼前を見据え、視界と音を常に確保し続ける。

通行人はおらず、ダンジョンのこちらを嘲笑うような雰囲気のみがヒシヒシと伝わってくるだけだ。

—— 餌がまた来たぞ。

—— 血を寄越せ。

—— 肉を置いていけ。

—— 絶望を晒せ。

—— 悲鳴をあげろ。

まるで蓄音機から流れる音楽のようだ。

所詮は初見の錯覚。

恐怖へ誘うための古典的な手段。

まさしく、子供騙しではないか。

「ゲツ」

「……」

目の前に現れるは緑色の肌をした異形の生物。

疎らに生えた体毛、黄色くくすんだ眼、鋭く尖った牙、汚らしく伸びた爪、薄汚れた衣類。

ゴ布林だ。

基本的に群れで行動し、集団で個を叩く物量戦を好む下等種族。

ダンジョンで初めに対峙することとなる代表的なモンスターだ。

複数の目玉が少年へ集中する。

下賤な笑みを浮かべ、みっともなく涎を垂らす。

ゴ布林達は、あからさまに横一列へ広がっていき、最終的に少年を取り囲む円を描いた。

群れで行動するゴ布林からよく見られる四方八方からの物量作戦だ。

あつけなく取り囲まれた少年は、とりあえず立ち止まる。

目の前にいる二匹のゴ布林は、品定めをするかのような不快な視線を向ける。

余りにも見え透いている。

下卑た笑いを放ち、武器である木の棍棒を見せびらかしてくる。背後に気配が迫る。

足音も殺さず、奇声を発しながら急接近してくる存在を当然のごとく察知する。

「グバァッ!!」

それは奇妙な声を上げて止まった。

そして、ある一定の位置から動けなくなっている。

少年に顔を掴まれて、地に足を着けられないまま。

苦痛に顔を歪めるゴブリン。

痛みから逃れようと身体をよじらせるものの、顔に取り付いた拘束具は一向に外れない。
い。

そして掴まれている指の間から確かに見えた。

この薄暗い洞窟の中でもはつきりと映る、その青い瞳がこちらを見据えていた。

目は笑っていない。

口元は釣り上がっていない。

息は乱れていない。

そこにあつたものは“無”だった。

目の前の少年は何も感じてなどいない。

ただ眼前のものを障害物としか認識していない。

生き物とすら見られていない。

ただ“動く何か”とこちらを捉えているだけだ。

死神の足音が聞こえる。

何故だ。

死神ですら嗤うのに、目の前の少年は嗤わない。

—— コレは、なんだ？

そう思った直後、ゴブリンは死神に追いつかれた。

不快な音を響かせて、顔と呼べなくなった部分が無残にひしゃげられて死んだ。

世の中には禁忌と呼ばれるものが存在する。

実状を知ること、近づぐことも、話すことも禁じられるものだ。

アレは文字通り、触れてはならないものだ。

既に事切れているゴブリンを見下ろし、少年は特に何の感情も秘めない視線を投げかける。

見たこともないものに対し、これがダンジョン内のモンスターであることを理解する。

なんてことはない、ただの怪物。

自分たちとは身体の形状が似通っていて、異なっているものがこれらだ。

ほんの少し力を込めただけでこの有様になるようなものがこれだ。

上層に生息するモンスターは比較的弱いと聞いていたが、ヒューマン相手にもこの程度とは露ほども考えていなかった。

少年は周囲に狼狽えるゴブリン達を一瞥するが、大した力量を持っていないと見るや、その場を通り過ぎようと考えた。

だが、ここで少年の主神たるアテナの言葉を思い出し、その歩みを止める。

「いいかラジエル。」

今以上に強くなりたいのなら、可能な限りモンスターを倒すことだ。

相手が弱いかどうかは関係ない。

戦うか否かで経験値は貯まっていエッセリアき、私が恩恵を更新することでお前は成長していきく。

お前の求めるものが何なのかは私には分からない。

だが、何かを成し遂げたいのなら、戦って強くなれ。

もちろん、無理をしないことが前提だがな”

少年の主神はそう言っていた。

どんな敵であれ、戦わなければ強くなれない。

今以上の存在に成ることはできない。

現状に満足したくなければ、モンスターを倒し続ける。

「……しよーがないよね」

「グゲツ!?!」

「強くなるには、お前たちをたおさないといけない。

だから、俺にたおされるのは、しよーがないよね」

唐突に何か宇宙を舞った。

ゴブリンの目に見えたのは、拳を振り抜いた少年の姿。棒立ちになっている同胞の姿。

だが、そこにはあるべきものが欠けている。

そこにあるべき首が、欠けている。

何も実感できないまま、同胞は死んでいったのだ。

「だいじょうぶ、すぐに終わらせるから」

吹き荒れるは突風。

刹那に散っていくゴブリンの命。

人間とは思えない速度で肉薄し、一撃で摘み取られていく。突きを放せば首が消し飛んだ。

小さな手は槍となって胸を貫いた。

足は凶悪な斧のように首を薙いだ。

その小さな身体が動いた際には、身体の何処かが欠けた。逃げる間も与えられなかった。

瞬く間に、十数人いたゴブリンは地に伏せてしまっていた。

残るは、ただ放心して立ち尽くすゴブリンのみ。

目が離せなかつたのだ。

少年の動きを一言で表すならば、「美しかった」が当てはまっただろう。

拳を振り抜き、足を振り切る様に見とれた。

残心の際に垣間見えた流し目。

迷いのない攻撃。

最小限に留められた移動。

動くたびに揺れる長い黒髪。

年にそぐわない艶に驚き、モンスターでさえ見とれた。

「お前で、ささいだね」

少年の言葉を聞き終える前に、残ったゴブリンは死んだ。

肉体的にはなく、迫り来る未知の恐怖に押しつぶされて死んだのだ。

そして自分たちはようやく悟る。

間違いないアレは、禁忌そのものだったということ。

「……貫手かんしゅいつかく一角。

じゃあ、おやすみなさい」

あれから数時間の時が過ぎた。

ダンジョンでは、モンスターは定期的に生産されていく。

主に壁から浮き出るように現れるとされる。

また、生まれる際、モンスターは体内に魔石と呼ばれる結晶石を持った上で生まれる。それは身体構造とは別離の急所となっており、それを破壊されたモンスターは灰となつて消滅する。

そして、それは街や世界にとって重要な資源として注目されており、魔石ごとに価値がつけられる。

上層のモンスターの魔石であっても、安価ではあるが価値はある。

より深い階層に入っていくほど、その魔石に凝縮されたエネルギーは多くなり、価値が高騰していく。

ダンジョン内においてモンスターは無限に湧き出る。

この性質を利用して、迷宮都市オラリオは世界に注目され、より多くの富を求めるため冒険者たちは危険な

冒険に繰り返し出していくようになった。

だが、魔石があるからといって、モンスターの急所は変わることなく存在する。

いかに発生や増殖方法が不明であっても、モンスターは総じて生物である。

頭部や心臓部を破壊すれば、人間と同じように倒せる。

ただ倒すだけなら魔石を破壊すればいい。

金を得たいのなら生物特有の急所を突けばいい。

ただそれだけのこと。

そのどちらにも関心がない少年にとっては、全くもって関係のないことではあるが。

「今は……えっと、六階層かな？」

探索を始めたのが日の出前の早朝だったので、今の時間帯は大体昼前辺り。

上層のモンスターではほとんど相手にならず、より強敵を求めて階段を下り続けて今に至る。

気づけば到達階層は六階層になっており、このまま進んでも全く支障がないほどに順調だった。

携帯食料を食べ、水を少し飲んで空腹を紛らわす。

体力問題なし。

身体の損傷もなし。

以前の鍛錬で山の中に籠った時と同じような感覚。

その気になれば、後一日はこのままの調子で戦い続けられる。

変わったことといえば、遭遇するモンスターの種類が増えたことぐらいだろう。

巨大な単眼蛙、フロッグ・シューター。

長い舌が特徴的だったが、舌を伸ばした後は隙だらけだったため、舌を切断した後に目に足刀をお見舞いして下した。

次にダンジョン・リザード。

大蛇以上の体格を持ち、壁や天井を自在に這いずるため、体格に似合わず俊敏だった。最も、遠距離攻撃を持っていなかったため、対処は容易だった。

巨大な口を開けて迫ってきたため、上顎を蹴り上げて昏倒させ、貫手を使って沈めた。どれもこれも取るに足らない雑魚ばかりだ。

ただ巨大な相手など恐るるに値しない。

むしろ的が大きい分やりやすい。

ここまで何の驚異になり得ないやつらばかりであったが、現在いる場所は六階層。リユースの話によれば、ここより先にはやつが現れる。

「あ、あれかな？」

「……………」

それは、まるで人影が一人歩きしているかのような体格であった。

初心者殺しのうちの一体として恐れられる人型モンスター、ウォーシャドウ。

体長はラジエルより高く、足の先にまで届くのではないかというほどに長い腕を持つ。

刃物と同じ殺傷能力を持つ爪を両指に三本ずつ携えており、動きが人間染みている。現れた数は二体。

定石通り選択肢を挙げるならば、撤退一択である状況だ。

「やっ」

「……………ッ!？」

右腕の手刀を一閃。

一体目のウォーシャドウの爪を破壊する。

鍛え抜いた強靱な筋肉、抜刀の初速を真剣さながらに振るえば、生物の爪など簡単に破壊できる。

自分より前にいる仲間の危機を察した二体目のウォーシャドウは、背後から飛び出るように奇襲を仕掛けた。

今度こそ、その幼い体を引き裂くために爪を突き立てる。
だが、自慢の爪より強固なものにそれを阻まれる。

「……………きかくてつこう
亀殻鉄甲」

防具の隙間を通したかのような一撃だった。

確実に肉を抉るはずだったが。

腹部に爪を突き立てた後、自慢の武装は砕け散った。

少年の身体自体に、それを阻まれたのだ。

『亀殻鉄甲』

筋肉を瞬間的に膨張させて硬化し、鉄の強度を人体で実現させる防衛の型。筋肉がより密集した箇所においては鉄壁を誇り、並大抵の兵装では傷一つ付けられない。

積み上げられた石の上で瞑想を繰り返し続けた求道者は、長い年月を掛けて自身の身体を石以上の強度へ変貌させたという話がある。

「シツ」

ウォーシャドウの腹部へ膝蹴りを放ち、よろけたところに掌底を放つ。

生まれ出た壁に再びめり込み、その姿を灰へ変化させていく。

奇襲を仕掛けた二体目は、一瞬で潰されたのだ。

その一体目が視線を仲間へ移した刹那、自身の視界は暗転した。

自分たちの爪より強靱な細腕が、容易く身体を貫通してきたのだ。

「よそ見はダメだって、ししよーは言ってた」

視線を敵から外したが最後、それが自身の命運を分ける。

故に、意識は常に相手に向けられているものでなければならぬ。
戦闘において、一瞬の隙は命取り。
いつ何時も油断してはならない。

「あ、そういうえば」

ラジエルは、魔石を回収することを思い出した。

リユーから事前に言われていたことだ。

ギルドが設ける換金所が、どんな魔石であれ査定して換金してくれるのだという。

この街で、獲物を狩って食らう必要はない。

衣食住を揃えるためには資金が必要となってくる。

それを稼ぐために、倒したモンスターからのドロップする魔石があるのだ。

そして、稀に出てくるものがある。

「これ……つめ、かな？」

それがドロップアイテムと呼ばれるもの。

モンスターの身体の一部が灰にならず残ったものものを指す。

ダンジョン内で取れるモンスターの一部は、ものによつてはそのまま武器にもなるほどに質が高い。

それらを鍛冶師に持ち入り、加工してもらうことでより強固な武具となる。

また、魔石以上の価値になるため、売却することもできる。

「むー、またてきがいなくなっちゃった」

気づけば周囲に敵の気配はなくなってしまった。

壁から新たに生まれる様子もないため、完全に暇を持て余している。ならば歩を進める以外すべきことはないだろう。

「つぎはここからつと」

緊張感欠ける様子は当分変わりそうにない。

しかして、ダンジョンの恐怖はまだ始まりに過ぎない。

いつまでもこの調子は続かない。

その深淵から覗く死線は、無数に冒険者に対して向けられているのだから。

第9話 少年、叱られる

見渡す限りは不毛の地。

岩だけがいたるところに敷き詰められ、果てのない空間が光源を奪い去る。

薄暗闇の中で見える光景は、生命の温かさを感じさせない。

在るのは、常に飛び交う無数の死線。

それは、間髪入れずに生者に対して突き刺さる不可視の刃。

延々と鋭い刃物で突かれているかのような錯覚を、冒険者に対して与え続ける。

ふと、思い出す。

あの日の光景も、こんな感じだったような気がする。

生存者がいないあの虚無感。

死が充満する不快と恐怖が支配する空気。

無慈悲に生命を奪い去ろうとする環境。

何から何まで似通っている。

これが死地だ。

生きるか死ぬかの選択を迫られ続ける世界。

正常な者であれば、数時間で気が狂ってしまう魔の巣窟。

だが、少年には何も響かない。

何かが足りない。

あの時見たものは、こんなものではない。

自分に刻まれた印象は、この程度では済まない。

衝撃が足りない。

刺激が足りない。

嘆きが足りない。

痛みが足りない。

悲しみが足りない。

苦しみが足りない。

何もかもを焼き尽くすあの熱が、足りない。

決して消えることのない赤が、十年以上経った今でも鮮明に焼き付いている。

それは、きつと。

あらゆるものに対して平等な、炎なのだ。

ウォーシヤドウを撃破してからは、特に大きな変化なくラジエルは前進を続けた。最早何階層まで降りてきたのか分からなくなった。

相も変わらず襲い来る障害を一蹴し、黙々と、淡々と進んでいく。

ここまでの道のりで、発見されてきたモンスターには全て遭遇してきた。

上層といえど、うかうかしていたら四方八方をモンスターに囲まれ、あっという間に命を落としてしまう。

それがダンジョンの恐ろしさ。

低級とはいえ、数の暴力は立派な驚異のうちの一つだ。

どんな歴戦の猛者であろうとも、自身の容量を越えた物量に対してはあまりも無力。戦場において戦士の多さは特に評価される。

どれほど質の高い戦士を前にしても、数の波で押し切ってしまうえば、それだけで相手の戦力を大幅に削げる。

原則として、多数の敵影を前にしたときは撤退以外、選択肢はないと見てもいい。

そういった場合は攪乱することに努め、戦力が分散したところを各個撃破することが

定石。

まともにかち合えば、まず勝機は薄い。

しかし、中には例外も存在する。

かくいう少年も、その中の一人として数えられる。

人間の身体能力を優に越え、その数が十を越えようとも、少年に対しては物足りないの一言に尽きる。

どれもこれも弱く、脆いため一撃で沈んでしまう。

人型のゴブリンやコボルト、ウォーシャドウはもちろんそうだが、ダンジョンリザードやキラーアントはただ図体が大きいだけだった。

いずれも力任せに迫るだけだったため、隙を見つけることはあまりにも容易く、無防備な姿を沈めることは実に簡単だったからだ。

全く驚異になり得ないものばかりだ。

早く強敵に出会いたい。

自分が体験したことのない新たな存在を求めてきた。

山賊や山に住み着くモンスター、賞金首、やたら数だけ多いならず者たちなどを沈め続けてきた。

言うまでもなく、どれも相手にとって不足でしかなかった。

その反面、師にだけは全く齒が立たなかつた。

何度死を近くに感じたか分らないほどに打ち合つた。

思えば、あの時が最も充実していたのかもしれない。

突きが全く当たれる気がしない。

蹴りが全く触れられる気がしない。

攻撃を防ぎきれぬ気がしない。

どれもこれもが、自分にとつて得難いものばかりだつた。

そんな師の元だつたからこそ、今の形に叩き上げることができた。

師に比べれば、ここいらの敵など木偶と変わらない。

「……………つまんない」

胸中に宿るは虚しさだけ。

これまでのことから分かるように、少年の心はどこか壊れてしまつている。

幼い頃より故郷を戦火に包まれ、自分以外の者は全て殺されている。

その過去から、少年の心は死と炎が大半を覆つている。

多くの大切なものが目の前で消えた。

「廃人一步手前で済んでいるのは、ラジエルの精神防衛の働きによるところが多いだろう。」

「生きる屍にならずに済んだのは、バラバラに砕け散った心を無理矢理寄せ集めたからだ。」

「以前より不器用になったが、廃人よりは遥かにマシだった。」

「その心は、全く型にはまっていないパズルのピースのよう。」

「それがラジエル^彼だ。」

「死と隣り合わせになる戦いが、皮肉にも少年の新たな生きる術となっている。」

「——アア!!」

「……?」

「だれか、たたかっている?」

「研ぎ澄まされた少年の聴覚に、モンスターの奇声が届いた。」

「どうやら何者かと交戦中のようにだ。」

「ラジエルの丁度見据えている先に感じる。」

「このままだと死んじゃうかも」

モンスターの声に紛れて聞き辛いのが、冒険者と思われる声も聞こえる。耳を塞ぎたくなるのは女性の悲鳴。

武器がかち合う音が聞こえない限り、冒険者側は防戦一方なのだろう。状況を耳で拾いつつ、交戦している付近に急行する。

縮地からの前傾姿勢で突貫。

最速で最短に駆けつける。

「すとーっぷ」

「……えっ!？」

「…象震脚、えいや」

着地と同時に周囲のオークたちの動きを強引に止める。

強力な震脚から繰り出される衝撃は、生物の行動を硬直させる振動となる。

短い硬直時間ではあるが、僅かとはいえ動きを止める技はいつだって優秀だ。

ほんの一瞬の硬直が命取りとなるのが戦場だからだ。

その巨体の動きが鈍った刹那、少年の姿はブレる。

まるで蜃気楼のように姿は朧げに映り、動きはコマ送りのようにしか見えない。

「けんかくぶどう剣鶴舞踏」

残心を確認できた時には、既にオークは赤に塗れていた。

恐らく、奴らにも何が起こったか理解できなかつただろう。

救われたこの冒険者である者の目から見ても理解できなかつたのだから。

「えっと、だいじょうぶ？」

「あ、ああ。」

助かった、ありがとう。」

少年は息一つ乱さずに女性に向き直り、手を差し伸べる。

フードを目深に被った女性は、困惑しつつも平静を取り戻し自力で立ち上がる。

背丈と同じくらい長さの杖を携え、身体の線を覆い隠すほどのローブを身に纏う。

状況から察するに、一人では手に余る数に囲まれてしまったように思える。

ダンジョンでは主に複数人で潜るのが常識とされている。

規格外のラジエルならいざ知らず、女性一人でここまで来るのはあまりにも不自然だった。

「おねーさん一人なの？」

「ああ、今はな。」

モンスターの大群に襲われ、撤退しているうちに仲間とはぐれてしまったんだ。

そういう君こそ一人なのか？」

「うん、上層までつていう約束ならいーよつて言われてね。」

俺はラジエル・クロヴィスだよ。

よろしくね。」

「すまない、申し送れた」

謝罪を述べると、女性はフードを取り、その素顔を顕わにさせる。

薄緑色のロングヘア、男性顔負けのキリツと引き締められた瞳。

誰に対しても物怖じしない佇まいと、特徴的な耳の形状。

妖精に相応しい美貌を持つ女性は軽くお辞儀をしつつ答えた。

「私はリヴェリア・リヨス・アールヴ。

見ての通りエルフ族だ。

所属はロキ・ファミリア。

「こちらこそよろしく頼む」

「うんよろしく。」

……あ、そっか、自分のファミリアも言わないといけないんだよね。
俺はアテナ・ファミリアに入ってるんだ」

女性の名はリヴェリア。

自分の所属ファミリアを伝えたところで簡単な自己紹介は終了した。

「ラジエル、君は一体どうやってここまで来た？」

見たところ何の武器も持っていないようなんだが……」

「さっき言ったとおり一人だよ？」

「武器は俺には必要ないからね」

「な……なんだと？」

子どもの身でここまで一人で!?

しかも武器も持たずにこのダンジョンに潜るだど!?

嘘なら嘘と言え!

子どもといえど、このダンジョンでつまらん冗談は許さんぞ!」

「ほんとー……なんだけど」

「嘘じゃ……ないだど？」

ラジエル、もう一つ聞く。

君は冒険者になってどれほど経つ？」

「えと、いつしゅーかん……ぐらいつ？」

「馬鹿者!!」

少年の答えを聞いた途端、リヴェリアは激昂した。

モンスターを呼び寄せてしまうほどの音量を響かせて、ラジエルを叱り飛ばした。

口をポカんと空けて、呆けている少年のことなどお構いなしにリヴェリアは思いつく限りの言葉を羅列していった。

「信じられん！」

ここは十一階層だぞ!?

冒険者になって一週間しか経っていない者が来るべきところではない!

バカという次元を通り越している!

いや、一週通り越して結局バカだ!

このダンジョンがどれほど危険なところか十分に教えてもらっただろう!?
うちの団員といいお前といい、どうして冒険者にはこうバカが多い……!
同じ冒険者として恥ずかしくて仕方ない!

いいか!

ダンジョンでは、いつ何が起きるか誰にも分からない!

回復薬や状態異常用の解毒薬は大袈裟というほど持つておくのが基本だ!
なのになんだその貧相な装備は!?

そんな不十分な装備ですぐに命を落とすことを分かっているのか!

揃えるほど余裕がないのならきちんと段階を踏んで余裕を作れ!

あとラジエル!

武器が必要ないと言ったな?

子どもが意味のない意地を張るんじゃない!

そうじゃないにしても護身用のナイフも持ってきていないなど笑い話にもならん！
モンスターに囲まれたら一体どうするつもりだったんだ!?

曲がりなりにも冒険者を目指すくらいなら、それ相応の心得をしつかりと学んでおけ
この大馬鹿者!!」

「……………」

「ハア……ハア……」

彼女は一息に叱責を吐き出した。

一度たりとも嘯まずに言い切る辺り、相当弁の立つ者だ。

どうやら身内に少年と似たようなことをする輩を抱え込んでいるようだ。

言葉に苦勞が滲み出ている辺り、かなりの苦勞者でもあるらしい。

常日頃から言わされているとなれば、さぞ頭痛が絶えないだろう。

何より、ラジエルが呆けたことに関してはもちろん意味がある。

この街に来て、初めて叱られたのだ。

「ハアハア……分かったか？」

分かったのなら返事！」

「は、はい、ごめんなさい……」

「ふう……全く。」

こんなところで他のファミリアの子どもを叱ることになるとは……。

まあ、君には助けてもらった借りもあるしここまでにしておこう。

どうやったかは全く分からなかったが……。

それより、地上に戻った時は覚悟しておけ。

そのフワついた頭にみっちり知識を詰め込んでやるからな」

「う、うん」

新鮮な感覚にどういった反応をしているのか分からなくなったラジエルは、とりあえず素直に従うことにした。

少年の心境は複雑だった。

叱られたのに、胸の辺りに温かい気持ち溢れる。

リヴェリアは悪意をもってこちらに対して怒りを顕わにしたのではない。

むしろその真逆。

少年を心底案じたからこそ厳しい言葉をぶつけた。

つい先程会ったばかりのラジエルに対して、正面から向き合ってくれたのだ。

叱っている最中も、彼女は真つ直ぐに目を合わせながら真摯に想いをぶつけてくれた。

人は本来、接点のない者に対しては無関心である。

何故なら、その者に対する思い入れが存在しないからだ。

縁もゆかりもない、ましてや話したことのない相手には進んで感情など示さない。

示すは怒りや侮蔑といった黒い感情が大半を占めるだろう。

だが、中には縁もない者に対して真つ直ぐに気持ちをぶつける者も存在する。

例えそれが、一時の感情の昂ぶり故のものであったとしても、言葉を投げかけたという気持ちに嘘は混じっていないのだから。

「……………」

流星にあれだけ怒鳴り散らしていれば寄って来るか……。

ラジエル、私の後ろから離れるな」

「むー?」

そんな二人に忍び寄る影が多数。

キラアアントにシルバーク、オークやバトルボアなどのモンスターたちが迫り来

ていた。

余程声が響いたのだろう。

それ以外のモンスターの影も多数見受けられた。

一般の冒険者からすれば絶望的状况。

退路は徐々に狭められ、一分もしないうちに囲まれてしまうだろう。

しかし、目の前のエルフは動じない。

ラジエルも薄々は勘付いていた。

彼女はかなりの使い手であると。

相応の場数を踏んできたのだろう。

追い込まれているにも関わらず、彼女は慌てふためくことなく、冷静に状況を分析する。

敵の位置を正確に把握。

危険度の高い個体を選別。

自身の持つ手札を確認。

打開策を冷静に模索。

的確に作戦を構築。

活路を見出す方法を選択する。

「フツ、この程度なら呪文一つで事足りる。

ラジエル、よく見ておけ。

君の見たことのない力の一端を見せよう。

やや魔力が不足しているが、この程度の数なら問題ない」

一瞬で解析を終わらせたリヴェリアは不敵に笑った。

杖を握る手に力が籠る。

どうやらこの状況を一気に覆す手段を見つけ出したらしい。

ラジエルの見る一点は、目の前のエルフだけ。

周りの雑魚には一瞥もくれなく、ただ彼女の動きのみに注視した。

低級モンスターでは成長の糧にならない。

ならば、自分より冒険者として経験の深い者の動きを見たほうがよっぽど有意義だ。リヴェリアは杖を前に突き出し、静かに言霊を紡ぎ出す。

『間もなく、焔は放たれる』

それは、あまりにも身近に感じたことのあるものだった。

紡がれていく言葉は早く、常人ならば聞き取れないほどの速度。

迅速に、的確に、確実に紡いでいく。

詠唱が積み重ねられていくにつれて、リヴェリアを纏う魔力は膨れ上がっていく。

『忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。』

開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む』

肌で感じるは強烈な熱気。

触れるもの全てを燃やし尽くさんと牙を剥く破壊の力。

少年は知っている。

この熱が生み出した光景を。

猛威を振るったその有様を。

全てを焼き尽くした暴力を。

『至れ、紅蓮の炎、無慈悲な猛火。

汝は業火の化身なり。

大いなる戦乱に幕引きを』

久しく感じていなかったあの熱を、今一度体感する。

リヴェリアが映る光景には、あの時の自分が重なって見える。

幻想だ、幻覚だ、幻影だ。

だが、あの炎を見ると、自然と胸が疼く。

表情は一切動かないのに、胸の高鳴りは一向に止まらない。

忘れたいと思っていた。

忘れてはいけなくとも思っていた。

あの日をなかったことに出来ないように、あの光景だけは忘れてはいけなかった。

忘れるはずがないのに。

消えるはずがないのに。

自分の心が自分勝手に躍動する。

自分は一体、何を感じているのだろうか。

『焼き尽くせ、スルトの剣——我が名はアールヴ』

ただ一つだけ分かったことがあった。

『レア・ラーヴァテイン！』

炎こそが、自分にとっての始まりなのだ。

「改めて自己紹介しよう。

私はリヴェリア・リヨス・アールヴ。

ロキ・ファミリア所属にして魔法支援担当を受け持つ、L.V. 3だ」

ダンジョン内に響き渡るは無数の断末魔。

紅蓮の炎に焼かれ、成す術もなく倒れ伏していく。

あれだけいた大群は、物の見事に灰塵の山に成り果てた。

エルフが用いたものは魔法。

人の身で奇跡を発現させる特別な力。

その詠唱が長ければ長いほど威力が高く、消費する魔力も多い。

詠唱に集中することで、自身を無防備にしてしまう。

加えて、魔力の配分量を誤れば精神疲弊マインドダウンを引き起こし、目眩などの症状を引き起こす

うえに身体の動きが鈍る。

確かに消費する魔力は確かに多く、唱えるまでに多くの危険を伴うが、その見返りも

また大きい。

一度解き放てば戦況を覆すほどの可能性を秘めており、仲間の危機を救うことができ

る。

その上、魔法を発現する者は少ないため、魔法所持者はそれだけで重宝される。

「ハア……」。

どうだ、ラジエル。

これが魔法というものだ」

「すごいね。

リヴェイア一人で倒しちゃった」

「リヴェリアだ。

まあ……その舌つ足らずも後々治すでしょう。

今は君の保護が最優先事項だからな」

「でもリヴェエふらふらだよ？」

休んだほうがいいよ？」

「リヴェリアだ。

勝手に訳すんじゃない。

問題ない、上層なら確実に守り通して見せるとも」

「さっきダンジョンは何が起きるかわからないって、リア言った」

「リヴェリアだ！

勝手に訳すなと言っただろう!？」

変に可愛くアレンジしてもダメだ！

はあ……そうだったな。

確かに私はそう言った。

格好付けた手前申し訳ないが、少し休んでもいいだろうか？」

「うん、でもその前にあっち行こ？」

たぶん、ここあぶない」

「ここら一带を焼き尽くしたから大丈夫だとは思うが……。」

そうだな、何かしら匂いを嗅ぎつけてくる奴らもいないとは限らない。

場所を変えようか」

「手、いる？」

「だいじょう……いや、借りよう。」

ありがとう、ラジエル」

「んーん、ここらこそありがとう」

リヴェリアは、一瞬ラジエルの手を掴むことを躊躇ったが、素直に好意に甘えることにした。

肌の接触を嫌うエルフ族の一人であるリヴェリアだが、ラジエルには嫌悪感を示さなかった。

何故だか、自然と掴めるような気がしたのだ。

少年には邪な感情が存在しない。

例え絶世の美貌を持つ相手であろうと、醜悪な身なりをした相手であろうとも対応に差はない。

感情の希薄さは、それらを平等の位置に引き上げた。

視線に敏感なエルフは、そういった劣情を秘めた者には近づこうとしない。例え必死で隠そうとも、的確に見抜いてしまう。

故に、少年にはそんな警戒は自然に解けた。

それこそまるで、草木などの自然に触れ合うかのような感覚だったからだ。むしろ、触れたリヴェリア側が安心する。

これこそ、平等に接することができる存在だと。

「この辺りでいっか。」

周りには何も感じないし、だいじょぶだよ」

「そんなことが分かるのか？」

「うん、まちに来る前は山にいたから。」

「どーぶつの気はすぐ分かる」

「そうだったのか……。」

「なら、その山ではどうやって生活していた？」

「ししよーと二人でくらしてたよ。」

「えものをつかまえて、しゆぎよーして、寝るの。」

「十年ぐらいそーしてきた」

「じゅ、十年？」

それに、修行って……」

「この体だけで戦う戦い方。」

リアに会うまで、俺ずっとモンスターたおしてきたんだよ？」

「……本当なのか？」

本当に君は素手でここまで来たのか？

いや、初めて会った時からそうだったんだろうが、納得や理解なんてものが出来るはずもなくでな……。

ましてや君は子どもだ。

いくら鍛錬を長年積んだからといって、成熟していない体で戦場に繰り出すのは余りにも危険だ」

リヴェリアの意見は最もだ。

こちらを気遣う気持ちが十二分に感じられる。

だが、今の今まで、拳を振るって生き抜いてきたことは確かだ。

そういつた言葉も随分と投げ掛けられてきた。

それに、少年には戦い以外生きる術がないのだ。

「っ!？」

「む？」

大地が鳴動する。

ダンジョンは、不規則に地震を引き起こすことがある。

基本的にはただの地震で終わることが多い。

だが、この揺れは時として思わぬ副産物を生み出す。

全くの予想外のモンスターが現れたとしても、全くもって不思議ではない。

ダンジョンでは、何が起きるか分からないのだから。

「イ、インフアント・ドラゴンだと!？」

第10話 少年、命を救う

「!!」

ダンジョンでは、実に多くの種族のモンスターたちが生息している。

有名なゴブリンやコボルトもまた然り、この魔窟の中では一種の生態系のようなものが築かれている。

そして中には、通常の個体に紛れて、滅多に姿を現さない個体がある。

絶対数が少なく、その姿を見た者はほとんどいないとされる。

希少種であるが故に、「レアモンスター」と呼称される。

そして、二人の目の前に現れた竜もそのうちの一種類だ。

インフアント・ドラゴン。

体長4mにして体高は150cmほどの体格を有している。

小竜と認定されているが、人から見れば十分に立派な大きさだろう。

体表は赤土色で、頭には短く伸びた角が一对。

前足と呼べるものではなく、大きく発達した二本足のみで自立歩行している。

これだけの要素であるならば、複数で相手取れば問題ないように思える。

だが、インフアント・ドラゴンには長い首と尻尾を先頭手段として用いる。

よって、常に長いリーチからの攻撃を周囲に振るうことが出来るため、複数人を相手取ろうとも返り討ちにする力量がある。

加えて、龍種の特徴である高い生命力と知能を併せ持つ。

上層においてのボスの立ち位置であるモンスターだ。

「くっ……！」

この状況でインフアント・ドラゴンに遭遇するとは、幸運なのか不幸なのか分からんな……。

ラジエル、下がれ。

さつきまでの話が事実であろうとも、こいつ相手には分が悪い！」

「なんで？」

「インフアント・ドラゴン。」

小竜ではあるが立派な龍種のうちの一つだ。

上層には固定された階層主が存在しないが、こいつが出てくるとなれば話は別だ。
滅多に現れることはないが、事実上上層の階層主だ」

「そーなんだ」

「何を呑気なことを……」。

まあいい、こいつは私が引き受ける。

君はその間に地上へ戻れ。

連戦は厳しいが、幸い怪我はしていない。

仕留めることは出来なくとも生き延びることぐらいは十分可能だ。

……上層で防戦を強いられることはLv. 3としてこの上ない屈辱だが、命に変えることは出来ない。

私の合図とともに走れ。

決して振り返るんじゃないぞ」

リヴェリアは少数のパーティを組んで中層攻略の最中であつた。

しかし、その道中に他のファミリアのパーティからモンスターを押し付けられた。

それは「怪物進呈^{バス・バレット}」と呼ばれ、冒険者の間で苦肉の策とされている。

Aパーティがモンスターたちに追い回されていると仮定する。

走り込む先にBパーティがいた場合、Bに対して密着気味に近づきながら走り抜ける。

モンスターはより近い獲物に対して襲ってくる傾向があるため、この場合はBパーティが強制的に交戦させられることとなる。

この怪物進呈^{バス・バレット}を受けたパーティは、モンスターたちからの強襲を余儀なくされるため、体力の温存ができていなければそのまま命を落とす。

逃げるために他を蹴落とすこの行為は、冒険者たちの間で嫌悪されている。

だが、自分たちがそういった状況に陥った際、怪物進呈^{バス・バレット}をする可能性もなくはないため、一概に間違った選択ではない。

多くの恨みを買うことになるが、生き抜くためには知っておいて損はない戦術とされている。

リヴェリアたちもその被害に遭った。

既にモンスターの群れと交戦中であつたにも関わらず、更に群れの追加を余儀なくされた。

容量を越える質量を前に撤退戦を強いられ、その合間に仲間とはぐれてしまったのだ。

慌てふためくメンバーをまとめあげるために魔法を連発してしまったのもミスのうちの一つ。

高威力の魔法でモンスターを殲滅するのと引き換えに、後の先頭のための精神力を温存できなかった。

当然仲間の命には変えられない。

その代わりにリヴェリアは自身を不利な状況に追い込んでしまった。

本来であれば上層のモンスターたちなど恐れる必要はないほどの強さを持つリヴェリアだが、消耗した体力と精神力マインドの代償は大きかった。

ソロで心身共に衰弱すれば、たちまちモンスターの餌食となる。

単身で挑む最低条件は、決して無防備にならないこと。

リヴェリアはモンスターを殲滅することを目的とせず、生存率を上げるための行動を取らざるを得なかった。

いくら level 3とはいえ、所詮は人の身体。

どれほどまで成長しようともモンスターからの攻撃を受け続ければ人は死んでしま

例えそれが上層のモンスターであろうとも。

「(……ここが、私の運命の分岐点、か。

この子に出会わなければ……いや、あの怪物進呈パスバレードを受けた時点で、既にこの状況は定められていたようなものか。

ラジエルに、ダンジョン内では何が起きるか分からないと説教をしておきながらこのザマか……。

トラブルの一つや二つで呆けていたのは、むしろ私の方だったな。

なら、巻き込んでしまった借りをここで返そう。

ああ、そうだと。

失態の返上として、喜んでこの子を明日へ生かすための選択を取ろう)」

故にリヴェリアは決断する。

既に退路は絶たれた。

この薄暗く、霧が立ち込める空間であつても、インフアント・ドラゴンはこちら目掛けて進撃してくる。

龍種の嗅覚を誤魔化すのは難しい。

リヴェリアは囿になる選択を取ることにした。

ここまで突き合わせてしまった少年に対して、謝罪の意を示すように意思を示した。確かに身体にこれといった怪我は存在しない。

だが、ここまで登ってくるまでに多量の体力と精神力マインドを使ってしまった。十分な休息がなければ当分持ち直せそうにない。

回復薬の類は全て使い尽くし、頼れるべきアイテムはもうない。

今自分に残っている力が最後の頼みの綱。

「ではな。

短い間だったが楽しかった。

なに、私は死ぬわけじゃない。

君が生き残っていればどこかで必ず会える。

座学の件、忘れるんじゃないぞ。

さあ、行けえ！」

「——ツ、——アアアア!!」

リヴェリアはラジエルの背を押して、一気に敵前に躍り出た。

最後の最後に少年の顔を見る事が出来なかった。

間違いなく気丈に振る舞っていたはずだ。

だが、最後に顔を見てしまえば、決心が揺らぎそうで怖かった。

そのため返事も聞けずに飛び出してしまった。

一方的に取り付けた約束も、果たしてあげられないのが無念でならない。

しつかりとした知識をつけてあげたかった。

できる限りの教養を身につけさせたかった。

嫌悪を感じない時間を、もう少し味わってみたかった。

それは、大人から子どもへ送られる優しい嘘。

自分だけが悟れる、果たせない約束。

またいつか会える。

いつか大人になって、この嘘の意味が分かるまで気負わないで欲しい。

だが、自分はまだまだだと、同時に悟る。

最後の最後に、しつかりと顔を見て話せない辺りまだまだなのだろう。

先輩として、この状況で涙を流すなんて以ての外だ。

ああ、でも残念でならない。

僅かであっても、自分より未来ある子どもの顔を、もう少し見ていたかったのに。

「すまないラジエル……。」

約束、果たせそうに……ないよ」

「——アア!!!!」

轟音が、無情に鳴り響いた。

「ラジエル、修行は一度中断してお話をしましょう」

「おはなし？」

「はい、貴方が戦う上で、知っておかなければならないことを話しておきます。

ラジエル、貴方はもう自分の身を護る術を十分に身につけましたね？」

“うん”

“よろしい。”

ですが、それは貴方だけの話です。

他の人はそうはいきません。

ラジエル、もし貴方の前で、他の人が自分を守れないような状況の時、貴方はどうします？”

“どうって……”

“力というものは、自分の為だけにあるものではありません。

むしろ、自分以外のものの為にあるのです。

ここまで言えば分かりますか？”

“たぶん……”

“貴方が本当に強くなりたいと望むなら、この意味をよく考え、自分なりに答えを見つけてみてください。”

その答えに辿り着いた時、貴方は本当の強さの一步を知ることができます。

なので、私は答えを言いません。

自分で思う存分悩み、考え、そして迷ってください。

その選択が迫られた時に、貴方が取る行動がその答えとなります。

私が信じるラジエルなら、きつと私が望んだ答えを出してくれるはずですよ”

“そーなのかな。”

なんか、分かりそーで、分からないよーな……”

“ふむ、貴方は英雄譚に興味を示しませんからね。”

そういつたことに関して柔軟に頭が働かないのも無理ありませんか。

では、仮の話をししましょう。”

もし、私がラジエルの目の前で大岩に押しつぶされそうになっていたらどうしますか

?”

“助ける。”

ししよーは死なないと思うけど”

“要はそういうことですよ。”

弱きを助け、の信条です。”

他人がどうしようもないほどにピンチの時は、貴方が助けてあげてください。”

その行いは他人の助けとなり、貴方の探し求めるものの手掛かりにもなるはずですよ。”

まあ、ラジエルには、そういつたことを一切考えずに動いてもらいたいものですよ”

ね”

“それで、いいの?”

“はい、少なくともしばらくはね。

いつかは、自分の力で答えを見つけるんですよ？

期待、していますからね”

インフアント・ドラゴンとの距離が急速に縮まっていく。

あの巨体に押しつぶされれば、いかにLv. 3といえどただでは済まない。いくら経験値エクセリアを貯めてランクアップしたとしても、所詮この身は人の身体。重厚な装備でもしていなければ、呆気なく命を落としてしまうことだろう。常日頃から準備は怠るな。

新人たちによく言って聞かせていたことを唐突に思い出す。所謂、走馬灯というものなのだろう。

自分の意思と関係なしに、これまで体験してきた様々な記憶が再生される。年頃時に一族のしきりに不満を覚えるようになったこと。

衝動的に故郷を飛び出した時のこと。

オラリオに辿り着き、ロキに出会ったこと。

今日から家族と言われ、内心嬉しかった時のこと。

同じ仲間の者との距離感が分からずいがみ合っていた時のこと。

ランクアップした時のこと。

自分たちを慕う新人が入ってきてくれた時のこと。

何もかもが、つい最近のことにように感じる。

背景が緩やかな速度で流れていく。

これからの結末は分かりきっていることなのに、それを防ぐ手立ても術もない。

このまま運命に流されて行く。

抗う術など初めからなかった。

そう、故郷にいたときもそうだった。

両親に、外の世界へ行きたいと訴えても聞き入れてもらえなかった。

あの時、独断で故郷を去る選択を取らなかつたら、私はきつと流されていただろう。

広い世界を知ることできず、素性も知らない者と婚約を迫られ、生きがいも見つけられないまま生涯を終える形になっていたに違いない。

飛び出したからこそ、充実した今がある。

自分の手で、定められた運命を振り切ったと思えた。

だが、結局変わらない。

何も満たされないうまま死んでいくことに変わりはない。

まだまだやりたいことは沢山あったのに。

口キ親に恩を返したかった。

仲間ともつと話したかった。

新人を立派な冒険者に育てたかった。

もつと色んな世界を見てみたかった。

自由気ままな旅をいつかしてみたかった。

いつか、心底愛することができる者に、出会ってみたかった。

不思議な雰囲気を持った少年と、もつと触れ合ってみたかった。

思い返せばキリがなかった。

それ程までに強い気持ちだが、私の中で渦巻いていたというのに。

それらを叶えられることのないまま、ここで終わる。

少しくらい、ワガママになってもよかったのかもしれない。

後悔先にたたず。

今更思い至っても、もう遅かった。

「ツツ!!」

きつと私は、最初から何かを間違えてしまっていたのだろう。

迫る巨体。

閉ざされていく瞼。

捨てる、ここで、全てを。

「……………っ」

さようなら。

願わくば、来世は、自由でありたい。

されど痛みは訪れず。

耐え難いと思つていた苦痛は、身体を這いずることなく、確定された死は一向にやつてこなかった。

縫い付けられたような錯覚に陥つていた瞼を、強引に周囲の筋肉がこじ開けていく。

確かに、竜は目の前にいた。

同時に違和感を覚える。

少なくとも、先ほどまでに誰かが隔たりとして立つてはいなかったはず。

ならば、目の前にいる者は誰だ。

「待って」

小さな黒い子が、竜の前に立ちはだかつている。

頭からつま先まで黒に身を溶かした姿。

後ろから見れば、影のように見えるほどに真っ黒だ。

しかし、この影には実態が確かにある。

でなければ、竜の突進を受け止めているものか。

「リア、助けにきたよ」

「……………ラ、ジエル？」

渾身の体当たりを止められたインフロント・ドラゴン。

雄叫びをあげ、力を込めつつも前進し続ける。

だが、この小さな壁は動かない。

この掌が、まるで巨大な物体のように悠然として動かない。

有り得ない。

人間より遥かに優れた体格を有している龍種が、矮小な子どもの片手で抑えられているなどあつてはならない事実だ。

力を込め、込め直してみるも微動だにしない。

これは一体なんだ。

「おべんきよう、するんでしょ？」

「え……………」

「まだ、やりたいことあるんでしょ？」

「……………あ」

「まだ、生きたいよね」

「……………もちろんだ」

「いろんな事、教えてくれるよね」

「ああ！」

エルフは声高らかに返答する。

まだまだやりたいことは山ほどある。

それこそ数え切れないほどにある。

まだ生きたい。

こんなところで死にたくない。

死を間近にして初めて感じる生への渴望。

自分はまだ、生きていたいと切に願えたのだ。

「アアッ！！！！」

小竜は咄嗟に姿勢を真横にずらし、自慢の長い尻尾を力任せに振るう。

巨大な斧の横薙ぎに匹敵する一撃。

ラジエルは身を屈め、リヴェリアを抱えて後方へ飛ぶ。

舞い上がった砂煙が視界を覆う。

見えずとも十分に伝わる。

砂煙の先、大波のように迫り来る殺意の波動。

威圧だけで押しつぶさんとする竜の眼光を。

「……………」

少年が発する言葉はそれだけ。

多くを語らず、その技のみで示してきた。

今も昔も変わらない。

行う動作は、全てにおいて一貫するものである。

水の流れがその最たるもの。

どのような形になるのも自然に、ただそう在るように至る。

握られた拳は逆手に構え、左手は照準を定めるように竜に合わせる。

中腰に落としていき、足幅は一步多く広げる。

重心は突き出した左足に集中。

腰の位置は中腰で保ち、そのまま水平に滑走する。

狙うは正中線。

人体と構造は異なれど、内臓があることに変わりはない。

流れた風は、苦もなく対象の元へと辿り着く。

「りゅうついでほうけん
竜墜崩拳」

「ツツツ!!」

少年の突きは、必然と言わんばかりにインフロント・ドラゴンを貫いた。

収まるべき場所に収まったと言うべきだろうか。

当たるまでが、当たり前と錯覚してしまった。

そう、*“自然”* だった。

正確に正中線を突かれた竜は、文字通り地に墮ちる。
ふとりヴェリアは悟る。

うちの団員より、遙かに厄介な子であると。

第11話 少年、標的にされる

「この大馬鹿者がああ!!」

アストレア・ファミリアのホームのとある一室にて、その落雷は落ちた。

本当に雷が落ちたかのようにそれは建物全体に響き渡り、眷属たちは皆一様に身を竦ませた。

その一喝を目の前で受けているのは、言うまでもなくラジエルという少年だった。

黒目黒髪で、服装も黒一色で統一された奇妙な子ども。

武器の類を携帯せず、その手足には革製の防具だけ。

冒険者と言われなければならないただの子どもと思われるだろう。

しかしその実、卓越した武術を持ち、徒手空拳で戦う術を持っている。

その拳は岩を軽々と砕き、その足は風のように地を駆ける。

その実力はアストレア・ファミリア随一の戦闘力を誇るリユーと、団長代理のリユーによって太鼓判を押されており、実際目にした者が居らずとも、眷属達の中では周

知の事実となっている。

また常識や知識において乏しい部分があり、それを前にしたりユーによる懇願にて居候を許可。

以後、アストレア・ファミリアの眷属たちと共に生活することになった。

そんな彼は今、主神であるアテナよりお叱りを受けている。

説教を続けてかれこれ小一時間。

危険な行為に身を投じた少年に対して、怒りの衝動から怒鳴り散らしてしまっている。

立て続けに発せられる言葉の嵐には、叱っている自分からしてもどうかと思える程に怒った。

だが、一度堰を切ってしまったからには止まらない。

「全くお前という奴は！

無理はしないという私との約束はどうした！

冒険者になって日が浅いというのに十一階層に行った!?

いくら私が下界に来て間もないと言えど、ダンジョンの危険度は承知している！

お前も散々リユーから聞かされただろう！」

「……いめんさいい」

ラジエルは反省の言葉を口にした。

しかし、少年の表情が変わらない。

故に本当に反省し、事の危うさが理解できているのかどうか判断が出来ない。

こればかりは理解してくれていることを信じる以外なかった。

その迷いが、アテナに対して不安を煽る。

「はあ……。」

ラジエル、最初に忠告したはずなのに何故危険を冒した？

熟練の冒険者がお前の傍についていれば私の溜飲も下がろう。

だが、今回の探索でお前は単独行動だった。

助けてくれる者は誰ひとりとしていない。

もし不意打ちで深手を負えば、誰に看取られることなく死ぬんだぞ？」

「……」

神として、大人として今までの言い分がみつともないのは痛感している。

だが、それ以上に自分の子が心配なのだ。
初めて出来た眷属。

邂逅が偶然で、たまたま自分が空いていて、成り行きで自分の眷属となった。
守護女神としての自分を慕ってくれていた訳ではない。

まだ何の愛も示せてはいない。

それでも、眷属となってくれた子の身を心底案じようと思った。

ラジエルが力を求めて我武者羅に戦いを望んでいたことを知っていた。
だからこそ、心配の面を匂わせず、背中を押す激励を掛けた。

結果は、自分の不安を煽る形に終わった。

無事帰ってきてくれたが、それを心底喜べない自分がいた。

ただ、その感覚が不快だったのだ。

「ラジエル、身を危険に晒した罰として、三日間探索することを禁ずる。

その三日間の間に、私の言った言葉をよく考えろ」

「はい……」

「……もういい、戻りなさい」

最後まで顔を伏せたまま、少年は部屋を後にした。
乾いた開閉音が響く。

同時に自分の行いがどれほどまでに身勝手であったかを自覚する。
心を覆う自己嫌悪の波。

後味がとても悪い。

吐き気を催すほどに、心境は最悪だった。

時間が経つごとに今までのことを思い返していく。

自分にあの子を叱る権利などなかった。

ここ最近、ラジエルに親らしいことを何一つしてやれてなかったからだ。

ファミリアの運営方法、資金の活用法、ギルドへの申請、主神としてのノウハウ等を学ぶことに手一杯で、まともにあの子に接してあげられていない。

一言二言話すこともなかった日もあった。

思い直していけばいくほど、後悔や罪悪感が込み上げていく。

もう少しやりようはあったはずなのに。

ラジエルの過去は聞いていた。

親の愛情をろくに感じることもなく一人になったこと。

それ故に自分自身が壊れてしまったこと。

それを知った上での対応がこれか。

全く彼に寄り添えていない。

これで何が家族か。

笑えもしない状況を引き起こした自分自身に対して怒りが沸き起こる。

可哀想なことをしてしまった。

自己嫌悪に頭を抱え始めた時、ノックの音が耳に届いた。

「アテナ、今いいかしら？」

「アストレアか……ああ、どうぞ」

「調子はどう……なんて、思わせぶりな言い回しかしら？」

随分と厳しく当たったみたいね。

ラジくん、顔には出さなないけれど、目に見えて落ち込んでいたわ」

「ああ……」。

怒る側も気分が悪いとはよく言ったものだ。

お陰で心中は最悪だ。

もつとうまい言い方があったはずなんだがな……。

いざ自分が事に直面すればこの通りだ。

冷静なんてとても保てなかった」

厳密に表せば、保てなかったではなく、持てなかった。

保とうとしていたはずの冷静が、突如目の前から消失してしまえば、事の運びは言うまでもなかったからだ。

怒りという成分を含んだ感情は、本来冷静というフィルターを介して初めてろ過される。

今回はそのフィルターをはめ込む前に落としてしまった。

劇薬を中和させるはずが、劇薬をそのまま服用するはめになった。

簡潔にまとめるなら、それだけの表現で十分だった。

「悪い言い方と捉えて欲しくないのだけれど、これも経験よアテナ。

確かに、今回は互いに落ち度があったわ。

一方は身を危険に晒し、一方は相手の心を配慮せずに一方的に言葉をぶつけた。

どちらもそれまでと言ってしまうては世話がない。

だからこそ、前向きに捉えましょう？

貴女は、子どもの叱り方の一つを学んだ。

彼は、一人で挑むことの危うさを知った。

ゼロから始めるんですもの。

これくらい痛み分けは避けられないことよ。

大切なのは、次に進むための仲直りよ」

「アストレア……」

「ちよつと落ち着いたら、リユータちと一緒に、またご飯食べましょう？」

神友となつてから、最早数えるのも億劫になるほどの年月が経つ。

そんな長い間、多くの時間を共有してきたというのに、その顔は全くと言っていいほど見たことがなかった。

何気なく、朗らかに笑顔を浮かべるアストレア。

紛れもなく彼女は、女神だった。

小石が、目の前を転がっていく。

強制的に力を加えられ、所々角ばった地面に乱反射して、小石は不規則に地を転がり

続けた。

小石を蹴り続けるその足もまた、とても小さなものだった。

いつもより歩幅が狭く、不貞腐れたような足取りは、何やら多くの感情を含んでいそうだった。

転がる小石を見下ろす黒い双眼。

その目に、感情と呼べるものはない。

例えるなら無機質なビー玉。

光を反射して、不恰好でありながらも輝きを放つ。

だがその反面、光がなければくすんで見えてしまうほどに魅力がない。

もちろん、そのパーツが置かれているベースの顔もまた、大きな双眼と同様だった。

例えるならまっさらなキャンバス。

それは言うまでもなく、色が塗られる前の状態を意味する。

人間の表情をまっさらなキャンバスに例えることはほとんどない。

何故なら、人は皆何かしらの表情を無意識的に浮かべているものだからだ。

限りなく無表情に思えたとしても、じつくりと観察していれば、細やかな機微がある。

それは嬉しさや怒り、哀しみ、楽しい等といったもの。

それらを総じて、表情と呼ぶのだ。

彼には、表情はおろか、機微と思わせるものすら匂わせない。

完全なる無臭。

完全なる無表情。

完全なる無機物。

人の身で、ここまで完全を再現させたものはほとんどいないだろう。

どれほど過去を遡り、伝記を読み漁ろうとも、これほどまでに無表情を貫いたものはいないだろう。

いるとするならば、それは最早人ではない。

元来、人という存在は、それほど器用な生物ではない。

個体ごとに、何かしらの欠点が存在する。

何か欠けているのが、人として正しい証拠。

故に、どこか完成された部分が一つでも存在していた場合、それは最早人ではないのではないだろうか。

だが、この少年もまた、何処かが欠けている。

何処かが完成されていて、何処かが欠落している。

先程までの理論で証明付きたいのなら、この少年はまだ定義付けできない。

いや、今のままでは、未来永劫定義付けすることはできない。

何故ならそれは、矛盾を抱えているから。

どっちつかずの境界に位置づけられているため、どちらかによる明確な結論が下せない。

つまるところ、人間として正しいのかについては保留ということだ。

「……………」

人間未満の少年は、行く宛てもなく、ただ足が動くままに街を彷徨い続けた。

傾きかけている太陽は色を変え、温かい暖色となつて街を照らしている。

街中は、昼間とはまた違った賑わいを見せる。

仲間同士で肩を組み合い、酒場を目指す者たち。

親子で手を繋ぎ合い、喜色に包まれて我が家へ歩く者たち。

楽しく談笑しながら、街中を闊歩するカップルたち。

店主と笑い合う者たち。

何もかもが、昼間までの顔と違って見えた。

きつとこれは、オラリオの表情。

厳密に言えば、オラリオの表情を形作る者たち。

街ですら表情を忙しなく変化させるといふのに、少年の顔は何の反応も示さなかった。

川の流れに抗う鮭のように、周囲に馴染めていない様が表れていた。

「……お腹、へったなあ」

去来する思いは空腹感。

虚無感や悲嘆ではなく、生物として当たり前の反応が際立った。

少年はふと空を見上げる。

何気なしに、ふと唐突に空を見上げたくなった。

それが自分にとって何を意味するかは分からなかったが、同時に世界が広いと改めて思えた。

少年は再び、宛てもなく彷徨い続ける。

相棒となった小石を連れて、暮れていく夕日を目指すように歩いた。

「ふふっ、やっぱりオラリオっていいわ。

魂が輝いている子が沢山いるもの。

誰も彼もが希望に満ち、誰も彼女もが絶望に満ちているわ。

そんな子たちの未来を想像すればするほど、ああ……愉しくて仕方ないわあ……」

妖しく目を輝かせながら街を見下ろす女が、そこにはいた。

彼女の名は、女神フレイヤ。

人間はおろか、神々ですら溺れさせてしまうほどの魅力と美貌を兼ね備える女神。

美しき星。

美の化身。

愛欲に満ち溢れし天女。

この世すべての美しさを凝縮し、形を成した存在。

それが女神フレイヤ。

彼女に魅了された者たちは総じて、彼女の虜となり、彼女からの寵愛を受けるためならどんな手段も厭わない者へと成り果てる。

狂信者ならぬ、狂愛者と呼んだ方が適切かもしれない。

そんな美しき女神の日課は、こうして街を見下ろし、自分の気に入った魂を探すこと

である。

いや、気に入ったという表現は正確ではない。

気に入る段階は、あくまで最初だけ。

最後までその在り方を貫かせるためではないのだから。

要するに、自分好みの色に染め上げたい魂を品定めしているのだ。

そんな女神にも、側近と呼べるべき存在がいる。

「人間ってどんなに高価な金銀財宝、宝石より価値があるわ。

見ていてとても飽きない。

弄っていてとても面白い。

古今東西で唯一共通するのは人間の価値だけ。

どの子たちも、例え神であっても可能性を測りきれないわ。

ねえ、貴方もそうだと思わない？

オツタル

「私も同意見でございます、フレイヤ様」

多くの眷属の中で、唯一女神フレイヤの側近を任された男。

名はオツタル。

猪人ポアスの種族にして、オラリオで唯一の絶対的強者狂者。

オラリオでただ一人、Lv. 7に至った男。

その実力は圧倒的の一言に尽きる。

一級冒険者たちの中でも別格中の別格。

他を圧倒するほどの剛力、冷静沈着に状況を把握する分析能力の高さ、多くの武具を自在に操る技量等を兼ね備える。

卓越した技量を併せ持つことから、向かうところ敵無しと誰しも口を揃えて話すだろう。

それらが全て、彼を武人と讃えている要因となっている。

スキルやアビリティに関しては、誰もその実態を目にした者はおらず、その圧倒的な力以外は謎に包まれている。

彼ほどの武人が、何故女神フレイヤに心酔しているのかもまた、謎である。

「ああ、やっぱり下界はいいわね。

あちこちに金の卵がフラフラ。

どの子も素敵で、いろんな子に目移りしちゃう。

はあ……いいわね、この街の景観は最高よ。

……あら？」

「どうされました？」

「ねえ、オツタル。」

貴方、子どもとはいえ、10年以上生きた子の魂が真つ白なんて信じられる？」

「それは……実に奇妙な話でございます。」

及ばずながら、私めの見解を述べてもよろしいですか？」

「ええ、貴方の意見を聞かせて頂戴？」

「では、僭越ながら申します。」

フレイヤ様、初めに敬愛すべき貴方のご慧眼を疑う訳では無いことを前提に伺わせて

下さい」

「構わないわ。」

他でもない貴方の言葉だもの、聞かせなさい」

「ありがとうございます。」

恐らくそもそも白では無いのではないのでしょうか」

「……塗り潰された、そう言いたいのか？」

「恐らく。」

フレイヤ様も承知なされている通り、そもそも魂に色のついていない者、ましてや人などおりませぬ。

もし、そんな者がいたとなれば、それはフレイヤ様が気に掛けるべき存在ではありません。

人ではないのですから。

それに、我が敬愛すべき貴女の目を欺く者など有り得ません。

故に、最も考えられる可能性をご提示させていただいたまでのことです。

恐らく、フレイヤ様が見られた者は、何らかの理由により、魂そのものを塗り潰されたのではないのでしょうか。

それが作物的なものか、事故的なものかは判断しかねますが。

以上でございます」

「貴方の考えはよく分かったわ。

ありがとう、オツタル」

「はっ」

オツタルは、無色の人など存在しないと断言した。

誰よりも強く、誰よりも多くの者をこの女神と見てきたからこそ言える見解。

彼もまた、武人として多くの者と対峙してきたからこそ解るものがあるからだ。

どのような善人であれ、悪人であれ、皆独特の色を持っている。

それはその者を象徴するものによって、如何様にも変わってくる。

例えば、その者が情熱的な存在であった場合、その魂の大部分は情熱を意味する赤になる。

感情を表に出さないものであれば、それは冷静を象徴する青になる。

また、それ以外の要素を持ち得ているのであれば、それ以外の色が仄かに垣間見えるのだ。

本来、人間とはそういう存在。

であるならば、色を持たないその少年は一体何なのだろうか。

主神以外には興味を示さないオツタルが、主神が見た者に対して興味を抱かせた。

「差し出がましいようですが、フレイヤ様」

「あら、貴方が興味を持つなんて珍しい。

分かっているわ、すぐにでも貴方に動いてもらおうと思っていたところだしね。

彼がどういう存在なのか、まず貴方自身の目で見定めてきなさい」

「はい、我が主神よ。

私は貴女の手となり足となり、御心のままに動く駒となりましょう。

「ご命令を、女神フレイヤ様」

「ええ、主神として貴方に命じます。」

彼の少年の在り方を見定めなさい。

ああ、殺しちやだめよ？」

「はっ、仰せの通りに」

女神が指差すは黒髪の少年。

武人は動く。

今まで通り、主神の命を受け、それを忠実に遂行するだけだ。

だが、今宵のオツタルは今まで通りではない。

久方ぶりに興味を示した者が、どれほどの力を持っているのか。

内心、オツタルは密かに楽しみを抱いた。

無論、普段纏っている空気と違うことに気づかないフレイヤではない。

それを理解していたからこそ、彼に動いてもらうのだ。

たまには、私情を持って行動させよう。

神は、いつだって気まぐれなのだ。

斯くして少年は、数奇な運命に巻き込まれていく。僅かに心を高ぶらせた絶対的強者が、後数刻の間に目の前に現ることなど知りもせず
に。

彼の名はオツタル。

オラリオにおいて絶対的強者として君臨し、冒険者の頂点に位置する男。あまりにも強すぎる彼には、畏怖と敬意を込めて、こう呼ばれる。

『おうじゃ猛者』

それが彼に与えられた、頂点としての証である。

第12話 少年、邂逅を果たす

「(ラジエル……大丈夫でしょうか)」

ここにも、彼の身を案ずる者が1人。

リユーは人知れず、主神に怒りを向けられた少年を心配していた。

探索初日にして1階層にまで潜った経緯は聞いていた。

確かに常識的に考えれば、少年のしたことはあまりに無謀極まりない行為だっただろう。

パーティを組むならまだしも、今回の探索は単独で挑んだ。

アテナの言い過ぎという点を除けば、当然の結果ではあっただろう。

だが、リユーの懸念はそこではない。

最初の手合わせの時点で、ラジエルの戦闘能力に関しては何も心配していなかった。

相手に自分の力量を示すには、百の言葉より一の実戦だからだ。

防戦に徹していたとはいえ、Lv.4のリユー相手にあれほどの手数を打ち込むこと

が出来るのは、並大抵の鍛錬で成し得ることではないから。であるならば、リユウの懸念とは何か。

それは、初めて向けられるであろう純粹な怒りに対する反応であった。以前にもリユウはラジエルに対して叱ったことはあった。

だが、それは彼の身を案じた故での発言。

少年もそれを感じ取ったからこそ、今までの関係が継続している。

今回のアテナの反応は、はつきり言つて過剰の域にあった。

初めて眷属を持ち、初めて自分の子に迫った危険故に自分の気持ちが走つてしまつた。

普通に育つたものであるならば多少なりとも考えよう。

だが、少年にはその耐性がない。

何から何までが初めての経験なのだ。

「甘い、とは自分でも思えます。

でも私にはとても見過ごせない。

決して貴方が憎いから、アテナ様はそう言ったのではないということを書いて欲しい。

そういう普通の成長は、ゆっくりでいいのですから」

思考より先に、体が動いていた。

幾通りものの話を考えながら、少年のいる部屋へ歩いていく。

大丈夫だ。

彼ならきつと分かってくれる。

大人故の不器用さというものを、多少なりとも理解はしてくれる。

自分自身をそう勇気づけるながら扉をノックする。

「ラジエル？」

少しお話があるのですが、入ってもいいですか？」

されど、一向に返事は来ない。

普段なら一拍置くか置かないかぐらいの間隔で返答があるはずなのに。扉の先からは、沈黙以外伝わってこない。

「…ラジエル？」

開けますよ?」

扉を開けた先には、人一人存在しなかった。

ベッドとクローゼット以外何も無い殺風景な部屋が、一層空き部屋の頃を思い出させた。

隠れる場所等ないのに、リユーはしきりに辺りを見渡す。

何度も何度も首を右へ左へ向けた。

何度確認しようと、少年の姿はどこにも見当たらない。

「ラジ…… エル……?」

抑揚も力もない声が、殺風景の部屋に流れ込んだ。

夜の帳が本格的に落ち始めた頃、ラジエルはようやく足を止めた。

歩くことに疲れたのではなく、空腹が限界に来たのではなく、相棒の小石を見失った訳でもない。

気付けば、路地裏の広間にまで足を運んでいた。

風で細切れになった雲が空を流れていき、月の光が途切れ途切れで街を照らしている。

何より少年の注意は、建物の暗闇から迫る威圧感に向けられた。

夜遅く山奥で狩りをしていた状況とは違う。

研ぎ澄ませた聴覚が拾うは一定の足音。

早すぎず遅すぎない。

目の前からくる謎の脅威は、悠然とした足取りでこちらに近付いてくる。

少年には分かる。

嫌でも分かってしまう。

これは、武を修めたものの足取りだ。

直感的な意味合いも含まれるが、ラジエルの場合、長年そういう存在と生活してきたからこそ分かる。

一歩ごとに込められる筋肉の稼働具合。

乱雑に踏まれるものではなく、地面に杭を刺していくかのような歩法。

靴底を滑らせる音が聞こえない辺り、歩行者の姿勢も真っ直ぐに伸びている。

姿勢が正しいということは、体に必要最低限の負荷しかかけられていないということ

になる。

腰は曲がらず、軸もブレることがなくなる。

加えて遠くからでも伝わるこの重圧。

恐らく、少年以上に鍛え上げられている鋼の肉体を有している。

無論、一般人には到底知覚できない。

同じく武の道を進んでいる者同士だからこそ分かる。

地面から伝わってくるごく僅かな振動ですら、こちらを威圧してくる。

間違いなく、相当な手練の気配。

「……フウー」

思わず、呼吸を正してしまふ。

ラジエルのこの行為もまた、普段の鍛錬から習慣づいてしまったものだ。

強敵と対峙する前に呼吸を正し、集中力を極限にまで高めていく。

胸が高鳴る。

師以外の強敵を見つけたのだ。

武人として、気を張り詰めないわけがない。

雲が、晴れていく。

月が、その美しい全貌を明らかにしていく。

そして、暗闇にいる武人の姿の全貌も見えてくる。

「ふん、その年で俺の気配を掴むか。

それなりに気配は絶ったつもりだったのだがな」

現れるは、オラリオにおいて最強の称号を持つ男。

挨拶がてらと言わんばかりに、獣の如き眼光を、容赦なく少年に浴びせる。

その眼は、見られる者全てを威圧させ、無様に背を向けて走り去らせるほどの眼圧。並みの冒険者であれば、その身を膠着、失禁、失神させてしまうほどに凄まじい。

文字通り、次元が違う存在なのだ。

これこそが『おうじゃ猛者』オツタルの風格。

存在感だけで、周囲の者を震え上がらせる破格の男。

自分が敬愛すべき主神しか歯牙にも掛けないスタンスだが、今日だけは異なっていた。

彼の興味は今、目の前にいる少年にのみ注がれている。

「だれ？」

「俺の名はオツタル。」

とある事情により、お前の力を見定めに来た。

小僧、名はなんという」

「ラジエル。」

ラジエル・クロヴィス」

「そうか。」

小僧、手始めにお前にいくつか聞いておきたいことがある」

「いいよ、何？」

少年は震えることなく、怯えることなく、怖がることなく『猛者』に尋ねる。

彼を知る者からすれば、まず間違いなく蛮勇とされる行為だ。

少年の身の丈を優に越える体格を有するオツタルを前にしても、ラジエルは真摯に目を見据え返す。

暫く対面したまま無言の圧力も加えたが、少年の態度は変わらない。

この時オツタルは、少年に対しては脅しの類いは通用しないと感じた。

目の前に対峙している少年は、自身の目的のことしか頭にないと。

「……フツ」

オツタルは思わず笑みを零してしまった。

普段の彼からすれば考えられない。

普段の彼を知っている者であれば想像だにしない。

絶世の美神であるフレイヤの傍で仕えていても、滅多に見せることのない微笑だった。

それは決して、ラジエルに対して侮辱の意を込めたわけではない。

この街にてオツタルが歩けば、まず間違いない人混みの動きは止まり、自然と道を開けていく。

誰も彼もが彼を前にすれば絶句し、へりくだってくる。

それはオツタルから見ても、あまりにも情けない姿だった。

本当に同性なのか疑うほどに弱々しい存在に見えていた。

その反面、この目の前の年端もいかなない少年の反応を見てどうだ。

その辺にいる男共よりずっと遅しく、雄々しく見えるではないか。

久しい感覚だったからこそ、オツタルは思わずその鉄仮面をずらした。

「いや、やはり今宵は一つだけにしておこう」

「どーして？」

「気が変わった、それだけだ。」

深い意味などない。

では、改めて一つ、お前に問おう」

——
小僧、お前は俺と同じか？

それは、あまりにも言葉足らずの問いだった。

大多数の者が聞けば理解できないだろう。

だが、世の中には、そういう少ない言葉から物事を察せられる者は少なからず存在する。

多くを語る必要がないように、多くを問う必要がない。

同じ道を歩まんとする者同士ならば、たったこれだけで伝わることもあるのだから。少年は迷いなく、こう答えた。

「うん、そうだよ」

「フ、フフツ……フハハハ、ハツハハハハハハ!!」

そうか!

やはりお前もそうだったのだな?!」

少年の返答を待っていたと言わんばかりにオツタルは歓喜し、高らかに声を上げて笑った。

狂気に駆られたように笑い、冷徹な仮面をかなぐり捨てて自らの感情を顕わにさせる。

今日、今この瞬間、今回の命はオツタルにとつて忘れられない日となった。同時に自身の主神に対し、最上位の感謝を抱いた。

「ありがとうございます、フレイヤ様。

流石は我が女神。

貴女の慧眼は何よりも正しい真実を見抜くのですね……」

「なんのここと？」

「いや、すまん。

なんでもないさ。

ああ、お前にも感謝しなければな」

「なんで？」

「いいから素直に受け取っておけ。

大人からの礼など早々あるものではない。

とは言つても、それはお楽しみの後だがな……」

オツタルの表情が、急速に元の引き締まった面貌に戻る。

纏う空気が一変する。

体中から覇気が吹き出し、明確な戦意が剥き出しになっていく。

呼吸とともに隆起する鋼の肉体。

眼差しだけで射殺す獣の眼光。

周囲を戦慄させる男の重圧。

紛れもない、戦闘態勢だ。

彼の動作を見るや否や、ラジエルもまた、瞬時に自身の身体を戦闘態勢に移していく。相対するのは武人同士の手合わせ。

彼らの有り様を理解できない者であるならば、その殺伐とした空気は、とても手合わせのものには感じられないだろう。

「殺しはせん。」

だが、お前に敬意を評して決して手は抜かん。

いいか、殺す気で掛かってこい。

お前の選択次第で、その生命、簡単に取り零すことになるぞ」

「いいよ。」

俺もぜんりよくでやるつもりだったから。

……やろう、オツタル」

「いいだろう、幼き武人よ。

これより先、言葉など不要。

我らが武を持つて、己が力を証明するとしよう。

来るがいい、ラジエル・クロヴィスよ」

二人の内なる熱量に反し、周囲は不気味なほどに静まり返る。

一陣の風が吹いても、お互い微動だにすることは無い。

舞い上がる木の葉が、二人の間に揺れて落ちていく。

二人もまた、自然と同調するように気を内に引き戻していく。

気とは本来、無闇に振るうものではない。

然るべきにこそ、発揮するものだからだ。

長いようで、短いような静寂が広間を支配していく。

互いの視線は、互いの眼を捉えたまま、互いに逸らさない。

そして、木の葉は地に落ち、時は満ちる。

「シツ!!!」

互いの距離が零になった時、静寂は喧騒に打って変わった。放たれた二つの突きが激突し、周囲に大きな波紋を広げる。大地は震え、大気が揺らぐ。突きが同時に繰り出され、互いの拳を合わせる形となる。

「……………む」

オラリオに来て、初撃で初めてラジエルが苦悶の声を漏らす。オツタルは全力ではないものの手は抜いていない。

予想通りと思うべきだろう。

否、予想外とも思わざるを得ない。

前提条件の割には、あまりにも重すぎる一撃だった。

常人なら即座に爆散してしまうほどの脅力。

鍛えに鍛え抜かれたオツタルの一撃は、正しく必殺と同義。無駄打ちを一切せず、隙を探し出し、作り出して狙い打つ。ラジエルと同じ、いや、それ以上の練度だ。

「ほう、俺の力量を測っておきながら初撃を迎え撃つか。

幾分か衝撃も逃がされた。

実に良い鍛え方をしている。

その年で身体中の筋肉の稼働方法を熟知しているとは。

素直に驚いたな……」

内心、オツタルは素直に少年を称賛した。

最初の立ち会いの時点で逃げ出さずとも、戦闘時の殺気を放てばたじろぐと考えていたからだ。

オツタルが最も驚いたのは、ラジエルがこちらの突きに対して迎え撃つて来たことだった。

勿論、迎え撃つのは間違った行為ではない。

互いに敬意を持ち得ているのであれば、自分の力を相手の心にもぶつけるように技を

受け合う。

躲すのではなく、受ける。

達人は、剣を合わせることでモノを語るといふ言葉がある。

それは、剣術のみに限った話ではなく、全ての武術に共通する。

相手の技を受けて、その道に至るまでの過程を感覚で理解するのだ。

だが、今回の手合わせの相手はオラリオ随一の武人。

まともに打ち合えば、赤子の手を捻るように、簡単に体を破壊されてしまうのだ。

スキルやアビリティの話ではない。

純粹な鍛錬の質と量の差。

武道に心血を注いできた年月が違い過ぎる。

だが、少年は表情を崩さない。

崩せない、ということもあるが、ラジエルは戦闘時に関して言えば、自身の弱みを見

せないよう徹底的に振る舞う。

例えそれが、実践ではなく手合わせであっても、少年は従来通り立ち回る。

常に実践を意識しろ。

師の言葉を、どこまでも真つ直ぐに信じているからだ。

「ヌオオオオオオ!!」

暴虐を体現させたかのような猛攻が少年に迫る。

一撃一つひとつが自分より重く、誰よりも速い。

師以外の武芸者の卓越した動きに、ラジエルは目を奪われた。

迷いなど微塵も感じさせない思い切りの良さ。

全ての動きに流れがしつかり意識されている。

淀みが存在しない完璧な動きとも言える。

「フッー」

まともに受ければすぐに再起不能になる。

故に選択肢は一つ。

受けず、受け流していく。

当たった箇所への衝撃を外へ逃がし、ダメージを大幅に減らす。

大半が目で追いきれないほどの速度だ。

だから、視覚のみに頼らない。

肌や耳、直感を持って捌く。

そして、その攻防の中で反撃の糸口を探し出し、的確に反撃する。

突きを、蹴りを、足刀を、手刀を、貫手を、膝蹴りを、肘打ちを、掌底を放ち続けた。

僅かな穴にしか見えないが、それでも穴は穴だ。

反撃する箇所は限られている。

判断を誤ればそこで終わりだ。

糸を針穴に通すような所業を懸命に続ける。

ラジエルには、ここまでの流れが途方もないように感じた。

体感時間が、一秒一分を何倍にも引き伸ばした感覚。

感覚が極限まで研ぎ澄まされた時、人はあらゆる動作がスローモーションに見えると
いう。

達人同士の斬り合いの中では有名な話であるが、それはあくまで部分的な話だ。

通常、長時間それを維持できる訳ではない。

何故なら、想像を絶する集中力、瞬間的な判断、複雑な身体の動作等を、一度に行わなければならないからだ。

端的に表現するならば、ラジエルはその超人的現象を長時間維持している。

通常の神経では、まず間違いなく数秒で摩耗し切る。

「(受けることを避けて、受け流しにかかるか。

この程度であれば食らいついてくる。

加えて反撃までしてくるか。

フツ、本当にお前は面白いな！」

「う……くっ!？」

だが、無論長くはもたない。

未体験の戦闘が故の緊張感。

オツタルの猛攻に耐え、加えて反撃に移らねばならない。

体力の消費速度は尋常の比ではない。

少年も十分化物じみた体力は持ち得ている。

十一階層までをほぼ休みなく潜り、且つ上層の階層主の撃破までを息一つ乱さなかつた。

上層の危険度と、冒険者の頂点に位置する男を比べるのもおかしい話ではあるが、それにしては死線の数之余りにも掛け離れすぎている。

そして、このままでは必ず殺られる。

小さな沢が、巨大な岩石を流しきれる訳がないように、早々に限界が差し迫った。何も出来ないまま敗北する。

折角強敵に出会えたのに。

まだロクに戦いを愉しめていない。

故に、少年は賭けに出ることにした。

「破っ!!」

「む?!」

ラジエルは強引に懐に潜り込み、腹部を蹴って間合いから離脱する。

無論逃げるためではない。

自身が誇る戯拳を持って打破にかかる。

この手合わせにおいて、出し惜しみは無用。

ましてや相手はあの『猛者』だ。

手札を洩る暇など、そもそもありはしない。

「フツ!!」

着地した刹那、少年が四人に増える。

表現が余りにも素つ頓狂で、とても奇妙な話だろう。

つい先程まで一人だった少年が、幾つにも分裂して見える。

『怪狐演舞』
かいこえんぶ

最高速度で踏み込んだ足を、最高速度で踏み返すことで限定的な残像を作り出す攪乱用の奥義。

本来は敵を惑わせるための独特の歩法なのだが、極めればこのように幾重にも分身して見えるほどの残像を生み出せる。

その昔、仏が旅の途中に、狐に化かされたという話がある。

目の前にいる者の目を欺くほどの立ち振る舞いに驚いた仏が、寺に戻った際に編み出したという。

達人の域にまで至っている者の目を欺くことは難しい。

この技は大半の人間の目を誤魔化すことは出来るが、瞬時に動きの法則性を見破る猛者には効果が薄い。

展開はあくまでほんの少しの間だけ。

ラジエルは、一瞬だけ時間を稼ぐことを最優先にする。

一瞬の隙を見出し、そこに全てを賭けて、打って出るのだ。

「(高速移動による攪乱作戦か。

悪くはない……が、その程度目眩しにもならんぞ)」

オツタルは直ぐ様前進した。

子ども騙しの動きでは、この『猛者』には何の意味も成さない。

真つ向から、徹底的に潰しに掛かる。

「まだっ!!」

「こ、これは……?!」

だが、この程度の速度はまだ序の口。

少年は更に速度を引き上げる。

自身の最高速度を過去のものにし、更なる次元へと自身を昇華させる。

瞬く間に残像は増える。

一瞬の間に残像の数は、元の倍に膨れ上がり、現在数七人。まだ誘導が足りない。

決定的瞬間を待ち続ける。

痺れを切らすまで持ち堪えろ。

ここが少年にとつての正念場となつた。

「小癩な!!!」

鍛え上げられた豪腕が、横一文字に振るわれる。

齡何百年ものの大樹と見間違えるほど、その一閃は重たいものであつた。

出鱈目とも思える無情なる一撃。

横薙ぎに少年たちをまとめて打ち払いに掛かる。

「そっ!!」

ようやく見つけた唯一の死角。

最後の左端の残像が掻き消えた瞬間、オツタルの腕は右へと伸びきる。

オツタル自身の右腕を隠れ蓑して、一瞬で間合いに潜り込む。

先程と変わらない僅かな隙ではあるが、死角となればその価値は段違い。オツタルが反応し切る前に、渾身の重撃を押し込む。

「やあああああ!!」

「……………」

僅かに見えた一筋の光明目掛けて、か細い腕が突き出される。

今自分が出せる最大出力。

落としきれるかどうかなんて考えない。

今自分に出ることのみを考えて、最高の力を発揮するだけだ。

「鉄犀轟掌てつさいこうしょうっ!!」

第13話 少年、決意を顕わにする

暗闇にいる。

上下感覚はおろか、右や左といった概念が存在しない空間。

三百六十度見渡そうも、そこには黒以外存在しない。

しかし、自分の姿だけははっきりと見える。

見下ろせば手足や身体は見え、いつもどおりの小柄な体格がある。

少年は思う。

こんなところに来ようと思って来たわけではない。

気づけばここにいます。

こんな空間で目覚めることになった覚えが全くない。

死んでしまったのだろうか。

今一度、心を空にして世界に身を委ねる。

瞬間的に外界より解脱し、自身の思考以外の要素を断ち切る。

思い返す。

強者達が集う街に訪れたこと。

思い返す。

歩み寄ってくれた者がいたこと。

思い返す。

家族が出来たこと。

思い返す。

死地へ赴いたこと。

思い返す。

遙か高みへ至った者と邂逅したこと。

自身の身に起きた出来事を再確認。

ほんの少し揺らいでしまった心を持ち直し、ゆっくりと瞼を持ち上げていく。

眼前に見えるは微かな灯火。

揺ら揺らと儚げに漂い、吹けば消えてしまいそうなほどにか細い篝火。

弱々しくはある。

頼りがいがないものと見える。

だが、それは紛れもなく炎の一部だ。

在るだけで辺りを照らし、道標となるもの。

いつから其処にあつたかは分からない。

いつの間にか自分の心に灯つていた。

それは善なるものなのか、邪悪なるものなのか。

その灯火の真意はまだ解らない。

少年にとって、原点となつてゐること以外は、まだ解らないのだから。

揺らめきは次第に大きくなり、何かを形作つていく。

何へと変貌するのか考へてゐるうちに、次第に世界は再び暗転する。

「——エル？」

不意に、声が聞こえた。

夢の中で語りかけてくるように、くぐもつて聞こえてくる声。

如何様に歪められようとも、その元の清涼にして透き通る声の在り方は変わらない。

故に、声を掛けてくれてゐる人物が分かる。

「——リユール……?」

「ああ……目が覚めたのですね。

本当に、よかった……。

気分はどうですか?

どこか痛いとか吐き気がするとかありませんか?」

「んーん、どこも痛くないよ?」

よつと……」

上半身を起こしてみるも、どこを探してもあの時の手合わせの痛みは見当たらなかった。

それこそまるで魔法のように、身体中の欠損箇所が綺麗に消えてなくなっていたのだから。

いや、元より溜まっていた身体的疲労そのものが感じられない。

これは一体どうなっているのか。

「ねえリユール、どれくらい寝てた?」

「……気を失っていた貴方を見つけてからまだ二日と経っていません」

「けっこー血出ちゃってたと思うんだけど

なんでキズ一つないのかな」

「……………あの後どうなったのか話しましょう」

リユーは、重く開きづらい口を無理やり開け、事の顛末を話す。

見るも話すも痛々しいあの惨状を。

思い出すのも苦しいあの光景を。

彼のことを本当に想っているのなら、話さなければならぬ。

これ以上、招かれない悲劇を呼び込まないように。

獲った。

少年は確信する。

この間合い、技の出のタイミング、加えて死角の刺し具合。

間違いなく捉えた。

一流以上の腕前を持つ者であるならば、技を繰り出した瞬間、決まると確信する領域

が存在する。

少年は、正しくそれを実感している最中だった。

「惜しかったな」

「っ!!?!」

だが、悔つてはいけなかった。

ほんの少しでも勝ちを錯覚してはいけなかった。

最後の最後まで、気を抜いていい相手ではなかったことを、今この瞬間悟った。

興奮故に、不覚をとってしまった。

少年が対する相手は猛者が集うオラリオにおいて、ただ一人頂点に立った男。

冒険者になって日の浅い者が、ましてや子どもに遅れを取るはずもない。

頭上から悠々と惜しむ声を聞いた途端、視界が渦を巻く。

完全に捉えたと思いきや、あと一步で掻き消えた。

背後に感じる確かな殺気。

寸でのところで身を捻るも回避など出来ようもない。

幼い体は、ただの一撃で壁まで吹き飛んだ。

「最後の最後で気を抜いたな。

俺自身の腕を死角として利用したまでは良かった。

が、油断故か、入りの瞬間気配を断ち切れなかったな。

いや、実に惜しかった」

「……………」

痛恨の一撃を見舞い、黙する少年。

その姿は土煙で確認することは出来ないが、再起不能と捉えて間違いはないだろう。

先程までに感じた殺気が、みるみる薄れていくのだから。

「だが……ハハッ、なかなかどうして面白い。

手加減は加えていない、油断の隙を感じさせずに打ち込んだ。

間違いなくお前の胸を捉えた。

防御に向かった腕諸共振し伏せた。

複数の内蔵を破壊、到底五体満足では居られん」

「……………ううっ」

「それでも、お前はまだ立つか」

諦めの悪い眼差しが、そこにはあつた。

痛みで震える体に鞭を打ち、懸命にオツタルを睨みつける少年の姿が、そこにはあつた。

身体中傷のないところはない。

足は自分の意思と関係なく震え、破れた服の隙間からは、所々赤黒く変色している。

指は何本も折れ、到底握ることの出来ない状態。

頭部からは止めどない出血が見え、眼の焦点もロクに定まっていな

満身創痍だった。

「……………ハア……………ハア、うぐつ……………!?!」

誰がどう見ても戦える体ではないの是一目瞭然だった。

指一本動かすことすら激痛を引き起こさせる有様なのに、少年は決して膝を折らな

い。
ここで折れば傷の具合関係なく死ぬ。

今までそう自分に言い聞かせてきた。

それでも、構えだけは解かなかった。

どんなになろうとも、決して倒れてはいけない。

痛かろうと、辛かろうとも立っていることは当たり前。

それが、自身に課した戒めでもあるのだから。

「深手を負うも戦意を失わないその意気や良し。

やはりお前もまた武人か。

嬉しいぞラジエル・クロヴィス。

この街で俺と素手でやり合ってくれる者はそう居ないのでな。

久々の凌ぎ合い、実に心躍る一時だった。

重ねて礼を言おう」

『猛者』から告げられるは素直な賞賛。

己が身体だけで行う手合わせは、このオラリオでそう行えるものではない。

武器を扱う武術等であれば、それを武器にして戦う冒険者も存在する。

だが、到底オツタルと打ち合おうと思う者は存在しない。

『猛者』もまた、燦る闘志を持って余していたのだ。

頂点に立つことは、同時に孤高への頂きにも達してしまう。

未だ高みを目指すオツタルにとっては、実に致命的なことだった。

「だが、今宵はここまでだ」

目の前で声を掛けてきた気配が、知覚を置き去りにした。

首元に響く衝撃も感じられないまま、少年は沈む。

勝手に照明を落とされたように、少年の意識は刈り取られてしまった。

「……よもや、この齡にしてここまでやるとはな」

『猛者』の腕が、僅かに震えていた。

心身ともに未熟もいところの子どもにここまでやられた。

客観的に見れば、オツタルが余裕綽々と押しつぶしたように思えるだろう。

力量の差は歴然。

劣勢など存在するはずがない。

苦戦など強いられるはずがない。
辛勝など思われるはずがない。

そう、ステイタスが正常に作動していればの話だが。

「どうやら満足いくものだったみたいね、オツタル？」

「はっ、誠に有意義な一時でありました。

改めて感謝の言葉を述べさせていただきます、フレイヤ様」

「ふふっ……ええ、どういたしまして。

ステイタスを封印する価値があったみたいで何よりだわ。

こうでもしないとすぐ壊れちゃうものね。

でも、本つ当に綺麗だったわあ……まるで御伽噺のよう。

小さな子どもが、自分より遥かに強い者に立ち向かうなんて……。

実に、ありふれてる。

何の捻りもない子供騙し。

でも、やっぱり面白い。

「流石は王道中の王道こそと表現すべきかしら」

ステイタスの封印。

それは即ち、主神からの恩恵を受けられなくなる状態を指す。

身体能力は恩恵を受ける前の状態になり、スキルやアビリティも一切使用できなくなる。

今回、フレイヤは特例処置としてオツタルの恩恵を一時的に止めた。

何をしようとも埋めることのできないステイタスの差を持ち得ていれば、この手合わせは成立していなかったからだ。

その気になれば、指先で小突くだけで殺めてしまう。

Lv. 7の境地に達した『猛者』からすれば、この街にいる冒険者では戦いにすらならない。

オツタルが動けば、それこそ一方的な蹂躪となる。

故にフレイヤは、ステイタスに封印を施すことにした。

恩恵による力のみを封じれば、残るは本人の力量のみ。

これまで培ってきたもののみが如実に現れる。

ハンデも意味合いも込めたことだったとは、初見であった少年は知る由もないだろう。

「お言葉ですがフレイヤ様、今宵の立ち会い等、序章に過ぎません」

「……あら、嬉しそうですね、オツタル」

「実に、久方ぶりの感覚でございます」

オツタルは、僅かに震える腕を女神に見せた。

それは、ラジエルからの猛攻を防ぎ続けたが故の結果。

傷こそないものの、芯にまで響かせられた数々の攻撃が、その豪腕に僅かな痙攣を生じさせた。

ステイタス無しの状態だからこそ実現できたこと。

あの『猛者』オツタルが、L.V. 1の冒険者の攻撃で腕を震わせるなど、到底実現できることではないのだから。

ハンデありきで立ち会ったものの、オツタルの表情は、確かに充実感を孕ませていた。封印状態だったとはいえ、オツタルの技術等は健在。

万に一つも手は抜いていない。

冒険者の頂点に至ってしまった自分に対して、この少年は果敢に挑んできた。

一切の恐怖を感じさせず、勝つことだけに執着する意気込みを感じ取った。

肝を冷やすことなどなかった、と言えば嘘になる。

洗練された技と、逆にこちらを食い殺さんとばかりに迫り来る氣迫。紛れもなく、自分が長らく遠ざかっていた命のやりとりだった。

端から見れば狂っている。

そんな窮地を、オツタルは自ら招き入れた。

一時的にとはいえ、立合いの最中は冒険者ではなかったのに。

「いや、実に心地いい……」

だが、それ以上に彼は武人である。

自身を窮地に立たせ続け、その先にある力を求めて愚直に邁進する。

危険無くして力は得られない。

己を高める為なら、どんな鍛錬であろうとも受け入れる。

どんな危険だろうであろうとも厭わない。

武術の真髓を極める為ならば、この命、幾度なりとも窮地に立たせよう。

「惜しい、実に惜しいぞ小僧。」

お前ほどの使い手なら、近いうち、本当の俺と渡り合えるはずだ。
そんな若い芽をここで潰してしまうのは、実に惜しい」

「……………ふっ」

オツタルは、倒れ伏す少年を心底惜しんだ。

この少年は近いうち、必ず化ける。

これは推測ではなく、断言だ。

純粹な武術の凌ぎ合いならば、必ず自分を満足させてくれる。

故にオツタルは確信した。

この少年には、もっと伸びてもらわなければならない。

もっと高みへ登ってもらわねばならない。

懐から取り出すは小さな小瓶。

中には、オラリオ最高峰と呼ばれる回復薬、エリクサー万能薬が入っている。

オツタルはそれを、惜しげもなく少年の傷に振りまき、飲ませた。

エリクサー万能薬は、少年の傷をたちどころに完治させた。

飲めば体内の毒素全てを排し、五臓六腑全てを癒す。

傷にかければ、傷跡一つ残さず元の状態に復元させる。

最高品質であるならば、例え手足がちぎれようと、細胞さえ生きていれば完全再生させる。

故に万能薬。エリクサー

この薬一つで家が建つほどに高額なため、冒険者の中でも垂涎もののアイテムの一つである。

「さあ、ここまで上がってくるがいい若き拳闘士よ。

次に凌ぎ合う時も、お前の全てをぶつけて来い。

俺は武人として、お前の挑戦を心待ちにしよう」

「あらあら、随分気に入られちゃったのねアナタ。

私の眷属をここまでの気にさせるなんて、ちよつぱり妬げちやいそう」

くすりと妖艶に微笑むフレイヤは、心の底から愉快そうに少年を見下ろした。

眼を爛々と輝かせ、ラジエルに目一杯の期待を込める。

色を持たない人間がどこまで進めるのか、はたまたどんな色に染まるのか。

楽しくて仕方がない。

娯楽に飢えた神は、時として人間を思うがままに振り回す。

フレイヤに眼をつけられてしまったが最後、その者が命を落とすまで延々と付き纏う。

このオラリオにおいて、最も相手にしたくないうちの一神が、美の女神フレイヤなのだ。

「ああそうそう！」

この子にご褒美をあげないといけないわよね？

そうなんですよ、オツタル？」

「はっ、既に目星はつけてあります。

ですがその前に………：………：暫しお待ちいただきたい。

盗み見とはいい趣味をしている。

早々に姿を現せ、女」

「………：………：流石は『猛者』、ですな」

暗闇に塗れた路地裏から、一人の女性が靴音を鳴らしながら歩み寄る。足元から月明かりに照らされ、その全貌が明らかとなっていく。

「貴様か、『疾風』^{リオン}」。

「こんな夜更けに、何の用だ」

「単刀直入に言う。」

その少年、ラジエルを返していただきたい」

リユーは臆することなく『猛者』に告げる。

恐れている暇などない。

今のリユーの頭の中には、一刻も早くラジエルを取り返したいという焦りだった。辺りに飛び散った血痕、所々挟れている石畳、大きなヒビが走る体壁。

これだけ見れば、ここで激闘があつたことは明白。

熾烈を極めた争いがあつたにも関わらず、双方に傷らしい傷は見えない。

少年が瀕死の重傷を負っているという、最も危惧していた予感が外れていた。気を失っているラジエルに損傷がないことに疑問が湧いていたのだ。

「……『猛者』、貴様よもや幼き子を手にかけた訳ではあるまいな。

このような惨事、誰の目から見ても戦いがあつたことは明白。

貴様の目を見れば分かる。

未だ熱が引いていないその目が何よりの証拠。
私の目を欺けると思うな。

ラジエルと一戦交えたのは貴様で間違いない。

……答えろ!!」

「女、そう急くな。

案せずとも、殺めてはいない。

この小僧は特別なのでな、ここで潰えてもらってはこちらとしても困るのだ。

故に、傷の方はこちらで癒した。

信用せずとも、連れ帰った後で気の済むままに調べるがいい」

「……………」

怒りが込み上げる。

顔に、眼に、頭に怒りが表れていくのが伝わる。

握り拳に、食いしばった歯に力が無駄に集中するのが分かる。

今にも飛びかかかってしまいそうになる身体を、リユーは必死に押さえ込んでいた。
自分にとって大切な子がこんな酷い目に遭わされて、冷静でいられる訳が無い。

しかし、ここで激情に身を任せても事態は好転しない。

いち大人として、先導者として、ここは感情的になるべき場ではない。そう自身を無理矢理納得させる。

「貴様と小僧がどのような関係なのか詮索するつもりもなければ興味もない。

俺が求めるは、この小僧の力。

そして、互いに命を削り合う熾烈な凌ぎ合い。

故に、小僧にはまだまだ高みへ登ってもらう必要がある。

それこそが俺の目的であり、我が主神のお望みでもある。

それ以外、歯牙にかける価値はない」

「……こちらとて、多くを語ることも、長らく問答することも望んではない。

ならば、ラジエルは連れ帰させてもらおう。

私の気が変わらないうちに、早々にご退場願おうか……」

「フン、言われずとも退いてやる。

我が敬愛すべき主神を、このような薄汚い路地裏に一秒でも長く滞在させたくないの
でな。

その前に、小僧にコレを渡しておけ」

「っ……………っ、これは！」

貴様、一体何を考えている……?!」

「言ったはずだ、俺が求めるは小僧の力と戦い。」

今は、これで登れるだけ登るがいい。

必ず小僧に伝えておけ。

俺は、いつでも待っているとな」

『猛者』より投げ渡されたもの。

リユースですら、コレに巡りあった機会はほとんどない。

あつたとしても、遠目から見かける程度のものであるし、自分にとって必要のないものだったからだ。

渡すものを渡し、言いたいことだけ言って、彼らは去っていった。

去り際に、オツタルは瞳に力強い意思を宿らせた目を向け、フレイヤは普段通りの厭らしい笑みをこちらに見せつけていった。

フレイヤはいつものこととして、オツタルからは普段と違った印象を持った。

直ぐ様少年の元へ駆け寄り、上半身を抱き起こす。

確かに、衣服の所々に血が付着してはいるものの、傷らしき傷は確認できなかった。

だが、些か血を流しすぎたのか、呼吸は正常であろうとも顔色は少し悪い。

少し目を離しただけで、この街で最も厄介な神とその眷属である『猛者』に目をつけられるとは。

ましてや気に入られる等あつてはならない現状。

娯楽に飢えた神は、時として人間を子どものように遊び倒し、ボロ雑巾のように使い倒してしまう。

神に気に入られるということは、一概に喜ばれるようなものではない。

この少年は、一体どこまで運命に振り回されるのだろうか。

「……………」

だが、今は喜ぶべきだ。

少なくともラジエルは死んではいない。

こうして再び生きているうちに触れられている。

彼というたった一人の少年の命に触れられている。

リユーは安堵の表現を、ラジエルを強く抱きしめることで表す。

本当に、無事で良かった。

心底、そう思えた。

「早く、戻らないと」

優先事項を確立させるや否や、ラジエルをしつかりと背負う。

街中を吹き抜ける風より速く駆ける。

不気味な贈り物である、一冊の書物を携えて、リユースはホーム目掛けて飛んでいく。

「まあ、ざっくり説明すれば、以上になりますね。

本当に、無事でよかったです……」

「ごめんね、リユース」

「今回ばかりは、飲み込みましょう。

私もあの二人に目をつけられるとは思っていなかったのです。

で・す・が」

「むゆう?」

リユーは、両の手で少年の顔を包み、強引に顔を合わせる。完全に逃げ場を無くすための荒業である。

「夜遅くに出歩いたことだけは水に流せません。」

日が落ちた時は危険だと、お師匠さんに教わらなかったのですか？」

「それは……おそわった」

「正直で結構です。」

今回の件から私も学びました。

やはり、重要案件以外はほぼ捨てるべきということが、今回を通して痛感しました。

どう考えても、貴方をあちらこちらへとふらつかせる訳にはいきません。

ラジエル、これから貴方の罰を伝えるからよく聞きなさい」

「うん」

「これから、ご飯もお風呂も寝るときも私と一緒にです。」

ほぼ毎日貴方と一緒に過ごします。

いいですね？」

「う、うん。」

リユーといっしょなら、安心、だね」

「もつともつと、貴方に色んなことを教えてあげますからね」

そう言つて、リユーは破顔した。

これまでの重圧が全て吹き飛んだかのような開放感が、その表情から溢れ出していたからだ。

彼女の抱擁も体温も、ちゃんと肌で感じている。

生きているという実感が、少年を包み込んでいた。

胸の奥が一層、熱くなった気がした。

内なる熱の正体を考えていると、視界に見慣れない本が机の上に置いてあった。

「ねえリユー、そのほんは何？」

「……その前にラジエル、私の質問に答えてくれますか？」

「うん、なに？」

「貴方は、強くなりたいですか？」

肉体的、精神的だけに限った事ではなく、もうちよつとこう……。

なんと言いましょうか……私は貴方のように武術に関して深く精通している訳ではありません。

貴方が求める強さというものに関して理解が及びきっていないのかもしれませんが。

……はい、それを承知でもう一度問い直しましょう。

ラジエル、貴方は強くなり続けたいですか？」

「うん。

俺は、もつと強くなりたいよ。

これからもずっと、ね」

強い意思が宿った眼だった。

その眼を見れば、多くを語る必要がないと思える程に、説得力に満ちていたからだ。

ならば、この先に関する制止は不要だろう。

強くなりたいと心から願うのなら、自分が全力で支えてあげればいい。

リユートの心にもまた、一つの決意が生まれた。

少年のこれからの行く末を、隣で見守っていこうと。

「はい、貴方の決意、確かに聞き届けました。

鍛錬の相手ならいつでも言ってお下さい。

貴方がより高みを目指そうというのなら、私も全力で手伝いますから」

「ありがとう、リユール」

「では、受け取りなさいラジエル。」

「これが、貴方が強くなるための第一歩です」

「なにこれ？」

「これは、魔道書グリモアというものです」

第二章

第14話 少年、歩み寄る

鳥の囀りが聞こえる。

朝日の光が燦々と窓に差し込み、一日の始まりを告げる。

窓際に設置されたベッドに眠る主人に対し、柔らかな目覚ましとなり、一日の活動を開始する者へささやかな祝福として光を注ぐ。

ベッドに敷かれた純白のシーツは、朝日を微かに反射し、部屋全体を照らすような光を行き渡らせる。

そんな快晴とも呼べる朝の空の下、寝所にて蠢く影があった。

「んっ……んんう……」

「……………すう」

否、蠢く影は二つ。

動きを見せるは色白の肌を持つ妖精であった。

枕だけでは物足りないのか、自身の腕をも枕とし、静かに覚醒を待っている。

美しい薄緑色の髪は朝日に照らされて輝き、まるで日に照らされて透き通る木の葉のようであった。

薄手のブラウスに白い上着を纏い、ホットパンツで眠るリユウの姿は一枚の絵の如く、より際立って見える。

柔らかな布団からはみ出る素足が、ベッドの反対側まで美しく伸ばされ、隣で眠る少年に絡みついている。

隣にて眠っている少年は、寝る前と変わらぬ姿勢で朝を迎えようとしていた。

白き寝所とは正反対に、七分袖のシャツとパンツという黒い服装であった。

目を閉じていることから、男の子にしては珍しく長く伸びた睫毛が一層目立ち、無造作に伸びつつも艶がある黒髪が後頭部へと流れている。

呼吸で規則的に上下する胸が、心地よい眠りについていてることを表す。
血の繋がっていない姉弟は、心休まる一時を満喫していた。

「……………あ、朝ですか。」

ふあ……………そろそろ、起きる時間、ですね。

……ふふつ、こんなにも穏やかな顔をするのですね、貴方は
「んう……」

リユーは、ラジエルの寝顔を少しの間だけ眺めていた。

思えば、少年がオラリオへ来てから色々なことがあった。

ラジエルが世間体に疎いまま迷宮都市オラリオにやって来て、そこでリユーが偶然声をかけたことから始まった。

少年の事情を知り、ファミリアを探し歩いて、アストレア・ファミリアへ招いて、アストレアの神友であるアテナの眷属となった。

初めての手合わせに度肝を抜かれ、買い物に出掛けて、ダンジョンに向かう少年を見送った。

ほんの一週間ほどで、随分と多くのことをしてきたように思える。

そしてこの短い間で、彼はアストレア・ファミリアの眷属たちの中心人物となりつつある。

『たっだいまあ！』

みんなのお姉さんリーヴァさんが探索から帰ってきたよお！

ラジくん成分補給させてーはいぎゅーって。

ああー癒されるう……』

『ラジエル、新しいジャーキーが手に入ったの。

特別に君にもあげる。

今回はなんと、粉チーズと香辛料をまぶしたものだよ。

私の自信作だから味わって食べるように。

あ、ちゃんと感想教えてね。

次の試作のためだよ。

えーっと、ういんういん？の関係になるからお願いね』

『ラ、ラジくん！

リーヴァさんに教えてもらったシチューのレシピ！

つつ、作って、みました！

どうぞ、食べ、食べて感想、下さい！』

『ラジエル、ちよつと肩を揉んでくれないかしら？

デナトックス
神会の準備やら書類業務とか忙しくてね。

みんなのステイタス更新も楽しやないし、アテナのレクチャーもまだ済んでないし

……ね、お願い。

ちよつとだけでいいから、マツサージ頂戴?』

ここまで溶け込むとは思ってもみなかった。

彼が眷属たちとすれ違えば、二言目には少年を呼ぶ声がホーム中から飛んでくる。今ではすっかりみんなの心の拠り所の一つとなっている。

こうした反応を見ていくうちに、連れてきたのは間違っていないかと思えて改めて思える。

少年が、リユーにとって大切な存在となったという実感をもたらしてくれた。

「今日くらいは……もう少しだけのおんびりしても、いいですよね」
「んう……」

少年の顔を優しく撫で、リユーは目を閉じていく。

もう少しだけ、この穏やかな一時を味わいたい。

彼女にしては珍しい寝坊から起きたひと騒動は、また別のお話。

「ラジエルっ!!」

私はお前に……なんと言つて謝ればいいか……!」

「……えーつと、リユール?」

「……ここで私の方を見られても困ります……」

怒られた日に大怪我をして帰つてきたことも含め、改めてアテナに謝りに行こうと促したリユール。

ラジエルに対して憎くて言つたわけじゃない。

心から案じているからこそ、戒めるために叱つたのだとリユールは言つた。

本当に思つてくれていている相手だからこそ、感情を表にして伝えるのだ。

が、部屋へ訪れた瞬間に見たものは、目にも止まらない速度で頭を下げながらこちらに滑り込んでくる少年の主神の姿だった。

走りながらにして、その動きはとてもスムーズであった。

一切の淀みなく滑り込んで膝を着き、手を八の字に床に付け、背中に美しい曲線を描いて丸めて頭を下げる。

それは、遙か極東に位置する国より伝わる究極の謝罪の意を示す作法。

自身の一切をかなぐり捨てて行うもの。
俗に言う「ドゲザ」というものであった。

「(こ、これがドゲザ……。」

初めてこの目で見ましたが……なるほど、端から見ればすごい格好……ですね」

「えと、あてな様？」

どうしたの、そのかつこー」

「神友から教わった最上位の謝罪だ。」

私は危うく自分の子を失ってしまふところだった……。」

一方的に叱りつけ、お前の心境も考えずに怒鳴ってしまった。

本当に申し訳ない!!!」

神とは、あらゆる生物を超越した存在にして最高位の存在である。

そんな神たちは頭を下げて他人に、よもや人間に対して謝ることはない。

しかし、こと天界より下ってきた神たちの動向は若干変化しているようにも思える。

自らの家族を作ったからに他ならないからだ。

縁を結んだものに対しては、神とて情を生む。

いかに自由奔放な神であっても、自分の子達の前では一人の親としての振る舞いになる。

下界にて生活するアテナは、自身の功績全てをなしにして少年に向き合う。

それを証明するのが、目の前にいる彼女の姿。

神としてではなく、親としての在り方。

「あてな様」

「……私は、経過はどうであろうと、結果的にお前を危険に晒した。

散々危険に身を投じるなど説教を垂れておきながらこの始末だ……。

どんな処罰も受け入れる。

ラジエル、本当に済まなかった……」

「あてな様、俺の目、見て？」

「あ、ああ……」

アテナは何もかもが弱々しかった。

負い目が何よりも勝ってしまい、動作全てが引け腰に見えてしまうほどに。

碧く美しい眼は動揺に満ちており、自分の子を前にして怯えきっているようだ。

立場が逆転していると思われても仕方がない。

アテナはおずおずと顔を上げ、相も変わらない無表情の少年の面貌を見る。端から見れば裁きの時を待つ罪人のようだ。

「叱ってくれて、ありがとう」

「……な、なに？」

「リユーが言ってた。」

ほんとうに俺のことを思ってなかったら、あんなに怒らないって

あんなに、必死にならないって」

「……………あ」

「俺たちは家族、なんだよね？」

だったら、そんなことは言いつこなしだよ。

それなら、俺のほうこそごめんなさい。

夜遅くに外に行つて、ごめんなさい」

「……………うう、ラジエルう！」

アテナは、反射的に少年に飛びついた。

安堵故に泣き崩れ、周囲の目も気にせず声を上げて泣いた。

その姿は、とても微笑ましかった。

実の親子ではないにせよ、本当の親子に近づこうとしている。

すれ違いや衝突は多々あれど、歩み寄ろうという気持ちさえあれば、いつかは在るべき形へ落ち着くことになる。

リユーは、その一部始終を目の当たりにしている。

自分と主神との思い出を同時に振り返りながら。

そも、奇跡とは何か。

曰く、不意に起こるものである。

曰く、窮地に追いやられた者がごく稀に招くもの。

曰く、精霊等が引き起こす類のもの。

諸説によつて見解は様々だが、この現象は人外の類の存在によつて引き起こされるといふ説が最も有力であるとされた。

一度起きればあらゆる状況を覆す。

覆すとはいかずとも、決定されたものとは異なる結果へ導くためのきつかけともなる。

定められた事象を、根本からひっくり返す可能性を秘めた現象。故に奇跡。

人には決して理解できず、決して発現を予知できない抽象的概念。

そも、魔法とは何か。

それは人智を越えたものである。

人の身でありながら、人為的に奇跡を発現させる。

本来の魔法は、精霊に認められた者のみが使用を可能とし、文字通りあらゆる奇跡を呼ぶ。

突如何もないところから火を灯すことから始め、瞬時に傷を癒すことも、天変地異をも実現させるほどの現象を意図的に起こせる。

しかし、人の身でそれを扱うには到底困難といえる。

魔法は魔力と呼ばれる未知の力を元に奇跡を発現させるものであって、元より魔力を持たない人にそれを扱うことは叶わない。

また、魔法の種類によっては魔力だけに及ばず、魔力とは別の代償を支払うものもま

た存在する。

魔法は万能に近い現象を引き起こすが、それを引き出すにはそれ相応の代償が求められる。

俗に言う等価交換だ。

何かを得るためには何かを差し出さなければならない。

引き出したい力に見合った代償を差し出さなければ、魔法を実現させることはできない。

であるならば、冒険者が魔法を扱えるのは何故か。

端的に説明するならば、神の力の一部を分け与えられているためである。

神は精霊の上位に位置する絶対的存在。

星を作り、生命を生み出し、文化を繁栄させてきた。

人の歴史の起源を紐解くならば、語る上で欠かすことのできない存在。

そんな彼らに、超常的能力が備わっていることは周知の事実。

人は精霊を介さなければ魔法を使えないが、神々はこれを単独で行う力を有している。

そんな彼らの血が入っている冒険者であるならば、魔法を使用できない道理はない。

個人差によって発現できる者もいれば、そうでない者も存在する。

だが、そんな神々の力を分け与えられた彼らであるならば、精霊を介さずとも、魔法を扱うことができる可能性がある。

無論、神の力の一部から発現するものであるため、威力や規模は数段劣る。

しかし、人の世界において、魔法を扱うことができるというだけで十分な価値を発揮する。

だが、魔法を発現するためには様々な問題を解消していかなばならない。

これもまた個人によって異なる。

無意識に発現していた者もいれば、ランクアップを重ねてようやく習得できた者もある。

そう、個人によって課されるものは異なる。

その眼に見えない難題に対し、冒険者たちは暗闇の中手探りで探し当て、魔法の発現を目指しているのだ。

魔法といっても様々な種類が存在する。

炎や水といった五大属性を呼び起こすもの。

自身や他者の勢力を引き上げるもの。

周囲に癒しの力を振りまくもの。

あらゆるものに変身するもの。

呪いや穢れを刻むもの。

このように、あらゆる事象に対して奇跡を呼び起こすものであるため、存在する魔法の数は実に多岐にも渡る。

未だ発見されていないものを含めるならば、その数は最早無数と呼んでいい。

その数も、どんな力なのかも、全てにおいて未知数なのだ。

人という存在が扱う以上、どんなものが発現するのは神でさえ予想出来ないのかも
しれない。

「むうーん。

まどーしよ、かあ」

そんな難題を全て無視する方法が、今のところたった一つだけ存在する。
魔法書グリモアを読むことである。

別名、魔法強制発現装置ともされる。

無題白紙の本に、神秘のアビリティを持つ者が力を注ぎ込むことで作成することができるアイテム。

一冊の本に力を注ぎ込むと端的に言えば簡単に聴こえてくるが、その裏側にはとてつ

もない労力を要する。

神秘のアビリティを持っていれば作れるのではなく、あくまで作れる力があるだけ。半端な気持ちで作成にかかれば当然失敗し、仮に完成できたとしても発現出来るだけの力が込められているとは言い難い。

神秘はあくまで作れる資格に過ぎず。

作れるかどうかはほんのひと握りの者たちだけだ。

故に魔道書グリモアはいずれも高額で取引されており、普通の冒険者たちには手が届かない一品となっている。

そんな貴重な代物である魔道書グリモアは、今少年に手の平で弄ばれている。

先日オツタルと戦闘を行った後に渡されたものだどリユーは言っていた。

必ず読むようにという言葉も一緒に。

アテナの号泣謝罪案件から解放されて少しして、ラジエルは自室にて置かれていた魔道書グリモアのことを思い出したのだ。

「……ちよつとだけ、見てみよーかな」

正直なところ、魔法云々に関しては全く興味を持っていないのがラジエルである。

これまでの人生で、魔法を扱ってみたいと思っただけがなかったからだ。山奥で神秘と無縁の生活をしていただけだから無理もない。

自然の中で食料を探し、動物やモンスターたちと戯れたり、鍛錬に費やした時間が遥かに長かったからだ。

しかし、他でもないリユーに念を押されてしまっている。

『いいですかラジエル。』

魔法というものは、本来もつと後になってから発現するものです。

辛い鍛錬を繰り返し、ランクをゆつくりと重ね、そしてようやく習得できるかどうかのものなのです。

ですが今回は異例中の異例。

使えるものとはことん使います。

まあ……もらった相手が相手なので、私としては素直に喜ばせんが……。ですが、ここは私情を捨てましょう。

生き残る術が入りますから、この際きちんと段階を踏むべきという意見は流しませぬ。

ダンジョンの中は生きるか死ぬかの瀬戸際が常に続きますから……。

んんっ、それはそうとして、ラジエル。

これは貴方にとつて必ず必要になる力です。

貴方が以前言っていた、強くなり続けたいという願いを叶えるためにはこれを読まなければいけません。

面倒と思わず、まずは読みましょう。

あ、必ずホームの中で読むんですよ？

外へ持ち出したらおしおきします。

ええ、必ずです』

最後に呟いた部分には若干の寒気を感じたが、彼女にそうまで言わせてしまつては仕方がない。

全く興味も関心もないが、ここは素直に従つておこうと少年は観念した。

何より、あの『猛者』が望んでこれを渡してきたのだ。

これは、言うなれば期待の証。

この力を用いて、再び彼と対峙する。

自分をもつともつと高みへ登らなければならぬ。

あの強大すぎる壁をこの目で見た。

この体でその強さを体感した。

そして身をもって敗北を知った。

ならば、次会うときはそれを打ち破らなければならない。

強敵との邂逅は、強さを貪欲に求めさせる。

ラジエルにとって、今回はいい起爆剤として機能している。

「ええーつと、なになに？

『—お子さままでもわかるやくそうがく—』？

……………へんなの。」

表紙は至って子ども用の普通の参考書。

他には何の特徴もない。

グリモア 魔道書は普通の書物の題名で作成されることが多い。

仮に人目についても目立ちにくくするためだ。

よって、こうして一般の書物として潜ませ、安全に使用してもらおうための配慮なのだ。

「むう、読めるかな…………？」

えっと、やくそうは体のキズをなおすためのものとしてつかわれます。

やくそうはとてもべんりですが、なかには中にはどくになつてしまうものもあります。
す。

つかいかたをまちがえると、体にわるいことが起きてしまいます。

それは火のように、刃物のように。

人の叡知は時として万物に対して背徳行為となる。

それ即ち、母と呼ばれる星に対して、我らが——」

見えない何かに、引き込まれる。

序章を読んでいるうちに、自身の口から身にそぐわない言葉が紡がれていく。

自分の意思に反するように、自分の意思に導かれるように。

最早少年は、自分が何を口走っているのか理解できなくなつていく。

まるで他者の言葉を、自分が代わりに口に出しているように。

視界が暗く、狭まっていく。

本の中に、自分という存在が吸い込まれていく。

少年は、意識を手放した。

あーあ、
もう来ちまったのか

第15話 少年、欠片を拾う

果てが見えない。

目が覚めて、まず初めに感じたものはそれだった。

この世界には、光と影以外存在しない。

それ以外、色が存在しない。

対比としては、どう見ても影の割合の方が多い。

それほどまでに、この世界には影が満ちていた。

果てのようなものは見える。

少年が立っている場所よりずっと遠い場所に、それらしき場所がある。

光が横一直線に伸びていて、その遙か頭上には小さな光体が輝いている。

光が照らしているのはその線だけ。

辺り一帯を照らしているわけではなかった。

あれが果てなのか、それともただの光なのかは分からない。

この世界は何なのだろうか。

辺りには自分以外の生物は存在していない。

この世界に、まるで一人ぼっち。

在るのは光と影。

そして、ラジエル・クロヴィスという少年だけ。

何とも面白みの欠片もない世界なのだろう。

見るものは、目の前にある光の光景だけなのだ。

——
あーあ、もう来ちまったのか

不意に声が響く。

この不毛な世界に、初めて声が生まれた。

振り返れば、そこには何かがあった。

背丈は少年と全く同じ。

人のように見える。

表せるのは、ただこれだけ。

この何かは間違いなく人ではない。

全身が同一色の黒で染まっているなんて、どう考えても人ではない。

『お前と会うのはまだ先になるとばかり踏んでたんだがなあ……。

まあいつか、あーつと……何？

お決まりの語りかけとか言った方がいいわけ？

汝にとって魔法とはーみたいなのやつ？

ツハハア、下らねえ。

大体ンなまどろっこしいことしねえでさつさと済ませろよなあ？

つつても、ここまでベラベラ喋ってる俺が言えた義理じゃねえか。
ツハハア、許せよ兄弟。

こちらとら初めての会話なモンでテンション上がっちゃまってるんだわ。
だからこんぐらいの不敬ぐらい流してくれや。

不敬ならぬ、父兄からの頼みつてとこで、一丁よろしく』

開口二言目から聞いてもいないのにつらつらと言葉を重ねていく影。

心底可笑しそうにケラケラ笑いつつ、幾重にも言葉を折り重ねて紡ぎ出す。
よく喋るやつだ。

第一印象はよく口が回るだった。

殺意もなければ敵意も感じない。

どうやら敵対する意思はないように思える。
果たして、この影は一体何者なのだろうか。

『おうおう、俺が一体何者なのかって面してやがん？

さてさて、ここにいる俺は一体何者何でしょう？

って、それを聞いてんだよな？

ツハハア、別に何者だっぺいいンだよ。

そこは別に指して問題じゃあない。

早速だが、役割をハツキリさせておいてやる。

俺がすることは大きく分けて二つ。

お前に魔法をやることと、真実を伝えてやること。

結構重要な役割なんだからよ、ちやちやつと進めさせてくれや。

別段、お前が何かをする必要は無い。

強いて言うなら「聞け」。

耳を傾けろ。

こつちを見ろ。

思い返せ。

まあ、こんなところだな。

緊張感もクソもねえのは百も承知だが、これが俺のスタンスだ。

ツハハア、諦めて観念するんだな。

短い時間だが、俺の話すこと全部よく聞いておけよ?』

やはり、よく喋る。

口だけ別の生き物のように動き続ける。

要点のみ挙げるるとすれば、影の言った通り二つだけ。

“魔法を与えること”と“事実を知ること”だ。

少年には何のことだかほとんど分かっていないが、今はこの影の言葉に耳を傾ける以外道はなさそうだったため、どうでも良さげに聞くとここにする。

しかし、ここに来て妙な違和感を感じる。

先程から、自分の姿が見えない。

体はおろか、手足や指一本さえ視認できない。

加えて声も出ない。

これは一体どういう事なのだろうか。

『ああ、言い忘れてたな。』

この世界は、お前の心象世界。

所謂“心の中の世界”って奴だな。

何ともまあ殺風景で、面白みもへつたくれもねえとこだと思つたら？

紛れもねえ、お前の内だ。

まあ、ごちゃごちゃしてるよりかははずっといいんじゃないやねえの？

こういう世界の方が落ち着くし、何より集中できる。

この世界はお前自身なんだから、姿形も声がなくても何ら不思議じゃあない。思ったこと、感じたことだけが反映されて、ありのままを映し出す。

まあ、鏡とでも思えよ。

分かりやすいだろ？』

ここは、ラジエル・クロヴィスの心象世界。

光と影以外存在しない空虚な空間。

なんと虚しい世界なのだろうか。

人は年を重ねていくごとに、心に様々なものを浮かべていくようになる。

それは色であったり、美しいものであったり、醜いものであったりする。

それらを総じて豊かさとして表し、自分という器の中身を形作っていくのだ。

ラジエル・クロヴィスには、それらが極端に欠けている。

余分なものを一切排除したかのような世界。

人間という存在の善と悪、光と闇の両極端しか示されていない。

表情が顔に全く出ないことは分かっていた。

しかし、こう目に見える形で表されると、幼い自分としても痛感してしまう。

“自分の中には、何も無い”

『ツハハア、そう気を落とすなよ。

たかだか一回白紙になっちまったただけだろ？

別に気にする必要なんてないね。

むしろそれで済んでよかったと思えよ。

考え方によっちゃあ色々言い分あるけどよ、不幸中の幸いつて奴さ。

それを哀れむか、悲しむか、悼むか、喜ぶか、前向きに捉えるか。

周りに言わせりやそれぞれに捉えられるがな。

お前自身思えたことだけを信じとけ。

ま、今は無理だろうけど。

って、そんな話は置いといてだ。

お前には、ンなちつちえことで悩んでる暇なんてありやしねえんだ。

悩むのもいいが、それに囚われるのもまた考えようってね。

今は別のことに目を向けようぜ。

そう、例えば“魔法”。

例えば「お前が忘れてる過去」とかな？」

忘れてる過去。

思い当たる節がない少年にとって、その言葉の意味理解できない。

自分に知らない真実を、何故この影が知り得ているのか。

何から何までがさっぱり分からない。

魔法云々に関してはまだ理解出来ても、その他がちんぷんかんぷんだ。

疑問が尽きないことこの上ない。

『ツハハア、まあそう混乱すんな。

それも含めて俺が全部、事細かく詳細に、補足諸々つけて説明してやるからよ。

ンじゃ、楽しい楽しいお話をしようぜ……いやちげえな。

俺が勝手に一方的に喋るだけだったわ。

ツハハア、勘弁な？

こちとら出番がこれで最初にして最後なんだよ。

嫌ってほど記憶に刷り込んでもらうため必死なのよ。

つつーわけで俺様の独壇場のはじまりはじまりー。

……いや冗談だよ、間に受けんなよ。

緊張感をほぐしてもらおうと気い使った俺の身にもなれよ。

まあどうでもいつか、ツハハア。

わりいわりい、随分と前座が長くなっちまった、こりや失敬。

はーいいはい、いつまでもふざけてませんよと』

小粋なジョークのつもりだったのだろうか。

こちらには何も響かないが、影は至って楽しそうだ。

少年の反応など二の次程しか考えていない言動の数々。

最早どこからどこまでが冗談なのか分からない。

そういつた線引きが掴めない以上、ほとんどの言葉を鵜呑みにするしかない。

『じゃあ始めるか。』

今回、語り手を務めさせていただきまずはこの私。

今からお話することは嘘偽りない物語。

ある少年のお話でございます。

どうぞごゆるりとお寛ぎ下さい。

この場にて忙しないのはこの私の口のみ。

どうか王のように、お殿様のように、神様のようにお構え下さい。

そして、どうか終幕までお口を開かないように。

それでようやく、語り手としての役目を全うできるというものです。

これより先、あらゆる口出しは不要。

貴方様が退屈されませんよう精一杯務めさせていただく所存でございます故、どうか最後までお付き合ひ頂きたい。

事の始まり、舞台はとある村。

自然とともに共生し、裕福ではないものの豊かな暮らしを送ってきたとある村。

そこにて走り回る男の子こそが、今回の中心人物。

両親と妹の四人家族。

顔の知らない村人はいないほどまで顔の知れた、とある快活な少年。

その日はいつもと同じように、妹と多くの友を連れて近辺にある遊び場に赴いておりました。

これより先に、何が起きるかなど想像もしないで。

そう、少年の後の生き方を変えたある出来事。

事の始まりにして、あるお方の起源ともなってしまうれた凄惨たるお話。

『全ては、あの日の夜に始まったことなのです』

「やあラジエル。

今日も元気いっぱいだな！」

一人の子どもが元気に走り回る。

一点の曇りさえない真摯な瞳は、文字通り今を十二分に噛み締めながら過ごしている。

足は忙しく飛び跳ね、髪もまたそれに呼応するかのように跳ねる。

見ているだけで、見えなくなるほどに眩しい姿。

そう、目を背けたくなるほどに真っ直ぐだった。

「いつも店の手伝いをありがとう」

困っている人を見れば放っておけない。

それ故に、村の中で彼を知らないものはいない。

困っている人を見かければ、誰彼構わず手を差し伸べた。

店の手伝い、畑仕事、荷物持ち、探し物。

誰に言われた訳でもないのに、自分にできることは精一杯やった。

そんな少年だからこそ、皆心打たれ、いつでも彼を気にかけてくれたのだろう。

「コラいたずら坊主！」

今日という今日は許さんぞ！」

時にする悪戯も、村人たちからすれば微笑ましかった。

悪戯をされた村人は怒っているというより、彼と走る口実を見つけたかのように追いかける。

その時の姿は、しがらみから解放されたかのように晴れ晴れしいものだった。

追いかけている時間は、皆等しく子供時代に戻っているのだ。

「おーいラジエル！」

今日こそヌシを釣りに行こうぜ！」

人に話しかけられない日など、ほとんどないほどに目立つ男の子。

毎日友達と元気に遊び回る。

いるかどうかも分からない川の主を求めてたくさん釣りをした。

多くの友達と共に多くの時間を共有し、どこまでも和を広め、深めていった。笑顔の絶えない快活な少年が、そこにはいた。

「まっつてよおにーちゃん！」

わたしもいくつてばあ！」

そんな彼には妹がいた。

いつでも後ろにくつついて、少年とともに駆け回る。

手を焼かされることが多かったが、同時に掛け替えのない存在なのだという気持ち常在に湧き上がった。

転んで怪我をした時も、愚図って泣き出した時も、帰り道疲れ果てて背中で眠ってしまつた時も、いつも一緒だつた。

煩わしいと思つたことは一度もない。

迷惑を掛けられることが、頼られているようで嬉しかった。

ケンカをすることがあつても、翌日と経たずに仲直りする。

翌日には、ケンカの反動により、いつも以上に仲良しに見えた。

自分を慕つてくれる妹。

いつでも傍にいてくれる妹。

元気を分けてくれる妹。

少年以上に元気な妹は、少年にとつてとても大切な存在だつた。

「あらあらおかえりなさい。

ふふつ、今日も一段と泥だらけね。

「ご飯用意してるから、一緒にお風呂入ってきなさい」

「おお帰つたか！

ラジエル、今日もご飯食べ終わつたらお父さんと腕相撲するか？

はっはっは！

「まだまだお前には負けなさい」

いつでも笑顔で出迎えてくれた両親。

優しく、いつでも微笑んでくれる母。

生涯、その笑顔には勝てないと思えるほどに優しい存在。

毎日自分たちにご飯を作ってくれる。

お世辞にも味は美味しいとは言えなかったけれど、自分たち家族にとっては、どんな高級料理よりもおいしい料理だった。

毎日汚した服で抱きついてても、全く気にせずには笑ってくれた。

いつでも元気な姿を見せてくれる貴方を見れば、それでお母さん幸せよと言ってくれた。

優しくて強い自慢の母親だった。

父は笑顔が眩しい屈強な人だった。

小さなことを気にせず、悪いことも笑い飛ばしてしまう。

子どもの腕で勝てるわけなのに腕相撲をしようと言ってきた。

いつの間にか少年もムキになって、飽きもせずに毎晩勝負した。

負ける度にゴツゴツとした大きな手で乱雑に頭を撫でられた。

優しい力加減ではなかったけれど、とても暖かかった。

いつか俺を越える強い男の子になればよと言ってくれた。

そんなみんなが大好きだった。

特別なものは何もなかったけれど、少年にとってはこの村で生活するだけで幸せだった。

優しい愛情をくれる両親。

いつでも傍にいてくれる妹。

毎日一緒に走ってくれる友達。

見守ってくれる村人。

毎日が、とても充実していた。

あれは、夢い夢だったのだろうか。

ある日、それは突然やってきた。

夕日が暮れ、夜の帳が落ちようとしていた時だった。

いつもと同じように友達と別れ、眠りこけた妹をおぶって帰路に着いていた。

その日には、鴉が忙しなく鳴き続けていた。

滅多に見ることのないほどの大群を引き連れ、縦横無尽に空を飛び回る。

その先から、鴉ではない黒が迫ってきた。

何かは分からない。

だが無性に嫌な予感がした。

一瞬で胸を侵食したのは、原因不明の焦燥感。

何かが迫ってくる。

根拠も何もない感覚だ。

第六感とでもいうのだろうか。

何かが少年に告げていた。

それがなんだったのかは、当時の少年には分からなかった。

走らなければならぬ。

愛する村を目指して、とにかく全速力で走らなければならぬ。

背で眠っている妹を極力揺らさないように、全力疾走で駆けた。

友達とともに見つけ出した抜け道を蛇のように辿り、最短経路で走り抜けた。

村の門まであと一息だ。

草むらの茂みから垣間見えたものに、少年は言葉を失ってしまった。

黒の正体が、その全貌を顕にした。

火がゆらゆらと列をもつて揺れ、ひっきりなしに鉄同士がかち合う音が鳴り響く。

母と同じ笑顔には到底思えない。

父と同じ力の持ち主には心底思えない。

妹と同じ迷惑を掛けるようには、どうしても思えなかった。

ましてや、同じ生き物には見えなかった。自分たちと纏っているものが違いすぎる。

真つ黒に汚れていて、ドロドロとしたヘドロのようなものを垂れ流しているようだ。目を背けたくなるような欲望が嫌でも感じ取れる。

眼には、正気と呼べるものは存在せず、ただならぬ空気を醸し出す狂った連中は、正しく常軌を逸していた。

迫ってくる者誰一人、まともではなかった。

黒い集団は、着実に村の門前へと迫ってきていた。

門番を長いこと勤めてきた中年の男性が勇ましく立ちはだかる。

彼は門番の中でも一際優秀で、過去に幾度なりともモンスターやならず者たちを退けてきた人だ。

どんな相手であろうが一步も引かず、村へ害為すものを立ち入れはしない。

自慢の大槍を携え、欲望の獣たち相手に槍を突きつけようとする。

寸前、少年の視界に何かが舞った。

ゴトリと鈍い音を立てて何かが地面に転がった。

ボールのように少年の足元まで、それは転がってきた。

見間違えようがない。

モンスターとの戦闘でついた、特徴的な頬の傷。

気合をいれるためにいつも身につけている赤いハチマキ。

整えられた自慢の顎鬚。

勇ましくおしやべり好きの門番のおじさんの首が、無言で転がってきた。

少年の中で、何かが欠けた。

虫を払うように門番を殺した連中が、我が物顔で自分たちの村に侵入してきた。

手には凶器、滲み出すは狂気、人を殺めては狂喜する。

あれは最早理性ある生き物ではない。

村に足を踏み入れたことを引き金に、枷が外れたかのように悪逆の限りを尽くす。

躊躇いもせずに人を殺した。

苦痛から起こる絶叫を音楽のように楽しみ、楽しげに人肉に刃物を通していく。

それは、道徳観念がない子どもたちの姿のようだった。

蝗ぼったの足を挽ぐように身体の四肢を刻む。

蟻を踏みつけるように命を奪う。

生を悪戯に弄び、欲望の赴くまま行動する。

雑貨屋の店主が切り殺された。

花屋のお手伝いさんが刺し殺された。

物知りな老夫婦が殴り殺された。

元氣な泣き声を出す赤ん坊が焼き殺された。

氣の強い若娘が親の前で犯し殺された。

一番仲のよかった快活な友達が絞め殺された。

出産を控えた妊婦が抉り殺された。

足を悪くした青年が撃ち殺された。

何から何までが昨日と違う。

一瞬で、大好きな人たちが物言わぬ肉片に変わっていった。

瞬く間に阿鼻叫喚の地獄絵図へと成り果ててしまった。

少年は、何もできない。

遠目から状況を見て、妹に悲鳴を聞かせないようにすることで精一杯だった。

下唇を噛み切つて、泣き叫ばないように振舞うことで手一杯だった。

惚けている場合ではない。

「何よりも、両親の安否を確認しに村へ入らなければならぬ。意を決して足を踏み出す。」

「せめて、自分の家族だけは守らなければ。」

「最短距離を駆け抜けて我が家を目指す。」

「妹は騒ぎを聞きつけてパニックになり、騒ぎ出すものの足は止めない。」

「ここまで来たら一気に行くしかない。」

「我が家はもう、目と鼻の先なのだから。」

目の前で、両親が刺された。

互いに背を合わせたまま、何本もの槍で貫かれた。

あれじゃ、お互いに顔が見えない。

最愛の人の顔も見れずに殺されてしまうのか。

少年には最早、何かをする気力が失せてしまった。

妹が両親に駆け寄っていく。

凶人がいるにも関わらず、覚束無い足取りで懸命に走る。

それが、歩いている妹の最後の姿だった。

両親に辿り着く前に、妹は鈍器で殴り殺された。

即死だった。

もう、何も聞こえなくなった。

少年の中で、何か死んだ。

意識がはっきりし始めた頃には、自分の視界は赤一色だった。

地には多くの血が流れ、辺りには炎が充満していた。

視線をどこへ動かしても赤しか見えない。

もう、妹も両親も見えない。

辺りの死体が誰なのか分からない。

これが現実なのかどうかも分からない。

吐き気を催す死臭と、噎せ返るほどの熱気が、非情にも現実なのだと思わせた。

今度こそ、少年の意識は途絶えた。

最後まで、この惨状を理解できないまま。

な、現実って残酷なモンだろ。

認めようが認めまいが、現実は変わりやしねえ。

見たものと感じたものが全てだ。

これがお前の捨てちまった過去だ。

あの時のお前が、最後まで必死で抵抗して遠ざけてた現実だ。

ここまで話せば分かんだろ。

お前はあの時、間違いなく死んだのさ。

外伝
新たな年に向けて、尋ね人来たる

ひっそりと構えられた喫茶店が、そこにはあつた。

住宅街の奥の奥へと進んでいった先に、その店はある。

大きくもなければ小さくもない。

何方かと言えばこぢんまりとしていると表現した方がしっくりくるかもしれない。

しかして店はある。

そして、店があれば、客もまたやって来る。

暖簾さえ掛かつていれば、呼ばずとも自然に客はここを訪れるのだ。

店とは、得てしてそういうものである。

「ちわー！」

マスター、お邪魔するでえ！」

また、面白いとお客が思ってくれれば、苦勞など気にせず足運んでくれるのだ。

見つけるのが大変な酔狂な店に、こうして定期的にやって来るお客は少なからず存在する。

自分で構えておいてなんだが、このお客も存外物好きと見える。

酒盛りするために、わざわざ迷路じみた通路を抜けてまで来てくれる。

その熱心な姿には、呆れを通り越して尊敬に値する。

まあ、数時間後には必ず前言を撤回するハメになるのだが。

「いやあさむさむさむ。

最近寒なり過ぎとちやうか？

こないなん続いてもうたらウチかて凍りついてまうよ。

それで、そうなる前にちやんと温かいモン飲まんとな！

そういうことで、熱燗とテキトーにツマミ頼むでマスター？」

「ホント、物好きだよなあお前さんも。

わざわざこんな辺鄙なところに通うなんてな。

精が出るこつて」

「んもう、固いこと言いっこなしやで。」

神と同じくらい気紛れなアンタが、よりもよつてこの日に店開けるから悪いんやで？

一常連として、足運ばん訳にはあかんやろ。

そーれーよーりー！

はよあつつい一本頼むわあ！

ウチ凍えてまうで！」

「……まあ、常連を無碍にするわけにはいかないよなあ。

ホラよ、熱爛とおでん詰め合わせ。

上がったばっかだから熱いぞ、気いつけな」

「おお！

なんやもう準備してくれはったん!?

何時になく気が利くやんかあ。

ひよつとして……ウチが来ること期待してたとか？」

「阿呆。

誰が来てもいいようにだよ。

準備はしておいて損はないからな」

「にひひ、マスター素直やないなあ。

喫茶店で酒がある時点でお察しやんか。

ツンデレも大概にしとき？

惚れんのも時間の問題なんやから」

「そいつはどうも。

男冥利に尽きるねえ。

それよりホラ、冷めるぞ」

「ま、今日はこんくらいにしといたるか。

祝い事の前日やしな、野暮なことも言いつこなしや！

マスター、かんばしい」

「へいへい、乾杯っと」

程よい熱さにまで熱した焼酎が喉を鳴らす。

凍えていたお客はそれを一杯煽っただけで、直ぐ様顔に火照りを浮かび上がらせる。

そして、素早く煮玉子に箸を通す。

半熟気味になった卵を半分頬張る。

熱いことはもちろん分かっているが、鼻腔くすぐる出汁の香りの前には、がつつかない訳にはいかなかった。

再び熱燗をお猪口一杯を煽る。

無限に繰り返せそうだった。

「くうう……効くわあ！」

寒空の下歩いてきた甲斐があったわ。

につひひ、また腕上げよったな。

ホンマこのおでん最高やな！

なんぼでも食えてまう！

………ぶはあ、ああ幸せやあ」

「毎度毎度美味そうに食つてくれるなあ。

作り手としちやあこれ以上に嬉しいが、塩分高いからほどほどにしとけよ？
なんであれ、食い過ぎはすぐ肥えるからな」

「あ、乙女に向かつてなんちゅーこと言いよんねん。

ウチかてピッチピチの淑女なんやで？

マスター、そんなデリカシーない発言、控えんとあかんよ？

そないやから何時まで経つてもええ子捕まらんやんか」

「お前さん以外こんなこと言わねえよ。

常連は大切にしたいんでな、体調管理もしっかりしてもらわねえとこつちも困んのよつと。

ホラ、うちの特製干し柿だ。

ザラメ塗してあつから口直しにお上がりよ。

あ、だからって食い過ぎんなよ？

呑み終わった頃にもう一回食つとけ。

高確率で二日酔い防げるからよ」

「おお、これもうんまあ！

毎度気が利くなあマスター。

んーなんやかんやゆーても、総合的にマスターは魅力的やね。
プラスやプラス。

他の要素も全部プラスにしてまえばモテモテやんか」

「そんな浮気性な男にはなりたくねえの。

分かってくれる奴にだけ、分かってくればいいのさ。

丁度一人、分かってくれる奴は知ってるがね」

「……にひひ、そういえばウチも心当たりあるわあ。

だいぶ物好きなんやね、その人って」

「まあな。

酒癖悪いのが玉に瑕だが、お陰で退屈しない時間をもらってるよ。

だからこうして、誰かを通してお礼してんのさ」

「ええ？」

そこは直接言わんとあかんちやうの？」

「調子に乗るからダメだな。」

まあ、そのうち考えとくよ」

「そっか、じゃこれ以上は野暮やな」

「そういうこつた。」

気にしねえで楽しんどけ」

こうした酒の席では、全てのお客は対等の立場となる。

無礼講も行き過ぎれば悪いが、硬くなりすぎなものも返って逆効果だ。

ほどほどに気を遣わず、双方が楽しめれば万事解決なのだ。

ゆつくりなようで、あつという間に時が過ぎていく。

何とも奇妙な時間感覚を覚えるのが、こうしたいい雰囲気の成せる技なのだ。

「ほんでマスター？」

この店構えてもうなんぼになるん？」

「なんだよ急に」

「ええからええから。」

たまには過去を振り返ってみるモンやで？

そつからまた新しい発見があるかもしれんやんか。

こういう振り返りの場は大切な機会や。

まして、祝い事の前日なら尚更。

ウチが特別に聞いたるよ？」

「あー……：そーいやあ考えたことなかったな。」

気付けばもう一年も終わりなんだなあって思つたくらいかな？

店構えてもう早えモンでさ、あつという間に半年ぐらい経ちまった。

まあ、そんな短い間で常連が出来たことは予想外だったが……」

「にひひ、そんで？」

他には何か思ったことはないんか？

「アンタ別にこの店一筋って訳ちやうんやろ？」

「まあ、確かに俺はここだけが本業じゃねえからな。

他にもやらなきやいけねえことは腐るほどあるし、毎日面倒を見てやれるわけじやないんだが……。」

「ははっ、いやあなんだ。」

「時たまこうしてやって来るお客にえらく有り難みを感じてよお」

「……っ！」

「なんや、今日は変とこで素直やな。」

「思わんストレート発言でちよいビツクリしてもーたわ……」

「いいだろ？」

たまにはこうやって吐き出してみんなも悪くねえ。

ロクに考えもせずによって来るお客が大半だが、常連もいてくれる。来てくれるだけでも嬉しいのさ。

こんな気紛れな店相手によ。

そういうお客全部ひつくるめて感謝してんのさ。

一番じゃなくてもいい、ついででもいい、この店と同じように気紛れでもいい。来てくれるだけでも御の字だ。

ここに来てくれるお客には、それだけで俺は嬉しい」

「確かに、ここに来る輩はアンタと同じくらい気紛れモンばつかや。

好き勝手吐き散らかして帰ってくで、アイツら？

それでもアンタは幸せなんか？」

「ああ、幸せだとも。

そういう奴らも、日々のストレスでいっぱいいっぱいなんだから。だつたらここでいっそ吐いてくれりゃいい。

ハメ外して、バカ騒ぎしてくれんならそれで結構。

この店も喜ぶってモンだ。

そういう奴らの抛り所になつて欲しいんだよ。

だから、まだ当分ここを閉める気にはならねえよ。

せつかく集まつてくれた大事なお客だ。

まだまだいい思ひしてくれねえとな」

「……ちよつと見いひん間に、ごつつ男前になつたやないの。

せやな、どんな奴にしたつて、感謝する心忘れたらあかんな。

持ちつ持たれつ、ここに來たからには一蓮托生やもんな」

「ンなでけえこと言うつもりはねえけどよ。

でもまあ、とりあえず寄れる所があるつてことぐらい思つてくれれば、今はそれでいいかな」

「なんやちつちやいなあ。

男ならもつとおつきい夢見たらええやん。

叶う叶わない限らず、夢くらい夢見てええやんか。

少なくとも、ウチは応援したるよ？」

「そう言ってくれるだけで十分さ。

まあまだまだ始まったばかりだ。

じっくり時間かけて、登れるところまで行くつもりよ」

「……ふうーん。

今はまだそれでええということにしとくわ。

ウチかて、もつと盛り上がってくれんとつまらんしな。

のんびりとした雰囲気も悪くはないんやけど、それだけじゃ飽きてまう。

物事は緩急つけてなんぼやかな」

「言われんでも分かかってるよ。

他の店に尻尾振られないよう足掻いてみるさ。

毎回来てくれるお客に申し訳ないしな」

緩やかな時間が過ぎていく。

気づけば一年の終わりがすぐ近くまで迫ってきている。

つくづくあつという間だったと痛感させられる。

色々あつたようで、何もなかったように思えた。

だが、結局のところはどつちでもいいのかもしれない。

何かがあれば変化を楽しめばいいし、何もなければ穏やかな一年だったと思えばいい。

後ろ向きに物事を捉える必要はない。

何気ないように過ごしていた日々は、しっかりと着実に、その先にある何かに繋がっている。

一年はこれで終わるが、人生はまだまだ終わりに程遠い。

ゆつくりと時間をかけて味わえばいい。

焦ることはない。

人生はまだまだこれからなのだから。

「あ、言い忘れてたわ。

マスターのお望み通り、そろそろ新しいお客来るで？」

「なんで分かんだよ？」

「ウチが呼んだからや。」

辺鄙なところに酔狂な店があつて、物好きなマスターがおる変わった店があんねん！
つてオススメしといたで。

感謝してやあマスター？
にひひっ」

「全然勧めてねえじゃねえか。」

「ほぼ悪口じゃん、何も褒めてねえじゃん」

「だーから固いこと言いつこなしやて。」

「来てくれるかもしれないだけええと思わん？」

「まあ……来てくれるに越したことはねえけどよ。」

「なーんか腑に落ちねえなあ……。」

「やっぱ干し柿は取り上げとくか」

「あぁーん！」

堪忍やてマスター！

それなかつたらウチ年明け早々寝て過ごしてまうやんか！

全然めでたくない感じになつてまうやんか！

返してーな！」

「おうおう潰れて寝て過ごしちまえ！」

いい感じにまとめあげたようにドヤ顔かましやがつて！

そもそも毎回吐き散らかして帰つてくのお前さんじゃねえか！

誰が掃除すると思つてやがる！

ちつたああの子たちの身にもなりやがれ！

散々迷つた挙句に酔つ払いを連れて帰るハメになるあの子達に同情するわ！」

「喧しー！」

酒呑んで何が悪いねん！

酔つ払つて何が悪いねん！

ウチは呑みたい時に飲む、誰にも文句は言わさへん!

金置いてんねんから最後まで面倒見いや!

背中摩つて介抱せえや!

それより、迷うのはウチのせいちやうやんか!

こんな訳分からんとこに店構えるのがおかしいちやうの!?

ホレ、何とか言うてみいや!」

「お邪魔します。

知人に紹介されて訪ねてきたのですが……お取り込み中ですか?」

「なーに?」

けんかー?

俺おなかすいちやつたんだけど」

「ほう、随分風変わりな店だな。

我が主神を招くには少し薄汚いが、まあこれはこれで悪くはないな。

久々に一杯もらうとするか」

「なになに!？」

結構いい雰囲気じゃない!

代理の仕事終わりにばあーつとするには丁度いいかも。
たまには誰かが作った料理も食べてみたいしね」

「やっぱりここにいたのか!

毎回連れて帰る私の身にもなれ!

誰のために毎回会議を行っていると思ってる!？」

団員が団員なら主神も主神だ!

ウチのファミリアは私にどれだけ手を焼かせるつもりだ!」

「あらあらうふふ。

随分と賑やかなお店ね。

雑務の息抜きにはうってつけじゃないの」

「そうだな、最近ロクにお茶も出来なかったから丁度いい。

今日ぐらいはファミリアの勉強は休んで、一杯飲むのもいいかもしれんな」

店があればお客有り。

またその逆もまた然り。

一人は二人となり、二人は四人となる。

そうやって人との繋がりは無数に枝分かれしていく。

そして、そうして人は新たな出会いに巡り合っていく。

年が明けることとなっても、結局人の本質は変わらない。

今まで通りに、今まで以上に過ごすのだ。

新たな巡り合わせを求めて人は、今日を過ごす。

願わくば新たな年は、素敵な出会いがありますように。

「つたく……また一段と忙しくなるなあオイ。

まあ、やっぱりこういう方が面白いな。

いらっしやいませ、あずき屋へようこそ！」

第16話 少年、炎を思い出す

個人により差はあれど、幸福と不幸は平等に降りかかる。

その中でも、人間という生き物は自身にとつて不快な思いほど強く認識する。

そして、それは長い間心に深く根を張り、その者を苦しめ続ける。

悲しみや怒りが齎らす黒の侵食。

知能が大きく発達してしまつた種であるが故に、余計なものを抱え込みやすい。

あらゆる事に何らかの反応を示す人という存在が、その存在を如実に表していると言

えるだろう。

不幸が幸福に優つているという点を挙げるならば、それなのかもしれない。

幸福を味わつても、その余韻に浸る時間はほんの一時。

しかして不幸は、実に多くの時間を人を苦しめる。

禍福は糾える縄の如し。

互いに密接な関係ではあるものの、決して一方のみを味わえる訳ではない。

どちらかが迫ってくれば、いずれもう一方が必ず迫ってくる。

幸福と不幸は表裏一体の存在で、この世のあらゆる生に対して、常にその存在を与え続けている。

この時、少年が味わっているのは間違ひなく不幸であった。

それも、飛び抜けて凄惨なものを。

家族含めて村民を皆殺しにされて、築き上げてきたもの全てを灰にさせられた。

それは無慈悲に、悪魔の所業を思わせるように。

自分たちが一体、何をしたというのか。

村民全ての命を対価に支払わなければならない罪を犯したというのか。

あれほど凄惨な光景を現実になんて許さずしてしまふほどの行いを、自分たちはしてきたとでも言うのか。

罪なき赤子諸共命を散らさなければならぬ過ちを行ったというのか。

否、断じて否。

自然と共に生き、無闇な殺生を行わず、慎ましく生活し、日々を笑顔で過ごしてきた。特別なことは、何一つしてきていない。

掛け替えのない日々を、村人全員で共有しながら全力で生きてきた。

これまでの日々全てが、地に還るその時まで皆の心に残るように生き抜いてきた。それを間違っているなどは、誰であろうと断じて言わせない。身に覚えのない余りにの仕打ちに、いったい誰がこの現状を見て仕方ないと思えるのか。

炎が燃える。

村人や思い出を燃やすだけでなく、生き残ってしまった少年の心にも火が移る。

憎悪や深い悲しみなどの負の感情を薪に、あの時の光景のように大きく燃え上がる。

その感覚は、とても奇妙なものだった。

当時は何も感じることはなかったのに、今こうして当時の記憶を呼び起こされた途端に自覚する。

自分は、何かに対して憎んでいる。

だが、あの時の侵略者たちの顔は誰一人として覚えていない。

誰を憎めばいいのか。

誰に怒ればいいのか。

誰を殺せばいいのか。

行き場のない深い憎悪が、心の奥に確かに芽生えた。

あの灰の中で、少年は一体どうなってしまったのだろうか。

「死んだよ。」

あの災禍の中で、お前は間違いないで死んだ。

身体じゃなく、心がな。

無理もないさ、家族や村人含め総勢二百名余りが漏れなく皆殺しだ。

そんな衝撃的過ぎる光景を見せつけられれば、年端もいかないガキに何らかの悪影響を及ぼしたとしても、何ら不思議なことじゃない。

あの時、お前は心の中全てを取り零した。

ラジエル・クロヴィスという名前と、空っぽの器だけが残った。

そら、そんなもの実質死んでも同然だろ？」

ならば、何故自分は生き残ったのか。

全てを失い、何もかもを取り零した傀儡と変わらない存在となってしまう少年が、どうして今日まで生き抜くことができたのか。

「さあな……ただ、最後の最後で見つけたんだろうよ。」

生きなきやいけない、生きる意味ってやつを」

生きる意味。

大切なものを踏み躪られる光景をまざまざと見せつけられて、地獄の奥深くに突き落とされた手前、到底そんなものが見つけられたとは思えない。

理解の範疇を越えた結末、感覚が麻痺するほどに味わった悲しみや苦しみの連鎖。それすらも、もう感じなくなってしまうほどに、心が一瞬で摩耗してしまった。

何も感じられなくなり、何も考えられなくなってしまうはずだ。そんな正常な思考、あの場ではどうしても出来なかつた。

「深く考え込む必要はないさ。

だって、そいつは頭で考えるものじゃない。

所謂本能。

死を回避しようと藻掻き、生に執着しようとするみともない姿。

哀れにも愚かにも見えるが、それは決して恥ずかしいことじゃない。

どんなになろうとも、懸命に生き抜こうとする生物として当然の形だからな。

極めて合理的に、感情的に、本能的に動く「人」という存在だからこそ、必死に足掻

くんだよ。

きつとお前を突き動かしたものは、やっぱり家族の存在があったからこそだろう」

家族という存在。

寝食を共にするだけの関係ではなく、思いや時間の多くを共有し、互いに成長させるもの。

理屈ではなく、感情的から生み出される特異なもの。

親は子を時に叱り、諫め、褒め、愛し、導く役割を担う。

母は子を身籠り、長き苦痛に耐え抜き、命を削って我が子を産む。

父は妻と子を養うため、日々汗水流し、時に血を流して金銭や食料を得るため、日々を労働に捧げる。

双方ともに苦勞が絶えない日々を強いられることになるが、根底ではよく考えて許容している。

全ては掛け替えのない時間を少しでも多く作っていくため。

子どもの成長を身近で見守っていききたため。

自身の全てを投げ打ってでも、我が子に笑って生きていて欲しいため。

愛故に成される所業。

そんな子にも役目がある。

日々を元気に過ごし、遊び、学び、育ち、生きることだ。

それは自身の両親のように人として成長し、後に自分が彼らの立場になるための準備期間として、日々を元気に過ごす義務がある。

ただ生きるのではない。

誰かの力になり、世のために役に立てるよう成長しなければならない。

両親と妹は確かに、ラジエル・クロヴィスという存在に対して、とても大きな思いを遺してくれた。

貴方が元気な姿を見せられたら、お母さんは幸せ。

いつかお父さんを越える強い男の子になれ。

——小さな者に頼られ、守れるような存在に。

日々の生活の中で、家族はそんな大切なものをラジエルに託してくれていた。

どんなに泣き出しそうな辛い境地に立たされようとも、もう起き上がれないぐらいの絶望を眼前に叩きつけられようとも、閉じ籠りたくなるほどの悲しみを抱えようとも、必ず生き抜かなければならない。

命ある限り、生きることを放棄してはならない。

「その証拠に、お前に覆い被さってたあの灰。

ぶっ倒れる前はそんなモン被ってなかったろ？

間違いねえよ、あれは俺たちの親の灰だ」

影の語りかけは、あの時の光景を鮮明に蘇らせてくれる。

一度意識を手放す前、自分はまっさらな状態で地に伏せていたはずだ。

被った覚えのない灰が、自分の背中を優しく包んでいた。

文字通り、両親が最後の力を振り絞って息子を守り抜こうとした。自分たちが後どれくらい息が続くか分からない。

最愛の人の顔も見えなければ、娘も目の前で散らせてしまった。

不幸のどん底に突き落とされた、

でも、まだ目の前には息子が残っている。

ならば、せめて息子だけは生かさねばならない。

自分たちの幸せの結晶を、悪しき者の手に落とすわけにはいかなかった。

激痛に見舞われる中、懸命に地面を這いずって息子を隠した。

子どもの死を偽装するために覆い被さった。

戦火に身を焼かれようと構いはしない、そんな覚悟の上だったのだろう。

「皮肉にも気を失ったのが幸いしたな。

地に伏せて、そのまま動かなけりゃ奴らは気づかない。

まあ、そのままお前ごと焼かれる可能性もあったが、あの人たちはその賭けに勝った。

今ももう知る術をあの人たちにはないが、お前は今こうして生きてる。

両親にとっては、それだけで大勝利なんだよ。

自分たちの宝物が、今まで元気にやってる。

それでお前が天寿全うすりやそれで万々歳。

……ホント、生涯頭が上がりねえや」

そうして、村は壊滅の一途を辿った。

気紛れに吹いた風が、偶然少年の住む村を倒しただけ。

何故も何も無い。

偶然の重なりが続いて、こうなっただけの話だ。

経緯についての考察など無意味。

全ては結果のみが物語る。

そして、少年はその灰の中から再び生まれた。

「まるで英雄譚みたいだな。

燃え尽きた灰の山から蘇るなんてよ。

神様の復活かってんだよな。

まあ、経緯はどうあれ、お前は生き残った。

死んで生まれて、リユータチの知ってるラジエル・クロヴィスとなってここにいる。

前より性格は真反対の存在になったがな。

明暗が反転し、感情を覆い隠す鉄仮面を被り、何に対しても反応の薄い不感症気味のガキになっちまった。

これがお前の忘れていた記憶の欠片。

心の奥底に封じ込めた思い出したくない過去だ」

斯くして、少年は死に、少年は生まれた。

粉々に砕け散った心の欠片を寄せ集め、無理矢理に繋げ合わせた歪な存在として新たに生まれ直した。

決して消えることのない赤い炎を遺して、ラジエル・クロヴィスは新たな人生を歩むこととなった。

「前に進むためには、時には辛い過去にも向き合わねえといけねえ。

そうじゃなねえと、何の為に前に進んでんのか分からなくなっちまうからな。

いい事も悪いことも全部ひっくりかえして生きてよ。

それが、あの時お前に課された勤めだ。

随分と前座が長引いちまったが、こればかりは避けられねえ。

待たせちまったな。

お詫びにはならねえが、こいつを渡す時が来たよ」

影の掌に浮かぶ赤き塊。

妖しく揺らめき、邪な思いを宿す恩讐の具現。

時の終わりまで決して消えない憎悪の炎。

【原初^{エイワズ}の炎】

使い手の負の感情を薪に、この世の終わりまで燃え尽きない不浄にして、不滅の魔法だ。

魔力が尽きない限り消えることはなく、あらゆる形に変じられる憎悪の業火つて言つたところか。

お前の心の憎しみが強ければ強いほど猛々しく燃え上がり、際限なく一切合切を問答無用で焼き尽くす。

ツハハ、厳密に言やあ魔法じゃなく、呪いそのものだなあこりや。

まあ、確かに渡したぜ。

後は好きに慣らしな。

勝手や加減はそのうち掴めんだろ。

歩くより走れ、習うより慣れろってな」

それは、決して消えることのない傷の形そのもの。

修復が完全に不可能となったその傷は、あらゆる万能薬をもつてしても癒える事はない。

徐々に傷跡は大きくなり、いずれ身体だけでなく、心にまで広がっていく。

生まれながらにして致命傷を負った少年は、死に場所を求めて彷徨う幽鬼。

ぶつけどころが分からず、暗れることのない憎しみを、いつか消せると信じて漂う。

終わりのない旅路に終わりがあると、信じて止まない哀れな鬼の子。

叶いもしない願いを、愚直にも信じ続けた少年の在り方を体現したもの。

「今回はここまでだ。

俺からしてやれるのはこんくらいなんだな。

後は自分で見つけな。

しんどくなるほど考え、死にそうになるほど悩み、心の底から納得したモンが答えだ。折れない限り、いつかは見つけられんだろよ。

おおっと、そろそろ時間切れかねえ」

影の姿が、徐々に霧散していく。

役目を終えたからだろうか、その姿かたちは薄れていき、この世界に還元させられる。彼は、少年の心の一部。

消えるのではなく、在るべき所へ戻るだけなのだろう。

「……まあ、俺としちやあだいぶ引き伸ばせたモンだろ。

とりあえずはサヨナラしてやんよ。

ツハハ、何？

ここで俺の登場終了とでも思ってたんの？

ツハハア！大ハズレってな。

俺自身分かんねえけど、またいつかはお前の前に出てくるよ。

俺は、お前の闇そのものなんだからな。

呼ばれずとも何度でも出てくるさ。

せいぜいその時を楽しみにしてな」

消えかけになっても、その減らず口は留まる事を知らない。

最後の最後まで、耳障りになるお喋りは終わらない。

どこまでもしつこい影は、消えるその時までには大きな謎を口にした。

忘れんなよ。

自覚がないにせよ、お前の心には……いつでも憎しみが巣食っていることを

「……………うあ？」

目が覚めると、少年は仰向けで寝転がっていた。

覚醒しきっていない頭は働かず、何故眠っていたのかだけを延々と自己問答する。ちらりと左手を見やれば、太陽が退場しようとしている時間帯であった。

むくりと上半身を起こす。

身体はほんの少し怠いが、さして支障はない。

何やら、夢を見ていたようだ。

自分の過去を追体験する、そんな悪夢を。

「……あれ。」

俺、覚えてる？」

夢は総じて朧げな印象である。

しかし、少年は自分の見ていた夢の内容をはっきりと覚えている。

否、夢ではなく、自身の身に起きた出来事を思い出したように、取り戻したような感覚だ。

村の皆のことや家族のことを、鮮明に思い出した。

だからといって、今の少年に対して大きな変化はない。

だが、忘れてはいけなものを、取り戻したような気がした。

自身の胸の内に仕舞いこんでしまっていたものを、ようやく一つ見つけたのだ。

「……熱い。」

何だか、すごく……熱いや」

胸の奥に、確かな熱を感じる。

優しいものではなく、いずれ身を焦がしてしまうのではないかと錯覚を覚える熱さ。これが一体何なのかは分からない。

自身に起きた出来事を、いまいち理解できないまま、夜を迎えることになってしまった。

「ラジエル、今いいか？

アテナだ。」

ノックが響き渡った。

夕餉を知らせるために誰か来たのだろうか。

「ん、どーぞ」

「すまない、失礼するよ。」

せっかくお前を休ませているのだから、ここいらでステイタス更新をしようと思っ

な」

「うん?どーして?」

後二日くらいはダンジョン行けないんでしょ?」

「まあ、確かにそうなのだが……ホラ、アレだ。」

「この前のお詫びも兼ねてというかな……」

「あてな様、まだ言ってる」

「う……済まない。」

私としても、少しでもお前に寄り添いたいのだ。

形にはできないが、せめて何かラジエルにしてやりたくてな。

まだダンジョンで力を試させてやることはできないが、今のうちに自分の力を把握させるにはいいかと思って……」

少年の主神は、普段の凜とした態度を隅に追いやって、何やらモジモジと語りだした。

どうやら猛者^{オツタル}との諍いに巻き込まれた件を未だに気にしているらしい。

アストレアファミリアの眷属たちは、皆口にくそ出しはしないが、この短い期間の間にアテナの性格に関して掴み始めているようだ。

普段はその美貌を引き締め、毅然とした強気の状態を崩さない。

が、その反面はとてモナイブだ。

傷つきやすく、自身の失敗を長く悔い続ける傾向にある。

噂によれば、ファミリア設立の際にギルドからあれこれ説明や注意を受けた後、人知れずアストレアに泣きついていたらしい。

説明や注意で泣きつく意味は一切不明だが、とても繊細な心の持ち主であるということは確かだ。

少しばかり慣れたせい、今日の朝餉から、アテナは弱々しい一面を少年に見せるようになった。

慣れてくれたことは嬉しいが、自分の親がこうも打たれ弱いのはどうなのだろうか。

「んんっ！」

ダンジョンにはまだ行かせられないが、ここで鍛錬するならば何の文句もない。

どちらにせよ、新たに身に付いた力を持て余すことはないだろうと思つたまでだ！
ほ、ほんとだぞぞ！」

「……ふーん」

「や、やめろ！」

そんな迷いのない円らかな瞳で私を見るんじゃない！

神といつても、純真無垢な子どもの視線にはくるものがあるんだぞ！

……はあ、まあちよつとばかり早いとは私も思うが、このままでは私の気も晴れない。ここは一つ、私を助けると思つて頼む。

それに……なんだ、お前も猛者と戦つた時に蓄積された^{エッセリア}経験値を、早くその目で見たいだろ？

ラジエルがどういつた強さを求めるのかは分からないが、少しでもその強さに近づいていつている実感を、すぐ持たせたいと思つて……」

「……ありがとう、あてな様」

「……ははっ、またその言葉に救われてしまったよ。

不甲斐ない親で済まないな。

いつか、胸を張つて自慢できるよう、私も強くなろう。

なんやかんや建前を並べても、本音はラジエルの成長を見たいだけなんだ。

子どもの成長が待ち遠しくて仕方ない……ははっ、ダメな親だろう？」

「んーん、そんなことないよ。

あてな様は、俺の親だよ。

これからも、そうなんですよ？」

「……ああ、もちろんだとも。

お前の初めての更新を機に、私の成長も更新しよう」

自分の気持ちも固まったことで、アテナはステイタス更新の儀式に取り掛かる。儀式といっても、そこまで大掛かりなものではない。

最初に恩恵を刻んだ時のように、背中の神聖文字ヒエログリフを書き換えるだけだ。

指に金の針を刺し、神血イコルを滲ませる。

熟練の画家のような筆使いで、淀むことなく指を走らせる。

「ああ、そういうえば魔道書グリモアを手に入れたのだったな。

もう読んだのか？」

「うん、読んで寝ちゃった」

「ははっ、慣れない読書で眠気が来たか。

書物に触れる機会が少なかったのだから仕方ないと言えば仕方ないか」

「むう、あてな様、ばかにしてる？」

「悪かった悪かった。

そう怒らないでくれ。

何事も経験から、と言うだろう？」

今は慣れずとも、これからゆっくり慣らしていけばいいさ」
「なのかなー」

たわいもない会話を続けて更新を続けた。

自分にとって、少年が掛け替えのない存在であると再認識したアテナは、この何気ない時間がとても愛おしく感じた。

特別なことは何一つとしてしていない。

そして、特別なことをする必要もない。

当たり前の触れ合いを、意識して噛み締めるだけで、それが特別に思える。

こういった時間こそが、親子にとっても大切なものなのだ。

「そういうものさ。」

私も昔は読書が得意という訳ではなかったしな。

ラジエルのように、数ページ読んですぐ眠くなってしまうっていたよ？」

「あてな様もそーだったの？」

「私とて苦手なものはあるとも。」

神は生まれながらにして完全な存在ではあるが、厳密に言えば完璧ではない。

お前たち子どものように、苦手なもの一つや二つはあるさ。
後は、勉強もあまり好きではなかったな」

「お勉強？」

「ああ、お勉強だ。」

私が過ごしていた時代に関することや危険なこと、やってはいけないことなんかも学ばなければならなかった。

神といえど、自分が関与する前の事柄を知っている訳ではないからな。

自分の住む世界くらいのは、自分で調べなければならなかったよ」

「じゃあ俺も、色々調べないといけないかな？」

「そうだな、じっくり時間を掛けて、様々なことを学んでいくといいさ。」

お前たちの可能性は無限大だ。

ちよつと目を離れた隙にあつという間に成長してしまう。

ほら、今みたいはこのステイタスを見れば一目瞭ぜ……………んん？」

「んん？」

「……………これ、は？」

「一体どういふことだあああああ!!!」

女神の絶叫が木霊する。

アテナは、生涯今日という日を忘れることはないだろう。

この異常過ぎる伸びようは、忘れたくとも忘れることは出来ない。

他の冒険者たちからしても前代未聞。

それは近いうち、必ずやこのオラリオに波紋を呼ぶことだろう。

狂い始めている歯車が、それを遠からず実現させる。

どのような結末が待ち構えているのかは、神ですら予想することは出来ないかもしれない。

歪に重なり合っている歯車が、どんな結果を呼び込むかは想像し得ないからだ。

少年の運命は、着実に歪み始めている。

長年封じ込めていた枷は外れ、悍ましいものが溢れ出す。

自覚なき怨嗟は、誰に対して牙を剥くのだろうか。

ラジエル・クロヴィス

L v. 1

種族：ヒューマン

所属：アテナ・ファミリア

力：G 231

耐久：D 511

器用：E 402

敏捷：D 507

魔力：C 646

《魔法》

【原初の炎】エイワズ

- ・ 変幻魔法
- ・ 魔力（憎悪）が続く限り対象に炎を付与する
- ・ 発動間、外部による干渉を無効にする

《スキル》

【狂い立て我が恩讐】インサニア・アサーヴ

- ・ 憎しみがある限り、戦闘時にアビリティ上昇補正
- ・ 時間経過と共に魔力を微量に回復
- ・ 誘惑、魅了を無効化

・早熟する

第17話 少年、思わぬ形で再会する

ステイタスが更新されてから翌日のこと。

少年の急激な成長により、半狂乱になったアテナがファミリア中に触れ回ったことから始まる。

いや、隣に座っていたリユウの様子が一変したことから始まっていたのかもしれない。

また眷属たちが沸き立って、お祭り騒ぎの状態になると当初は考えられた。

別段、何か特別なことが起きるといふわけではなかった。

それもその筈、人という生き物は、自らの耳に情報が届かない限り騒ぎ立つことはない。

例えば情報が入ったとしても、自身にとって有益なものであるかどうかを一度吟味する。

不要であればその場で切り捨て、有益であれば自身の好奇心を満たすために利用し、知人に伝えることもある。

自ら聞きに行くという行動があれば、また違った流れにはなるのだが、基本的には利用するかしないかのどちらかということになる。

つまり、何か大きな出来事があるうと、それを知る人間が居なければ無駄に荒波は立たない。

世間とはそういうもの。

結局のところ、耳にさえ入らなければ、他人事として流されるのだ。

そう、特に何か特別なことが起きたわけではない。

敢えて挙げるならば、朝餉の場でアストレアファミリアの眷属たちに、急激なステイタスの成長について質問攻めにあつたこと。

朝ごはんが目の前にあるのに、リユーの一時間近い小言を浴びせられて食べられなかったこと。

リユーの作つたサンドウィッチが半分だけ炭になつて、折角の進歩が全然注目されなかったこと。

もみくちやにされて、やつぱり食事ができなかつたこと。

アストレアが「あらあらまあまあ」とだけ口にして全然助け舟を出してくれなかつたこと。

アテナが死んだような顔つきで、何やらブツブツ呟いていたこと。

特に、何も特別なことは起きていない。

至つて普通の反応に違いないだろう。

そう、普通の反応だ。

想像してみても欲しい。

今までむさ苦しい男だった自分が、朝起きたら誰もが振り向く美少女になっていた
ら、誰もが同じような反応を示すだろう。

家族に質問攻めにされて半狂乱になられて、知り合いからも質問攻めにされてアレコ
レ言われて、近所のおばさんが「あらあらまあまあ」と他人事のように振舞つて、普段
の疲れから死にそうになっている人が目の前を横切つたとしても、全然不思議じゃな
い。

過去の忌まわしき経験故に無表情となつてしまつた理由などさして置いて、唐突な周囲
の反応の変わりように表情が固まつてしまうのも、全然不思議じゃない。

助け舟どころか、周りに味方の一人すら見当たらないのも、全然不思議じゃない。

敢えて一つ、おかしい点を挙げるとするならば、団長代理であるリーヴァが一人「ぐ
ぶぐく」と気持ちの悪い笑い声を漏らしていたことぐらいだろう。

ガミガミと矢継ぎ早に小言を放つリユート、どんな顔をしたらいいか本気で分からな
くなつてゐるラジエルを眺めながら、一人ずつと笑つていた。

かなり、ドン引きするぐらい、気持ちいぐらいに気持ちの悪い笑顔を浮かべていたことぐらいだろう。

「……むうおーん。

結局何も食べられなかったあ……」

かくなる上は撤退に限る。

半ば無理矢理包囲網を抜けて、命からがら街道にまで逃げてきた。

あんなところに長いこと置かれていたら、完全に参ってしまう。

食事があるうと手をつけれられないとあつては結局何も食べられない。

質問と小言の集中砲火が浴びせられ続ける中、最早腹が減ったどうこう言っている場合ではない。

飯を取るか精神的安寧を取るかの選択。

故に少年は食事を犠牲にし、周囲から重圧から逃げ出した。

「お金はあるし……まあだいじよぶかな」

簡単な金勘定は、既にリユースから教わっていた。

端的に説明すれば、提示されている数字と同額、又はそれ以上の金額を払えば売買は成立する。

より詳しいことになる、その商品の原価やら正当な値段かどうかをよく吟味する必要性があるとリユースは言っていたが、ラジエルにはそこまで理解できる訳ではなかった。

故に無駄遣いをしないという点さえ守れば自由にしていいとのお達しだった。

前回潜った時に回収した魔石やドロップアイテムを換金したため、ある程度余裕はある。

じゃが丸くん百個くらいは余裕で買えそうな金額を所持しているとだけ言うておこう。

「……何でもいいや。

とりあえずじゃが丸くんでも買おつかな。

ごめんくださいーい」

「おおう、いつかの少年クンじゃないか！

いらっしやいませー。

今日はお姉ちゃんは一緒じゃないの？」

「ああ……うん、お姉ちゃんは今日いないよ？」

それよりお姉さん、じゃが丸くん一つくださいな」

「そっか、はいはい承りました。」

今日はどうする？」

この間は色々品切れだったけど、今日は大丈夫！

プレーンにチョコクリーム、キャラメル、シナモン、レモンペッパーとかいっぱいあ

るよ！

いっぱい悩んでいてね！」

「ほんとだ。」

前よりいっぱいあるね……どうしようかな。

あ、この小豆クリーム味っていうの何？」

この前来たときなかったよね？」

「あ、いいところに気がついたね。」

そう、今日から始めた新商品だよ！

私としてもコレちよつとやりすぎじゃないって思っ、いや言ったんだけどさ。

店長がゴリ押しして商品化しちゃったんだよ。

まあでも確かにチョコクリーム味とか出しちゃってるし？

これも別に変わるんないよって真顔で押し切られちゃった、あはは……。でも不思議なことにこれが大ヒット！

みんなこのミスマツチと低カロリーがいいって評判なんだよ！

そしてそしてえ……。何と大好評につきあと一個で完売！

どうかな少年くん？

自慢？の一品、試しに買ってみてくれないかな？」

「そーなんだ。

じゃあ一つもらおーかな」

「はいはい、お買い上げありがとう……。うん？」

「うん？」

じゃが丸くんの味の種類は実に豊富だ。

揚げ芋に調味料一つ変えるだけで、様々な満足に繋がる。

最近では揚げるための油の品種改良に成功したとのことで、より低カロリーに出来たそうだ。

それにより、前回より女性客の来店が倍増したと聞く。

芋の特有の腹持ちの良さ、味の種類豊富さ、求めやすい価格は、じゃが丸くんを有名にさせるには十分な理由だった。

中には、じゃが丸くんを一日の食事を済ませてしまふ強者もいるそうだ。

売子のお姉さんがオススメしてくれる新商品を買おうと思つた少年に、軽快な足取りで近づいてくる気配があつた。

「ねえ待つてつて!」

そんな急がなくてもいいじゃん!

別にじゃが丸くんは逃げないからつて、ちよつ足はつや!!

モンスターに突つ込むくらい早つ!?

私置いてけぼりになる!」

「早く行かないと新商品売り切れちゃう。

もう目の前だから頑張つて」

「いやもう何言つてるのか全然聞こえないよつ!

目の前なのアイズだけだから!

私まだ遙か後ろだから!」

「すみません、小豆クリームを一つ……あ」

猛スピードで屋台に走り込んできたのは、鎧を身に纏った金髪の少女だった。

風に靡いた金髪は、まるで空に輝く流れ星のよう。

そしてじやが丸くんに注ぐは髪色と同じ金色に似た瞳。

その瞳は見開いたまま止まった。

屋台に向けて文字通り、流星のように飛来した彼女は、目の前の光景を前に急停止してしまった。

「ああー、ごめんねアイズちゃん……タッチの差で売りきれになっちゃったよ……。

ホントに僅差だったよ。

あの距離からホントに僅差だったよ。

あまりのスピードに、お姉さんビックリしちゃったよ……。」

「そ、そんな。

目の前で、売り切れ……なんて」

「っだはあ！

はあはあ……ようやく追いついたよ……。

アイズ……ホントに、じやが丸くんって聞くと……早すぎ……。

「はあはあ、で、お目当てのものは、あったの？」

「目の前で、なくなつた……」

「ええー!!」

「こんだけ私走らせといて売り切れ!？」

「折角鍛錬後の水浴びも我慢して来たつていうのに……」

「そりゃないよ……走り損のくたびれ何とかじゃん」

同じく必死に走り込んできたのは黒髪褐色の少女。

アイズと呼ばれている少女に懸命に付いてきたため、息が切れまくっている。

金髪少女は売り切れに愕然とし、褐色少女は振り回された末のあんまりな結果に呆然としてゐる。

自分よりも年上の少女たちの姿を前に、これまたどうしようかと考える少年。

ぶつちやけ新作云々について、ラジエルは別にどうでもいいと思っていた。

まともな味で、腹を少しでも満たせばそれで満足なのだ。

居た堪れない姿をこれ以上見ていられなくなつた少年は、彼女たちに歩み寄ることにした。

「あの、コレ食べる?」

「……ええ?」

「い、いいの少年クン?」

あと一個しかないんだよ?」

「うん、まあ残念? かもしれないけど、本当に食べたがつてる人に食べてもらうのが一番だと思うよ。」

俺は他のにするからお姉さんあげる。

楽しみにしてたんでしょ?」

「あ……ありがとう。」

ちゃんと、キミの分まで味わって食べるね」

「やっさしーねキミ!」

私の苦労も少し報われた気分!

よかつたね、アイズ?」

「うん、本当にありがとう」

「きにしないで」

正直ここまで感謝されるとは思ってもみなかった。

本気で頭を下げてくるアイズを前に、ただ困惑するしかないラジエル。

後ろの褐色少女は、先程までの疲れを忘れて少年の手を掴んで飛び跳ねている。

やったことは大したことはないが、ここまで喜んでくれている。

さつきより十分マシな空気になり、喜んでくれている分少年にとってはそれでよかった。

「私も朝からいいもの見れて特した気分だよ！」

少年クンの優しさに免じて、今日だけ特別に好きなじゃが丸くんを一つサービスしちゃおう！

「さあさあどうぞご覧あれ！」

「じゃあチョコクリームに……む？」

少年のお腹から、腹の虫が大きな声を上げた。

考えてもみれば、朝起きてから二時間以上何も口にしていない。

腹の虫が暴れだすのも致し方ないことであつた。

「アレ？」

もしかしてキミ、すごくお腹減ってる？

それじゃあ一個食べたくらいじゃ足りないよね」

「なら、お礼に私から他の味、プレゼントしてあげる。

他にも色々買って帰る予定だったし」

「おおアイズ太っ腹あ！

ならウチのホームで一緒に食べようよ！

受けた恩は倍にして返せって団長も言ってたしね」

「別にお腹は出てないけど。

それより、どう？

ウチ、来る？」

「じゃあ、おじゃましよーかな。

あ、俺はラジエル・クロヴィス、よろしくね」

「私はアイズ。

アイズ・ヴァレンシユタインだよ。

こちらこそよろしくね。

それとありがとう」

「私はティオナ・ヒリユテ！

よろしくね、ラジくん！」

なし崩し的に仲良くなったアイズとティオナ。

二人の性格はほぼ正反対。

感情豊かで快活明朗な褐色少女のティオナ。

少年と同じように感情の起伏が少ない少女のアイズ。

ティオナは常時明るく、元氣いっぱい飛び回る。

その姿は、見ているとこちらまで明るくなれるようであった。

正に周囲を照らし出す太陽そのもの。

その輝きが失われぬ限り、照らされるものはいつまでも明るく振る舞えるであろう。

少年からしてみれば、直視できないほどに眩しい存在だった。

昔の自分もこういった振る舞いを自然と行っていたようだが、今の自分ではその一割すら発揮できそうにない。

反面、アイズはとても大人しい。

感情に起伏は少ないが、要所要所で反応は示している。

常に感情を出すのではなく、場面によって使い分けているのだろう。

少なくとも、じゃが丸くんを求めに行く時の彼女の顔は、ティオナと同じくらい輝いていた。

「とりあえず、端から端まで、全種類下さい」

「あはははっ！

相変わらずだねアイズちゃん」

めちやくちや、輝いていた。

このオラリオにおいて、ファミリアの強さは随時更新される。

常日頃より鍛錬に励み、ダンジョンにて懸命に戦い、ランクを上げていくことで、ファミリアとしての強さは上がっていく。

冒険者のレベルは基本的に1が多い。

日々新しく冒険者となる者が後を絶えないが、同時になかなかランクアップ出来ない者が大半であるからだ。

ランクアップとは、「魂の器の昇華」のことであり、人としての領域から一步外れる存在となる。

ランクが上がることにより強さの枠は広がっていき、その力は以前のレベルから発揮されるものとは別物となる。

これに関しても、どうすれば上がるのかは個人よって異なる。

並外れた努力を重ねることはもちろんのことだが、それだけではランクは上がらない。

共通することがあるとすれば、皆一概に同じことを口にするだろう。

冒険をすること。

文字通り、命を張る局面に出くわすることでランクが上がるという説が有力だ。

過去にランクアップを果たした者によると、生きるか死ぬかの瀬戸際を迫られた強敵と対峙したから成し得たと語る者が多い。

ただ危険に直面すれば良いという訳ではない。

自身の分岐点となる戦いに直面し、これに立ち向かった者にこそ、更なる高みへの道は開ける。

ランクアップを果たせば周囲から向けられる視線は変わり、「二つ名」というその者だけの特別な称号が神より授与されるため、あらゆる思惑の元、皆日々自身を鍛えている。

レベルの高い冒険者が多く揃うファミリアこそ、街中からの注目度は高い。

個人のランクアップは、ファミリアにとつてのランクアップに直結する。

これにより、ファミリアに依頼される仕事の量と質は上がって行き、発言権も高くなっていく。

名前が売れば売れるほど、周囲から注目され、あらゆる交渉に対して優位性を持たせることができるのだ。

そして、少年の両脇にいる少女たちもまた、オラリオにおいて注目度が上がっているファミリアの眷属である。

その昔、世界そのものを意のままに掻き回し、悪戯に世界を破壊に追い込んだ存在。トリックスターの異名を世に轟かした、このオラリオにおいてもつと狡賢い女神。

「おかえりー!!」

もうアイズたん何処行つとつたん？

目え覚まして食堂行ったらアイズたんおらんもん。

ウチびつくりしてもーて、牛乳やなくて酒飲みそうになつたわ」

「それいつものことじゃん……」

「あ、暑苦しい……ロキ、離れて」

「そんな連れへんこと言わんといてえな。

ウチかて傷ついてまうわあ……って、おろ？

「その黒髪の子、だれ？」

オラリオにおいて、敵に回したくないうちの一神。

それがトリックスター、ロキである。

少年と大差ないほどに背は低く、子供のようなりをしている。

赤毛に糸目、テイオナ以上に天真爛漫な性格の女神。

悪巧みにおいて右に出るものはおらず、あらゆるものを悪戯に引つ掻き回す。

その規模は悪戯の枠を軽く凌駕し、世界そのものを破滅へ導きかけたこともある。

無闇矢鱈にちよつかいを掛ければ、何倍もの嫌がらせとなつて返ってくる。

故に、過去でも今でも神々の間で恐れられている存在。

その手腕を持つてして多くの有望な冒険者たちをスカウトし、短い間でファミリアの勢力を拡大させた。

特にお気に入りとされているのがアイズ・ヴァレンシユタイン。

見た目で一目惚れだったが、後に冒険者としての才能を開花。

類い稀な剣術から将来を期待される、ロキ・ファミリアのとおっておきである。

そんなロキも、人の親となり、日々共に生活していくことで以前よりかは大人しくなった。

誰彼構わず悪戯をすることはほぼなくなり、ひょうきんな性格が目立つ神となっていく。

代わりに可愛いものに対してのセクハラに目覚める。

本命はアイズではあるが、その他にも可愛いものに対してはちよっかいを掛け続ける。

ボデイツッチは当たり前。

気づけば胸や尻を触られているなど日常茶飯事。

堂々と自身のファミリアへ勧誘することもよくあることだ。

悪戯神の目が、少年を値踏みする。

その一瞥で全てを見透かす神眼には、誰であろうと逃れられるものではない。

「めっちゃかわええやん!？」

え、なに!?

ウチに勧誘しに連れてきてくれはったん!?

やっほー!

またかわええ子が増えるわ!

アンタ名前はなんてーの?

年は?

好きな子のタイプは?

休みの日は何してんの?

夜寝るとき服着る派?

それとも全裸派なん?」

「え、えつと……苦しい」

一言付け加えるとするれば、愛でる者は性別を問わない。

男であろうが女であろうが、可愛ければ徹底的に愛でる。

あらゆる意味で厄介な神なのだ。

「もうロキってば!」

勧誘のために連れてきたわけじゃないってば！

この子はアイズを助けてくれたの！

もう救世主と言っていいくらいの子なんだから」

「そう、私この子に救われた。」

絶望から救ってくれた恩人なの」

「おん……じん……？」

話が大きくなっていくことに戸惑いを隠せなく少年。

新商品のじゃが丸くんを譲っただけで、何やら救世主扱いにされている。

ロキは話を聞けば聞くほど目を丸くし、魚のように口をパクパクと開け閉めしている。

次第に少年に首を戻し、じつとこちらを見つめてくる。

糸目が一気に見開かれ、煌々と輝く赤い眼が少年を凝視する。

「……………ちよつと一回、抱いてもええ？」

「……………うえ？」

「言いわけないだろうがっ!!」

「ぎゃん!!」

突如とんでもないことを口走った神は、子の一撃により沈んだ。

学術書を慣れたように武器として扱うその姿に、少年は覚えがあった。

妖精の如き美貌と尖った耳。

薄緑色のロングヘアーを靡かせる者の心当たりは、記憶上一人しかいなかった。

「こんな形で再会するとは思わなかったが、また会えて何よりだ。

随分と待ったような気分だ。

だが、ようやく約束を果たせそうだよ

久々だな、ラジエル」

「あ、リアだ」

「え？」

まさか、リヴェリアの知り合い？」

長いようで短かったが、ようやく二人は再会を果たす。

薄暗いダンジョンで交わした約束を、リヴェリアはしっかりと覚えていた。

偶然にして、必然とも言えるこの再会は、彼女が待ち望んでいたもの。故に彼女は、ロキ・ファミリアを代表して挨拶する。

「ようこそ、ロキ・ファミリアがホーム、黄昏の館へ。

我が恩人よ、ファミリアを代表して、貴君を正式に我が家へ招待しよう」

第18話 少年、甘やかされる

「ラジエル、こっつち来て」

「うん。」

「うわあ……なんて言うか、すこいね」

黄昏の館は、端的に表せばとんでもなく豪華だった。

何から何までが高価なもので統一されているのが、嫌でも伝わるぐらい清掃と維持が行き届いていたからだ。

ランプや花瓶などといった小物をはじめ、あらゆるものが高級感を放っている。

吊り下げられたシャンデリア、どれだけ長いこと座つていようと苦にならなそうなお質な布をふんだんに使用したソファ、細部にまで装飾が施された大きなテーブル。

想像しているお金持ちの家をそのまま具現化したような様であった。

もちろん、そういったものに縁がない少年はあちこち目移りしてしまう。

初めてオラリオに来た時のように、自然と目や首が部屋中のあらゆるものに注目す

る。

まるで生きている世界が違う。

少年の第一印象はそんな感じだった。

「ふふーん、どやエルたん。

これがウチのホーム自慢の客間や。

どないなヤツが来ようと完璧にもてなす体制が整つとる。

ウチらかて、上位に食い込むファミリアやからな、これくらいはせなあかんわけよ。でもあんま氣い遣わんといて。

エルたんみたいな子にはそないな硬っ苦しいモンは必要あらへん。

自分ちみたいに寛ぎや。

何ならウチの膝の上に乗ったってええんやで？」

「う、うん、ありがとう口キさま。

おひぎの上はいいや。

エルたん……？」

「ぐはっ………！」

ストレートな拒否は胸にごつつ来るなあ……。

まあ、いずれメロメロにしたるから今はええか。

ゆつくりしたつてやあ。

今リヴェリアにお菓子と飲みモン取りに行つてもろてるからな。

それまでウチとお話してよーや」

アイズたちに案内されて通された客間は、はつきり言つてもものすごく居心地が悪い。自分にとつて縁もゆかりも無いものと長時間触れ合うのは、精神的に辛いものがある。

慣れてしまえばそこまでなのだが、自給自足の生活を送つてきた少年にとつて、この手のものに慣れる自信はない。

慣れるまで一ヶ月ほど時間を有しない限り無理だろう。

ものの数分で復活したロキは、何事も無かつたかのようにラジエルをもてなす。頭頂部が先程より盛り上がっているが、気のせいなのだろうか。

「いいよ、と言つても何話せばいいのかな？」

「ああん、そんな難しく考へんでええ。

ウチみたいに思つたことそのまま口に出したらええねん。

エルたん可愛ええとか、ナデナデさせてーとか、※※※させてーとか、※※※で※※※※※しよーとかそんなんでオツケーや」

「むう？」

ロキさま、何を言っているのかわからないよ。

俺はおとこだよ？」

「何を言うてんねん、そんなもん最初から分かつてるわ。

性別なんて何だつてええ。

可愛ければ何でも万事解決や。

自然の法則で昔っから決まっとる。

今は分からなくてええよ、ウチがこれからみっちりねつとり、他のことなんて何も気にならんようメロンメロンにしたるだけの話。

だいじよぶだいじよぶ！

何も考えずにウチに全部任せたらええねん！」

「そうか、ではまた何も考えられずに大好きな床と熱い抱擁でもするか？」

ロキが分かつてくれるまで、私は何度だつて恋のキューピットになってやろう」

「さ、エルたん。」

冗談はこの辺りにしとこか」

お盆を手にしたリヴェリアが、ロキに対して釘を刺す。

反応を百八十度変えたロキは、徐ろに話題を変えにかかる。

よく見ずとも、その頬には汗が流れていた。

ロキファミリアの中で、リヴェリアはなかなか上位の立ち位置だそうだ。

あらゆる意味で上位なのだろう。

「まったく、子どもに向かって卑猥な言葉は控えないか。

お前のせいでラジエルが悪い影響でも受けたらどうする。

訴訟ものだぞ？

裁判前に有罪確定だぞ？」

「んもう、いつにも増してリヴェリアさんはママやなあ。

そんな過保護にならんと、ありのままの世の中を知っていったらええやんか。

何でも吸収できる年頃なんやから」

「誰がママだ。

それに、そんなものが蔓延っている世界があるままなら、私はとつくにこの世界を滅ぼしている。

頼むから、一日五分でいいから真面目になれ。

客人以前に、彼は私の命の恩人なんだからな」

「ラジエル、何食べる？」

全種類買ってきたから、何でも言つて？」

「なら私からのオススメをおせーてあげる。

最初は甘いものよりご飯感出るもの食べた方がいいと思うよ。

つてな訳でテイオナちゃんおすすめはレモンペッパー！

さっぱりしてて何個でもいけちゃうぐらい美味しいから食べてみて！」

「じゃあ、それもらおーかな」

「へーいへい、すんませんしたあ。

にしてもこの子がそうだったんか。

いや話には聞いたつたけど、予想以上にお子様やな。

ホンマにインファント・ドラゴンを一発でのしてもうたんか？」

「ああ、ロキも確認しただろう？」

私は嘘偽りは言つてない。

それこそ、ありのままというやつだな」

「ほおーん、この子が、なあ……」

「あ、美味しい」

「でしょ?」

神に対して、嘘をつくことは出来ない。

これは特殊な能力といったものではなく、神であれば誰もが最初から有している当たり前の力のようなものだ。

その者がついている虚偽の内容を完全に看破することは出来ないが、嘘をついているということのみを見破ることが出来る。

どんな歴戦の強者であろうと大賢者であろうと、絶対的存在である神を前にすれば、どんな嘘も通用しない。

主神は、子どもたちに関して基本詮索はしない。

子どもたちにもプライバシーがあるため、ロキもその辺はある程度弁えている。リヴェリアがたつた一人で探索から帰ってきた際、事の詳細は聞いていた。

もちろん嘘偽りは感じ取れなかった。

だからこそ、余計気になっていた。

新米にして、Lv. 1の冒険者がインファント・ドラゴンを一撃で葬ったなど、娯楽に飢えている神が気にならない訳がない。

「(リヴェリアがあれ程言うんやから間違いはないはずなんやが……やつぱ直接この目で見てみたいわなあ。

どんなカラクリがあるにせよ、この子は一発で上層の階層主をぶっ飛ばした。嘘やないから疑ってる訳やないんやけど……うーん、どうしたモンかな)」

一言で言えば、非常に気になる。

疲労困憊でまともに戦闘出来なかつたとはいえ、曲がりなりにもリヴェリアを守り抜き、彼女の目の前で驚異を一蹴してみせた。

事実上上層の階層主をただの一撃でだ。

あまつさえ、武器の類は一切使用していない。

徒手格闘において、インファント・ドラゴン相手に圧倒的な力量を見せつけた。

ましてや、ロキファミアの随一の知識と魔法力を誇るトップ3のうちの一人にここまで言わしめたのだ。

当然どれほどの力の持ち主なのかは気になる。

こういった者の謎は、深まれば深まるほど面白い。

調べた末に、イカサマ等でない事実であった時こそ尚更興味深い。

ロキファミリアの団長であれば、さぞ食い気味に勧誘しているだろう。あれは団員一合理的な男だ。

このファミリアをより強くし、より強い権限を持てる為なら手段を選ばない。どこまでもこの少年に対して強いアプローチを掛ける。ある意味一途な団長なのだ。

「……はあ、私ごとやかく言ったところで、今更考えが変わるヤツではないか」
「ごめんでリヴェリアたん！

ウチもちよつとだけ自制するから、そんなにむくれんといてーな。

可愛い顔が台無しになるで？」

「ふん、もうそういう台詞は聞き飽きた。

待たせたなラジエル。

お前の好みがよく分からなかったから、とりあえずジュースを持ってきた。

それと、じゃが丸くんだけでは流石に飽きるだろう。

今朝焼いたクッキーとマフィンをご馳走しよう。

遠慮はするな、食べ物くらいいつだって振舞ってやる」

「おおう！

いつにも増して豪華なお茶会じゃん！

どっかのお偉いさんが来てもこんなにいいもの出さなかったよね？」

「彼らにも相応のものは差し出している。

言っただろう？」

ラジエルは私の命の恩人だ。

これくらいのお礼は当然だろう。

むしろ、これっぽっちじゃ足りなさすぎるくらいだ」

「っていうか、他のお客に出すものみんな買ってきたお菓子じゃん……。

こんなに手作り感満載じゃなかったよ……。

普段以上に気合入りすぎてない……？」

「ん、どうしたティオナ？」

いつもより大人しいな。

体調でも悪いのか？」

「ウチも、何となく察したわ」

「うん？まあいいか。

あ、こらラジエル、お前まだ手洗いとうがいを済ませてないじゃないか。

済ませるまでお菓子とじやが丸くんはおあずけだ。

ラジエル、アイズとティオナに洗面所まで案内してもらえ」

「はいはい。」

アイズ、ラジエル行こ」

「早く食べたい、すぐ洗いに行こう」

「アイズ、ちゃんと洗わないとダメだよ？」

手はしっかりと洗ってししよーも言ってた」

「たはは……ホンマ、おかん言われてもしやーないわ」

だが、それがリヴェリアという女性なのだ。

口では不満を漏らすことはあれど、本心では心配が離れないのだ。

故に、近しい者に対してはどこまでも世話を焼く。

お人好しで、心配性で、お節介で、口煩い。

でもそれ以上に、誰よりも強くて優しい。

流れるように小言を言ってしまうのも、その人を案じているが故に出るもの。

自分より誰かを優先しているからこそ、他人の世話をよく焼き、よく自分を困らせる。

もしかしたら彼女は、静かなところより、こうして日々喧騒が絶えない場所の方が合っているのかもしれない。

本人は断固として否定するだろうが。

「はあ、本当に……世話の焼ける子達ばかりだよ」

リヴェリアがため息を漏らすのはいつものこと。

いつだって、こうして家族を眺めては頬杖をついて項垂れている。

だが、そこにはいつもと同じ表情は見当たらない。

誰も気づかないような彼女の表情の機微。

親であるロキが見逃すはずはない。

そこには、いつもと違う優しい微笑みが浮かんでいたのだから。

リヴェリアを筆頭に行われたもてなしは、とても心地の良いものだった。

顔見知りの仲ということもあるが、それにしてもこの待遇はすごい。

アイズが買ってくれたじゃが丸くん、程よく冷えたジュース、手作りの焼き菓子。

やや行き過ぎな件も否めないが。

時間が経つに連れて、ロキたちのお陰で大分緊張が解れた。対してリヴェリアは、見果てぬ目的地に向かって爆走中であつた。

「どうだ、ラジエル？」

その……お味の方は？」

「うん、すごく美味しいよ。」

こんなの今まで食べたことないなあ。

お店出せるくらいおいしいよ」

「そ、そうか！」

あ、いや……んんっ！

口にあつたようで何よりだ。

まあ、なんだ、焼き菓子程度で満足されても困るな。

ラジエル、どうせなら昼食も一緒にどうだ？」

お前さえ良ければなんだが……」

「ねえ、アレ誰？」

ホントに私たちの知ってるリヴェリアなの？

私にはほとんど別人に見えるんだけど。

変身魔法使って化けてる別人に見えるんだけど」

「うん、リヴェリア、いつもと全然違うね。」

「……ロキ？」

「ぶほお……！」

あ、あかんあかん、鼻血出てもーた。

え、何？アイズたんなんか言うた？」

「めっちゃ興奮してんじゃない。」

普段見ないリヴェリアにアドレナリンとか色々出まくってるじゃん。

いや、気持ちは分からないでもないんだけど……」

彼女を知る者からすれば皆一様に答えただろう。

あれは本当に本人による反応なのだろうか。

いつもガミガミと怒っている印象が強いため、余りのギャップに3人は困惑していた。

ロキに至っては鼻血を出すほど興奮しており、二人のやりとりを引くほど凝視している。

主神程ではないが、アイズとテイオナも戸惑っている。

かつてないほど、リヴェリアは舞い上がっていたのだ。

「ホント？」

「リアがご飯作ってくれるの？」

「あ、ああもちろんだ！」

「お前が食べていくというのなら腕に寄りをかけて作るとも。

「何が食べたいんだ？」

「どーしよーかな。」

「あ、じゃあオムライスがいいな」

「……っははははは！」

「オムライスか、ああもちろんいいとも。」

「お前が食べたことのないような美味しいオムライスを作ろう」

「ねえ、もうホントにアレ誰なの？」

「少なくとも私にはあんな反応されたことないんだけど」

「リヴェリア、すごい嬉しそう」

「あかん、ティッシュなくなりそうや」

三人の目に映るは完全に甘やかしの母そのもの。見ていてとてもむず痒い気持ちを感じる。

悪化すればお金すら渡しそうになる勢いである。

リヴェリアは、将来結婚する相手は慎重に選んだ方がいいだろう。

相手に対して完全に虜になってしまうと、持ち前のおもてなしの精神が全面に出てしまう。

子どもであるラジエルが決して悪い訳では無いが、悪い男に引つかかった場合どのような結末が待ち構えるのかは何となく想像がついてしまう。

恋仲になる相手は、自分たちももしかかりと吟味して判断すべきと誓う三人なのであった。

「ジュースのお代わりはどうだラジエル？」

焼き菓子もまだまだ沢山あるぞ？

何なら新しく焼いてきてもいいぞ？

む、口周りが汚れているな。

そのまま動くなよ……つと、キレイになった。

どうだ、私にして欲しいことがあつたら何でも言うんだぞ？」

「ありがとうリア。」

「じゃあ、ジュースちよーだい？」

「ああ、任せておけ。」

他にも何かつまめるものがあれば取ってくるとしよう」

「……お母さんっ!!」

「テイオナ、しつかり」

「……これがリヴェリアたんの、ギャップ萌え…か。」

「……ふっ！」

「ああ、ロキまでおかしくなっちゃった」

一つ言えるとすれば、ロキファミリアはいつも以上に平和だ。

実に騒がしく、充実した穏やかな日であった。

忙しく喜んではいしゃぎ回る姿は、皆子ども時代に戻った様。

これもラジエルの成せる力なのだろう。

一度全てを取りこぼしたとはいえ、グリモア魔導書による精神干渉から何かを取り戻しつつは

あるようだ。

「そういえばさ、なんでラジくんは一人でじゃが丸くんなんて買ったの？」

「テイオナ、今の発言は、聞き逃せない。」

じゃが丸くんは「なんか」じゃない。

あれば全ての人を救う最高の食べ物。

世界にとって、掛け替えのないものなんだよ」

「うわわこめんって！」

そんなつもりじゃなかったんだよ！

アイズホント、じゃが丸くんのことになると目の色変わりすぎてすごい心臓に悪い

…。

それで、どうして一人だったの？

リヴェリアからある程度聞いてはいるけど、ラジくんも冒険者なんでしょ？

それもこの街に来て日の浅いしき」

「お、テイオナにしては鋭い読みやな」

「私にしてはって何さ！」

「うん、まあ…何か皆からステイタスコーしんからずっと話しかけられて、ちよつと居づらくなったから出てきちゃった」

「ステイタス更新で？」

それで騒ぐってことは、よっぽど上がったんだね！

おめでとう！」

「そー…なのかなあ。

あてな様はそー言ってたけど」

「おん、アテナ？

アイツ下界に来とったんか？

それはウチも知らなかったなあ」

「ロキ知ってるの？」

「アテナだけはな。

ファミリア立ち上げたのは知らなかったわ。

にしても…アイツが人の親に、かあ。

ウチも他人のこと言えんけど、なんや意外やなあ」

感慨深そうにロキはそう呟いた。

ファミリアを立ち上げることは比較的容易ではあるが、そこに踏み切るまでと、その関係を維持することは難しい。

神によっても様々ではあるが、面倒くさがりの神は傍観に徹し、進んで下界に干渉す

ることは少ない。

かく言うロキも、当初は気紛れにファミリアを立ち上げた。

子どもたちと触れ合い、共に時間を共有していくことで特別な感情を芽生えさせてきた。

今では自分の命以上に大切な光となった。

「アテナは一言で言えばアレやな、堅物キャラやな」

「かたぶつつて何？」

「分かりやすくゆーとやな、めっちゃ真面目っていうこつちや。

とにかく真面目でな、ルールに反することは何があつても曲げん奴なんや。

時間通り行動せえへんと機嫌悪くなるみたいな感じで理解しとけばええ。

そういう話でもゆーと昔な、うちがちよーつとお尻触った程度でめつちや怒られたんよ。

何であんな真面目なんやろな。

もうちよい肩の力抜かんとしんどいやろ、あれ」

「いやそれ普通の反応じゃない…？」

「全然真面目カンケーないし」

「ふーん、 そうなんだ」

「まあ、 何にせよ悪いやつじゃない。

それだけはウチが保証したるわ」

アテナはロキと旧知の仲のようだ。

セクハラ等の問題で目の上の敵にされているようだが、ロキ本人は嫌ってはいない。恐らく、アテナも内心嫌いではないのだろう。

ロキという神に対する反応は、どの生物も似通っている。

鬱陶しいが、嫌悪するほどではない。

可愛く表現すればイタズラ好きな子どもと同じ。

ロキを知る者の大半は彼女の性格を分かっているため、あからさまに邪険した態度を取ることには無い。

寧ろまたか、といったような反応をされるため、最近は対応を流されることが多くなつた。

決して、心底疎まれていることはないと言っておこう。

「へえー、 神様にも色々あるんだね」

「うん、私もロキから他の神様の話、あんまり聞いたことない」

「どいつもこいつも話すのも面倒になるぐらい長い時間近くにおったからな。」

意識せえへんと話題に上がらんのや。

何も変わらん神より、何にでも変われる子どもたちに目え向けた方がよっぽおもしろいやん。

今ウチの本命はお前らや。

他はぜーんぶ二の次でええねん」

カラカラと笑いながら、ロキはそう言った。

それは、疑いようもないほどに真っ直ぐにこちらに向けた賛辞であるからだ。

昔のように誰彼構わず悪戯する神ではない。

永劫不変の神でも、人に接することで変わることが出来る。

神は変わらないとロキは言ったが、それは必ずしも本心ではないし、全ての神に向けて発言したことではないのだ。

変わる気がある者であるならば、在り方は変わらずとも変化を生み出すことが出来る。

ロキのように神ですら変われるのだから、子どもたちだって必ず変われる。

大事なことは伏せ、考えさせるのが神として、親としての役割。その行く末を見届けるのが、主神であるロキの務めなのだ。

「他の神様の話もそれはそれで気になるけど……ねえ、ラジくん。

私にちよーつと試させてくれない？」

「ためす？」

「何をすればいいの？」

「簡単なことだよ？」

「今から私と勝負して！」

「テイオナ、また悪い癖」

「まあ、こればかりはしゃーないな。

正直なところ、ウチも興味あるしええやん？」

「うん？」

「手合わせすればいいの？」

「そう！」

リヴェリアが言うくらいだから、君はすんごく強いんだよね？

潜ったばっかでインフアント・ドラゴン倒しちゃうなんて、広まったら大注目間違い

なしなんだから！

そんな子と戦いたくないわけなんてない。

つてことで、ラジくん。

私と手合わせ、してくれるよね？」

風向きが、変わりつつある。

彼女はリヴェリアから聞いた。

インファント・ドラゴンを素手で倒す子どもがいたと。

信じられないと思いつつも、内心は少し期待していた。

どうい子なんだろう。

どれほど強いだろう。

どんな戦いをするのだろう。

考えれば考えるほど、ティオナは昂りを感じてしまった。

しかも今日、目の前に件の子がいる。

試してみたくて仕方ない。

正体不明のこの少年が、一体どこまで自分を楽しませてくれるのか、楽しみで仕方ない。

「ごめんね、でも……私ちよつと……ガマンできそうにない」
「……ティオナ？」

彼女はティオナ・ヒリュテ。

L.V. 2にして前線を任された女性のアタッカー。

性別が女性で、特徴的である黒い肌を持ち、強靱でしなやかな肉体を有する。

戦闘^{アマゾネス}民族の一人がティオナだ。

その引き締まった肉体は子どももの身にそぐわず、大人の女性に引けを取らないほどに美しい線を持つ。

アマゾネスとして生まれた者は、優れた身体と身体能力を持って、自らの伴侶として相応しい雄を求めて戦い続ける。

だが、彼女たちは戦うことでしか生きる意味を見い出せない。

戦うことでしか愛も感じる事が出来ない。

血が騒ぎ出す。

ティオナの中にあるアマゾネスとしての闘争本能が疼きだしていく。

ここまで抑え込んできたのに、意識するに連れて本能に逆らえなくなってしまう。

最早自分では止められない。

発情に似た甘い空気を垂れ流し、蕩けた眼で少年を見つめる。

見ているだけで息は勝手に乱れ、顔も身体も炎のように熱くなり、今にも飛びかからんとする身体を、最後の理性を振り絞って耐えている。

「ちよつと……だけだから。

お願い、ほんの少しでいいの。

熱くて暑くてたまらない……。

ねえラジくん、キミなら……きつと私を満足させてくれると思うんだあ……。

私と、やろうよ……ね？」

第19話 少年、心を溶かす

生物において、最も萎縮してしまう状況とは何だろうか。
自身にとつて恐れを抱くものに遭遇したこと。

トラウマを刺激されかねない出来事に出くわしたこと。

他人から感情剥き出しで怒りを向けられること。

どれも間違つてはいない。

間違つてはいないが、どれも対処が出来る。

恐れるものやトラウマは、言つてしまえば克服が可能だ。

時間と場数さえ踏めば乗り越えることができ、自分の成長に繋がる。

叱られることは、時として避けることは出来ない。

しかし、やつてはならないことを知り、学ぶことでそういった場面を回避することが出来る。

では、その最たるものは一体何なのか。

「ねえねえ！」

リヴェリア早く始めてよお！

こんな待ちぼうけなんてあんまり！

身体が熱くて暑くておかしくなりそうの！

早くやらせてえ……！」

「私が少し目を離れた際に、何が一体どうなったというのだ……」

即ち、捕食者に出会うことである。

自身を喰らうもの、身ぐるみを剥ぎに掛かるものでもいい。

地力の差が歴然で、どんなに抵抗しようと最終的には一方的に蹂躪されてしまう相手に対し、生物はその身を疎ませてしまう。

結果の予測が容易なほどつまらないものはないが、それが命のやり取りとなれば話はいくらでも変わってくる。

Lvの差は1であろうと、そこには埋めようのない1の差が存在する。

純粹に、ステータスに差があるのだ。

火照る身体を抱き締め、襲いかかりそうになる足を必死で抑え込むティオナ。それに対し、涼しい顔で対峙するラジエル。

誰かがヒートアップしよう、決して波風を立てない。

武道において共通するのが不動の心得。

奇しくもそれを体現してしまっているのが何とも歯痒い。

その年で身につけるべき才ではないというのに。

「(落ち着いとるなあ。

ビビつとるよーには見えへんし、かといつて萎縮しとる訳やない。

ましてや余裕ぶっこいとるつもりにも見えへんな。

ウチに来てから何も変化してへんやんか。

うーん……なんか引つかかるわあ)」

彼には、一切の凄みの類は通用しない。

感情抑制による、擬似的な明鏡止水の境地に到れるため、滅多なことが起きない限り

その心は揺れない。

全てはいつも通りに、いつも以上の動きを実現させることだけに尽力する。

どんな相手であろうとも負ける訳にはいかない。

遥か高みにいる彼を越えるまでは、負けることは許されない。

まだ、彼の足元すら見えていないのだから。

「はあ……ティオナがこうなってしまった以上、適度に動かして発散させる他ないか。

ラジエル、本当に相手してもらっていいののか？

怪我云々は私が治すからいいとしても、こんな面倒なことになってしまった」

「うん、全然だいじょぶだよ。

俺もきようはまだ体動かしてないし。

相手してくれるってゆーならだいかん……だいがん……う？」

「大歓迎、だな。

今日は勉強を教えようと思っていたのだが……まあ焦ることもないか。

分かった分かった。

分かったから抗議の目を向けるなティオナ。

これより双方合意の元、手合せを行う。

熱意あれども殺意は要らず、殺す気で挑むな。

互いに胸を借りるつもりで尽くすこと」

「うんうん、わかってるわかってる……。

ちよつとだけ、ちよつとだけだから」

「……………」

「……………いいだろう。

では、いぎ尋常に」

対峙する二人の間に一陣の風が吹く。

戦いを急かす様に、野次を飛ばすように強引に両者の身体を撫でる。

しかし、両者には両者の姿しか見えていない。

他のことなど眼中になく、開始の合図を今か今かと待ち侘びる。

どちらにせよ、初めて対する相手。

どのような立ち回りをするのか、どのような駆け引きを仕掛けてくるのか楽しみで仕方ない。

そんな子ども特有の待ちきれない雰囲気、二人を見守る三人には嫌というほど伝わった。

秘められた熱が溢れ出し、絶え間なく牽制を続ける。

紛れもない臨戦態勢だ。

膨らんだ緊張感に針を落とすように、リヴェリアの手が下される。

「始めっ!!」

「ううあああああああ!!」

合図とともにテイオナが爆ぜる。

元より爆発寸前だった彼女は、導火線の火が火薬に届いたかのように弾けた。

地面を抉るように踏みしめた足は、一息で少年に接近する。

振るわれるは、右の力任せの振り落とし。

型も軌道もあつたものではないが、それを覆い尽くしてしまうほどのパワーがそこにはあつた。

その様は、まるで巨大な槌が杭を打ち込むが如く。

ただの一撃でクレーターを作り出してしまうほどに強力だ。

か細い体からは想像できないほどの剛力が、鉄槌となつて少年に振るわれ、地が弾け飛ぶ。

視界を埋め尽くすほど舞い上がった土煙が、リヴェリアの不安を逆撫でしていく。

「……………っ!!」

あのバカ、私の忠告を聞いていなかったのか……………!!

いくら戦闘に対して一日の長がラジエルにはあるとは言え、あの子はまだLv. 1なんだぞ!

加減を誤れば怪我で取まるものではなくなってしまう!」

「まあまあ、そうカッコしなさんな。」

リヴェリア、お前エルたんの動き見とんのやる?

ならそない心配せえへんでもええやんか」

「何を呑気なこと……!」

ステイタスの差は歴然、経験で捌けてたとしても数分と持たない!

あの時はモンスターだったから倒せたのかもしれないが、今回は対人戦だぞ!

我を忘れかけているとはいえ、あのティオナ相手にそんな無茶が!」

「ホンマにそう見えるか?

アイズたん」

「……………大丈夫、だと思おうよ」

「アイズ、お前まで一体何を……………まさか」

相手が誰であろうと、少年には関係のない話。

初撃の破壊力には目を見張るものがあつたが、実際それまでだ。

力の強さだけなら簡単に伸ばせる。

何でも粉碎するほどの力は、純粹に時間を掛ければ手に入る。

しつかりと食事をして、しつかりと休息を取って、しつかりと鍛錬すれば誰でも身に

つけられる。

だが、技術だけは別だ。

足の動かし方から筋肉の回し方等は、時間を掛ければ手に入るといふものではない。

試行錯誤を重ね、手足を動かすように身体に対して染み込ませて、ようやく技として

成立する。

例えば、少年が左半身を少し後退させただけで鉄槌を回避したように。

「当たって……ない？」

ま、まさか、いくら何でもLv. 1のステータスの数値で反応しきれるはずがない。

完全に知覚できない一撃だったはず……」

「……………すいこ」

早い相手ならもう見飽きている。

自分が一体、何年格上の大人相手に鍛錬を続けてきたと思っっている。

ステイタスという概念が存在していなければ、あの猛者にすら匹敵する力を、数え切れないほど目の当たりにしてきた。

——こんなことで根を上げる、なんて言いませぬよね？

師匠は、少年をここまで叩き上げてくれた。

身体的にも精神的にも、大人すら置き去りにするように育てられた。

誰が相手であろうが、決して引けを取らない戦法を、決して折れない心を学んだ。鍛錬に没頭し続けた成果が、どんな状況であろうと変わらず発揮される。

それは、飽くなき向上心から練り上げられた自分だけの高み。

相手が格上であればあるほど、少年の中に確立された武がより一層際立つ。

「っ……まだまだあ!!!!」

迫り来る無数の殴打。

技量こそないが、その差を埋めるように速く、重い連撃を繰り出すティオナ。

L.v. 2のステイタスから発揮される力なら、一撃で建物を揺らがせるほどとなり、数度殴れば半壊させてしまう。

例えるなら巨大な獣の突進。

一切の牽制を含めない純粹無垢な戦法は、見ていてとても真つ直ぐだった。

故に、読みやすい。

駆け引きを行わないとなれば、後は本能のままに戦うしかない。

確かにティオナとステイタスの差は歴然だ。

これまでダンジョンに潜ってきた数が違いすぎる。

だが、事戦闘となれば話は別。

少年は命の駆け引きだけでなく、相手を倒す術と生き残る力を身につけてきた。

それは極めて合理的に、計画的に仕留める古来の技法。

力で押し負かすのではない、圧倒的身体能力で圧倒するのでもない。

人だからこそ積み上げられる技を、長い時間を掛けて磨き続けたのだ。

だからこそ、相手の挙動一つひとつで次にどういった行動を取るのかよく分かる。

少年の目には、テイオナが起こす行動の可能性が見えている。

予測して躲す。

予測して捌く。

予知して去なす。

予期して流す。

予見して受ける。

どんなに力を振るおうと、テイオナの力は少年に届かない。

腕の防御を崩そうとしても、身体を半回転させられて流される。

衝撃が全て伝わりきる前に外へ逃がされる。

いとも簡単に、拳が掌で止められる。

攻撃が別の方向へ導かれる。

こちらの攻撃を出し切る前に、防御が置かれている。

そして、それは回数を重ねる度に多くなり、次第に少年から遠ざかっていく。

当たっているのに当たっている気がしない。

不快だ。

身体がまるで空回りしているようだ。

イライラする。

自分の方がLvが上なのに圧倒できない。

面白くない。

動きが全て先読みされている。

つまらない。

自分がどこに拳を振るっているのか分からなくなる。

ひどく、不愉快だ。

「なんで……なんで……!!」

なんで、当たらないのっ!!」

「うん、やっぱりするこい。

彼、テイオナの動き、全部読んでは。

攻撃がまるで、打ち合わせしたように、捌かれてる。

動作に無駄が、全くない」

「(ま)までとは……。」

Lvの差が、全くと言っていいほど感じられん」

「(……うーん、見れば見るほど欲しいわあ)」

「なんで、なんでなんでなんでなんでなんでなんでっ
!!!!!!」

テイオナの苛立ちが、徐々に悲しみに変わっていく。

想像していなかったからだ。

力任せとはいえ、Lv. 2の冒険者である自分の攻撃が通用しないなんて、考えたこともなかった。

この街に来てひと月も経っていない少年が、自分の攻めを苦もなく捌いていく。

まるで理解できない。

魔術か妖術の類でも受けていると言ってくればまだ納得する。

だが、その手の類が使われた形跡も気配もない。

だからこそ、尚更理解できないのだ。

「遅いよ」

「なっ……!」

連撃が、次第に力を乗せられなくなっていく。

焦る気持ちだが前面に出すぎているため、身体の軸が振れる。

殴打一つひとつに腰が入っていかず、動きが散漫で滅茶苦茶だ。ここでラジエルが、初めて攻撃に転じる。

少年は、オツタルとの戦いで何が悪かったのかを徹底的に考察した。確かに序盤は押されまいと踏み止まろうとしたが、後半は勢いに押され、拳句の果てに押し切られた。

大きな反省点は、猛者の攻撃に見てから反応してしまっていたのだ。

次の一手を読めていない。

あれほどの手練相手なら、攻撃を見てから反応するのは遅すぎる。

筋肉の機微一つで、直ぐ様次の行動の可能性を予測しなければならぬ。

故に少年は学んだ。

学んだが故に、今回の手合わせで実行しようと考えた。

攻めも大事だが、それに転じる過程も大切だ。

だからこそ防御と回避に主軸を置き、相手の行動を予測することに徹した。

そう、攻撃がうまく通らなければ相手は次第に怒りを募らせる。

怒りは力を引き出すが、代償として理性を飛ばす。

動きが雑になり、無駄な箇所力を入れやすくなってしまう。

それこそが、自分が攻撃に転じるために必要な隙だ。

隙は出るのを待つのではなく、自身で作り出すものなのだ。

ティオナの攻撃を躲しては防ぎ、防御に専念して少年は理解した。この前進こそ、高みへ上り詰めるための一歩であると。

「シッ！」

「うあっ!!」

左右への手刀の切り払いが、ティオナの攻防を諸共に崩す。

間髪入れず攻撃に転じていたティオナが、一瞬無防備になる。

そこへ少年の掌底が、容赦なく鳩尾へ打ち込まれる。

防御が完全に間に合わなくなった胴に、痛烈な一撃が入った。

苦痛で顔が歪み、胃の底から嗚咽感が込み上がる。

眼には涙が溜まり、視界がぼやけて霞みかかる。

たった一撃で、致命的な状況に追い込まれてしまった。

力で圧倒しようとしていたティオナは、ようやく自身の愚かさを嘆いた。

理性を振り切つて戦うなど自殺行為。

そして何より、相手に対してとても無礼に値する行為であつたと。

「これで、おわり」

「ま、待てラジエ——」

膝から崩れ落ちていくテイオナは、迫り来るモノにようやく恐怖を感じた。

まともな状態で落ちていければ、何も感じずに済んだものを。

掌底からの迫撃が連なる。

居合抜きを彷彿とさせる納刀に似た拳の引き絞り。

腰が上下せず、そのまま水平に拳だけが前に突き出される。

その動作はとても滑らかで、一切の窮屈さを感じさせない。

ただ、その余りにも美しい流れが、同時に恐怖を濃縮させる。

まるで躊躇いなく人に抜き身の刃を差し向けるように冷淡。

顔色一つ変えず、ただの一撃で命を攫いかねない彼は、見ていてとても似つかわしくない。

年相応に思えないからだ。

理性が戻って、ようやく感じ取ることができた。

自分と変わらない年齢の子が、Lvの概念を覆すほどに鍛錬を積み重ねていたなん

て。

きっと自分は、目に見える力にのみ頼りすぎていたのだろう。

先程までの醜態を見れば明らかだ。

後先考えず、悪戯に力を振り回し、強くなっていると錯覚していた。

それは、大きな誤りだ。

力が強い者が強いのではない、力を求め続ける者が強いのだ。

今の現状に決して満足せず、常にその先にあるものに対して手を伸ばし続ける。

少年の姿を見れば一目瞭然だった。

彼は力を求め続けている。

慢心せず、愚直に果てしないその先を見据え、日々足を前に動かす。

Lvが一つ上がって舞い上がっていた自分とはまるで違う。

「でも」

「……………っ」

唇を噛み締める。

それでも、テイオナにも譲れないものがあつたから。

今の今まで戦い続けてきたのは、決して周囲に自分の力を誇示したい訳じゃない。たつた一人の肉親である、姉とともにこの腐った世界を生き抜くためだ。

何の力もなかった昔とは違う。

下卑た視線を絶えず向けかけてくる下衆共に怯えていた昔とは違う。

女だからといって舐められていた昔とは違う。

絶対に生き抜いて、幸せを享受し、生涯を費やして家族とともに終わりたい。

ただそれだけを糧にして、命を掛けた戦いを続けてここまで力を伸ばしてきた。

「ない」

眼に光が戻り始める。

確かに、今日まで絶やさず鍛錬を続けてきた彼には及ばないかもしれない。

自分が今まで蔑ろにしてきた技術では、彼には届かないだろう。

それでも、今まで培ってきたこの力は、思いは、願いだけは嘘じゃない。

自分が本当に心の底から求めていたものだけは、偽りなんかじゃない。

自分のこの熱い思いは、ラジエルにだって負けてない。

「けられない」

「……………ティオナ」

緩みきった気を引き締める。

自分にだって、誰にも譲れないものがある。

例え多くの人に比べて、それが劣っていようと。

絶対に曲げられない思いがある。

「必ず幸せに死んでやる」という気持ちだけは、誰にだって負けてない。目の前の少年が、自分には届かない高みに居たとしても。

「私だって、負けられないんだからあああああ！」

声高らかに叫ぶ。

最初に纏わりついていた邪な思念は、最早見る影もない。

そこにあるのは、ただ夢に向かつて走り続けている少女のものであった。

穢れが徐々に霧散していき、テイオナ本来の輝きが映し出される。

闘争本能に打ち勝ち、自分の気持ちに素直になることができた、彼女だけの光。

少年は、最初から気づいていた。

彼女はとても純粹で、真つ直ぐで、周りに光を与えられるような存在だ。

それはきつと、本当の光のように敵味方関係なく照らし出し、優しく包み込んでくれるような美しいものなのだろう。

迷いのなくなったあの瞳を見ればすぐに理解できる。

きつと、もう自分の醜い心に負けることなんてないと思わせてくれる輝きであると。

弱さを受け入れて、自分と向き合ったテイオナは、さつきまでとはまるで別人の顔つき。

崩れ落ちそうになった両足に活をいれて、寸でのところでラジエルの拳を受け止める。

淀みが消えたその瞳は、彼女本来の純粹な心を映し出す。

邪念を振り払った、彼女本来の力が輝き出す。

「ふっ、はっ、やああ!!」

最初とは比べるまでもないほどに迷いがなく、キレが増している。

余計な雑念が消えて、目の前の少年に対して集中できている。

今この場において見るべきは互いだけ。

他に見るべきものなど何も無い。

例えラジエルに自分の攻撃が通らなくても、持てる力を出し切りたい。

気持ちが悪くほど改められようとも、戦況が覆ることはない。

先の一撃が急所を突いていたため、息の乱れが戻らず、動悸が激しい。

身体に力が入らなくなり、手足が震えてくる。

内蔵がズキズキと痛み出し、休息と治療を要求して疼きだす。

相も変わらず攻撃はまともに当たらず、全てが完全に防がれる。

「くっ………あははっ」

なのに、明るい笑みが零れて止まない。

真つ直ぐな心で立ち会うことが、こんなにも心地いいものだとは知りもしなかった。この時間がとても楽しい。

いつまでもこうしていたい。

不躰ながらも、ティオナはそんな感情を抱いてしまっていた。

まだ終わらせたくない。

弱音を上げる身体に鞭を打って、限界まで動き続ける。

互いの距離はいつの間にか、限りなく零に近い距離で鏝迫り合いになっていた。思わずティオナは思いの丈を独白する。

「ごめんね、ラジエル。

私、心のどこかでキミを下に見てたのかもしれない。

Lvが全てっていう間違った考えが、キミに対してすごく悪い見方をしてた。

でも、さっきの一発で目が覚めたよ。

私は本当に間違った考えをして、キミに酷いことをしてたんだって。

見下して、自分は違うって思い込んで、中途半端な力で舞い上がった。

本当にごめん……。

自分勝手かも知れないけど……うん、すぐに自分で気づけてよかった。

だって、キミに嫌われたくないからね！」

「……………」

少年は、黙してティオナの気持ちを受け止める。

彼女の心からの告白を、ただ眼を見つめてじつと聞いていた。

こちらの心を、優しく温かく照らしてくれる光を感じながら、ラジエルは彼女を見つめた。

残念ながら、沸き上がってくる感情はない。

それでも、確かに響くものがある。

眼に見えて触れられるものではなくて、眼を閉じて感じれば傍にあるような曖昧なもの。

曖昧ではあるが、確かに自分の内に感じられるもの。

それをティオナが教えてくれた。

悪しき思惑から始まったこの機会が、結果的には掛け替えのないものを自覚させてくれたのだ。

「えへへ…………ラジエルは強いね。」

私よりもずっと強い。

なんていうか、こう……口じや言えないような強さ？

言えないけど、確かにキミから感じるよ。

きつとラジエルは、みんなの作った強さの基準なんて当てはまらないんだよね。

それでいいと思う。

みんなが勝手に作ったゴールじゃなくて、キミだけのゴールを目指していけばいいんだよ。

私だってそうする。

あはは、なんだろ、もっとお話ししたいんだけど、もうあんまり時間がないみたい」

倒れそうになる身体を持ち堪えながら、ティオナは距離を離す。

掌底を打ち込まれた身体が、もう限界だと騒ぎ出してきた。

この競り合いから離れたら倒れてしまいそうになるほど、足に力が入らなくなっていた。

それでも、最後までいいは、自分の本気を出したい。

自分の本気を、ラジエルに受け止めてもらいたい。

その一心で、悲鳴を上げる身体を最後まで鼓舞する。

泣いても笑ってもこれが最後。

惜しむ気持ちしが止まらないが、今回はこれで飲み込むことにしよう。
これで終わりではないのだから。

「ラジエル、私の本気……受け止めてくれる？」

「うん、そのつもり。」

ティオナも、俺の本気、受けてくれる？」

「もちろん、そのつもり。」

キミの全てをぶつけてきて。

私はそれに、全力で応えるから!!」

再び両者は疾駆する。

互いに譲れないものを胸に抱いて、いつかそれを実現させるため。

この戦いが大きな一歩となることを確信して、この組み手に幕を下ろす。

ティオナの心は非常に晴れやかだ。

まるで、姉がすぐ傍にいるように元気になれる。

ラジエルのお陰で、大切な気持ちを取り戻せた。

本人は意図してやってる訳ではないだろうけど、それでも気づかせてくれたのは彼だ。

近いうち、もつと彼に寄り添ってみよう。

今回のお詫びと感謝を込めて、芽生えつつある気持ちを確かめるために。

ティオナはこれからも、ラジエル・クロヴィスという少年に対して自分の全力をぶつけ続けると決めた。

第20話 少年、知らぬ所で話題にされる

「……………んあ？」

「あ、起きた」

見知った天井が見える。

間の抜けた声を上げ、部屋の主であるティオナはそのそと起き上がる。

「覚醒しきっていない頭が、何故部屋で眠りこけているのか懸命に思考を巡らせる。待てども答えが出てこない。」

何か、鮮烈な印象だけが胸に残っているのだが。

「……………ふえ？」

アイズ？

何でここにいんの？

何で私、ここで寝てんの？

アレ、今なんじ？」

「もうお昼過ぎだよ。」

何で寝てるかっていうとね、テイオナ負けたから」

「負けた……？」

私、誰かと勝負、してたんだけ？

アレ、なんか、大事なことを忘れてる気が」

「忘れちゃったの？」

お昼前にラジエルと組み手、したじゃない？」

「組み手……？」

組み………あああああ!!!」

布団を跳ね除け飛び上がる。

自分はさつきまで、とても大事な時間を過ごしていたのを忘れてしまっていた。

余りにも衝撃的過ぎた数時間前の一時は、一時的に記憶を飛ばしてしまうほどの出来事だったようだ。

記憶が巻き戻る。

あの黒髪蒼目の少年に、自分は負けたのだ。

ステイタスもLvもひっくり返されて、ただの一発も入れることなく完敗してしまっ
た。

「あ、ラジエルは!？」

「さっきアストレア・ファミリアの「疾風」^{リオン}が迎えに来て、一緒に帰ったよ。

テイオナによろしくって」

「そう、なんだ」

「それと、リヴェリアから伝言。

今日は絶対安静、だって。

後、ラジエルにお昼はちゃんと振舞ったから、安心するようにだって」

「それ私に伝える必要、あるかなあ……」

みるみるしよぼくれていく姿を、アイズは不思議そうに眺めた。

結局、自分で発した言葉が現実となり、今日はもう少年と話をする事は叶わないようだ。

まるで夢を見ていたような気分だ。

数時間前に体験したことが、現実起こったと感ぜられない。

彼より強いはずの力を持つ自分が、物の見事に完膚なきまでに圧倒された。

自分の愛読書の英雄譚の一つに似ている。

格上の相手にも臆することなく懸命に戦う勇者の話に、とても似ていた。

だが、あの少年を勇者と呼ぶには語弊がある。

寡黙で、無表情で、年相応の振る舞いを見せない。

近所の悪ガキらしさも感じさせないラジエルを勇者に当てはめるのは、どうしても出来ない。

何故だが、あの少年には違和感を感じる。

子どものように見えるが、子どもには見えない。

かと言って大人に見えるという訳ではない。

何かが欠けているのだ。

あるべきものがないと表現したほうが適切なのかもしれない。

「……わーっかんない。」

全然、分かんないや」

今日出会ったばかりの少年に対して浮かんだものはそれぐらいだった。

憶測で判断するのは危険であるし、真実からかけ離れてしまう可能性が高い。

情報が圧倒的に足りない。

ティオナはラジエル・クロヴィスという少年を知ら無さ過ぎる。

彼をもっとよく知りたい、理解したい気持ちが始り前のように湧いてくる。

どうやら、彼に興味を持ってしまったようだ。

どんな反省を歩んできたかを始め、様々なことを話したい。

もっと手を合わせていたいという気持ちだが、胸中を覆っていく。

「ティオナ？」

「まあ、今日はいつか！」

また明日から始めればいいんだよ！」

「何を言ってるのか分からない」

「いーの！」

私にだって分からないんだから」

「結局、ティオナはどうするの？」

その疑問を解消する鍵は、あの少年が持っている。

興味を抱いた彼をもっと知ることが出来れば、この胸の靄は晴れていくだろう。

そのためには、彼にも興味を持ってもらう必要がある。

ラジエルは、きっと誰にも負けない強さを求めている。

でなければあれ程の強さを持つている理由にはならないし、強さを求め続けているあの姿勢にも説明がつかない。

ならば、彼の興味を引くためには、自分も強くならなければならない。

それは同時に、自分の夢の実現にも繋がっていくことにもなるから。

今はそれだけを考えて目標に進もう。

考えることが苦手なティオナには、それぐらいで十分だから。

「んー……内緒」

ティオナ・ヒリュテには、笑顔のまま進んでいく姿が、丁度いいのだ。

「あっちゃあ、お肉切れてるの忘れてた」

「マジすか団長代理。」

「緊急事態じゃないですか」

それから少しして、アストレア・ファミアでは、団長代理であるリーヴァ・フロイツは今日も夕飯の支度に取り掛かっていた。

このファミリアでは、料理当番は基本交代制であるが、リーヴァがいるときはその限りではない。

誰が作っても基本不満が出ることはないが、中でも彼女の料理が絶賛される。

どんな趣向であっても皆が満足できるものを提供でき、かつ毎日必ず美味しいと声を上げさせる腕前だ。

アストレア・ファミリアでの第二の母と呼んでもいいかもしれない。

厳密には、彼女が生み出す料理による母の味だ。

リーヴァは、料理を作る上で大切な信条を一つだけ設けている。

いつでも真心込めて作ること。

料理を作るときは、食べてくれる相手を思つて調理する。

愛情込めて食材を切り、愛情を込めて火を通し、愛情を込めて煮込む。

だからこそ、彼女の作ったものは何でも美味しい。

誰かを思つて作る料理は、どんな一流シェフをも越える逸品となる。

画期的な調理法でも、三大珍味から成せる味覚でもない。

ただ一途に相手を思つて作ること。

それが、彼女の料理が美味しい秘訣。

それ以外は粗が目立つのがまたリーヴァでもあるのだが。

「ありやりや……私としたことがやってしまったぞ」

「大丈夫つすよ団長代理。」

なんてことはねえ、平常運転ですわ。

チビ助見てデヘデヘしてる時と何も変わりやしませんから」

「そりやだつて可愛いもの！

特にラジくんを見てるリユウの眼差しといたら……もうっ!!

どうにかなつちやいそう!

なんなのあの優しい眼?

からかいに飛び出たお姉ちゃんが、こうもど徹まりするなんて思いもしなかったよ。

あの二人がよろしくやってるのを見るだけでお腹いっぱいって感じ?

まあ、やってしまったものは仕方ないか……セラ、シチューはまだ手をつけなくてい

いから、先にサラダとブレットを仕上げちゃってくれる?

私ちよつと急ぎで買い出しに行つてくるから」

「そすか……つて、ええ?」

「あたしがやっていいんすか？」

「サラダはドレッシング作るだけだし、ブレットは焼くだけ。

簡単でしょ？」

「どれもこれも、アンタがやって大丈夫だから心配しないでよろしい。

「あ、ブレット焼く前に卵黄とバター塗るの忘れないでね。

「それと焦がさないよう順番は守ること。

「焦げたニオイが出てからじゃ遅いんだからね。

「わかってると思うけど、火を扱うには十分注意すること。

「それと、今日はリユーに料理教えてあげられないこと伝えておいて。

「じゃあねー、いつてきまーす」

「あ、うん、行つてらっしやい。」

「……ちやつかり釘刺してくなあ、こりやまだまだ敵いそうにありやせんねえ。

「ウチのママは心配性でいけねえや」

「ミセラ・キスケットは一人ごちる。

「適当に櫛を入れただけの栗色の髪を垂らし、気怠げで半開きの目つきが特徴的な女性。」

スタイルは良い部類に入るのだが、本人はそれを活かす気はさらさらない。他人の目を気にしないような自由気ままな性格の持ち主。

口元を隠すハイネックのパーカー、動きやすさだけで選んだショートパンツを履き、その上から愛用のひよこエプロンを着こなす。

これでも、料理歴はそれなりに長い。

リーヴアの不在時、大抵必ずキッチンで皆にご飯を振舞っているのは彼女だ。

大抵の調理はこなせるが、その反面細かいことに気を遣わない。

ブレットは生地をただ焼くだけで味気なく、カレーを作れば辛さが中途半端になり、サラダに関しては野菜の面積が大きすぎて食べづらい等といったことを度々やらかす。

失敗することはないが、完成品は基本雑である。

本人曰く“腹に入れば一緒”という信条を持っているため、誰かに言われなければこ
うした雑な結果に終わってしまう。

大雑把な性格も相余って素朴な味わいになるが、裏を返せば味に大きな変化を齎さな
い。

ある意味安定した品を作り続けることができる。

長所と短所は紙一重であるが、ミセラは基本気にしない。

ただ皆の腹を満たし、次も頑張つて欲しいという彼女なりの声援を送っているに過ぎ

ない。

最も、決して誰に対しても口にするのではないが。

「基本腹に入りや一緒でしよーに。

要は不味くなきやいいんつすよ」

「確かに、貴方の料理が不味かったことは一度もありませんね」

「……気配消して後ろに立つのやめてもらっていいつすかねえ？」

良い趣味過ぎて誰にも理解されやせんから。

心臓に悪くていけねえ、危うく口から色々出るところだったつすよ、隊長」

素知らぬ顔で唐突に背後に現れた影に対して毒付くミセラ。

彼女は基本的に、誰に対しても取り繕うことをしない。

非協力という訳ではないが、誰に対しても深入りせず、表面上の付き合いをしている体で見られる。

悪く言えば取っ付き辛く、良く言えば飾らず接せられる。

彼女のことを理解している者からすれば、このような対応など慣れたものだ。

特に、アストレア・ファミリアが誇るダンジョン探索班第一部隊隊長兼鍛錬指導部最

高指導官であるリユー・リオンからすれば、最早恒例の挨拶のようなものである。

「すみません、意図してやっているわけじゃないのですが」

「尚更問題つすよ。」

これからあたしの後ろに立つ時は、大袈裟に足音立ててから来てくたせえ。

周りから太ったとか色々言われるかもしれないやせんが大丈夫つすよ。

少なくとも、あただしだけは違うって思ってるんで」

「明日から貴方の鍛錬を増やします。」

私が付きつきりで見るので覚悟しておいて下さい。

全く、齒に衣着せない物言いは嫌いではありませんが、度が過ぎれば誤解されるだけですよ。

思っているだけでは伝わりません。

貴方の作る料理にしても、心の内にしても言えることですが」

「……隊長、それ以上は野暮つてなモンです。」

知らなくていいことなんて、世の中にはざらにあることなんすから。

深入りは御法度の信条のあたしからしたら、今の隊長の発言はNGつす。

それで、あたしになんか用があたりで？

こつちにや団長代理から、隊長のお料理教室はまた今度つていう言伝預かってるくらいしかないです。

肉の買い足しに飛んでったばかりなんでね、しばらくは戻って来やせんよ」「そうですか。」

なら、今日は見学に務めるとしましょう。

セラの腕前を拝見させていただきます」

「ちよつと……勘弁してください。」

見られながら調理するって、どんな羞恥プレイですか？

あたし、そういうの慣れてないんですけど……」

リユーはラジエルとの約束以来、ほぼ毎日こうしてキッチンに来て料理を学んでいる。

基本はリーヴアがいるため、彼女から教わることが多い。

料理のさしすせそを学び直し、調理器具の扱い方も一からレクチャーを受けている。

リーヴアが語った信条に関しては、まだピンときていない。

だからこそ、理解するためにはもつと料理に潜り込んでいく必要がある。

故に、こうして誰かが料理をしている姿を網膜に焼き付けているのだ。

「気にする必要はありません。」

私のことは観葉植物とでも思っておけばいいです。

それとも、また気配を消して、貴方の後ろに張り付いている方がいいですか？」

「サラッとこええ事言わないでくださいえよ。」

隊長、それ絶対他の人にやらないでくださいよ。

ウチのファミリアからストーカーが出たなんて噂が立った日にや、アンタ二度と大手を振ってお天道さんの下歩けなくなりやすぜ」

「するわけないしよう、バカですか貴方は。」

例えしたとしてもラジエルだけに留めておきます。

あの子はちよつと眼を離すと凧のように飛んでいってしまうのですから。

食事時はおろか、入浴の際も就寝の際も眼を離せません。

外にいる時だつて、ちゃんと手を繋いでいないと危ないですから。

常にハラハラしている私の身にもなつて欲しいです」

「いや、眼を離したら危ない人ここにもいる。」

見たことのねえ目つきがやべえくらいソレを物語つてる。

チビ助にご執心なのも結構ですがね、ちったあ周りの眼も考えてくださいえ。

「恥ずかしくってたまったもんじゃねえ」

新入りが入ってくるのは珍しいことではない。

どこのファミリアも、頻繁に眷属の入れ替わりが起きているため、ミセラにとつても少年がここへ入ってきたのは別段驚くことじゃない。

驚いたことは年齢と卓越した技術ぐらいだ。

だからこそ、ミセラは新人であろうと深入りしない。

過去の詮索も人間関係も、自分から聞きに行ったりはしない。

最も誰かから又聞きすることも珍しくない。

このファミリアは女性が主流で統一されているため、そういった流行の話は意図せずとも流れてくる。

少年の過去を聞いたのは、偶然にも居合わせたホームで聞いてしまった。

確かに、同情の余地はあった。

今より小さい時期に、住んでいた村が全滅するなんて、古い伝承の中だけの話だと思っていた。

想像し得ない苦痛を受けたことだろう。

だからこそ、ミセラはそういつた話を聞きたくない。

ここにいる眷属たちの中にも、似たような境遇を持った者がいる。そういう奴らの話を聞くことを、ミセルは嫌った。

本心は誰にも語っていない。

主神にさえ話したことはない。

「はあ……まあ、恥ずかしいけど、好きにしてくださいな。

何も面白いことなんてありませんが」

「ありがとうございます。」

ではお言葉に甘えて見学させてもらいます。

それと、好きにしていとのことなので、質疑応答にも応えていただきますよ?」

「……言うんじゃなかった」

ミセラは、その胸中を明らかにすることなく、隊長の要求に泣く泣く応えることにした。

別に面白いことなんて何も無い。

ただ食材を切ったり煮込んだりするだけ。

薬を生成する手順と何ら変わり無い。

そんな面白みもないことを、リユーは熱心に見ていた。

少なくとも、自分がこのファミリアに入ってきた時には、彼女は料理に関してこれっぽっちも興味を示していなかった。

ただ純粋に力を求めて日々ダンジョンに潜り、表情も変えずにモンスターを淡々と処理してきた。

その理由としては、共に潜っていくにつれて理解できた。

それは家族を守るため。

必ず生きて皆で帰るため。

また明日を笑って迎えるため。

それだけのために、毎日を危険に晒して戦った。

その本心は聞いたことはない。

あの時は、ひたすら真つ直ぐに強くなることだけを望んでいたはずだ。

だが、今の彼女を見てどうだろうか。

ラジエル・クロヴィスという少年に出会った頃をきっかけに、リユー・リオンは変わりつつある。

苦手だった料理に手を出し、失敗を重ねながら汗を流す。

何故そんな行動を取るようになったのか、ミセラには分からなかった。

理解できないが、深入りもしたくない。

他人の内情に踏み込むなんてことは、できるだけしたくない。

「……ある意味真っ直ぐで羨ましいっすね」

「何か、言いました？」

「……いや、何でもないっよ。」

あ、隊長醤油と砂糖取って」

「あ、はい……えっと、これですか」

リユーが差し出して見つけたのは二つの容器。

白く細かい粒、粘り気のない黒い液体。

内心ビクビクしながらも、多少の自信を持っているリユー。

これはいける。

今回は間違えなかったと、自らを褒める。

若干得意げになっている体調を尻目に、ミセラはいつも通りの気だるげな顔で答える。

「いや、違うね」

「っ?!」

即答で一刀両断の元切り捨てた。

一切言葉を濁すことなく、スパッと告げた。

まさかの展開にシヨックを受ける。

自信があつたため、余計にシヨックだった。

ミセラはそんなリユーに構いもせず解説する。

「色は似てるけどコレ全然別モンすね。

タコとイカぐらい別モンっす。

いいですか隊長。

このサラサラしてる方が塩で、こう粘り気みたいに塊ができやすいのが砂糖っす。水分含みやすいんで固まりやすいんっすよ砂糖っす。

恨み妬みと厚化粧でこり固めた女みたいでしょ？

マジ同じ性別って捉えて欲しくないんすけど。

あいつら、なんかあつたらこぞつて寄つてたかつて貶しまりますからね。

もうホントヤバイ奴らっすよ。

その反面、塩はなんも考えてないから何にもくつつきません。普段からボーツと間抜け面かましてる男みたいでしょ？

味も見た目も中身もしよっペー奴らなんで、例えには最適つすね。

ベタバタで王道すぎる間違いないんで、気をつけてください。

やったらマジであざとい云々言われてやけ酒まつしぐらコースつす。

ガラスのハート持ちなら間違えない方がいいつすよ。

後コレ、こつちも色ほとんど一緒つすけど、コレも全然別モンつよ。

どつちもサラツサラだけど、匂い嗅げばコレがウスターソースつてことぐらい分かるでしょ。

ホラ、よく見るとソースは若干色薄いんつすよねえ。

ちよつと味見してみりや、中々パンチあるんすよコレ。

私全然恋愛とか興味ないし、とか何とか訳の分からない御託並べてる女みたいにタチ悪いモンすよ。

汚ねえ欲望が見え見えなんだよこんちくししよう。

こつちもホラ、匂いもマジ醤油でしょ？

見た目も醤油、味も醤油、もう今時の男つて感じでしょ？

立派な棒持つてんならちったあマシになれつて感じつすわ。

分かりました？隊長」

「あ……はあ。」

何となく……？」

「あ、分かります？」

なら筋は悪くないんじゃないですかね。

けっこーマジで向き合えば、ちゃんとしたモン作れますよ。

近いうち、あたし以上の腕持てますよ」

「……………」

いや、それはないだろう。

そう口に出すことは出来なかった。

口は悪く、がさつで飾り気が一切ないミセラだが、それでも料理に関しては、当分上に立てるとはどうしても思えなかった。

彼女は味に関しては一切考慮しない。

不味くなく、腹に入れば万事解決と豪語しているがその反面、その食事の効果が如実に現れるのだ。

リーヴァは食事に対して至福を齎すが、ミセルは幸福を齎らす。

味は素朴ではあるが、食したあとには不思議と体調を崩しにくい。

ダンジョンに向かう前に食べ比べてみるとこれがすぐ分かる。

例えばモンスタ―が振るう毒や状態異常。

ミセルの料理を食べた後だと、これらの異常がかかりにくい。

その他にも寒さに強くなることや疲労が感じにくくなるなどといった副次効果がある。

ミセラの料理はまるでお祓いみたい。

リーヴァは以前そう言っていた。

彼女も口にこそ出しはしないが、自分にはないいいものを持っていると聞いたことがある。

食事による美味しさを引き出すのではなく、日々の美味しさを引き出す者。

大袈裟にも聞こえるかもしれないが、彼女が作った料理を食べた者は、誰一人として文句を言わない。

それどころか、皆自然と笑顔が浮き出ている。

食べた後に待ち受ける幸福を知っているかのように。

「だから、調味料は命なんですって、マジで。

コレの扱い知ってるのと知らないとしやあ天地の差つすよ。

ご飯をまんま食べるのと、醬油掛けて食べるのどっちがいいつすか？

つまり、美味いご飯作るにや調味料の特性を理解するのが大前提つす。

例えばホラ、いかにもドレス着飾っていい女気取ってる風のコレ、鷹の爪ありますよね。

コレ、元は細かく切ってる唐辛子なんすよ。

辛味があるものは眼を覚まさせるのに最適つすから、眠気覚ましたいなら散らしてみてもいいつすよ。

あ、刺激物なんで掛け過ぎると腹下すんで、扱いには気をつけてください。

後塩つ気があるモンには合いますけど、甘味がある物には向きやせん。

その辺も自分で試すなりしてやってみてください。

それから」

「勉強になります」

少なくとも、解説しているミセラはとても楽しそうだ。

外には出さずとも、彼女は常に食べてもらおう側のことをよく考えている。

美味しいかそうでないかなんて考えのうちのひとつ。

きっと彼女は、その先にあるものに眼を向けているだけなのだ。

リユーはこの時、初めてミセラの内面に触れた気がした。

話すことだけが相手の内面に触れることではない。

きつと、何気ないひと時を過ごしているからこそ、見えてくるものがあるのだろう。

「だから！

こっちは胡椒でこっちがブラックペPPER！

くしやみするぐらいキッツイ香水つけてる女って言ったでしょ!?

コレは地雷臭する黒歴史持つてる男！

似てるようで全然違うんすからね！

どっちもやべーけど全然別モンなの！」

「すみません、間違えました」

箸休め 少年技録 其の壺

ラジエル・クロヴィス

L v. 1

種族：ヒューマン

所属：アテナ・ファミリア

力：G 2 3 1

耐久：D 5 1 1

器用：E 4 0 2

敏捷：D 5 0 7

魔力：C 6 4 6

《魔法》

【原初^{エイワズ}の炎】

・変幻魔法

・魔力（憎悪）が続く限り対象に炎を付与する

・発動間、外部による干渉を無効にする

《スキル》

【インサニアアサーザ狂い立て我が恩讐】

- ・憎しみがある限り、戦闘時にアビリティ上昇補正
- ・時間経過と共に魔力を微量に回復
- ・誘惑、魅了を無効化
- ・早熟する

まずはステイタスの概要ですね。

上記のものは、つい最近更新された最近のステイタスです。

力やら耐久やらが数値化されていますが、まあこの辺は読み飛ばしていただいて結構です。

正直参考の範囲を出ませんから。

ただの目安と思っただければ幸いです。

だってほら、いきなり他の冒険者に私の力の数値は——だとか言われてもピンと来ないじゃないですか。

私の戦闘力は53万ですとか言われたらまあ納得するかとは思いますが。

でもそれは玉を集める物語のお話です。

彼の物語に玉なんて出ませんから。

一応健全のつもりですよ。

注目すべきは「魔法」と「スキル」ですよね。

歪んでいるのは分かっていましたが、こう一つのものとして表されると、分かっているも響くものがありますね。

あまり深く掘り下げるつもりはないのですが、はい、私ラジエルが歪んでいるのは当初より気づいていました。

一目見れば分かるものだったのでね。

では最初に魔法、^{エイワズ}原初の炎から触れていきましよう。

これは変幻魔法と言いまして、使用者の思うがままに形を変えられる特徴をもった魔法です。

火の玉サイズから無機物、動植物まで形を模することができます。

飽くまで姿形だけなので、生はありません。

その気になれば動かすこともできますが、その分魔力も余計消費し、無駄に集中力を注がなければならぬので、動かすことに対してメリットはないと断言してもいいで

しよう。

時と場合にもよりますが、合理性を考えるならそのまま爆散させてしまったほうがいいですね。

次に魔力（憎しみ）がある限り、対象に火を付与するとありますよね。

これは正直まどろっこしい説明ですよね。

ですが、これも体裁のため。

かつこよく端的に説明するにはこれが最も適していたのです。

こういったことは契約書等にも似たようなことが言えますね。

その物事の一部には触れています、全てを説明している訳ではない。

気をつけてくださいね。

要するにこれは、対象に魔法の意識を向け続けている限り、その対象は炎に包まれ続けるということです。

ちなみにこれ、別に視覚のみに依存している訳ではありません。

対象に意識を向けている間なので、視界から消えようと、気配を気取れる範囲内に対象がいれば、ラジエルの後ろで意識を絶とうとしても意味ありません。

彼と戦闘状態に入り、炎を消したいのであれば、文字通り彼の意識を削ぐしかありません。

気絶か意識を逸らせなければ延々と燃やされ続けます。

そして、如何なる外的要因をぶつけようと、この炎を消すことはできません。水をかけようと、凍らせようと、酸素を奪おうとしても無駄です。

彼がこの魔法を発動している間は、燃やすという概念のみが存在します。

そこに酸素がなければ燃えない、許容量を越える水をかければ消火できるという概念は阻害されません。

その間、消費魔力も半端じゃありませんがね。

ただ、彼は魔力を憎しみから変換できます。

彼の心の根底には憎しみが大部分を占めているので、魔力はほぼ無尽蔵といってもいいでしょう。

次にスキル、^{インサニア・アザール}狂い立て我が恩讐の説明を致しましょうか。

うーん、前半部分はまあ理解できますかね。

ラジエルが戦闘と判断した場合、全てのステータスに上昇補正が入ります。

即ち、敵とエンカウントしたら自動的にヒートライザがかかると想像してください。

それで事足りません。

次に、時間経過とともに魔力を微量に回復とあります。

これは、憎しみを生成する心、ここでは炉と言ひ換えましようか。

その炉から延々と魔力の源である憎しみが流れ出てくることになります。

つまり、気をつけていれば魔力が途切れることはありませんよということです。

次は魅了、誘惑を無効化についてです。

これも大体想像できますよね。

まあ、それ以前に彼は子どもなので、大人の誘惑等に理解はありませんし、恐らく以降も理解できないでしょう。

なので、そういった悪意をもった外部からの精神干渉は彼には通用しません。

グリモア
魔道書はまた別です。

あれもまた精神干渉扱いに近いアイテムですが、本来はああいった長話をするものではないですね。

彼の根底が捻じ曲がっているが故に起きた想定外のものなので、あまりお気になさらずに結構ですよ。

最後に早熟ですね。

これも簡単です。

能力的な成長にブースト、ボーナスが入るということです。

これ以上ないくらいに簡単な説明文ですよ。

ただ、サンプルが故に効果は絶大です。

普通の冒険者が得られる経験値エクセリアが5とすれば、彼は10にも20にもなつてくるという事です。

ええ、言うまでもなくレアスキルですよ。

本来なら数多の神々から熱烈なアプローチを受けてもおかしくないんですが、彼はそういう視線や意識には敏感なのでね、撒くことなんて造作もないことですよ。

強硬手段と認識されれば……いや、殺されはしないでしよう。

恐らくね。

因みに最初にあつた精神の枷ですが、あれは魔道書グリモアの精神干渉の際、記憶の一部を取り戻すことで消去されました。

枷が壊れてしまったということでもありません。

ご想像できる方もいらつしやると思います。

ええ、封じる役目を持った枷が外れば、後々厄介なことになります。

あれはラジエルの精神安定のために付与されたスキルなのです。

皮肉な話ですよ。

成長するためには、あのサイズの枷は小さすぎるのです。

よつて壊れてしまい、今のスキルに強制的に昇華されました。

成り立ちとしてはこんなところですね。

ちよつとお疲れになつてきたところですよね。

ですがもう少々お付き合いください。

次は彼の持つ我流拳法、“戲拳 弔獸戯我”について少し触れます。

この名前の由来は勿論、かの昔極東で描かれた鳥獸戯画です。

これには彼の拳法の由来が全て詰まっています。

鳥獸戯画には、動物が人間と同じような行動を取るといった様子が描かれていますよ
ね。

兎や蛙が人間の子どもの遊びをしている。

これ、元は漫画なんですから、知ってました？

余談ですが、古い鳥獸戯画と最も新しい鳥獸戯画は別物となりつつあるそうです。

原本の写が徐々に形を変えるのと同じことですよね。

写を作るのもまた人間ですから、写をすればするほど、その内容は徐々に変わつてい
きます。

意味合いがズレたり、解釈の相違であつたりと書くほど誤りがおきますから、数を重
ねれば原本から遠ざかつていくのは自明の理です。

話を戻しましょう。

謂わばこれは人間と真逆ですよね。

古い擬人化というやつです。

ラジエルは、この登場人物である動物たちの行動に、更に自分を当てはめました。人間の真似事をしている動物、その真似事を更に真似ようとしているわけです。

つまり、彼のやっていることもまた写です。

結果、ラジエルの拳法は誰のものとも似つかない全く別物となってしまうました。

まあ、私の家にあつた鳥獣戯画もまた、原本とは全くの別物なので……ああした不可思議な拳技が生まれても不思議じゃありませんよね。

彼はそこから更にその他の動物たちの動きを真似した、独特の拳技を身につけていくようになりました。

人間は無駄が多い。

その反面、野生の動物は対象の息の根を止める方法を本能で知っています。

即ち、彼らの方が合理的です。

この方が、より強い力を手に入れられると考えたのでしょうか。

私の知り得ない技まで編み出してしまったくらいですから。

はい、ということで簡単な解説を終わりにしたいと思います。

特にこういったことを出して欲しいというお便りは頂かなかつたのですが、まあちよつとしたお節介という奴です。

お客様をできるだけ置いてきぼりにさせないため、敢えてこうしてお時間を拝借しました。

為になつたかどうかは分かりませんが、為になつたのであれば、声にして頂けると幸いですね。

次回もまたこういった紹介をして欲しいとあれば、是非ともこの私こと『ししよー』が務めさせて頂きますとも。

ええ、お便りお待ちしておりますよ。

一番が当分ないもので、こうして外伝に出てくるほかありません。

私に出番を超越すと思つて、お声掛けいただければと思います。

では皆々様、ご縁があれば、また次回にてお会い致しましょう。

第21話 少年、姉と散策す

「ん……つと、よし。

こんなもんかな」

ブーツの靴紐を結び直し、再度姿見で自身の装備を確認する。

両足のレッグホルスターに回復薬を二つずつ携帯していることを確認。

ウエストポーチに状態異常回復薬と携帯食料が入っていることを確認。

魔石やドロップアイテムを収納するアイテムパックを装備。

最後に戦闘用の装備を見渡す。

所々色褪せた相棒の黒い革の籠手。

長年使い古した籠手は、しわが唄れていく老人のように色褪せ、多くの傷が目立ち、しな韌やか

な質感は徐々に固くなっていた。

指の箇所は、随分と革の層が薄くなった気がする。

退魔の印も摩耗が進み、効力が失われつつあった。

同様に、脚具もまた劣化が進んでいた。

籠手と比肩するように革が痛み、修復不可能な傷が増えていた。

これは年月による劣化だけではない。

毎日欠かすことなく身に付け、血が滲む努力を続けてきたが故に至った結末。

村一の職人であった翁の最高傑作も、時が経てば磨り減ってしまう。

むしろここまで持ったこと自体大健闘ものだろう。

決して上質ではない革を、緻密な計算と技法でここまでものに仕上げた。

少年の中では、間違いなく最高の出来だ。

胸には鈍く輝く胸当て。

リユーに贈ってもらった初めての防具だ。

もらってそう月日は経っていないのに、かなり傷が付いている。

これもまた、少年の無茶な戦闘が起こした産物だ。

防具に傷が付いた日、彼女はひどく悲しい表情を浮かべていたことを思い出した。

「……もうボロボロになっちゃったなあ」

眩きが、虚しく静かに響く。

どれもこれも質素で華やかではないものの、そこには確かに思い入れがあった。籠手と脚具に関しては数年間使い続け、胸当ては大切な人からの贈り物である。

それらが傷ついていくのを、こうして改めて目の当たりになると、胸が締め付けられるような錯覚を覚えてしまう。

形在るもの、いつかは壊れてなくなってしまう。

ラジエルはそつと防具を撫でてみる。

「……………固くなった？」

それこそ、使い続けた道具の末路。

多くの敵の攻撃を受け、幾度となくその手で災厄を退けてきたが末の結果。

道具にとって、これほど嬉しい結末は他にない。

部屋の隅で埃を被って燻るのではなく、人に使われてその最後を遂げる。

それは、道具としての待望であり、本望である。

武具としての本懐を遂げられたとあらば、こうして散っていくこともまた受け入れられる。

「壊したく……ないなあ」

だが、壊れかけの物を使うのに思い止まるのもまた人の情。

入れ込んだ思いが強ければ強いほど、それを使い潰すことに躊躇いが生まれる。

浅ましかろう、思い上がりも甚だしかろう。

人の都合で作られ、思うがままに使われ、最後の最後で躊躇される。

これはきつと、偽善に近いものに違いない。

「……………」

曰く、物に思入れををするのは人のみ。

遙か極東の地で、誰かが語った言葉。

その地には「付喪神」という神が存在するという。

物を大切に使い続けることで、それに神が宿るといふ古い言い伝えだ。

その国の人間は物を愛する気質があり、どの国よりも多くの神が住まう土地とされる。

信仰によって神が増え、物を愛することで神が生まれる。

数多の神、即ち「八百万の神」と評される所以の一つだ。

無名ではあるが、生まれるものは歴とした神。

肌身離さず使い続けた物には、その使い手にささやかな祝福を送る。

何にも勝るは人の愛。

個人に向けられようが、概念に向けられようがその本質は変わらない。

純真な愛であるからこそ、向けられたものもまた愛を返す。

少年にも、いつかその愛が返ってくることだろう。

自覚はできないだろう。

はつきりと感じることもできないだろう。

形として目に見えるものにもできないだろう。

だが、真に何かを愛したのであれば、きっとそれは自身に返ってくる。

それはまだ、少年は知る由もない。

だがそれでいい。

いつか、その後にでも気づければいい。

自分の注いだ愛が、届いたのだと。

「準備はできましたか？」

「うん、だいじよぶだよ」

「回復薬……よし。」

防具の紐の緩みは……なし。

状態異常回復薬の携帯……よし。

携帯食料……よし。

服装の乱れ……なし。

靴紐は……よし。

寝癖……ちよつと跳ねてるけれど、まあいいでしょう。

歯磨き……よし。

目の充血……なし。

脈拍の異常……なし。

筋肉に異常……なし。

大丈夫……ですかね」

「ねえリユ」

「何ですか？」

「これ、ダンジョンに行く前に毎回やんなきゃダメ？」

「当然です。」

装備や心身の状態に不備があれば絶対に行かせませんから。

常に万全を。

貴方は私が見ていないと、すぐに厄介事に巻き込まれますからね。

こうしてちゃんとチェックしておけば、まあ大事はある程度避けられます。

……やっぱり跳ねが収まらない。

何度も口煩く言うようですが、ダンジョンでは何が起きるか誰にも分かりません。

何が命の危機を左右するか分からないからこそ、こうしてしっかりと確認しないと。

あ、ほらアイテムパックの口が緩んでる。

しっかりと締めないと、物も命も簡単に落としちゃいますから、ねっと」

そこには甲斐甲斐しく世話を焼くリユウの姿があった。

姉のようだとい前言われた日からしばらくして、心境の変化が目に見えて伺えた。

今では当然のように寝食を共にし、あまつさえ入浴も共にしている。

最早姉の領分を超えてしまっているのではという声も上がっているが、当の本人には

自覚がない模様。

むしろ心配が行き過ぎてエスカレートしつつある。

でなければ、今日のように持ち物や装備のチェックを入念には行わないだろう。

リユーは否定寄りの返答をしているが、世話を焼くときの彼女の眼は爛々と輝いていて、いつもよりもテンションが高いとどこかの団長代理が証言している。

本人がなんと言おうと、この手のやりとりは周知の事実である。

「……ふむ、結構です。

では行きましょう、久方ぶりのダンジョンへ」

「うん」

恒例のやりとりを終えると、二人は手を繋いでダンジョンの探索へと向かっていった。

他の眷属たちもこの光景は見慣れたもので、団長代理以外は平然と自分の仕事に取り掛かる。

ある者は班で素材を集めにダンジョンへ、ある者はクエストをこなしに、ある者はホームの管理を全うするなど、皆各々の作業に向かう。

今日もまた雲一つない快晴の空。

風は穏やかに流れ、過ごしやすい気温を維持したまま時が過ぎていく。

「あらあら、あの二人はいつ見ても仲良しね」

「ですなあ、いつ見ても目の保養。」

うん、私今日も元気よくイけそう！」

「団長代理、自制してくだせえ。」

ヨダレ垂らしてみつともないつすよ。

もう既に何から何までがみつともないつすけど」

「そんなことないよ。」

あの二人見て和やかーな気持ちになるだけ。

ホラ楽しいことあったりすると余韻に浸ったりするじゃない？

よかった思い出を振り返って、あの時すごい楽しかったなあって。

それと似たようなもんだよ。

……それはそうと、ちよつと暑くない？

一枚脱いだのになんか暑い……あ」

「オイ、それ全然別の余韻に浸ってただろ。」

てか既に一枚脱いでたんかい。

それと最後の『あ』ってなに？」

「いやーんセラッたらまだお昼前なのにわ・い・だ・ん？

アストレア様の前でそんなはしたない……でも、なんだろこの気持ち。

うん……なんか、ちよつと……いいかも知れない……」

「何朝っぱらから喘いでやがんだこのど変態!!」

妄想に見られながらで興奮するってどんな変態よ!?

ぜってえ別のモンも垂れ流してたんだろ!?

もうみつともないなんてレベルじゃねえわ!

チビ助に見せられないレベルだわ!

ホントのホントに外でそんな反応やめてくださいよ!

もし、どこぞの誰かに知られでもしたら……ああ考えたくもない。

ちよつと、アストレア様からもなんか言っちゃってやってくださいえよ!」

「あらあらまあまあ、リーヴアッたら」

「えっへへえ」

「オメーはまだそのキャラ引きずってんのかい!!」

「大丈夫だよ!

私は前から、だから……てへっ」

「オメーはもう黙ってろや!

いい加減にしないとその口ぶち抜くぞ！」

それを見守る三人の姿。

主神アストレアとファミリアの団長代理を務めるリーヴァ。

そして食堂管理課副料理長を担うミセラ。

アストレアはともかく、二人はどうも気の抜けた様子。

特に大きな揉め事が発生していないため、通常通りの職務をこなす以外やることがない。

このように、いつものように下らないやりとりをするぐらい暇なのだ。

「はあ……ってか真面目な話、あたしら本当にまだ動かなくていいんすか？」

そろそろ対策、打つといた方が賢明つすよ。

つい今朝方、情報を掴みやした。

ウチの部下の掴んできた話によると、どうも閩派閥イギリスの一派と思われる奴らが、ある武器の情報を求めて、街中に潜伏している模様です。

やっぱり、連中もう動き出してるんすね。

今じゃまだだんまり決め込んで体を装つちやいるが、その裏じゃ着実に力を溜め込ん

でる。

もう呑気に傍観してる場合でもないと思うんですけど」

このアストレアファミアには大きく分けて四つの隊が存在する。

対抗戦力と戦う戦闘班 “壹線”

街の防衛、住民の避難誘導等を行う防衛班 “貳線”

危険視されている団体の動向を探る諜報班 “參線”

戦闘や食料等の物資を定期的に確保する支援班 “肆線”

アストレアファミアに限った話ではなく、住民やオラリオを守ると旗を上げた数々のファミアも同等かそれ以上の戦力を有している。

基本周囲に存在を認知させず、人知れず活動を続ける実力者たち。

その存在はギルドを始め神々と、この街の防衛を誓ったごく一部のファミアの面々だけだ。

誰一人、その素性を表に出さず、普通の冒険者を装って生活している。

さながら影の暗躍者たちと表した方が適切かも知れない。

彼らはこのオラリオの平和を維持するため、日夜暗躍を続けている。

ミセラ・キスケットは諜報班の参線所属の隊長として、常にオラリオに監視の眼を光

らせている。

緊急事態が起きない限りは現状維持の職務しかないため、それほど忙しいというわけではないが、参線だけは異なる。

いつ何時、何かが起きる前に情報を絶えず掴み、得られた情報を上層部に進言し、その上で判断を仰ぐ。

つまり、参線においては平和なご時世であろうとやることは変わらず、常に忙しい毎日を送っている。

ミセラは、隊長の身でありながらも危険度が高いアジト等は進んで潜入に乗り出し、必ず何かしらの情報を掴んでくる。

相手が尻尾を出すまでじっと息を潜め、いつまでも背に纏わりついていく。彼女が動くところには煙が立たず、風とともにいつの間にか帰還するという。

「うん、わかってる。

私も昨日報告は聞いた。

これは、私たちもそろそろ本格的に動かないとね。

アストレア様、開幕の時は近いかもよ」

「ええ、そろそろこの幸せな一時も御預けかしらね。

せつかくの風情を乱そうとするなんて、また随分と無粋な真似を考えているみたい。はあ……嫌な予感ほどよく当たるものね。

まさか軽はずみで口にした想定が、こうもその通りに現実になるなんて、定石過ぎて驚くわ」

「え、まさか……もう対策立ててたんすか!?

あたしの部下が長期間の潜入の末ようやく掴み取ってきた情報、もう既に耳に入れてたと?」

……やっぱりすげえっすわ、お二人さん」

「何言ってるの、これぐらい当然のことよ。

いっだって戦況は常に変化するの。

大将の陣は攪乱のため忙しく動き、兵士たちの命のやり取りは常に揺れてる。

そして、その戦場となっている環境もすぐに色を変えるの。

天秤みたいなものよ、戦争って。

士気や天運を如何に自陣に置き、如何に犠牲なんかの不安要素を払い除けられるかが勝敗の分け目。

それがこっち側に傾くのか或いは……っていうことだからね。

どうあつたって、私たちは私たちのするべきことをするだけ」

アストレアもリーヴァもさして驚いた様子は見受けられない。

二人の様子を表せば、やっぱりかといった反応。

むしろ呆れた風にも見えた。

アストレアは肩をすくめて軽くため息を零し、悲しげに目を伏せる。

予想が当たったからといって事態が軽くなるわけではない。

せいぜい心の準備ができるかどうかだけだ。

真つ直ぐ玄関の先を見つめるリーヴァ。

その瞳は、目先にあるものではなく、その先にある未来の可能性を観察している。

今この場にある現状から、誰も予想だに出来ない未来を、どこまで予想することができ
きるのか。

まるで予言師のような眼力だった。

そこにはいつもおちやらけている団長代理の姿はどこにもなく、どこまでも頼れ、不安の類を一切感じさせない自信に満ち溢れた背中にか見えなかった。

自身の子の未来を見つめる主神、アストレアもまた、いつもと違った雰囲気醸し出して
していた。

普段のおっとりした空気ではない。

子どもたちに降りかかる外敵を払い除ける算段を導き出し、その後には齎される幸せを享受するために手を尽くそうとする。

その姿は正しく、古の先駆者そのもの。

かつて地上を正しき力と考えで先導した神々しい姿。

例え神アルカナムの力を封じているとしても、その在り方は封じ込めるわけではない。

彼女は偉大なる神のうちの一神。

紛れもなく、自分たちの主神にして、掛け替えのない親なのだ。

「そう、目まぐるしく変化するのが戦場。

部下の上に立っている私たちが、そう取り乱すことは許されないのよ。

何事も想定外の範囲内に収めるべし。

私たちがすべきことは、部下の統率だけじゃない。

あらゆる自体を想定し、その対策を先手を持って幾重にも張り巡らせること。

ある意味、戦場で戦うアナタたちだけが大変なわけじゃないわ。

私たちは、アナタたちが最悪の状態に陥らないよう注意して、常に先手を打ち続けなければならぬの。

たかが頭の労働と簡単に切り捨てられるけど、結構大変なのよ？」

「……知らなかったっす。

お二人が、あたし達以上に考え続けていたなんて」

「ふふつ、その言葉が聞けるだけで嬉しいわ。

別に勞つて欲しいと言っているわけではないわ。

アナタたちにはアナタたちのやるべきことがあるように、私たちには私たちのすべきことがあるつて遠巻きに言いたいだけなの。

だから氣に病まないでミセラ。

アナタは心の優しい子だから、考え込まないでつていうのも難しい話だけれど」

「いや、ホントすみませんでした。

ブーツと構えてたのはあたしの方だったんすね」

「そう、分かつてもらえて私も嬉しいよ！

じゃあ早速、ここに署名を」

「はい！

……はい？」

「可愛いものを愛でて一体何が悪い!!

愛いものそれ即ち万国共通の宝であるという事実は何故氣付かないのか!?

氣付いていて尚眼を背けようとするのは我々を作つた神への冒瀆ではないのか!?

我々は健全に、極めて健全に！

もう一度言おう、途轍もなく極めまくって健全に！！
彼らを愛そうと声高に叫んでいるだけだ！

神への懺悔の気持ちがあるのなら今すぐにでも行動をを起こすべきだ！
ロリダシヨタなんて言う蔑称の時代は最早古い！

今こそ、全ての人々が健全に等しく彼らを愛でる権利をこの広大な大地に打ち建て
べきっ！！

オラリオ青少年健全育成条例改正案に清き一票を、何卒よろしくお願いキヤア
アアアアアアアアアアア！！」

一切の躊躇いもない弾丸は、無情にもリーヴァに襲い掛かった。

突然の攻撃に、彼女は身を亀のように丸めて自らの的を小さくすることしか対応でき
ない。

任務の時と同じくらい冷めた眼で銃弾をかましたミセラの眼は、何度見てもやっぱり
冷めていた。

「アンタらに真面目な話を持ちかけたあたしが馬鹿だったっす。

しばらくあたしに話し掛けないで」

怒りが有頂天に達したミセラは、峠を超えて冷静にキレていた。

そのまま振り返ることなく外へと出て行ってしまった。

それをいつもの眼差しで眺めるアストレア。

無様に床に転がるリーヴァ。

その姿に、最早団長代理としての威光はない。

どこからどう見ても、成敗された変質者の末路そのものだからだ。

「あらあらまあまあ、随分とはしゃいだものねリーヴァ。

いくら彼女たちの為とはいえ、こうまでして誤魔化すことはなかったんじゃない？」

「うああ……ばっちい。

いやまあ、そうなんですけれどね。

仮にも私団長代理だし？

あの子が帰ってくるまでは、私があの子たちを守らないといけないじゃないですか。

不安にさせたくないのは本心だし、私に変に取り乱す事なんて出来ないし。

ええ、皆を守るんなら、バカにでも口りにでもシヨタにでもなつてやりますよ」

「あら、そんなの前からの話じゃない」

「あはっ……… バレた？」

「まあ、貴方がそれで良しとしているのなら、私は止めるつもりはないわ。きつとそれは、長い時間を掛けて悩んだ末のものでしようからね。

でもね、リーヴア。

貴方が本当に困って、自分一人じゃどうしようも出来なくなったら、ちゃんと周りを頼りなさい。

勿論私でもいいわ。

でもそれ以上に、貴方には大切な仲間がいる。

いつだって背中を預けて欲しいと言ってくれる仲間がいる。

それだけは、決して忘れないでね」

「……… はい、ごめんなさいアストレア様。

そして、ありがとうございます。

……… 嵐の前触れってやつなのかしらね。

本当に気持ち悪い気の流れ………

リユー、ラジ君をお願いね」

第22話 少年、魔の手忍び寄る

「シッ」

「ギャアアツ!!」

「迷いのない一撃、流石ですね」

アストレアファミリアで3人が応酬を繰り返している中、二人はダンジョン上層にてモンスターと戦闘を行っていた。

迫り来るゴブリンを埃を払うように葬って行き、小石を蹴るようにコボルト等の下級モンスターを一蹴していた。

端から見れば高レベル冒険者にも見えただろう。

しかしその実、高レベル冒険者は『疾風』^{リオン}の二つ名を持つリユーのみ。

その傍らにいる少年は、この街にきてひと月と経っていない新参者。

冒険者と言われても素直に飲み込めないその小さな姿。

黒で塗り固められた服装に、防具は籠手と脚具と胸当てのみの軽装スタイル。

武器の類いと呼ばれるようなものは一切装備していない。どこからどう見てもリユースに付いてきた子どもにしか見えない。

「リユース、ここじゃ物足りないよ。」

もつとつよいやつがいるところにいこーよ」

「ダメです。」

この先へ潜って行くなら、この上層にいるモンスターの情報を知り尽くしてからじゃないと行かせません。

雑魚と侮れば、そのうち必ず痛い目を見ますからね」

「はーい」

会話は冒険者として有り触れたもの。

ダンジョンの中で最も弱いモンスターが跋扈するのがここ上層である。

体格はどのモンスターも基本的に小さく、個体差があつたとしても比較的大差はなかった。

その上力も弱く、知能も高くない。

本能に従って活動するモンスターばかりであるため、上層の中では危険度は低い。

だが、こと命のやり取りの中では、圧倒的な戦力差があらうと何が盤台をひっくり返す要因になるかは誰にも分からない。

蟻が像に致命症を与える可能性だって有り得るのだ。

そういつたことが起こり得ないよう、極小の危険分子を常に排除する心掛けが必要となつて来る。

故にリユーは先達者としてラジエルに警告する。

雑魚といえど、当たりどころが悪ければ簡単に殺されてしまう。

まとめるとすると、いつ如何なる時も油断するなということだ。

「そう、どんなことがあっても油断はしてはいけません。

お師匠さんに教わったでしょう？」

周囲の気配りが、自分の命を守るのです」

「あ、そーだった。

ごめんリユー、あんまりにも弱いから忘れかけてたよ」

「ダメですよ？」

相手が強くて弱くても、それが敵ならば一欠片も油断を見せてはいけません。

私もそうですが、貴方の身体には必ず弱い箇所が存在します。

そして、敵はその弱い箇所を突く針を必ず持っています。

自分に対して危険を持ち得ている者に対して、貴方は安心して背中を見せられると思えますか？」

「んーん、何となくだけどわかるよ。

どんな敵にも油断はしちや、ダメなんだよね？」

「グギャアアアッ!!」

「はい、例えそれがゴブリンであつてもです」

少年の戦闘力は正直いって、Lv1の冒険者の中でトップクラスだろう。

オラリオに来るまで厳しい鍛錬を続け、合理的に相手を殺める術を体得してしている。

冒険者としては新参者だが、戦士としてはそこいらの冒険者では比較にならない。

リユ어의目的は、少年の中にある意識を正すこと。

やはりラジエルの中にも驕りが存在する。

下級モンスターに対して集中力が散漫になりつつあるからだ。

まずはその意識を正し、モンスターのクセや特徴を覚えさせる。

人間には共通する思考があるが、モンスターはその種類が多いため一概に一括りでは

済ませられない。

モンスターはとにかく種類が多い。

昆虫型や獣型、獣人型、竜型、巨人型など実に様々な種類がこのダンジョンで生息している。

それらに対し、常に同じ戦法を取り続けているは身が保たない。

毒を持つ相手に対してはどういった戦法を取るか。

集団で迫り来る相手に対してどう立ち回るか。

圧倒的体格差で攻めてくる相手に対してどう攻めるか。

そういったことを常に考えながら戦う必要がある。

「多いね、一気に行くよ。」

“ 剣鶴舞踏 ”

「ふむ、統率を取られる前に一掃しますか。」

悪くない手ですね」

少年の姿がコマ送りに見えるほどの高速体術が多数のゴブリンに迫る。

一般人であれば知覚できない動きも、Lv4まで上り詰めたリユーにははっきり見え

る。

最も見るために集中力を使うが、焦点さえ合わせればよく見える。

「どうやらあの技は地を踏みしめた一瞬だけ姿がようやくはつきり確認できるものらしい。」

高速で敵の死角に回り込み、剣に匹敵する鋭さを持った手刀で敵を切り刻む。

「んんー…… 終わりかな。」

もうこの辺りに敵はいないよ」

「そのようですね。」

流石ですよラジエル。

「気配の捉え方に関しては何も言うことはないぐらい完璧なものです」

「そーかな？」

周囲の気を探り、生物の発する物音が聞こえないことを確認すると、ラジエルは構えを解く。

軽く柔軟をして身体の調子を確認し、リユーの元へと戻って行く。

「うん、問題ないよ。

まだまだいける感じ」

「どれどれ……っど。

筋肉に痙攣もないし、脈拍も正常。

そうですね、全く問題ありません。

では、もう少し深く潜ってみましょうか」

「わーい」

「こら走らないの」

リユーから更なる階層への進行が許可され、先行して走り出す。

戦闘に関しては申し分ないが、その他に関する配慮が欠けている。

言ってしまうばそれくらいだ。

こうして時に注意を投げ掛け、徐々に身体に刷り込ませていけば時期に意識せずともこなせるようになるだろう。

時間の問題というやつだ。

そうして戦闘とリユーからの講義を繰り返して二時間と経たない頃、既に十一階層に到達していた。

道中フロッグ・シユーターやダンジョン・リザード等のモンスターが何度も現れたが、苦も無くそれらを蹴散らした。

舌を切り飛ばし、頭蓋を砕き、腹を踏み潰した。

話には聞いていたが、こうも顔色ひとつ変えずに倒して行くとは思ってもみなかったリユール。

ウオーシャドウを一撃で沈めたのを見ると深く考えることを放棄した。

最早この街に来る前からこう言った人外との戦闘は慣れっこなのだろう。

「さてラジエル、ここが貴方の潜った一番深い階層です。

前回はここでインファント・ドラゴンと戦ったんですよ」

「うん、おつきいだけであんまり強くなかったけど」

「普通ならその大きさに皆たじろぐはずなんですけど……」

まあ、過ぎたことはもういいでしょう。

んんっ、いいですか？

ここより先は中層一步手前。

つまり上層のモンスターなど比較にならない相手が多く出現してきます。

色々付け加えるべきこともありますが、簡単に言うならここから先は更に危険です。

最も口であれこれ言ったところで貴方はわからないでしょうから、実物を見せることにします」

リユーが指差す方向に見えるのは、真っ白な体毛に覆われた巨大な猿。

名はシルバーバック。

特徴的なのはその大きな体格だけでは無く、頭頂部から尻尾にまで染められた銀色の体毛だ。

その名の由来が特徴的な銀色の体毛からきていることは一目瞭然だろう。

このモンスターからドロップする銀色の体毛は天然素材として一目置かれており、防具や衣類などに使われている。

他に大きく発達した強靱な筋肉。

一度その剛腕を振り下ろせば、冒険者として簡単に押し殺してしまうほどの怪力だ。

巨体の割にダンジョン内を俊敏に動き回る。

中層へ挑もうとする冒険者の鼻っ柱をへし折らんとばかりの能力を有している獰猛なモンスターだ。

「いいですかラジエル。

あのモンスターはシルバーバックといって、大きい身体の割によく動き回る厄介な相手です。

勿論強靱なパワーを持っているため、あの腕には当然要注意です。

後は実践で掴んで来てください」

「うん、じゃあいつて来まーす」

返事の後、軽快な動作で近くにまで一気に接近する。

シルバーバックが動くと共に近づき、奴が止まると共に気配を断つ。

周囲の音に敏感なモンスター相手には、迂闊に動き回ると気配を察知される。

丁寧かつ迅速に接近し、一気に間合いに入れるよう差を詰めていく。

「ばあ」

「ヴオツ!?!」

不意を取られると、相手は一瞬無防備な姿を晒す。

予想外の出来事をされると反射的に固まってしまうのだ。

無論シルバーバックとしてその例外ではない。

知らず知らずの間に自分の肩に乗られ、いきなり小さな顔を横から見せられれば誰だつて驚く。

まるで友達にする悪戯のような仕草に虚を突かれるシルバーバック。未だ出会つたことのない謎の少年を前に、僅かに固まつてしまう。

「すきありっ」

「ッ!!?」

左肩から唐突に現れた少年は、倒立前転をするように流麗な線を描いてシルバーバックの前に躍り出る。

無防備な腹に向かっていつも通り突きを繰り出して大猿を仕留めにかかった。

細い腕から放たれる突きは鋭利な槍のように深々と突き刺さるはずであった。

「ラジエル！」

「離れなさい!!」

「ぬえ?」

「ガアアアアアッ!!!」

深々と突き刺さるはずの突きは、大猿の腹部を赤黒く変色させるだけで留まった。決定打になっていなかったため、シルバーバックは筋骨隆々の両腕を振り下ろし、少年を地の肥やしにせんと叩き潰そうとする。

巨岩の如き一撃が、少年に向けて垂直降下し、轟音をあげて土煙を巻き上げる。

「……………本つ当に心臓に悪いんですよ」

「ごめんねリユー。」

あれから試したいこといっぱいあってさ、ちよつとこーぶんしちやった」

「ツ!!?」

少年は軽口を叩き、顔色ひとつ変えずにシルバーバックを見つめていた。

両腕を交差して防御の姿勢を取り、両足はしっかりと地を踏みしめる。

大猿程ではないにせよ、少年の腕は通常より一回り太い大きさとなっていた。

鍛えているとはいえ、このような矮躯ではあの巨体から繰り出される一撃を無傷で防ぎきれぬわけがない。

では一体どうするのか。

無論、その差を埋めるのが技である。

「だいえんごうき大猿剛毅。

ねえ、力比べしよーよ」

「グフウウウン!!」

大猿の如き剛力を実現させる戯拳。

それがだいえんごうき大猿剛毅。

腕の筋肉に意識を集中させ、隆起させることで元の倍以上の筋力を発揮させる。

俊敏を犠牲にして力を倍増させるため、純粹なパワータイプ以外には使えない技。

パワーに自信のあるシルバーバックが力を込めるも押し切れない。

体重を掛けているのは自分の方なのに、一向に腕がこれ以上動かない。

鼻息が荒くなり、歯が碎けるほどに食いしばって力を込め続ける。

こんな子ども一人押し潰せないことに苛立ちを覚え、無駄なところにも力が入り、徐々に意地になって行く大猿。

「せーえのつと」

「ブウモオオオツ?!」

非力なはずの子どもに力負けし、為す術もなく壁に押し込まれる。

その姿はまさに極東の昔話に登場する金太郎の通り。

小柄な体格で大柄の敵を相手に無双する姿は、御伽噺の登場人物のよう。

大猿はたった今、少年との純粹な力勝負に負けたのだ。

「よっころっせつと」

大きな地響きをあげて、大猿を頭から垂直に地面に叩き落とす。

打ち所が悪かったのか、大猿は呻き声を上げることなく静かに落ちた。

徐々にその体が崩れて行く様を見て、少年は腕の大きさを元に戻して行く。

あらゆることをいとも簡単に成し遂げて行く少年の姿に、リユウは不安を募らせて行くばかりだった。

どんな相手も置き去りする縦横無尽の立ち回り、大柄な相手にも引けを取らない怪力無双のスタイル。

スピードやパワー、テクニックが並外れている。

冒険者になったばかりで、モンスターに対して引けを取らない意気込みを見せるものは珍しくない。

彼のように、恐怖心の類を一切かなぐり捨てて戦う者を何度だって見てきた。

そんな彼らと比べて、ラジエルは特筆して飛び抜けている。

否、強すぎると言ったほうがいい。

強すぎる者の末路は総じて凄惨なものばかりだ。

驕りや慢心などで簡単に命を散らす者がその大半を占める。

リユールはとても不安なのだ。

いつの日か、そう遠くないうちに、彼が死んでしまうような気がして。

「これもだいたいじょーぶそう。

力負けしてないし、体もへーき。

もつと下に行ってもいいよね」

「え、ええ……」

少年は確かに強い。

だが初めてだ。

こんなにも強さを持った者に対して不安を感じてしまうのは、嫌な予感ほど良く当たる。

遠からず、彼はとてつもない運命に巻き込まれて行くことになるだろう。

根拠はないが、リユーの中の直感がそう告げている。

彼の死因は、負ける絵を想像させない戦いの中の戦死だろう。

戦いを見れば見るほど、嫌な幻界が目を覆っていく。

少年の話してくれたあの赤い風景が、いつの日か彼自身の手で引き起こされそうで、胸が締め付けられる。

「ラジエル？」

「んー？」

なあにリユー？」

「初めて大きい敵と戦ったことですし、大事を取って休憩にしましょう」

「えー、あんなの全然へーきだって」

「ダメです。」

忘れたのですか？

ダンジョンで行動をする際、私の言う事を必ず聞くと言ったでしょう。

自分が感じていないだけで、疲労は溜まっていくものです。

ほら、おいで？」

「うん、わかったよ」

半ば強引に休憩を申し出ることにした。

分かつている。

今の戦闘をした程度で、彼に休息の必要はない。

後数体のシルバーバックとの戦闘を行ったとしても、休息を取る必要はないだろう。

だが、いずれ必ず訪れるであろう凄惨な未来を前にしたりューは、彼を抱き締めたくて仕方ない。

こうしてラジエルを抱き締められるのも、そう多くないかもしれないからだ。

彼にとって、自分は一体どう言った存在なのかは分からない。

でも、少なくともリューにとっては掛け替えのない存在だ。

初めていつまでも見守っていききたいと思えた子。

例え自分の命を張つても生きていて欲しいと思える大切な人。

ただの庇護欲なのかもしれない。

か弱いものを守りたいという自己満足から出た気持ちなのかもしれない。

「苦しいよりユー。」

ちよつと力強い……」

「ごめんなさい、でももう少し……このままで」

それでも、やっぱりリユーはラジエルと寄り添って生きたい。

一体何が自分をここまで変えたのだろう。

いくら記憶を遡っても思い当たる節がない。

初めて会った時だろうか。

彼の過去を聞いた時だろうか。

傷だらけになった姿を見たからだろうか。

それとも、自分を慕ってくれているからなのだろうか。

いくら考えても答えは出そうにない。

分らないのだ。

自分がここまでしてラジエルを守りたいと思えることが。

恐らく、今の自分の頭で考えても答えは出ない。

不安が心の大部分を占めてしまっている以上、前向きな思考がどうしてもできない

名残惜しいが、この問題については先送りにしよう。

いつの日か必ず答えが出ると信じて、今は精一杯彼と共に生きよう。

例えその先に、目を背けたくなる現実を突きつけられようとも。

「ほう…… 奴が、そうか」

時間を遡ること五日程前。

とあるファミリアがダンジョン探索のため、大規模な遠征が行われた。

おおよそ十日ほどダンジョンに潜り、冒険者の鍛錬と物資の採取、モンスターの動向等を探るのが目的だ。

ストレスや疲労が切り離せない環境に十日も身を置かなければならないため、精神訓練の機会とされている。

そんな中、二神の神が会話に花を咲かせていた。

場所には少々花が無いが。

「え、ウソ？」

あの子、ダンジョン潜って初日でインファント・ドラゴン倒しちやったの？」

「ウチの子の話やとそうなんやて。」

実際この目で見た訳やないからはずきりとしたことは言えんけどな？」

「でも嘘は言っていないんでしよう、その子は」

「うんにや、それは勿論確認済みや。」

せやから余計に気になってしゃーないねん。

聞けばオラリオに来てそう時間も経ってないんやろ？

尚更興味あつてな！。

そんでまたこれがかわええねん！」

「本当にブレないわね、あなた……。」

「まあこの話はいずれまた長々と語つたるわ。」

それよか今は次の遠征の話や。

次もヘファイストスの子、一緒に来てくれんのやろ？」

「わざわざあなた自身が来なくてもいいのに」

「暇やからな！」

ロキは次の遠征の話をしにヘファイストスのホームである工房へ訪れていた。

どこかしこにも職人の魂といえる道具が置かれており、煤で汚れた炉が未だに現役であると感じを露わにしていた。

ここで武具が生み出されていたと思うと、ただの工房ではなく一つの聖地のように感じる。

数えきれないほどの冒険者たちを危機から救ったものが、ここでは幾つも生み出されていたのだから。

だが、この工房では最早その役目を果たすことはほとんどない。

彼女は鍛冶の神と名高い神匠ヘファイストスなのだ。

人が自分たちの手で手掛けたものを世に広めて生計を立てるといふ世界の営みは、たとえ神であろうとも気安く手を出していいものではない。

ここで彼女がすべき事は眷属たちに鍛冶の心得を唱え続けることと、見守ることだけだ。

加えて彼女が手掛けた武具はこの世のあらゆる職人を凌駕し、ナイフ一本ですら莫大な資金がなければ商談にすらならない。

無論資金があると言っても、彼女も神の力を封印している為破格の力を宿したものは

できない。

とはいってもその神としての技術は失われていない故、彼女が打ったものは何であれ超高級品扱いとされる。

よつて、気軽に槌を持つ訳にはいかないのだ。

「……………そう、彼がもうそこまで行っちゃったのか。

これは、約束の時はそう遠くないかもなあ」

「なんか言うた？」

「いーえ、ただの独り言。

それで話はそれだけ？」

「こつちも遠征の準備に向けて忙しいんだけど」

「まあまあそう固いこと言いなさんな。

実はな、ちよつとばかしキナ臭い情報仕入れたんよ。
闇イグイルス派閥の動向についてや」

「ああ、あの野蛮な連中のことね。

噂は聞きたくなくても勝手に耳に入ってくるわ。

汚い話から腸が煮えくり返る話までね。

昔の貴方じゃないんだから、ちよつかいをかけるような真似は控えなさいよ？

悪ふざけじゃ済まされないからね」

「分かるとるよ、ウチかて沢山の子ども抱えてんのやし。

へフアイストスも無視できん内容やの、分かるとるやる？

連中の狙い、魔剣らしいやんか」

「……」

特殊な能力が備わった武具はいくつも存在する。

決して刃毀れしない剣や魔法の類を吸収する防具、装備者の力を跳ね上げる物などが存在する。

武具の中でも特別中の特別、スベリオルズ特殊武装と呼ばれる。

しかし、この武具は鍛冶師の中でも上位の鍛冶師でなければ製造不可能である為、街中ではほとんど流通していない。

また特殊武装は必ずその者の専用武装となるので他人には使いこなせない。

だが、これらの能力を併せ持ち、かつ量産可能の段階まで押し上げる武器が存在する。それが魔剣と呼ばれるもの。

魔剣の中には強力な魔法が内蔵されており、一級品であればあるほど城一つを一振り

で破壊できる力を持つ。

一説によれば海を焼き払ったとされるものも存在する為、その力は現代でも求められ続けている。

唯一の欠点とされるのがその耐久性にある。

個体差はあるが、基本複数回魔法を解放すれば粉々に砕け散ってしまう。

何度使えるかは砕けた後でしか数えられないが、一度でも解き放つことができれば脅威としては十分だ。

「多分、連中の狙いは魔剣であつても魔剣じゃないわ」

「せやな。」

アレは何本集めてもいつ壊れるかは分からんから不安しかない。

せやからその根本の問題を解消しようと動くのが定石。

あいつらが集めてんのはそれを打てる鍛冶師やろ？」

「……そうね。」

多分……いえ、きつとそうだわ」

「ウチのお得意様やからこうして直接注意に来たんやで？」

ゴブニユファミリアや鍛冶業界のファミリアにはもう連絡を回してある。

そんなかでもいつちやん危ないのが、アンタんとこやって話や。

…… おんのやろ？

そいつを打てる子がこのファミリアに」

「まだ入って日は浅いんだけれどもね」

力なく笑うヘファイストスの顔を見て、おちやらけた顔を真面目に引き締めるロキ。魔剣といつても、経験を積んだ鍛冶師であれば誰でも打てるという訳ではない。ステイタスにも記載されないその者だけが持つ特別な力。

魔法を扱える精霊の力を武器に下ろすことができる者だけが、唯一魔剣を製作することができる。

そんな希少な家名を持つ、魔剣製作の代名詞と呼ばれた一族の血が、未だに続いている。

そしてそれが、このヘファイストスファミリアに入団しているとも知れたら。

「…… あの子への贈り物以前に、ウチの問題を消化しないといけないよね」

悪魔の指先は、間違いなく迫ってきている。

この平穩な世界を脅かす悪しき思惑が、膨らみ続けているのだ。それを払い除けられるかは、抗う者達たちの宿命なのだろう。

第23話 少年、呼応する

そして、時は今へと戻る。

へファイストスファミリアのメンバーを加えたロキファミリアの遠征組は、止め処なく湧き続けるモンスター相手に苦戦している最中だった。

いつもより数が多く、いつもよりスムーズに戦闘がこなせない。ダンジョンの変化を、その身をもって体験していた。

「待つて待つて!!」

今日のダンジョンなんか全然違う!!」

「口より先に手エ動かしやがれバカソネス!!」

「陣形を乱すな!

常に援護に動けるよう立ち回れ!

B班、右方に散開しつつ距離を取れ!

倒しきれないなら守備に徹しろ!

C班用意はいいか!?

態勢を整え次第、後方支援用意！」

ダンジョンでは何が起きるか分からない。

これは冒険者の間でよく耳にする言葉だ。

人生においても何が起きるか分からないというが、ことダンジョンにおいてはそれが顕著に現れる。

例えばいつもと違うモンスターの行動パターン。

影響を受けにくい上層では滅多にあることでは無いが、中層からは話が変わってくる。

群れをなす種類がその日はほとんど群れをなさなかったり、好戦的ではないモンスターが好戦的になったりと変化が生じることがある。

これらは基本的に見ればそんな日もあるのだろうと受け流すかもしれない。

だが、ダンジョンに潜って日が長い者であれば、それが何か起きる前兆なのだと思っただけかか。

熟練者になればなるほどそういった変化に対して敏感になってくる。

そう、起こり得るはずのないと思っていた変化が起きた。

それだけで、いつも通りの考えでは生き残れない。

「ホーネット多すぎっ!!」

すぐ後ろにヘルハウンドもいるんだよ!」

「バカ!」

それだけじゃねエ!

ライガーやらリザードやらうじやうじやひしめいてンぞ!!

どうなつてやがるこりゃ!!」

「いつもよりモンスターたちが興奮している!!」

普段がち合うことのない奴らまでが関係なく湧き出てくるぞ!」

「どれだけいても、斬るだけ。」

リヴェリア、私が斬り込む」

「分かった、援護する!!」

ティオナ! ベート!

態勢が整うまで奴らをアイズに近づけるな!!」

「合点!!」

「ああめんどくせエ!!」

際限なく湧き出るモンスターたちは、狭い通路にひしめき合い興奮している。その絵はまるで魑魅魍魎。

これだけいても、ダンジョン内ではこれがごく一部の種類といのが恐ろしい。しかし所詮は暴れまわるだけの烏合の衆。

ただ各々勝手に暴れているだけで、統率が取れているというわけではない。

そこに突破口がある。

アイズはそれを、強引にこじ開けにかかる。

彼女の周囲に風が巻き起こっていく。

唯一の魔法にして、強烈な突風を自身に纏い、近づく者全てを切り刻む必殺魔法。

それを妨害せんと一齐に無防備な姿に飛びかかるモンスターたち。

視野の狭まった獲物を逆に利用して、ティオナとベートは周囲の敵を薙ぎ払っていき。

質量の多さには手こずるが、まともに立ち会えば一掃など容易い。

文字通り一撃でモンスターたちを再起不能にしていく。

「今だ！」

切り開けアイズ!!」

『テンベスト
目覚めよ』

「離れるテメエらっ!!」

真空の刃を全身に纏った状態で敵の密集箇所に向かって突進する。

右手に持つサーベルが唸りをあげて肉を断ち、渦巻く風が周囲の敵全てを切り刻む。

即席の人間大砲は一瞬でモンスターたちの意表を突き、たった一人で形勢を逆転させてしまった。

風と共に全てを斬り捨てるロキ・ファミリアの期待の星、それがアイズ・ヴァレンシユ
タインだ。

「好機だ!!」

総員、一気に殲滅しろ!

「まっかせてえ!!」

「分かってらア!!」

いちいち指図すんなババア!!」

「誰がババアだ、丸焼きにするぞ!!」

天秤は傾く。

モンスターへの吹き溜まりとなっていた箇所は、アイズの特攻によって崩された。突然の攻撃に動揺が走るモンスターたちは、猛攻の手を緩めてしまう。

これを好機とみなしたリヴェリアは団員に一掃の号令をかけた。

一気呵成とばかりに畳み掛けていく団員たち。

殲滅にはそう時間はかからなかった。

徐々に崩していくばかりが戦いではない。

時に奇策を、時に奇襲を持って打開にかかる。

戦況を覆すためならば、時には現状維持に努めて防衛に徹し、一気に穴を突く猛攻に転じられればいい。

その戦術を、リヴェリアは正しく実践した。

「もう……大丈夫、かな？」

「みてエだな。」

「まったく、何だったんだあの雑魚の湧き具合はよオ？」

「ハッキリ言って異常だったぜ。」

「前に来た時はこんなじゃなかったろ」

この場で暴れまわっていたモンスターは掃討された。

大した相手ではなかったものの、やはり物量で攻められるのはいつだって辛い。

例え相手を取るに足らない雑魚であっても、こうも立て続けに戦闘を強いられるは厳しい者がある。

力を付けて来ているとはいえ、ロキ・ファミリアの団員の最高レベルは3。

それもたった3名のみ。

アイズやティオナ、ベートは未だLv. 2。

その他の団員に至っては全員がランクアップ前。

Lv. 3のリヴェリアがいても、ほとんどがLv. 1の団員をまとめあげて戦うのは厳しい。

力量不足をカバーするのも一筋縄ではいかないのだ。

「折角みんなの経験積みに遠征組んだのに、これじゃ全然長続きしないよ。

ねえリヴェリア？

早いけど階層主のどこまで行っちゃおう？

流石にこれが続くともたないよ」

「そうだな……これは完全に誤算だった。

この調子が続けば、持って来た食料や備蓄の配分にも影響が出る。

ヘファイストス様の団員もお借りしている以上、わざわざ危険を犯すことはできない。

皆には申し訳ないが、今回は遠征を早めに切り上げるとしようか」

「オイオイ、こんなモンで終わらせる気かよ。

こんなんじや経験値エクセリアの足しにもならねエぞ？

経験不足を解消するいい機会じゃねエか。

いけるとこまで行つとこうぜ？」

「全員がお前のように戦えるわけではない。

それにさつきも言ったが、今回はヘファイストス様の団員をお借りしている。

我らだけならいざ知らず、このまま続けば彼らまで危険に晒してしまう。

ましてや最近のダンジョンは不安定だ。

下手をすれば先ほど以上の戦闘を強いられる可能性も十分にある。

悪いが今回は早々に切り上げる」

「ケツ、そうかよ。

ああつまんねエ」

「何も別にこれつきりという訳ではないんだ。

また日を改めて仕切り直せばいい。

焦ってもいいことなど有りはしないんだからな」

ベートはつまらないと吐き捨てる。

ロキ・ファミリアで最も好戦的な狼^{ウエアウルフ}人、ベート・ローガ。

短刀と持ち前の身体能力を駆使した体術を用いた戦法を好む、ファミリアきつての特攻隊長的存在だ。

また、その脚の速さは団員の中でトップクラスであり、その長所を生かした戦法は他の仲間を助けたりモンスターの注意を引くことに長けている為、ファミリアの中でも一目置かれている。

ただ、ケンカっ早い性格から挑発に乗りやすく、自身より弱い者は見下す傾向にある。何れにしても、ロキ・ファミリアの主力の一人として恥じない戦力を有している為、他ファミリアからも注目を集めつつある。

ベートの提案を一刀両断の元斬り捨てるリヴェリア。

自分たちだけならまだしも、今回はヘファイストス・ファミリアの団員たちを引き連れている。

彼らは経験を積むことだけではなく、ロキ・ファミリアの団員たちの武器の整備をする役目を担っている。

遠征という長期の戦闘を強いられる環境は、武器の摩耗に拍車をかけてしまう。整備を怠ると戦闘中に破損し、不利な状況に陥る可能性が出てくる。

簡単な整備に関しては団員それぞれに知識はあるが、数日間地上に戻れない遠征においては専門の知識を持って整備をしなければ武器の状態を良好に保てない。

故に、遠征においては彼ら鍛冶師をパーテイに組み込むことが基本となっている。彼らは冒険者ではあるものの、根っからの戦闘員ではない。

自衛の手段は当然持ち得てはいるものの、基本的には支援員の枠を出ない。

支援を受け持つ団員が戦闘もこなさなければならぬとなると、役割分担の意味が成り立たなくなってしまう。

彼らが戦うことは最終手段である為、これ以上余計な負担をかける事は出来ない。

最近のダンジョンは極めて不安定であることが、冒険者たちの間で話題になっている。

産まれる間隔が早まった、好戦的な種類が更に凶暴になった、能力値が上がっているなどの話が街中では飛び交う。

この謎を解明するためにギルドから推薦された調査団が派遣されたという話があつ

だが、一週間以上経っても使者の一人も帰ってこない。

だからと言って、戦死したという訳でもないようだ。

神に恩恵を刻まれた者は、目に見えない回路パスのような者が繋がっており、何処にいかまでは分からなくとも生存しているかどうかは判断できる。

そのため、死亡すれば神との繋がりは絶たれ、誰の恩恵が消えたかどうかを主神は判別することができる。

現在そう言った報告は届いていないため、調査団の面々は死亡こそはしていないと思われる。

「このまま進んで嘆きの大壁へ行き、ゴライアスを撃破した後には十八階層で休息を取って地上へ戻った方がいいだろう。」

この戦力なら、ゴライアスを突破するのには十分。

堅実に攻めていけば最悪の事態になる事はないだろう。

道中先ほどと同じような戦闘になる可能性が高い。

皆、各々周囲を警戒しながら進んでくれ」

「あいあいさー！」

「うん、わかった」

「へーへー」

全員の了承の意を確認し、注意しながら進む一行。

ダンジョンの異変は今日に始まったことではない。

それ即ち、現在進行形で危険度が増していることを指す。

嘆きの大壁の手前でモンスターたちの凶暴化。

ダンジョン全てのモンスターたちが一斉に強化されている。

では果たして、階層主が従来通り現れると思えるだろうか。

「あ、あれは一体……？」

ふと誰かが呟いた一言。

先ほどの疑問の答え、それは否である。

ダンジョン中のモンスターがある日を境に凶暴化を果たした。

つまるところ、これは階層主にも何らかの影響を与えていたとしてもなんら不思議ではない。

階層主は確かに他種を凌駕する力を秘めた強力な種であるが、階層主とは誰かが勝手に

に名付けた総称。

広い視点で見れば、階層主も他と変わりないモンスターの中のひとつ。

このモンスターが犇めく巢窟においては、別段珍しくないモンスターなのだ。

ただでさえ強力な力を有した階層主。

それが異変によって凶暴化が付与されている。

「オオ……！！」

迷宮モンスターレックスの弧王の異名を持つ灰色の巨人。

筋骨隆々にして、全長7mを越す巨体。

遠距離攻撃手段を持たない代わりに、圧倒的質量を持つて冒険者たちを蹂躪する破格の存在。

一步踏み込めば戦意を削ぎ、ひと睨みを効かせれば背を向けさせる威圧感。

本来であるならば、大人数でパーティを組み、魔法支援を駆使して前衛部隊と攻撃を入れ替えていけばさほど苦労はしない。

だが、この姿を見た者であるならば誰でも痛感できるはずだ。

アレはまるつきり別の個体であると。

「赤いゴライアス……!!」

真紅の巨人ゴライアス。

本来の色はなく、その体は烈火の如く赤い。

大きさは9 m程と巨大となっており、巨人ならではの威圧感が一層際立っていた。リヴェリアの頭には、まともに戦うという選択肢は消えつつあった。

「総員戦闘態勢!!」

倒そうなどと考えるな!

死なないことを第一として交戦せよ!」

この日、赤き巨人との戦闘により、冒険者たちは冒険をすることとなる。

「……?」

変ですね、こんなに揺れが続くなんて」

「なんで？」

揺れるの、そんなに珍しいことなの？」

「いえ、揺れ自体はそんなに珍しいことじゃありません。

ただ…… どうもおかしい。

不規則な揺れがある事は時折ありますが、この揺れ…… どうも断続的に続いています。

そろそろ嘆きの大壁に近づくはず。

もしかしたら、誰かがゴライアスと交戦した余波なのかもしれませんね」

「ごーらいあす？」

「はい、灰褐色の巨人ゴライアス。

身体がとてつもなく大きく、非常にパワーの強いモンスターです。

まあ大人数で戦えばさほど苦労する相手ではありませんよ。

魔法を使える者がいれば尚更楽に戦えます」

「強い？」

「ラジエルでも苦戦は免れませぬね。

ああ、一人で戦うのならという意味ですよ？

絶対戦わせませんけど。

単純に大きいだけといつても、まともに戦えばすぐに押し潰されてしまいます。

それに、貴方が戦うには早過ぎです。

まだまだダンジョンでの戦い経験して、いっぱい勉強してください」

「うん、わかった。

あ、そーいえば俺魔法使ってないや」

「今はそんなに焦って使わなくても大丈夫ですよ。

どんな魔法かも分かりませんし、燃費がいいのかどうかも分かりません。

最悪一回使って即気絶なんてことに成り兼ねませんから、使う際は必ず私の見てるところでする事。

いいですか？」

「はーん」

断続的に続く振動に不信感を抱いたりユー。

階層主が暴れている可能性が高いため、近寄らないようにすることにした。

少年が巨人を見れば、間違いなく戦おうとするはずだ。

多勢に無勢とはいえ、流星にステイタスに差がある少年が戦いに混ざっても戦力には

成り得ない可能性が高い。

連携や集団戦闘の経験を全く積んでおらず、ダンジョンでの経験が浅すぎる。危機感も薄いため、交戦は控えるべきだろう。

「(それにしても……)」

やはりどうもきな臭い。

リユーも、ここ最近のダンジョンの変化には勘付いていた。

どうもモンスターが活発に成り過ぎている。

先ほどのゴブリンとの戦闘とてそうだった。

通常集団での行動、戦闘を好む性質のあるゴブリンたちが何故少数で挑んできたのか。

自棄になっていたわけでもこちらを侮っていたわけでもない。

何かに取り憑かれていたかのような姿だった。

ここまで変化が如実に表れるのも珍しい。

何らかの介入があつたようにしか思えない有り様だ。

「ラジエル、今日はここまでにしてそろそろ上へ」

「リユー、何か来るよ」

「これは……？」

少年の言葉から気配を探ると、そう遠くない前方から複数の敵視を感じる。

この薄暗いダンジョンの中だ、モンスターといえど間違いなく目視はできていないはず。

先ほどもそうだ。

モンスターはまるでこちらの居場所が分かっているかのように奇襲を仕掛けて来る。

視界の悪いこの空間でも、寸分の狂いなくこちらを捕捉し、四方八方から息つく間もなく飛んできた。

どうということなのだろうか。

凶暴性が増したことで感知能力の向上。

中層のモンスターから兆候が見られればまだ納得がいく。

しかし今回は上層からその兆しが見えていた。

やはり今のダンジョンは普通ではない。

「前からだけじゃない。

後ろからもいつばいきてるよ」

「退路は塞がれているということですか。

ラジエル、こういうった場合どんな行動が適切だと思いますか？」

「んーと、とりあえず前の敵を倒す？」

「いいえ。

それでは後方からの敵に襲われてしまうでしょう？

簡単に今を整理します。

今私たちがいる場所は15階層の通路。

道は前後ろしかなく、それはモンスターで塞がれています。

ここには私と貴方の二人きり。

さて、ここまで言えば分かりますか？」

「ああそっか。

分かったよりユー」

凶暴な唸り声が近づく。

数は前だけでも10以上。

見えていないだけで後続にも大量に控えているかもしれない。しかし、それに臆する面子ではない。

ここにいるのは戦闘においては熟練者の位置に達する二人。

片や籠手の紐を締め直し、片や木刀を握り直す。

前門の虎に後門の狼。

退路は既になく、強行突破は望めない。

ならば残された道は戦うことのみ。

「えっと、何だっけ……」

あ、そうだ思い出した。

リユー、せなかはまかせた」

「…… リーヴァか誰かが変な本を読ませましたね。

帰ったら必ず探し出して折檻します。

まあでも、間違つてはいませんか。

ええ、お任せ下さい。

貴方の背中には、誰一人として近づけさせませんとも」

互いに背中を預けて前方の敵にのみ注視する。

これで敵は目の前だけ。

信頼関係を寄せた者通しだからこそ成立する陣形。

相方に不足なし。

後は敵を殲滅させることのみ。

「数分も掛けるつもりはありません。

無粋な輩は、早々に退場してもらいますよ」

「そっころで行くよ。

悪く思わないでね」

そうして二つの影が駆ける。

暴風と突風が逆に敵を食い殺さんと牙を剥く。

今日はいつもとより、ダンジョンが騒がしくなる一日となるだろう。

これから待ち受ける現実を、誰も予想することもなく、冒険者たちは今日も武器を振るう。

第24話 少年、揺れる

「止まれ!!」

本日はダンジョンに入ることを禁ずる!」

「は、はあ?」

何だよいきなり、わけ分かんねえよ。

潜るのは個人の自由のはずだろ?」

「今日はギルド上層部からダンジョン進入禁止令が下された!

暫くはダンジョンに立ち入ることは許可できない!

これはギルドによる決定だ!

規制が解けるまでは皆この街にて待機せよ!」

「ええー!!」

クエストの採集達成できないじゃん!

幾ら何でも勝手すぎ!

せめて説明くらいいちゃんとしなさいよ!」

「詳しくは言えないがこれは既に上部より下った決定だ。

これに背く者はファミリアにペナルティを課すことも辞さない。

それが嫌なら待てとしか言えない！」

突如ダンジョン入り口にて敷かれた厳戒態勢。

ギルドから下された決定は、例え主神であろうと簡単には覆すことはできない。

ギルドに楯突くとなればそれ相応のペナルティを課されることとなり、資金の没収やダンジョンへ潜行する規制等の罰則が発生するため、皆口々では文句を述べようともこれに背くことはできない。

即ち、既に潜行している者たち以外は、ダンジョンへの一切の立ち入りが拒否されるということ。

唐突に無茶な判断を下すことがないギルドの反応だからこそ、尚更理解できない。

何故このタイミングで潜行規制が起きたのか。

「はあ、皆好き勝手に言ってくれちゃうわね。

立ち入り禁止が設けられる程の事態になってるってことぐらい、想像できないものなのかしら」

「まあまあ、実際そこまで頭が回る人ばかりじゃないんだから仕方ないよ。

僕らも完全に出遅れちゃったから、完全に他人事の話じゃないし。

こればかりは、リヴェリアたちを信じるしかない」

「まあ…… 団長がそこまで言うなら。

でもでも、私たちが出遅れたのも仕方のないことじゃないですか！

ウチの安泰として本当に外せない会談でしたし、各方面に挨拶に回らなきゃ行けなかつたし、本当にどうしようもなかつたんですよ！

でも団長と二人つきりで出かけられる時間だったから嫌ってことじゃないんですよ？

むしろ嬉し…… あ、いやいやそうじゃなくって！

なんて言うか、こう…… あの、い…… いい経験になるって意味で！

いや、ゆくゆくは違う意味でいい経験をしたかと思つて…… ああごめんなさい！！

まだ日が早いですよね！

こういうことはもつと時間をかけてというか、私たちの関係をはつきりさせてからというべきか！

「うん、そうだね。

今はここであれこれ問答していても仕方のないことだね。

団員を信じて帰りを待つことも、僕たちの立派な役目だ。
帰ろうテイオネ。

ロキが待ちくたびれて待つてる」

「そ、そうだねって…… いやーん!!

団長つてば大胆!

そうですね、そんなに焦る必要ありませんよ!

じっくりと時間をかけて、ねつとりとじつとりとジワジワ私の魅力を団長に伝えられればいいですし……。

ああ子供の数は何人がいいですか!?

私はせめて二人は欲しいかなって前々から思っていたりして!

でもでも!

団長がもつと欲しいっていうのなら私はいくらでも頑張りますよ!!

子供ができた後でも夜の営みを疎かになんてしませんよ!?

家事全般も子育てもきちんとなしてみせますし、正妻として役目は立派に果たしてみせます……。つてああーん団長!!

待つてくださいってばあ!!」

槍を携えた少年は、冷静にギルドの決定を分析していた。物事は常に一側面しか表に出てこない。

隠されたその裏側にある側面を考えて想像し、他の要素から冷静に分析して全てを見通さなければならぬ。

見えるものだけで判断するのではなく、その裏側も見据えるべき。

団長と呼ばれた少年は、踵を返して自分のホームに向かって足を運び始めた。

ここで騒ぎ立てても自体が好転するわけではない。

今は職員の言う通り、待つ他ないだろう。

「皆、必ず生きて帰れよ」

仲間の生還を信じ、二人は去って行く。

自分たちのやるべきことを果たし、次の一步へ進むための準備に取り掛かる。

そう、いつだって自分たちにはやることがある。

人の一生はそう短いものではないが、いつまでも続くというわけでもない。

生きているうちにやれることは限られている。

時間を無駄にしないよう、今できることに精一杯取り組む。

今は自分たちの帰りを待つ、親の元へと帰ろう。
そこから、次にするべきことをはっきりさせよう。

見た目に似つかわしくない雰囲気を携えた少年は、小さな笑みを零してダンジョンを後にする。

親とともに、皆の出迎えをするために。

「ツツ!!!」

「クソっ!」

攻撃範囲が広すぎる!!

避けきれ……ヒッ、うあああああ!!!」

突然変異体のゴライアスには、戦法と呼べるものが一切通用しなかった。

通常のゴライアスより肉体は強固になっており、持つはずのない特殊攻撃と呼べる術を持つていた。

まずは咆哮ハウルと思われる強力な衝撃波。

ただ雄叫びをあげるだけの簡単な動作なのだが、この巨人がそれを行うと話が変わってくる。

咆哮^{ハウル}発動時は生半可な魔法の類を通さず、同時に生じる物理的衝撃波はあらゆる冒険者を吹き飛ばす。

一度吼えれば身体が吹き飛ぶ。

それに耐えようと身構えれば無防備な姿を晒してしまう。

予備動作がない上に届く範囲は広く、連射も可能だ。

加えてこの嘆きの大壁前の広場、身を隠せる障害物がほとんどなく、さほど広い空間ではない。

自然と動きは限定されていき、身動きの取れなくなるところに総攻撃されるのが関の山だ。

「チツ……くしょっ!!」

せめえ中アクティブに動くんじやねえよ!!

咆哮^{ハウル}と同時に動かれちゃいい的だぜ!!」

「てかかったあ!!」

大剣が通らない時点で意味不明だし、そもそもこっちの攻撃全然通らないんですけど

!!

「攻撃は陽動程度にしておけ！」

気を抜けば一瞬で持っていかれるぞ！」

「っ……硬い。」

でも、斬れないわけじゃない」

「動きを止める！」

皆、その間に安全階層^{セーフティポイント}まで走れ!!

あの荒くれ供も、この惨事ならば加勢にやってくる!!

援軍を呼んでそこを叩け！」

「りょーかい!!」

殿は私たちがするから、みんなは先に行つて!!」

「い、行くぞお!!」

赤き巨人の体は極めて堅牢。

まるで鋼のような硬度を持ち得ており、Lv2の冒険者から繰り出される攻撃もほとんど通さない。

咆哮は敵を跳ね除け、鋼の肉体は一切の攻撃を遮断する。

そしてその巨体から繰り出される一撃は、どんな防御も破壊し、押しつぶしてしまう。一見攻防ともに優れたモンスターに思える。

しかし、どんなに強い相手であっても、付け入る隙は必ずある。今はそれを懸命に探し出すしかない。

『終末の前触れよ、白き雪よ。』

黄昏を前に風を卷け。

閉ざされる光、凍てつく大地。

吹雪け、三度の嚴冬——我が名はアールヴ』

「アアア!!!」

「吹き荒れろ!!」

「いい加減こつちを向きやがれエ!!」

「切れないなら殴るまでっ!」

リヴェリアの詠唱が紡ぎ終わるまで耐えなければならぬ。

アイズは風を吹き放ち、咆哮ハウルの効力を最大限減衰させる。

その間懸命に両足を攻撃し、ゴライアスの注意を引こうとするベートとテイオナ。

少数精鋭でここまで息の合った陣形はなかなか取れるものではない。

誰もが鍛錬を怠らず、誰かの為に力を尽くそうとする心意気から生み出された結果。

今まで現状に満足せずに戦い続けてきたからこそ、少数でもここまでのことが出来る。

タイミングは完璧だ。

魂をも凍り付かせる吹雪が、大規模において展開される。

「『ウイン・フィンブルヴェトル』!!」

解き放たれた魔法は触れるもの全てを凍てつかせる冷気となり、ゴライアスの下半身
をみるみる氷で覆わせていく。

だが全身を凍らせるには無理がある。

一度解き放ち、その後も精神力を込め続ければ或いは全身を凍り付かせる事は出来る
だろう。

それをしてしまつては確実に精神疲弊マインドダウンを引き起こし、最悪の場合はその場で意識を
失つてしまう。

危険な賭けをするよりかはこちらの方がマシ。

より確実性のある可能性を掴み、反撃に打って出る。

今の彼らに勝機はない。

ならば一時撤退だ。

態勢を立て直して、徹底抗戦と行くべきだ。

「走れえ!!!」

氷が砕けるには少し時間がかかる。

その間ゴライアスはその場から動く事はできない。

このまま安全階層^{セーフティポイント}まで一気に駆け抜ける。

必ず間に合う。

氷が派手に砕け散る音を聞くまでは、少なくともそう確信していた。

「オオツツ
!!!!!!」

「な……なんだとオ?!

「テイオナア!!!」

「行って!!」

「ティオナ！」

巨人は、自身の左足を氷諸共砕いた。

反動でもう片方の氷の枷も破壊され、一本足の跳躍を持って四人に迫り来る。

完全に誤算だ。

リヴェリアは一瞬で後悔の念に苛まれた。

せめて片腕まで凍らせておくべきだった。

機動力だけ奪うのではなく、動きの選択肢をも狭めておくべきだったのだ。

少女は懸命に腕を伸ばした。

三人の大事を優先し、下り坂となつている通路に自分を除いた全員を突き飛ばす。

全滅寸前のところで見出した唯一の道。

それは、簡単に真似することの出来ない自己犠牲の姿。

ティオナは三人に託した。

アレに目を付けられては生きて出られない。

みんなと力を合わせて、必ず倒して欲しい。

そして、必ず生きて帰って欲しい。

ただそれだけを願った決死の選択。

「必ず…… 後で追いつくから！」

「テメエエエエ!!!」

んな馬鹿な真似があるかよオオオオ!!!」

「必ず助け出す!!」

それまでの辛抱だ!!

死ぬんじゃないぞ!!

死ぬなテイオナアアア!!!」

やがて三人の姿は下へと消えて行く。

この通路は殆どが下り坂である為、一度勢いをつけて転がり込めばすぐにも次の階層にたどり着ける。

それまで、自分の命があるかどうかは分からない。

振り返れば不恰好な態勢で拳を振り下ろそうとする巨人の姿が迫り来ている。

防御の態勢は取れる。

だが、それでもあの勢いから身を守り切る事は不可能だ。それなりの時間をこのダンジョンで過ごしてきたから分かる。自分に、死が差し迫っていることを。だから、心が挫けそうになる。自分の目の前に、どうしようもない現実が叩きつけられている。

「——————アアアアツツ!!!」

大地が波を打って揺れる。

渾身の力で叩き込まれた一撃は、紛れもなく大地を揺らした。着弾箇所から数十メートルに渡って衝撃が走り、小規模のクレーターが生み出される。

超重量から繰り出される鉄槌。

まともに受ければ一溜まりもない。

人の形すら保てない程の破壊力だ。

「——————ツツツツ!!!」

目標の排除に成功した巨人は雄叫びを上げる。

しつかりと両脚で大地を踏みしめ、肺から空気を吐き出し切るまで声を上げ続けた。

自身で砕いたはずの足は、損壊の後もない。

完全に元通りに再生されたのだ。

これが赤いゴライアスの特徴的特殊能力の一つ、超速再生能力だ。

無尽蔵に近い量の魔力量を込められた魔石を破壊しない限り、如何なる損傷も即座に再生してしまう破格の力。

最早並大抵の戦力ではこの巨人を止められない。

文字通り、このダンジョン内にいる冒険者の総力を結集しなければ、彼らに明日は無
い。

太陽を拝むことなく、このダンジョンの中で朽ち果てる。

ここですべき事を終えた巨人は、次の階層に向けて進軍を行う。

何処に逃げようとも無駄だ。

必ず全員見つけ出して息の根を止めてやる。

そう言わんばかりの思念を漂わせ、邪魔な大壁を破壊して行く。

「……………行つたね」

「ええ……………行つたようです」

「ひぐつ……………えぐ、うええええええん……………」

怖かつたよお……………」

「よーしよし、怖かつたねティオナ。

何とか間に合つたよ」

「……………はああああ。

本当に一時はどうなることかと。

振り回される方の身にもなって下さい……………」

でも、今回貴方の感知を信じた甲斐がありました。

寸でのところで救えたのは奇跡ですよ」

「だって……………だってみんなが死んじやうつ思つてえ……………それ、で私……………頭真つ

白になって……」

「一部始終も見ていないので何ともいえませんが、とりあえず無事で何よりです。貴女は、ちゃんと助かりましたよ」

「うわああああああああん!!!」

瓦礫の陰で息を潜め、巨人をやり過ごすことに成功したラジエルとリユー。堰を切ったように、ラジエルの腕の中で子供のように泣きじやくるティオナ。

死ぬ覚悟で体を張ったとはいえ、死ぬ事はどうあつても怖かったのだ。

恐怖より先に身体が動いてしまっていた。

だから、死んでも後悔はない。

それでも、あの一瞬で二人が助けに入ってくれなかったら死んでいたと思うと、追いつかれた恐怖に反応を示すしかない。

ラジエルは、そんな一途な思いを持った彼女を知っていた。

だからこそ余計放つて置けなかった。

あんな明るい太陽のような目を持った子が、こんなところで命を落としてはいけな

い。

リユーもまた、最初は危険域に飛び込もうとする少年を制するつもりで追いかけた。他人の心配より自分の身を案じること。

非情な対応ではあるが、命のやり取りを延々と迫られるダンジョンにおいては必要な冷徹さだ。

でも、彼の前だけを見ていた姿勢を無碍にすることもまた、リユーには出来なかった。

『ラジエル、こちらは片付きました』

『こつちも終わったよ。』

やっぱり大したことなかったね』

『あの数を相手に言い切れる貴方も相当ですね……………』

まあ、特に大きい怪我もないようで安心です。

流石にこの辺りで引き返しましょう。

またいつ襲われるか分かりませんからね。

……………
ラジエル？』

『……聞こえる』

『聞こえるって、何のことですか？』

『聞こえたんだ』

『だから何が、ってコラ!!』

ラジエル!!

勝手に進んではいけないと言ったはずです!!

止まりなさい!!』

『聞こえる……聞こえた。』

大きい声、小さい声。

覚えてる、この声。

間違いない、ティオナの声だ』

『っ!!』

力づくでも連れて帰りますよ!!』

『行かなきゃ……早く、早く行かなきゃ。』

『月下跳兔』、すぐに追いつくよ』

『私が、追いつけない?!』

くっ、もうゴライアスが目の前に!

見たことのない色ですが、今は関係ない。

止まらなさいラジエル!!』

『あの先に、ティオナがいるんだ』

我を失うほどの窮地だった。

だから、ラジエルもリユ어의制止の声を聞き取れなかった。

戦闘ではなく、救助の為に動いたラジエル。

一戦交える気がないとリユ어は感じとったが故に、彼の意図を察することが出来な

かった。

初めてだったからだ。

少年が、自分の言葉より自分の決断を優先したのが。

これまで受動的に行動していた彼が、初めて自分の目の前で能動的に動いたのだ。

疾走中、一抹の寂しさを胸中に覚えたものの、少年の変化がそれ以上に嬉しかった。

だからこそ、危険を承知で一か八かゴライアスの目の前に滑り込んだ。

拳がテイオナを直撃する寸前でラジェルが彼女を抱え、直撃をリユーが木刀で僅かに

逸らして防いだ。

何かに当たったと気付かせないよう滑るようになすのは至難の技だった。

リユーだからこそ為し得た芸当。

一瞬にしてギリギリの大活劇。

巨人が無我夢中で助かった。

あの時、こちらの姿を冷静に見られていたら、ここで悠長に会話などしていなかった

だろう。

「あの赤いゴライアスといいここ最近のモンスター凶暴化……ここまですればも

う無関係とは言えないでしょう。

あまりにもタイミングが良すぎる。

こんな偶然、普通なら重なることはまずあり得ません。

ティオナと言いましたね。

あのゴライアスとここで何が起きたかを詳しく説明していただきます」

ティオナ救出は上手くいったが、ダンジョンの根本的解決には至っていない。

むしろ本番はここからといえよう。

モンスターが無差別に凶暴化しているのなら、先ほどの色違いのゴライアスも何らかの影響を受けている。

雑魚ならまだしも階層主が更に強化されているのなら、これから待ち受ける戦いは一筋縄では行かない。

最悪死傷者が出る可能性も大いにある。

立てられる策は全て立て、打てる手は余さず打つべき。

「ラジエル、ここまで来てしまった以上致し方ありません。

冒険者として貴方の力を宛にさせていもらいますよ。

覚悟はいいですね？」

「いいよ、のぞむところ。」

「今度はこつちから仕掛けよう」

「ぐすっ……だ、だめだよ！」

『疾風』さんなら大丈夫だと思うけど、ラジエルはだめ！
リオン

「私らLv2の攻撃ですら傷すら付けられなかつたんだよ!？」

「しかもよく分かんない技も仕掛けて来たし、ふつーのゴライアスとは全然違うの！
そんなの相手に、つい最近来たばかりのキミを戦わせるわけには行かない！

「助けてもらってにおいて何だけど……これだけは絶対だめ！」

「大丈夫だよ、ティオナ」

「だ、大丈夫って」

「俺はまだ、ぜんぜん力を出し切ってない。」

「あ、でもオツタルの時はぜんりよくだったっけ?」

「お、『猛者』!!?」

「まあいいや。

何とかなるよ。

リユーだっているし、まだやってない技だつて残つてるし。

それに」

「……それに?」

こちらを全力で止めに来るティオナをやんわり押し退け、大壁の先を見つめる少年。
使い古された籠手はあちらこちらに小さなヒビが走り、脚具には欠損が多々見られた。

体術を軸として戦うことを知っているからこそ、どう考えても巨人を相手にする装備ではない。

裸一貫でドラゴンに挑むようなものだ。

それでも、少年から闘気が途切れることはない。

むしろ初めて会った時よりも強く見えた。

「よく分からないんだけどさ。」

なんか、胸の奥がざわざわして、すごく気持ち悪いんだ。
あの時のティオナを見た時から、ぜんぜん消えないんだ」

「……………」

胸に違和感を感じると少年は言った。

いつもと同じ表情ではあるが、自分の中にあるものに疑問を持ち得ているようだ。

それが一体何なのかは本人にも分からない。

ただ、リユーには何となく検討がついていた。

恐らく、自分の親しい者に対して拳を振るったあの巨人相手に、怒りのようなものを抱いているのだろうと。

もちろんこれはただの推測。

本音は彼の心の中にも入って直接聞かなければ分からない。

だが、リユーには根拠のない確信があった。

あの時より随分と良い方面へ進めている気がする。

淡白で受け身で、自分のことを一切顧みなかった時と比べて、彼は随分と変わった。ここに来て一月程度しか立っていないのに、長い時間をかけて来たようにも思える。子どもの成長は早い。

確かにその通りだ。

そして、それは留まること知らず、まだまだ成長しようとして必死で芽を伸ばそうとしている。

ならばそれを守り、より良い方向へ導くのがリユーの務め。

ラジエルの気持ち、今は最優先したいと考えた故の決断だった。

「では、情報をまとめ、作戦を立てましょう」

決戦に向けて策を練る。

アストレアファミリアの隊長格として、最善を尽くす。

久々の本領発揮に加え、少年の全力を乗せれば通用するかもしれない。

この戦い、どう転ぼうともプラスになるのは確実だ。

せいぜい、弟の良質な経験値エクセリアとなつてもらおう。

第25話 少年、絶望に踏み入る

何かが、自分の中から滑り落ちていく感覚がする。

思いや絆、記憶、感情、涙といったもの。

ほぼ全てがあやふやで、曖昧で、形が一定でないもの。

だが、それらは大切なもの。

人して、なくてはならない不可欠なもの。

自分が自分であるために、決して欠かしてはならないもの。

——
つていく。

この世で大切なものは、形あるものだけじゃない。

確かに、生きていくためには形あるものを消費して、日々を繋げていく事に直結する。

それは生きるために必要なこと。

だが、それは生きていくだけに過ぎない。

生かされていると言つてもいい。

命は、そんな単純に解明されることではない。

ではそれは一体何なのか。

真の意味で生きるとはどういうことなのか。

——く。

——も、かも。

それは、求めること。

形のないあやふやな概念を求め続けること。

それを手に入れることで、自分という器を昇華させられる。

優しさを得られれば、人に手を差し伸べられる。

強さを得られれば、人の道を正せる。

知恵を得られれば、人の行いを導ける。

抽象的概念はそれこそ無限に存在する。

概念に触れることで、自分という器は成長していき、中身は満たされていく。

そうして、触れたものを自分の中で育み、育つたものを周囲へ還元していく。

この世の人の摂理は、そうした人の感情で循環しているのかもしれない。

——た。

ま——一つ、お——。

人の営みとは、そういった形のないもので形成されてきた。

その結果文明が発達し、文化が芽生えてきた。

言語が生まれ、感情が生まれ、輪が広がっていった。

それが人の歴史。

全ては抽象的概念なくしては語ることはできない人の行い。

目に見えないものは総じて信憑性を欠いてしまう。

優しさという概念を知らない者に優しさを説いたところで、その者の心に優しさを響かせることはできない。

それは自分から歩み寄り、求め、そして手に入れて実感するもの。

自分から手を伸ばさなければ、概念は一生涯を掛けても理解することはできないだろう。

歩み寄らなければ、手に入れられないものだ。

—— また、無くしてしまった。

一つ、また一つと溢れていく。

中身のない、空っぽの容器に戻っていく。

総じて、例外というものは存在する。

とある少年が、その枠組みから押し出されてしまっている。

感情の欠落。

記憶の欠如。

人格の欠損。

概念を理解し、受容し、育み、周囲へ広げていくことこそが人生の義務。

それを果たせなくなってしまう時、その者は人といえるのだろうか。

この矮小な存在を見てどうだ。

顔からは表情が消え、無気力で、無関心で、記憶をなくし、人格は元あったものではない。

自分から生きるために大切なものに手を伸ばすことができない。否、伸ばすことを忘れてしまった。

あの日から、少年の心は致命的に壊れてしまっていた。

今ある人格は、心の欠片を無理矢理寄せ集めて形成した不安定なもの。まだ器はある。

周囲の者から、確かに良い影響を与えられている。

徐々に満たそうと、滔々と注がれている。

だが、それを自覚できるのは本人しかない。

——何も、感じなくなっていく。

まるで、砂時計みたいだ。

溜まっては落ちていく、そんなことの繰り返し。

器はあるが、それは決して綺麗に復元されたものではない。

器は心の形そのもの。

彼の心は、とうの昔にヒビ割れている。

中身を注がれようと、溜まらなければ意味はない。

小さく穴の空いた器では、大切なものを保管できず、気づけばすぐに無くなっていく。彼はそれを繰り返し返している。

注がれては零していく。

積もらせては崩していく。

建てては倒れていく。

彼の心は、そうしたものを残せなくなった。

人として大切な何かを、溜め込んでいけなくなった。

自覚があろうとなかろうと関係ない。

もう、純粋な人の道に戻ることが出来ないのだから。

堕ちた者は、堕ちた者に相応しい場所へ堕ちていく。

それが人の道ではないということだけだ。

ああ、やつぱりここへ落ちるんだ。

一つ言えるとすれば、その先は果ての見えない黒ということだけだろう。

それより先は、その先を見た者にしか分からない。

ダンジョンには安全階層セーフティポイントと呼ばれる比較的安全な階層が存在する。

それがここ18階層だ。

岩や土だけのこれまでの階層と異なり、草木が多く生い茂った自然満ち溢れた空間。木々には果物が多く実りをつけていることから、食料の問題もない。

清く透き通った水辺もあるため、ここではオラリオに匹敵するほどの生活環境が整っている。

その高い天井には長年かけて構成された巨大な水晶が剥き出しになっている。

水晶は時間帯により光を発するため、昼のように明るくなる時間帯もあれば夜のように薄暗い時間帯も存在する。

その様はまるで地上のよう。

中にはモンスターも存在するが、ここ18階層に滞在するモンスターは比較的穏やかであるため、刺激さえ与えなければ襲ってくることはほとんどない。

危険に満ち溢れたこのダンジョンの中で、何故このような階層が存在するのかは判明されていない。

分かっていることは、ここが危険なダンジョンの中で貴重な安全な階層であるということ。

ここではキャンプを作ることでもできるため、ここまでたどり着いた冒険者たちは皆体を休め、英気を養うことができる。

しかし、少なくとも今日だけは事情が異なった。

自然豊かで静かな階層に不釣り合いな怒号が飛び交う。

湖を振動させるほどの激動が響く。

その原因が変異した階層主、赤いゴライアスの侵入。

過去の例のない安全階層セーフティポイントに階層主が侵入したのだ。

「ツツツアアアアア!!!」

「ギヤアアアアア!!」

「クソっ……何なんだあのバケモノ。」

今までのゴライアスと全然違え………。

どうなってんだよこりや!!

少なくとも、あいつがまた出る頃合いはまだ先のはずだろ!!」

「原因の究明は後回しにしろ！」

今は目の前の敵に集中せんか！

こいつがこのまま野放しにされれば、お前たちの商売はおろか、冒険すままならな
いんだぞ!!」

「クソツタレがつ!!」

現在変異種ゴライアスと、18階層に在中している冒険者たちが交戦中。

縦横無尽に暴れまわる巨人を相手に、苦戦を強いられている最中だ。

多勢に無勢の状況ではあるが、如何せん相手が悪すぎる。

身体能力が強化されているだけではなく、従来のゴライアスにはない特性を持つてい
る。

厄介極まるのが咆哮^{ハウル}。

叫ぶだけのため、実質ノーモーションでこちらの行動を抑制してくる。

思うように動けず、動けないところに強烈な一撃を見舞ってくる。

加えて魔法の威力を減衰させるあの赤い肌。

リヴェリアの魔法の拘束を容易く引き千切り、強引に攻撃を押し通してくる様には、流石のロキファミアの面々も絶句した。

攻防ともに優れたフィジカルを有しているため、生半可な攻撃は通用しない。

「傷がすぐ様回復するってアリかよ!!」

「何遍攻撃当てても意味ねえじゃねえか!」

「怯むな!!」

「必ず突破口はある!」

「それを見つけ出すまで耐えろ!」

「無茶言ってくるぜ!」

「あんな攻撃、盾役でもそう何度も受けきれぬモンじゃねえぞ!!」

「では諦めてここで死ぬか!？」

「戦えるのなら歯を食いしばれ!」

剣を握れるのなら迎え撃て！

立てるのなら踏みとどまれ！

生きているのなら、生きることが諦めるんじゃない!!!」

「クッッ……!!

人気急上昇中のロキファミアの眷属は言うことがちげえ!!

スパルタもいいところだ！

べっぴんを見て悔ってたツケをこんなところで払わされるとはな!!」

「ツツツツ!!!」

互いを鼓舞し、互いを叩き合いながら戦意を煽る。

劣勢の場合にはよくある光景だ。

叱咤激励を欠かすことなく士気を向上させることで、味方の戦意を喪失させることなく戦闘が続行できる。

荒療治ではあるが、これも立派な戦術のうちの一つだ。

だが、それも長くは保たない。

こうしている間にも巨人は暴れ、冒険者たちに深手を負わせていく。前衛にはステイタスを一時的に向上させる魔法をかけているとはいえ、それでも上回れない。

総勢100名余りの数を揃えたはいいが、未だに決定打を打てていない。

このままではジリ貧だ。

徐々にこちらの戦力は削がれ、最終的には蹂躪されてしまうだろう。

「準備できたぞー！」

前衛、射線を開けろ!!」

「引けえテメェら!!」

奴の顔を火ダルマにする魔法を拜んでやろうぜ!!」

「「おおおおおおおおおお!!!!」」

前衛が注意を出来るだけ引きつけ、後衛の魔法部隊が一斉に魔法を解き放つ。

大人数で巨大モンスターに挑む際に行われる基本戦術のうちの一つ。

大火力を一気に放ち、続けざまに前衛が一気に突き崩す。

敵に態勢を整えられる前に押し崩し、一息入れる隙を与えないまま倒しきる。

注意を前衛に集中させていたゴライアスは、前衛の後方より飛来する魔法をモロに受ける。

誰が見てもゴライアスにとって痛手になったはずだ。

「そおら畳み掛けろおお!!」

「休む暇を与えさせるな!!」

「これで一気に追い込め!!」

爆煙が巨人に上がり、態勢が僅かに崩れたのを見逃さない。

今なら一気に突き崩せる。

このまま質量戦に持ちかけて、再生する暇を与えないまま倒せる。

いかに常識を超えた再生能力があろうとも、致命傷に持ちかけるのは不可能じゃない。

回復力を上回った攻撃を続けられればいいだけだ。

前衛が一気に巨人に雪崩れ込む。

魔法支援部隊は油断せず、次なる魔法の詠唱に取り掛かる。

これで押し込めなかったとしても、次に繋げていけば必ず倒せる。

誰もがそう信じて疑わなかった。

「ぎゃ」

「うつ」

「うわああああ!!」

「……バカな、これほどの攻撃を浴びせて尚、崩せないのか……？」

難攻不落。

それがあの赤き巨人に適切に当てはまった気がした。

いくら物量で攻め入ろうと、いくら魔法を束にして放とうと倒れない。

明らかに常軌を逸している。

煙幕が晴れると、傷らしい傷を追っているように見えない。

途轍もない回復力だ。

正に最強の盾と矛を具現化したようなモンスター。

誰もがそう思った。

それでも食い下がるように執拗に攻め続ける冒険者たち。

「ツツツアアアアアア
!!!!」

彼らの姿は英雄譚に現れる戦士のようではあったが、敵があまりにも強力すぎた。こちらの全力を、いとも容易く弾き返す。

繰り返し放たれる魔法を、蠟燭の火を消すかの如く吹き消される。

その光景は、次第に冒険者たちの心から戦意を奪っていった。勝てるはずがないと。

「ゴホツゴホツ……！」

……クソがア、反則もいいところだぜ、あんのバケモン……。

もう何回吹っ飛ばされたかわかりやしねエ……。」

「痛つ……でも、まだ戦える」

「オイオイアイズ、ンな有様で強がんな。」

お前が一番ボロボロだろうが……。」

ハアハア…… 変われ、次は俺が先行する。

このまま終われつかよオ…… ぜってえあいつの骨へし折ってやらア!!」

「…… そうだ、このままでは終われない。

少なくとも、まだ私たちは戦える。

立ち上がれる限り、何度だって食らいついてやるさ。

そうでなきや、テイオナを迎えに行けない。

こんな無様な姿で、あいつを迎えになどいけるものか」

「ケツ……頼んでもねえこと勝手にやりやがって。

いい迷惑だぜ。

借り作ったままこんなところで寝てられるか。

とつと返上してチャラにしてやる」

「うん、戦おう二人とも」

「ああ、行くぞアイズ、ベート!!」

そんな絶体絶命の状況下でも、少なくとも三人は戦意を失ってはいなかった。

ポロポロになった体に鞭を打って、懸命に立ち上がる。

まだ戦いは終わっていない。

まだ、自分たちは戦いを放棄してはいない。

勝手に終わらせるな。

自分たちは、まだ立っている。

戦いはここからだ。

「待って!!」

リヴェリアア!アイズ!バカベート!!」

「はあっ!!?」

「ティオナ……?」

「無事だったか!!」

「———— ツツツ!!?」

突如響く明るい声音。

それは、命を張って自分たちを守ってくれた少女の声だった。

18階層へ下る入り口の前で、ティオナは静止を求めた。

彼女は無事だった。

大きな怪我は負っておらず、至って健康そのものだったからだ。

彼女の声を聞いて、三人は驚嘆の声を漏らし、密かに安堵した。

だが、何故このタイミングで注意を引くような真似をしたのか。

その声は、間違いなく巨人にも届いているはず。

間違いなく攻撃の対象にされてしまう。

振り返る巨人。

たじろぐ少女。

戦慄する家族。

声を聞くべきではなかったと、この時リヴェリアたちは初めて後悔した。

「逃げろティオナツ!!!」

「……………っ!!!」
————— ツツツツアアアア!!!

無事でいてくれればそれでよかった。

仮に戦闘から離脱できて、帰りの道中で安否を確認できればそれで安心できたはずだった。

でも、彼女は声を上げてしまった。

多勢で仕掛けても太刀打ちできなかつた赤い巨人を前に、今や彼女一人のみ。距離が空きすぎている。

まず間違はなく間に合わない。

ゴライアスが咆哮ハウルを放つて、拳を振り下ろせばそれで事足りてしまう。

安堵の矢先に見えたものは、紛れもない絶望だった。

それを打ち碎ける者がいるとするならば、それはきつと。

「弔獣戯我 『飛魚彗星』」

とびうおすいせい

「ツツ!!?!」

「あ…… あれは」

彗星の如く飛来する、一筋の軌跡。

それは突如として現れ、唐突に巨人の首を蹴り抜いた。

予測不可能の方向から、何の前触れもなしに痛烈な一撃を見舞われた巨人は揺らぎ、ティオナへ狙いすましていた拳を逸らしてしまう。

啞然としていた面々の遙か先に舞い降りる黒き影が一つ。

頭のとっぺんから足の爪先まで黒い人影。

リヴェリアは呆然としつつも、その影に見覚えがあることを感じる。

小柄で、自分の理解を遥かに超えた戦闘能力を有する人物。

戦いの際はいつの時だって唐突に、当たり前のように敵を葬ってきた少年。

「ラ…… ラジエル!!?」

「おまたせ。」

助けに来たよ、俺だけじゃないけど」

「その通りです」

「——ッッ?!」

文字通り風を切って現れたもう一つの影。

風のように自在に動き回り、巨人の体を駆け巡っていった。

吹き抜けるように、それは巨人の片方の光を奪う。

左目を木刀で完全に潰したのだ。

理解不能の出来事に困惑し、初めて負った深手を激痛の反応を持って返す。

実に効率的な攻撃だった。

「少しはこれで凌げるでしょう。」

戦術は基本に則り、立ち回りに関しても文句なし。

前衛と後衛の動かし方をよく理解できていますね。

ですが、それだけでは足りない。

こちらの常識を超えた相手に対し、普段通りの立ち回りは危険な行為。

活路を見出したいのなら、まずは大きな隙を作りましょう。

さっきの通り、目を潰すなどして視界そのものを奪うように」

「あ、貴女は……」

「アストレアファミア所属、Lv4のリュー・リオンと申します。

今回に限り、助力致しますよう」

「…… Lv4の『疾風』^{リオン}」。

まさか、こんなところで出会えるなんて……」

現れた二人の影は、何故かとても心強いものに感じた。

ラジエルは未知数の實力を持ち、リューに至っては實力ともに折り紙つきの冒険者。

どちらも戦闘力的には申し分ない。

たった二人合流しただけで、僅かに希望が見えた。

決めに行くなら、この時しかない。

「総員聞け!!」

強力な応援が駆けつけてくれた!

武器を取れ! 立ち上がれ!

今こそ、反撃の狼煙をあげる時だ！」

士気が高まり、それが全員に伝わって行くのをはつきりと感じる。

体力は先ほどと比べればだいぶ落ちたが、気力は先ほどとは比べ物にならない。

ここが分水嶺と思え。

この波を利用して、一気に叩く。

今こそ自分にもてる最大限の力を振り絞って、冒険する時だ。

「ラジエル、貴方に細かな指示はしません。

思うがままに動いてみなさい。

私もできる限りのフォローをします。

ただ無理せず、深追いせず、死なないように。

そして最後には私の前に帰ってきてくれるように。

それさえ守ってくれば、私は安心して戦うことができます」

「うん、だいじよぶだよ。

今は思いっきり、このおっきいの倒したい。

本気で行くよ」

「では、行きなさいラジエル」

「行つてきます」

瞬間、少年は疾駆する。

音を置き去りにし、高速で流れる風景を視界で捉えつつ、目の前の巨人に向かって突進する。

ゴライアスは左目に感じる痛みを食いしばって耐え、迫り来る気配を捉える。

弱点は確かに存在する。

相手が生物である限り、痛覚が存在すること、相手が人型であるということ。

痛みを感じるのなら、深手を追ったときは間違いなく怯む。

そして、人の形を持っているのなら、人型に共通する弱点が沢山出てくる。

最初に少年が攻撃したのも急所である。

首元は脳へ血液を送るために多くの血管が集中している。

そこに強い衝撃を与えれば、血液の流れを阻害させ、動きを大幅に遅らせることができる。

だが相手は人の常識を外れた存在。

人と同じ耐久性ではない。

だからこそ、打てる急所を刺す所無く打てばいい。

「おつきい人とそんなに変わんないよね。

だから、まず足からだね」

「ツツ!!!」

『くまでかいもん
熊手開門』

「そおれ、かっくんと」

「ツツ?!!」

ラジエルが最初に狙うは体重を支える足。

そしてその関節のうちの一つである膝だ。

後方に回り込んで、強力な掌打を両手で放つ。

片膝を地面に付かせることで、その大柄な体格を確実に落とすことができる。

これなら、魔法でなくとも頭部への攻撃は届くようになる。

今回は戦を知っていれば勝てるというだけの話ではない。

人体の構造を、どこまで理解できているかが肝なのだ。

「ひざ、ついたね。次はそのおっきな腕。

『飛魚彗星』
とびうおすいせい

膝が突如折られれば、頭部を守るため必ず地面に手をつける。

人は防衛本能として、地面に対して頭部の接触を本能で避けようとする。

生物にとつて脳は大切な器官だからだ。

足の態勢が崩れてしまうと、腕がそれを代わりにカバーしようとする。

それ即ち、まともに拳が振るえない態勢。

そして、少年はその腕の支えをも同時に崩す。

肘の内側に、縮地からの飛び蹴りを見舞い、関節を曲げさせる。

これで巨人は、一時的に寝そべる形になる。

つまり、急所への攻撃のチャンスだ。

「うっ……お、すげえ……」

つ、突っ込めえテメエら!!

しくじるんじゃねえぞ!!

「復元しかけている左目から攻撃しなさい。」

次に狙うは首元です。

柔軟に動かさなければならぬ首は、他の部位より比較的強度が薄いはず。刃を持つ者は首元、及び関節を狙うこと。

隙あらば、顎を破壊して内部に魔法を一気に集中させなさい」

「えっぐい……」。

でも、それならさつきより確実にダメージになるよね!!」

「ツアア!!」

ラジエルがゴライアスの態勢を崩し、ほかの冒険者たちが一気に攻め立てる。

これなら拳を振るう暇など与えさせず、確実に追い詰めることができる。

巨人は、先ほどまでと全く異なる状況に困惑している最中。

正気に戻られる前に、一気に片をつける。

「ラジエル!!」

『龍墜崩拳』
りゆうついでいほうけん

「ツツツ!!」

赤いゴライアスの厄介な特性は、主にこちらの動きを抑制する咆哮^{ハウル}。

ノーモーションで放たれる攻撃は厄介ではあるが、その元を絶つてしまえば恐れることはない。

その根本、喉を潰しにかかる。

急速に回復していくとはいえず、随時攻撃を仕掛けていけば、その回復力を上回ったダメージを常に与えられる。

それを持續させていけば、間違いなく倒せる。

喉に攻撃を受けたゴライアスは、叫ぶことのできない状況に落とされてさらに困惑する。

「少しは静かになりましたね。」

では、早急に始末にかかります。

ラジエル、ついて来れますか？」

「もちろん。」

リユートなららくしよーだよ」

「ええ……何この姉弟」

戦況は覆りつつある。

しかし、絶望もまた確実に忍び寄ってきている。

じわりじわりと首を絞めるように。

このまま何もかもが上手くいくかと問われれば、その答えは否と断言できるだろう。

第26話 少年、絶望と再会する

「さて、どこまで早く倒せるかですね」

ラジエルとリユーが参戦し、巨人の勢いを抑え始めた頃、彼女は密かに懸念を抱いていた。

テイオナ救出時に言っていた赤きゴライアスの特徴。

一言で済ませるなら、普通のゴライアスより遥かに強い存在であるということ。

そのレベルは恐らく中層の中でも上位に食い込むほど。

下手をすれば下層の中に食い込む程だ。

傷を負った矢先から始まる高速復元能力。

多くの敵を一時的に行動不能にする咆哮ハウル。

主にこの二つが主要の能力と見ていい。

筋骨隆々の大柄な肉体を有しておきながら、厄介な能力まで身につけている。

これだけでも十分な脅威になる。

単騎で一騎当千を実現させる力に対し、こちらの戦力は徐々に削られていくばかりの現状。

二人の参入で戦局を動かす土俵に入れたとはいえ、このまま悠長に構えていられない。

神に恩恵を受けている身とはいえ、その身は人のものに変わりはない。

無尽蔵の体力があるというわけではないのだ。

長期戦になる程疲弊していき、本来の力を発揮できなくなっていく。

前衛を交代していったって疲労を分散したとしても長くは保たない。

後方支援にしてもそうだ。

精神力の回復は純粹な時間経過によるもの。

仮に精神力を回復させられる回復薬ポーションがあつたとしても、全員に行き渡らせることは不

可能。

出鼻を挫いたとはいえ、未だ巨人の体力は有り余っている。

反面こちらの疲労は溜まっていくばかり。

どうあつても短期決戦に持ち込むほかない。

危険な賭けを、必ずどこかで仕掛けなければならぬ。

そのタイミングを見計らいつつ、リユーは迫り来る豪腕を交わしつつ戦局を常に把握

し続ける。

その時は今ではない。

「てつせいしゅうしやう
鉄犀剛掌」

「ツツツ
!!!?」

「てめえらそれでも男か!!」

チビ助に負けてんぞ!!

気合入れて押し戻せ!!」

「うるせエ!!」

「あんなガキに遅れつかよオ!!」

今はこそはラジエルの技のお陰で何とか持ち堪えている状況だ。

彼が縦横無尽に動き回って敵を翻弄し、鍛え上げた技を持つて敵の体勢を崩して動きを封じる。

ギリギリ均衡状態を保っている。

それも長くは続かないだろう。

巨人は徐々にラジエルへ狙いを変えてきている。

開幕成功した不意打ちはもう通用しない。
崩しは出来なくなり、攻撃も上手く通せない状況へ逆戻りだ。

「(思ったより状況が好転しない。)

既にラジエルの遊撃効果も薄く、ダメージも通りにくくなった。

全員の士気は未だ健在でも、体力は確実に削られてしまっている。

後方支援もそろそろ精神力が底をつく頃合いでしょう。

魔法は打てて二波が限度。

駄目押しも考慮すのならば、次の一波で仕掛けるほかないでしょう」

リユーは戦闘の合間でも思考を絶やすことはない。

現状の打てる手、使える手札、有効な打開策、味方の戦力状況等を戦局にいかに関わり込むか。

猶予は刻々と削られていく。

タイミングを逃せば、その先に向かうのは全滅。

嫌な幻界を弱音とともに頭から振り落とす。

今必要なのはそんなものじゃない。

明日を迎えるために生に向かって手を伸ばし続けること。
死ぬことをイメージするな。

常に笑って生きる明日をイメージしろ。

生きることを放棄した時こそ、本当の敗北が待っている。

「ならば、私も全力で行かなければ」

「援護は任せろ『疾風』殿。」

私の精神力全てを使って、奴の動きを完全に封じる」

「……その先に、勝算は見えますか？」

「ああ、決して自棄になっっているわけじゃない。

私が奴の足を止め、其方が追い込みをかけ、総員で息の根を止めにかかる。

不安要素がちらつくのは確かに否めないが、同時に勝利の兆しも見えているのだ。

これを逃せば恐らく我らに勝ち目は無い。

救援の見込みはもう望めない。

ならば、早急に打てる最善手は打つべきだ。

問題ないさ、今度は持てる全ての力を注いで、奴を封じ込める。

今度こそ、決して逃れることのできない絶界に閉じ込めて見せよう」

「私もやる」

「貴方は」

リユアの決意は、リヴェリアとアイズにはしっかりと伝わっていた。

彼女たちもこの機を逃せば勝ち目がないことには勘付いていたからだ。

そんな可能性を打ち消すため、自分の持てる力全てを使って勝負に出ようという心意
気らしい。

博打には違いないが、賭けるだけの価値はある。

過去に成功してきた者たちは、皆そうして自らの道を切り拓いてきた。

有効打になるかどうかは分からない。

成功するかどうかなんてやって見なければ分からない。

だからこそ、そこに賭けてみたい。

自分たちが本当に、明日を生きるに値する存在なのかどうか。

それを今こそ示そうとしている。

覚悟ある者だけが灯せる決意の眼差し。

これ以上問いを投げかけるのは無粋。

彼女たちの光に賭けてみよう。

自分たちの道を、未来を作っていくために。

「私の魔法で、リヴェリアの魔法を後押しする。

範囲は広がるし、リヴェリアの負担も少しは減らせる。

そろそろ、決めにしよう」

「貴女達の決意、確かに受け取りました。

ですが、それにはやはり時間を稼ぐ必要が」

「いらねエよ、ンなモン」

「私たちがいるの、忘れないでよね！」

「ベート、ティオナ……」

「ケツ、トリは譲ってやるから一発で決めろ」

「もう、ホントに素直じゃないんだから。」

俺にも手伝わせろーみたいなこと素直に言えないの？」

「うるっせエぞこのバカ!!」

ンなくだらねエこといちいち言ってられつか!

「バカって言う方がバカなんですう!!」

「やれやれ全く……」

「決まりですね。」

動きを止めた後に私も渾身の魔法を叩き込みます。

恐らくそれだけでは足りないでしょうから、彼の力を借りることにします」

「彼？」

「アイズ、あの子のことさ」

『だいえんじょうき大猿剛毅』

「ツアアア!!!」

この作戦を成功させるためには、より多くの力を一点に集める必要がある。

注意を引き、動きを止め、大火力で一気に形勢を崩し、総当たりで仕留めにかかる。

誰一人欠けてはならず、タイミングも外してはならない。

暗黙の了解もとい、阿吽の呼吸が求められる。

チャンスは一度だけ。

これを逃せば押し切られる。

外したら最後、二度と日の目を見ることなく、このダンジョンの一部となる。

覚悟を決めろ。

もはや退路はなく、活路は閉じかけている。

生き残りたいのなら、その手で抉じ開けろ。

「ラジエル！」

「よっ………」と。

リユー、呼んだ？」

「はい、これより勝負を決めに行きます。

貴方はこの二人と共に、こちらの準備が整うまでの時間稼ぎをして欲しいのです。

幸か不幸か、巨人は貴方からの攻撃に敏感になりつつある。

それを利用して、ゴライアスの注意を引いておいて下さい」

「うん、分かった」

「こんなガキ入れて大丈夫なのかよ………」

「死んでも知らねえぞ？」

「大丈夫！」

ラジエルはすつごく強いんだから、きつと上手くいくつて！」

「ああ、新参の域はまだ出ないが、実力は私が保証しよう。

彼ならきつと上手くやってくれる」

「頑張つてね、ラジエル」

「うん、アイズもね」

「ゴリアー！」

ガキの分際でアイズを呼び捨てにしてんじやねエ!!

ゴライアスの前に、テメエから蹴り砕くぞオ!!」

「ベートうっさい!!」

そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!」

「緊張感の欠片も見受けられませんね」

「恥ずかしくて何も言い返せん……」

「みんな、そろそろ行くよ」

この戦場を覆さんと集中力を研ぎ澄ませて行く。

戦況は戦闘初期の段階に戻りつつあり、赤い巨人は未だに暴虐の限りを尽くしている。

この惨状をこれ以上眺めていたくはない。

全てを終わらせるため、六人は巨人に対して向き直る。

一番の後ろにリヴェリアが待機し、その前をアイズが陣取る。

二人の前にリユーが待機し、その前をラジエル、ティオナ、ベートが列になって駆け

る態勢を整える。

少数から織りなす多段攻撃の構え。

これで、決着をつけよう。

「前衛、行つてください!!」

「行くよ」

「指図すんな!!」

「いっくよお!!」

「『終末の前触れよ、白き雪よ』」

「絶対、守ってみせる」

リユートの合図とともに駆ける三人。

先陣を切るのはロキファミリアの特攻隊長ベート。

彼の脚力はファミリア随一。

ラジエルの縮地を除けば、この中で彼より速い者は存在しない。

後続にはティオナとラジエル。

即席のパーティーではあるが、不思議と何故か不安な気持ちはない。

テイオナには間違いなく成功する未来しか見えなかったのだから。

「行くよ、先手ひつしよー。」

弔獸戯我 空蟬磔からつがて

「ッッ!!」

空気を殴り付け、不可視の衝撃波を繰り出す戯拳を見舞う少年。

威力は低いが連打ができ、且つ見えない攻撃のため不意打ちに最適な技。

自分の咆哮ハウルの御株を奪うかのような攻撃に面食らうゴライアス。

たじろいだ隙を見逃さず、一斉に腹部に飛びかかる二人。

一人が追撃を仕掛けては、もう一人が更に追撃を仕掛ける。

一方に意識を集中させない多重攻撃だ。

「チィ…… また意味わかんねエ技使いやがって。」

あのがキは一体何なんだ？」

「ブツクサ言わないで殴る!!」

これ逃したらもうホントに終わりなんだかんね!!」

「うっせエ!!」

『黄昏を前に風を卷け』……っ!」

「焦らないで、落ち着いて確実に精神力を込めなさい。

大丈夫。

今はこちらに意識は向けられていない。

慎重に大胆に力を溜めて」

「……『閉ざされる光、凍てつく大地』」

「そう、それでいいのです。

私もそろそろ動きます。

アイズ、と言いましたね。

彼女のことは頼みましたよ?」

「うん、任せて」

「その言葉を聞いて安心しました。

では、参ります。

『今は遠き森の空。

無窮の夜天に鏤む無限の星々。

愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を』」

「走りながら…… しかも早い。

あれが、平行詠唱」

吹き荒れる風となって疾走するリユーは、呪文を詠唱しつつ戦場に躍り出る。

魔法の詠唱は途轍もない集中力を有するため、一節の詠唱以外は止まって詠唱を紡ぐのが基本だ。

詠唱を一度始めたが最後、唱え終えて放たなければ魔法が暴走し、使用者に多大な損害を与える。

しかし、中には詠唱を戦闘を行いながらこなす者が存在する。

それが平行詠唱。

魔法支援を主体とする者の目指す頂のうちの一つであり、魔法を極めた者の集大成でもある。

魔法は確かに奇跡を発現させ、戦局を優位にすることの出来る特別なものだ。だがその弱点として、詠唱中はその場から離れることのできない。

詠唱中は完全に無防備になってしまうのだ。

その弱点を無くす技法が平行詠唱。

戦闘や行動中に詠唱を完成させ、自分自身で隙を作って打ち込む。

固定型の人間大砲が、自立式砲台となるのだから恐ろしい。

この戦闘スタイルが実現できるからこそ、リユーは数少ない魔法剣士としての称号を掲げることができるのだ。

「『汝を見捨てし者に光の慈悲を。』」

来たれ、さすらう風、流浪の旅人。』」

ツツツツ!!!」

「オイオイ、詠唱しながら戦闘とかどうなつてやがる！

お前んとこの冒険者はあれがデフォなのかよ！」

「ベートが何を言ってるのかよくわかんない」

「『さん』をつけやがれエ!!!」

「いいから集中しなさいっばあ!!!」

「わかつてらアア!!!」

「弔獣戯我 鎧がいかいぼてい壊馬蹄」

迫り来る豪腕を華奢な足が打ち返す。

強靱な鎧をも蹴り砕く馬の如き足は、巨人の腕などもろともせず弾く。

脚具が悲鳴をあげる。

ヒビが修繕不可能な段階に差し迫り、端から徐々にその形を失っていく。

最早少年の防具も限界だった。

籠手は既に拳しか覆えてなく、その形は見るも無残な姿に成り果てている。

だが、それでも止まるわけにはいかない。

例えこの身、この防具が壊れようとも、戦うこと姿勢だけは崩してはいけない。命ある限り、どこまでも愚直に進むしかないのだから。

「『空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ』」

「『吹雪け、三度の厳冬を――我が名はアールヴ』！」

「みんな、行くよ」

準備は整い、舞台もまた整った。

この階層に渦巻くは深緑の風。

その風に乗るは極寒の吹雪。

そして、その吹雪を後押しする一陣の風。

今こそ冒険の時。

この一撃をもって、この戦いに幕を降ろそう。

「っ!?!」

来るか!! 離れるぞガキ!!」

「ぬえっ」

「いつけえ!!」

アイズ、リヴェリアアアア!!!」

『ウイン・フィンブルヴェトル』!!!」

『吹テンベストき荒れる…… エアリアル』!!!」

深緑戦ぐ緑豊かなこの階層に、全ての生命の動きを止める冷気が吹き荒れる。

吹雪は風の後押しによって吹雪く範囲を広げ、自然の猛威を再現するかのよう巨人に襲いかかる。

最初に放ったものとは比べ物にならない規模と速度に、ゴライアスはなす術もなく飲み込まれる。

瞬き一つする合間に両脚が凍てつき、一呼吸の間に胴体が氷に覆われていく。

叫ぶより早く、その吹雪は両腕をも凍らせてしまった。

幕引きが近づく。

その吹雪をも飲み込む深緑の風が唸る。

星の命を再現するかのような美しい光球が、リユウの背後に浮かび上がっている。

「すげエ冷氣だ。」

あのままだったら俺らもヤバかったぞ…」

「ねえねえベート。」

さっきの続きなんだけどさ」

「だから『さん』をつけろっつーのオ！」

…… 何の話だ？」

「みんながどれぐらい強いのかはわかんない。

俺も全員見てきたわけじゃないから」

「だから、一体何の話だ」

「それでも、俺は知ってる」

「…… あア？」

「『星屑の光を宿し敵を討て』」

風が爆ぜる。

大地の怒りを体現したかのような攻撃が、ゴライアスに無情に迫り寄る。その在り様、まさしく疾風。

風と共にあらゆる敵を打ち倒すエルフの姿が、そこにはあった。

「リユーは、一番強い。

いっちばん強い俺の、じまんのお姉ちゃんなんだ」

『『ルミノス・ウインド』!!!』

瞬間、誰もが見惚れた。

数多の光球を自在に操るエルフの姿に、誰もがその視線を釘付けにした。

光球一つひとつが上位魔法に匹敵する威力を持ち、その数は使用者の精神力が続く限

りいくらでも生み出せる。

風の化身と思わせるような姿だった。

巨人の絶叫は暴風に掻き消され、自身を縛り付ける氷諸共に打ち碎かれる。

両腕、両足を碎かれ沈みゆくゴライアス。

その巨人の遥か頭上にて、リユーは叫ぶ。

「だから、俺も強くならなきゃ」

「来なさい！ラジエル!!」

「お、オイ!!」

何するつもりだガキっ!!」

突き出た氷柱を足場にして、高く跳躍するラジエル。

その先に待つのには傲慢の姉の姿。

光球を放ち終えたリユーは木刀を両手に構え、少年に対して刀身の腹を見せつける。

そこには戦場に似つかわしくない微笑み。

まるで、少年の狙いを把握しているかのように。

少年と共に戦えていることに喜びを感じているように。

ラジエルは木刀の腹を足場にして、ゴライアスに向かって縮地で急接近する。全てはこの時のための布石に過ぎない。

この中で唯一打撃でゴライアスを圧倒できる少年に、リユーやリヴェリア、アイズ、テイオナを含む冒険者たちは全てを託す。

その小さな体に、多くの人たちの期待を背負って、巨人の頭目掛けて急降下する。

「弔獣戯我 鯨跳沈足」

げいちようちんぞく

「ツツオオオオオオ!!!」

それは巨大な物が落ちたかのような一撃だった。

鯨跳沈足とは、空中から繰り出される大振り of 踵落とし。

かの巨大生物、鯨の跳躍から閃いたこの技、命中率は低いが当たれば一撃で再起不能に追い込める大技。

その一撃は、氷諸共巨人を踏み砕いた。

踏み砕かれる立場であった存在が、その立場を逆転させてみたのだ。

「……おい、見ろよアレ」

「ゴライアスが、灰になっていくぜ……」

「や、やったああああ!!!」

勝ったんだ俺たちは!!!」

「マジかよ……あのガキ、やりやがった」

モンスターの灰化を確認した冒険者たちは、みな一応に喜び、喝采をあげた。

一進一退の攻防の末、見事大逆転劇を披露して見せた。

これが冒険。

危険を冒し、その先にある財宝を手にする事。

それは形あるものではなく、掛け替えのない物のことを指す。

この場にいる冒険者たちは、皆それを手にできた。

見知らぬ者同士肩を組み、喜びのあまりに抱擁をし涙する。

活気と生に満ち溢れたこの感覚こそが、危険な冒険の報酬なのだ。

「ゴライアスの消滅を確認……」

何とか、なりましたね」

「やったねリユ一」

「ええ、貴方のお陰です。」

初めての大掛かりな戦闘、お疲れ様でした。

よくやりましたね」

「リユ一もお疲れ様」

「おおーい、ラジエルウー！

お疲れー！

凄かったね最後のキック!!」

「ティオナ……少し静かにしてくれ。

魔法の使い過ぎで頭が痛む……」

「ハッ、歳とつたんじゃねエの？」

「おいベ一ト、折檻するだけの気力は残ってるぞ？」

「みんな、凄かったね」

これぞ大団円。

強敵を力を合わせて撃破し、皆で勝利を分かち合う。

正しく冒険者としての在り方。

少年はこの時ようやく冒険者としてスタートラインに立ったのだ。

未だ雛鳥の如き器ではあるが、着実に進歩しつつある。

今回は始まりに過ぎない。

これから様々な難関や脅威が待っている。

だが、今くらいは勝利の余韻に浸るのもいいだろう。

「タイミングとしては上々。」

さて、次はどうするかな」

「えっ?」

少なくともこの時ばかりはそう思っていた。

あの雄叫びを再び聞くまでは。

誰も予想だになんてしていない。

灰化を巻き戻すほどの回復力があるなんて。

「
ツツツツツアアアアア!!!」

「『^{リオン}疾風』殿つ!!!」

だからこそ、この絶望もまた正しい在り方。

禍福は糾える縄の如し。

幸福の後には必ず不幸がやってくる。

突如姉の姿は、ボロボロの赤い剛腕によつて掻き消え、鮮血を撒き散らしながら宙へ投げ出されてしまった。

冒険はまだ、終わってはいない。

そして、あの時と同じ現実を再び、この目で見ることになる。

「リユール……？」

第27話 顕現するは憎悪の人格

「リユー……？」

ねえ、返事してよ」

「……………」

姉に声を掛ける。

返ってくるのは沈黙のみ。

完全に不意打ちだった。

油断をしたつもりはなかった。

モンスターは体が灰化すると必ず諸滅するのに、ことこの赤いゴライアスに至っては異なった。

まるで時間の巻き戻し。

灰化を巻き戻すような驚異的な再生が施され、あつという間に元の体格を形作って

いった。

「……………ねえ、リユー？」

少年の言葉は、虚しく響く。

自分よりも遥かに強いリユーが、自分の目の前で無残に横たわっている。

あの光景がちらつく。

あの時の光景と瓜二つ。

戦闘で飛び交った炎、倒れ伏した冒険者の何人かと、自分にとって最も親しい者の負傷。

燃えてこそいけないものの、リユーは殴られてからピクリとも動かない。

「いやだ………… いやいや。」

ねえ、起きてよリユー。

リユーはあれくらいじゃ負けないよね？

じよーだんなんでしょ？

俺をからかっているんしょ？

返事くらい……… してよ、リユー」

「………」

「なんで、なんでなの？」

なんで、リユーが……… だってリユーはすぐくて、強くて、あたまも……… よくて」

燃えたぎる炎は、いつしかその身体中に熱を伝えていく。

心の一部で留まるはずだった。

常に心の内に秘めているだけで、生きるための指針としての役割を果たすだけだったはず。

自分の一番親しいものが目の前で倒れた。

あの時の再現のように自分を置いて、血を流して倒れた。

いつだって気高く、強く、優しかった姉のような存在が、力なく倒れている。

頭の整理が追いつかない。

体が熱い。

唇が震える。

心が折れそうになる。

目の焦点が合わなくなる。

かつてない動揺が、自分を乱して行く。

「ううっ、おえっ……」

恐怖と絶望に頭が真っ白になって行く。

胃の中から何か吐き出された。

消化しきれなかった食べ物の残骸と胃液が足元に流れる。

自分の体も碌に動かなくなり、吐瀉物に顔から倒れ、無様に蹲る。

心を侵食するのは不快感と恐怖。

体が行うことを効かない。

震えが止まらない。

気持ち悪い。

これはなんだ。

目の前で起きていることは現実なのか。

それとも質の悪い幻なのか。

後者であつて欲しいと懇願するが、ボヤけた視界で見えたものは一向に消える気配はない。

何度瞬きを繰り返しても、リユーは身じろぎ一つ起こさない。
流れ出る血が、止まらない。

「
ツツ
!!!!!!
」

あれ程煩わしかった雄叫びが耳に入らない。

受け止められない。

受け止められるものか。

受け止めてたまるか。

こんなもの、こんな酷い光景が現実なものか。

最愛の人が目の前で殺される現実など、あつてはならない幻だ。

そうだ、目を閉じて意識を失えば全てなかったことになる。

アレからまともに表情が動かなかつたのだ。

こんなに自分を取り乱す訳が無い。

何もかもがおかしい。

だから、これは現実じゃない。

「……………グ、クツ」

意識が途絶えない。

どうしようもないほどに眠りたいのに、必死に目を瞑っているのにどうしても落ちれない。

頭痛がひどくなっていく。

目の奥が燃えるほどに熱い。

胸が焦げそうになる程熱を帯びていく。

まただ。

またあの時の映像が鮮明に映し出される。

一面に至る所に広まる炎。

村人が殲滅されたあの忌まわしい過去。

何もかもが焼き尽くされた一夜の出来事。

あの時の光景が、今と重なっていく。

リユーが、自分の目の前で倒れた家族の姿と重なってしまう。

いやだ。

そんなものは見たくない。

そんな酷い結末、あつてはならない結末なんて、あつていいものじゃない。

「…………… ああつ」

焼けていく。

内側から、何かに焼かれていく。

肉が精神が、記憶、心が焼けていく。

無情にも、何もかもが炎に包まれていく。

自分が炎になったのか、炎そのものを纏っているのか。

最早どうでもいい。

また夜が更けてしまった。

また取り返しのつかないことが起きてしまった。

またここで、灰を被って死を待つだけなのか。

今度はもう、自分という存在を確立できないかもしれない。

「ギ…… グア、ウグウ……!!」

ウウツ……アアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

慟哭が虚しく空間に響く。

嘆きは悲しみとなって静かに沈んでいくはずだった。

だが、どうしようもない苦痛が自分を掴んで離さない。

途轍もない嘔吐感と不快感が増していく。

顔を、喉を、胸を掻き毟りたくて仕方がない。

自分の内側から何かが這い出して来るようなこの感覚は、一体なんだ。

体験した事のない頭痛と目眩、耳鳴りが更に自分から正常を奪う。

まともな思考を保つことができない。

長らく死んでいた感情が、この時に限って正常に働く。

自害したい、そう思える程の苦痛が少年に襲い掛かる。

『またそうして眺めているだけか？』

自分の大切なものが無様に無力に奪われていくあの光景を、お前は再び眺めているだけなのか？』

幻聴が聞こえてくる。

聞き覚えのない声音が、あの時の光景を無理矢理呼び起こし、惨劇の時と同じことをするのかと問いかけてくる。

分からない。

自分が一体何をしたいのか、分からない。

一体何を求め、何を欲していたのか。

いくら記憶を読み漁ろうとも、見つけられるのは夥しいほどの炎。

自分の中には、炎以外ない。

また肉親を失ってしまった。

愛を注いでくれた者が、また目の前で倒れてしまった。

これ以上、自分から何を焼こうというのか。

『お前は何の為に今日まで生き延び、力を付けてきた？』

鍛え上げたその肉体は何だ？

磨きに磨き抜いたその技は何だ？

あの惨劇を目の前にし、人格を殺してまで手に入れた鋼の精神は、一体何の為にある

『？』

「このちか、らは、一体……何の為に……？」

『思い出せ、お前の根底にあるものを。』

目の前で親しい者が斬られ、友が黜られ、家族が殺された現実を目の前にして、内に芽生えたものを思い出せ。

それを感じた時、初めて力が欲しいと思えたはずだ。

何者にも勝る力が欲しいと、心の底から渴望したはずだ』

「みんなが、殺され、れた…時、感じた、もの……？」

『それを思い出し、自覚しろ。』

己がうちに渦巻く黒い感情を。

あの時、死ぬ間に芽生えた感覚を今こそ認めろ』

「……………」

『愛する者を目の前で奪われたあの感覚を！』

世界の不条理に打ちひしがれたあの時の感応を！

そして、あまりにも無力だった自分への感情を！』

「……………くい」

『それが、それこそが！』

お前にとって果たさなければならぬ唯一の宿命だ!!』

「憎い……憎い憎い、憎い!!!」

ぜんぶ!!

憎い!!!」

『さあ!!』

オレを、お前の炎と共に解き放て!!

深い憎悪とお前の象徴!!

『原初の炎』と共に!!!』

あの時、自分の内に残った唯一のもの。

それを自覚すれば、心の蟠りはわたかまなくなる。

その望みを妨げるものはなくなる。

欲するがいい。

そして抗え。

憎き世界へ叛旗を翻したいのなら、心の底から求めろ。

この世の何よりも勝る焦熱を持ちて、今こそ発せよ。

その瞬間、その炎は心象より抜け出し、この瞬間、誰もが畏怖する災火となる。

渦巻く憎しみ。

噴き出す怒り。

燃え続ける悲しみ。

彼方へ轟く嘆き。

身を焦がしていく痛み。

最早個々に情など払っていられない。

自身にとつてのこの世の不条理こそ、我が怨讐の対象。

生命に対する冒流など知ったことではない。

身勝手なことこの上ないなど承知の上だ。

全てに報復するまで、光など邪魔でしかない。

「クフフフ……………」

「……………なんだ、アレは」

寒気を覚える負の急流に、身を焦がすほどの熱量がこの空間を支配する。

誰一人としてその場を動くことさえ出来ず、ただただ呆けた。

全員から注目を浴びるアレは誰だ。

暴虐の限りを尽くして暴れまわっていたゴライアスの動きを止めたアレはなんだ。

「フハハハハハハハハハッ!!!!

待ち望んだぞ。

待ち侘びたぞ。

待ち焦がれたぞ!!

また会えたなオレよ!!」

「ラ……ジエ……ル？」

「そう時は経っていないというのに、随分と久々に出会えた気分だ。そして、遂に自覚し、認めたな。」

お前の慟哭、その内に潜むその感情こそがお前の根源。

その叫びを持って、俺が表に出る条件は揃った！

その覚悟、怒り、憎しみ、嘆き、悲しみ、確かに聞き届けた。

ならば、オレはオレ自身の役目を果たすまで！！

さあ、心のままに命じろ！！」

渦巻く火炎が少年を包み込み、呼び起こしてはならないものを呼び起こす。

現れ出でる者は、それはさっきまでのラジエルでは無い。

ラジエル・クロヴィスの激情が限界に達した時、初めて黒き人格が呼び起こされる。

かつて魔道書の精神介入によって対面したあの黒い影。

あれこそが少年の心情に内在する恩讐の権化。

怒りや憎しみ、痛み、悲しみ、恨み、苦しみの黒い感情の集合体。

悪しきもので塗り固められた人の悪意の成れの果て。

それがこの黒き人格。

姿形こそ変化はないが、細部にはその迸る激情の色が所々表れている。

蒼い瞳だった眼は赤黒く染まり、内在した復讐の炎が煌々と映し出されている。

頭髮は火に当てられるようにゆらりと漂い、亡者の魂を思わせる。

そして極め付きはあの表情。

常に無表情だった彼の表情は、今や別人。

耳まで届かんとばかりに釣り上げられた口は、悪魔を彷彿とさせる不気味な笑みを浮かべ、獯猛な獣を思わせる犬歯がちらついている。

そこに注がれるは黒い感情と血涙。

その二つを原動力とし、少年の顔は原型がないほどに歪んだ。

最早かつての少年の姿はそこにはない。

あれこそが、長年蓄積し続けてきた恩讐。

個人という枠を決壊させ、その憎悪を世界そのものを憎むにまで拡大させてしまった復讐者としての姿。

自分が為すべきことに善悪の判断はない。

ただその憎しみをぶつきたいという一つの妄執に取り憑かれてしまった哀れな人の結末。

「アレを憎めと！」

そして、その復讐を完遂させろと！

復讐こそがオレの役目。

お前の望みを、相応しい対価に沿って成し遂げよう！

どんなものであれ、恩讐の対象には変わらん。

フフフハハハツツハハハハハツツ!!!

無論、あんなもの水滴一粒の慰めに過ぎないがな!!!

あの程度でオレたちの炎を消すことなど出来はしない!!

であればなんだ？

憎しみをぶつける意味がない？

無意味な争い？

そんな問いにこそ、意味などありはしない!!!

オレの役目は復讐を遂げること!!

晴らせる晴らせないなどの問題ではない。

復讐をする、ただそれだけだっ!!!」

「オオオ
!!!!!!」

「フハハハハッ!!!」

大きく吠えたな肉達磨!!

犬の遠吠えにも劣る畜生の戯言で、オレたちの耳を汚すか!!

嗚呼憎い、憎いぞ貴様っ!!

醜悪なその姿、耳障りな声、汚らわしいその魂!!

何故貴様のような汚物にも劣る出来損ないが、このオレたちの前に突っ立っている!!?

何故オレたちを見下しているっ!!?

貴様が、貴様等の存在がこの憎しみを駆り立てる。

何もかもが忌々しい!!

オレたちから全てを奪った忌々しい存在!!

灰にしてやる!!

その身体も魂も!!!」

地団駄で踏み碎かれる大地。

ゴライアスに向かって延々と吐き出される暴論。

少年はこの世全てのものに対して憎しみを抱く。

それが何であれ、全てが恩讐の対象。

あの日自分から全てを奪い去った者たちの顔を忘れてしまったが故、何に対して憎しみをぶつけなければいいか分からなくなってしまった。

長い年月を重ねようとも答えは出ず、無益な自問自答が堂々巡りする。

そして遂にある極論に至った。

あの村の所在地を教えた者が憎い。

武器を見繕った者が憎い。

道を整備した者が憎い。

侵略者に食物を与えた者が憎い。

灯りを見つけた者が憎い。

悪しき思惑を囁いた者が憎い。

何もかもが憎くて仕方がない。

こんな不条理が罷り通る世界そのものが憎い。

そう、全てが憎しみの対象となってしまった。

生物であろうが物であろうが関係ない。

この世に属する全てが憎い。

そしてそれは本人の自覚のし得ない心の奥底にて、密かに負の感情を溜め込み続けた。

恐ろしいほどの速度で、それは心に根を張った。

自身の中で、新たな人格を生み出してしまうほどに、その憎しみは強大になった。

憎しみが広がり続け、いつしかその心は何が憎かったのか忘れてしまった。

負の感情の濁流に飲み込まれ、本当の目的を見失い、新たに目的としてすり替わってしまった。

「燃えろ、爆ぜろ、砕け散れっ！！！！」

「——ツツツ！！！！！！」

「んだよオ!!」

「あのガキは一体何モンだア！！??」

「前と全然違うっ!!」

「どう見たって様子がおかしいよ!」

「ラジエル…… お前の身に、一体何が」

吹き乱れる衝撃波を置き去りに少年は暴走する。

あれだけ禍々しい雰囲気醸し出しておきながら、練り出される技は極めて合理的。

攻撃の可動域を狭めるために右腕を攻撃。

元の少年であったのなら、その一撃は虚しくも弾かれるはずだった。

巨人ゴライアスの脅力を持つてすれば、冒険者をたたき落とすことなど羽虫を潰すが如く容易い。

それはつい先程までの話。

今は何もかもがさっきまでと異なる。

急激に跳ね上がったラジエルの力は、巨人の腕を半身諸共消し飛ばす程になった。

慢心していたゴライアスは、あっさりと体の一部を取り零した。

最早、アレから正気という概念は存在しないだろう。

アレは心の激情のままに動く悪鬼羅刹の類だ。

瞬間、ゴライアスの右半身が爆炎で消し飛ぶ。

放たれた轟音は周囲の音全てを置き去りに、炎が先に巨人を吹き飛ばす。

アレは曲がりなりにも中層の階層主、巨人ゴライアスだ。

そしてダンジョンが直接介入してきたせいで、元のスペックを数段引き上げられ、一流冒険者が束になってかかっても攻めあぐねる強化種。

先程までこちらを圧倒していた赤き巨人が、今では少年一人に手も足も出せないでいる。

アレが強化種であることなど、この戦闘に参加している者は忘れてしまっているだろう。

それをも上回る復讐の怨嗟が、皆の視線を捉えて離さない。

まるでその眼にその姿を焼き付けさせるかのように、次はお前を焼き殺すと言っているように訴えかけてくる。

常人には決して理解できない憎しみを、強く記憶に刷り込むように少年は暴れた。

「フハハハハッ!!」

超速再生か、いいぞ肉達磨!!

オレたちの憎しみをその身で受け続けてくれるというのか!!

鬱陶しい!!

ゴミの分際で、オレたちの復讐を妨げるか!!

目障りだ、消えろ!!!」

焼かれようと、体を吹き飛ばされようとゴライアスの身体は再生を続ける。その巨体のどこかに命である核、魔石を破壊しない限り何度でも再生する。火の粉一つが自分の身を焦がすものであっても、ゴライアスは崩れなかった。体を消し飛ばす火力をその身に受けても、巨人は倒れなかった。どれほど命を削られても、巨人は少年から目を背けられなかった。

それはまるで無理矢理に戦闘を強いられている様。まず間違いなく、巨人は少年に対して畏怖の念を感じている。

「邪魔だ!!」

貴様らの存在そのものが!!」

脚具が碎ける。

右の大振りがこの身を消し飛ばす。

常に舞い散る火の粉がこの身を燃やす。

迫り来る業火がこの身を変え灰に変える。

喜べ肉達磨、オレたちより先にその苦しみから解放してやる。

オレたちの憎しみをその眼に!!

「魂に焼き付けたまま灰になれ!!!」

炎が周囲を侵食していく。

浜辺へ押し寄せる波のように、炎が際限なく広がっていく。

侵食された大地から吹き出されるは巨大な火柱。

それは徐々に宙へ流れ、一つの球体に形を変えていく。

まるで小さな陽。

眼前で照らし出されるその姿はまさしく巨大。

この星で太陽を再現するとなれば、あれほどの大きさが適切。

誰もが注目されるがまま、顔を宙へ向ける。

あまりにも理解し難い熱量を前に呆然とし、棒立ちになるだけだった。

「——ッ
ッ
?????!」

「バカな……ダンジョン内で、太陽が……昇るだど?」

小さな太陽に目移りしてしまったが最後、ゴライアスは知覚できないほどの連打を見舞う。

拳や蹴りを打ち込まれる箇所には力が入らなくなり、体の機動力が削がれていく。崩れると思った刹那、身体が何故か宙に浮いている。

いや浮いているのではない。

腹部を蹴り上げられて無理矢理浮かされている。

痛覚が麻痺したせいかわか認識できなかつた。

再生が追いつかない。

損傷一つを再生しているうちに新たな損傷が十や二十と増えていく。

自分をも簡単に吹き飛ばす強打を何度も打ち込まれ、どんどん上へ押し上げられていく。

そう、彼が作り出した太陽へ向けて。

「我が歩むは果て無き恩讐の彼方。

身を焦がすは常世への憎悪。

刮目せよ、我はいずれこの世に復讐を果たす者。

そして見届けるが良い。

我が辿り着く終局を。

この身、この魂が擦り切れ、世界諸共灰燼と帰するその日を!!

弔獣戯我 終ノ章」

籠手が砕けた。

そして、ゴライアスは成す術なく太陽へ押し込められる。

再生と燃焼が強制的に繰り返されて自我が崩壊しかける。

こうまでされて尚、肉体が形を保っていることに憎しみを覚えた。

ここまで頑丈でなければ、すぐにでも楽になれたはずなのに。

少年の慟哭が強く反響する。

世界を決して許しはしないと。

必ず報復してみせると。

「『幽鬼落陽』」

!!!!

昇るはずの無いものが昇り、落ちるはずの無いものが落ちた。

否、それは人の手によつて落とされた。

決して届くはずのないものに手を伸ばし、それを自らの手で沈める。

世界へ宣戦布告を叩きつけるように、自身への慈悲を踏みにじるように。

その日、彼らは生涯忘れられない光景を目に焼き付けることになる。

少年が、太陽を落としたと。

——君は対価を支払った。

自分の根底にある欲を満たすために、君は命を薪にして焼べてしまったんだ。

大切なものも何もかもを全て、炎にして燃やしてしまった。

残るのは灰だけ。

それが君の心の顕れ。

復讐に身を窶してしまった、定められた君の残照。

何が最後に残るかは分からない。

心の何かがどうかじゃない。

対価を支払ってしまつたら、君はもう自分を見つけれないかもしれない。

それでも、その道を選ぶのかい？

第28話 独白と宣誓

人には二種類のタイプが存在すると聞いたことがある。

以前そう友から教わった。

誰かの為に戦えるかそうでないか。

私は確かに一理あると首を縦に振った。

成る程、言われてみれば確かにそうかも知れない。

誰かの為に命を張ることが出来る者もいれば、己の命欲しさに見捨てる選択を取る者もいる。

後者は例えの問題ではあるが、決して悪いことではない。

命とは替えの効かない大切なもの。

それを必死になつて守ろうとするのは至極当然の話だろう。

それが他人か自分であるかの違い。

葛藤はすることはあれど、決して弾圧される謂れは無い。

では、果たして前者は正しい行動と言えるのだろうか。

言葉だけ聞けば立派に聞こえるかも知れない。

正義感故に示される正当な行為かも知れない。

見方を変えれば、それは偽善者の考えではないのだろうか。

そう、その反面自身の命を守れていない。

自身の命を投げ打つてまで、他人の命を守るだけの意味を問いたただせるのか。

私は、その答えを未だに出せずにいる。

唯一まともに出せた回答は、時と場合によるだろうと。

その局面を直前に迫られない限り、納得のいく答えを出せることはないだろう。

私はずっと考え続けてきた。

何度も何度も自問自答を繰り返した。

自分に問いを投げかけては回答を示していく。

そこに正当性や正確性は関係ない。

問いと回答を繰り返すことに意味があるからだ。

故に泥沼にはまっけていく。

明確な答えが出ないことに対する苛立ちや焦り。

何度繰り返しても、納得のいく答えが出ないのだから。

だがそれもそのはず。

概念に対して、答えは無数にある。

そういった概念の答えは個人の数だけ存在し、考え方も個人によって無数に枝分かれしていく。

幾度なりと自問自答を続けようと、そこに文句のつけようもない回答が出ることはない。

数式のように確立された解答はあれど、概念には通用しない。

だからこそ、私は未だに答えが出せないでいる。

これでいいと思える答えを未だに見出せずにいる。

どちらが正しいかなんて、私では判断できない。

そんな自問自答を繰り返しているうちに、私はある人物に出会った。

今まで出会ったことのない、友の言葉に属さない三種類目のタイプの存在。

小さな体躯の子が、忙しなく街中に視線を投げかけていた。

全身を黒で覆い、武器らしい武器を持たず、変わった防具を身につけた妙な子ども。

能面のように無表情で、凡そ人間らしさを感じさせない変わった子。

その醸し出す奇妙な空気故に、存在感がひどく曖昧に見えた。

風が吹けば消えていなくなってしまうようで、瞬きの合間にいなくなってしまう幻の

ような夢げな子。

行く宛てもなく世界を彷徨い、ふらふらと闊歩する幽鬼のようだった。

それが私が抱いた最初の印象。

私は興味本位で彼に声を掛けた。

存在そのものがこの世界に不釣り合いな空気を持つこの子どもに、自分の中の好奇心が騒いだのだ。

この子は人を疑うような感性を持つておらず、声を掛けられれば誰にでも付いて行ってしまうようになる。

それだけを見れば、ただこの街に迷い込んだ子どもとして見て、接していただろう。

私は、それ故にどこか油断していた。

人には人それぞれ抱く思いがある。

それが身分相応であれ、そうでなかれと抱く思いがあるのだ。

だからこそ、私は彼の言葉に耳を疑った。

『ダンジョンに行くにはどうすればいいの?』

まるで頭を鈍器で殴られたかのような衝撃が私を襲った。

こんな小さな子どもが、危険地帯であるダンジョンへ行きたいと口にするなど、夢に

も思っていなかったからだ。

どう考えてもダンジョンへ行く理由が見当たらない。

金勘定の感覚も曖昧そうなこんな子が、金銀財宝目当てで行きたがっているとは到底思えない。

ましてや見ての通り体格は華奢で矮躯だ。

鍛錬にしても場所を選ぶはずだし、自ら危険な場所に赴く必要性もない。考えるほど、この子の心中が理解できない。

だからこそ、私は彼の手を引いて事の詳細を聞き出すことにした。お腹も空いているようだったし、丁度良い機会にも思えたからだ。

だが、やはり私は油断していた。

人の過去も千差万別。

明るい者が凄惨な過去を辿ってきた話などよく聞く類だ。

少なくとも、この子にそれが当てはまるとはついぞ思ってもみなかった。

聞けば、家族諸共村を焼かれたという。

聞けば、何かを求めて力を求めたという。

聞けば、自分の何もかもを灰にされたという。

興味本位で聞くものではなかったと、心の底から後悔した。

彼の話から現実味がないと思えたのも事実。

だが、それが虚偽の内容であったのなら、この子の在りように説明がつかない。

この年頃の子どもはもつと喜怒哀楽が顕著に表れ、もつと素直な生き方をしているはずなのだ。

少年には、そのどれもが当てはまらない。

淡々と自分の過去を話してくる彼の姿勢そのものが、紛れもない現実であったと訴えている。

涙の一滴も流さず、眉一つ動かさず、声音一つ変わらない。

話の内容の真偽は、正直判断することはできない。

だが、この少年の変わり果ててしまった姿を見れば、凄惨な過去を体験したのだと伺える。

私の胸には、何か鋭利なもので貫かれたかのような痛みが走った。

これは錯覚だ。

あの子の辿ってきた人生に同情してしまつたが故に起こつた錯覚だ。

出会つて間もないのに、少年に出会つてから私の心はひどく揺らいだ。

でなければ、出会つたばかりの子を自分のホームに招いたりはしないだろう。

ただ、放っておけなかつた。

目を離せばどんな危険なところにも行ってしまいそうで、目を離せなかったからだ。

まるでただ流されるだけの凧のよう。

風で流され、荒波立つ場所に抵抗できず飛ばされてしまうそんな存在。

私はその糸を掴んであげたかった。

簡単に流され、どこへなりと飛んで行ってしまおうあの子を、どこか安心して飛べるよう、しっかりと根を張った木に繋いであげたいと思った。

どうにか繋ぐことはできたものの、その維持の仕方はわからないままだった。

それでも、私の言葉を信じて健気に付いてきてくれる彼の姿を見た途端に、そんな心配は消えてなくなった。

友は私に言った。

まるで姉弟のようだと。

私はその時は恥ずかしさあまりに曖昧な返答をしてしまった。

でも、心の底ではとても嬉しかった。

彼がどう思っているかはわからないが、少なくとも友はそう思ってくれていると知って、嬉しくなったのだ。

少年の考えを改め、行動を諫め、歩き方を教え、歩み方を教授した。

間違いなく充実した日々になっていた。

うちに居候している女神様も眷属を探しているとのことで、運良く彼は冒険者になることが出来た。

そんな中に、自分の心に不安分子が混ざり込んだ。

それから数日後、ダンジョンに行くと言つて聞かなかつた彼の力を確かめる為、修練場で組手を行うこととなつた。

研ぎ澄まされた感覚、磨き抜かれた技の数々、鍛え抜かれていた肉体、飛び抜けた戦闘の勘。

彼が今日まで積み上げてきたものを、私は目の当たりにした。

正直言つて、とても悲しかった。

年端もいかない子どもが、人殺しの術を身につけていた。

冷徹に、残酷に人の命を刈り取る技を持っていた。

L.v. 4にまで上り詰めた自分が、冒険者となつて一日と経っていない子どもに恐怖と悲しみを覚えた。

私は必死にその動揺を隠した。

隠すことに精一杯だつた。

例え他人の感情に疎くても、あの子の前でそれを晒すのは間違つていると思つたか

ら。

情け無い姿を、見せたくなかったから。

先導者として、恥じない姿を張り続けなければならぬと思つたから。

それでも、殺人拳を振るうあの子の姿を見るのは、やっぱり辛かつた。

あの子が戦いに関係しなければ穏やかな日々ではあつた。

寝食を共にし、鍛錬を行い、一日を共有する。

普通の一日を送れるだけで十分だつた。

私はそんな当たり前の生活を送れるだけで満足していたのだ。

しかし、現実とは思つた通りにいかないのが常。

上層なら敵なしと判断して一人であの子をダンジョンに行かせてしまつたのがまずかつた。

話を聞けば、初日で中層一步手前まで潜つてしまつたという。

当然彼の主神様はお怒りになり、きついお叱りを受けることとなつた。

誰に何を言われても表情は動かさず、常に自分のペースを崩さないあの子が、その日はホームを飛び出した。

長いこと遠ざかつていた人の温かさに触れ続けたのが裏目に出たのか、女神様に叱られた際はずつと俯いていた。

心の何処かで響いていたものがあつたのかもしれない。

あの子に対して失礼ではあると思うが、私は嬉しかった。

あれだけ凍り付いていたあの子の感性が、時間と人との接触を積み重ねれば溶かせると思えたからだ。

これは一つの兆し。

時間さえかければ、元通りとはいかずとも本来のあの子に近づくことができる。

私は、その時呑気にそんなことを考えていた。

その夜に事態は急展開を迎えた。

自分も言い過ぎた点もあることから、彼の部屋へ行き謝ろうと思った。

私がしつかりしなければ。

ノックを重ねること数回。

普段であれば返答は必ずあるのに、その日に至っては何の返答も帰ってこない。

扉を開けると、返答がない理由が分かった。

寝具しかない殺風景な部屋に、あの子の姿がなかったのだ。

途端に私の頭は真っ白になった。

子どもがヘソを曲げて家を出してしまふのは珍しいことじゃない。

大したことではないはずなのに、私は居ても立っても居られなかった。

私の豹変に気づいた友が何があつたか聞いてきたが、私はそれに答える余裕を失くしていた。

結果、誰に詳細を伝えることなく街中を走り回つた。

心配で仕方ない。

たださえ風来坊で土地勘もないのに、一人夜の街を当てもなく彷徨うなんてどうかしている。

早く見つけて連れて帰らなければならぬ。

私がしつかりしなければ。

もう日も沈みかけている。

暗くなれば邪な思惑を持つ輩が街を闊歩し始める。

行動し始めている闇派閥の件もある。

あの子が巻き込まれたなんて私の耳に入ったら、その時こそ正気を失ってしまふ。

探し回つて人通りが少なくなつてきた頃、オラリオに似つかわしくない音が風に乗つて私の耳に届いた。

轟音と破砕音。

街中で大気が震えることなど本来は有り得ない。

どうかあの子に関係ないように。

そう祈って音の震源地に向かって走った。

ままならないものだ。

嫌な予感は総じて当たってしまふ。

私が駆け付けた頃には、惨状が視界を埋め尽くしていた。

あちこち破壊された建物、飛び散った血痕、充満する殺気。

その中央に、最愛の弟が横たわっていた。

そして、それを見下ろすおうしや猛者の姿。

視界暗転。

目の前が真っ暗になる。

彼が絶対的強者の足元で力尽きている。

唇を噛み締める。

口元から血が滴る。

自分に途轍もない怒気が高まっていく。

「……………つ!!!」

しかし、ここで取り乱しても仕方がない。

心に平静を無理矢理呼び込む。

思考を放棄しようとする自分に鞭を打ち、何とか正常を保つ。

ここで感情の赴くままに飛び込んでも事態は好転しない。

私が、しっかりとしなければ。

結果、第二戦が起こることはなかった。

彼をよく看ると夥しい血痕の割には傷一つない。

どういう訳か万能薬を使つたようだ。

未だにこの二人の胸中が理解できない。

それもそのはず。

美の女神の気まぐれはかのトリックスターに匹敵するからだ。

私は全速力で彼をホームに連れて帰つた。

傷は消えど失つた血液は戻らない。

彼の体を清潔にし、増血剤を飲ませて安静に寝かせた。

「…………… ラジエル、私は…………… 貴方のために、剣を握れなかった」

友の言葉を、思い出す。

私は、彼のために戦うことができなかつた。

弟の窮地を前に、怒りを顕にすることができなかつた。

自分に嫌気が指す。

冷静沈着でいることが戦いの中で最も大切なこと。

戦士として立派な心掛けだ。

確かに正しくはあるだろう。

感情のままに振る舞えば更なる危機を招き、より多くの敵を作りかねない。

それは確かに必要なことだ。

結果的に、彼らが退いたから良しとできる。

普段の行いが更なる危機を招かずに済んだのだ。

「…………… 私は、優しくなんて…………… ない」

しかし、それは人としては間違っている。

愛する者のために拳一つ振り上げられないなんて、情けないにも程がある。

優しいなど、私に掛けられるような言葉ではない。

私は、臆病者だ。

あの頃から何も変わっていない。

下らない風習を正すのではなく、その場から逃げ出した頃から何も変わっていない。どこまで情けない女なのだろうか。

こんな無様な姿、モンスターに苦戦する自分よりずっと無様だ。実に、遣る瀬無い。

私は冒険者として強くはなったが、人としてはまだ弱いままだ。

大切な存在があんなに近くにいたのに、手を伸ばせば届く距離に居たのに。

倒れた時に支えてあげられないなんて。

何て嫌な女なのだろうか、私は。

結局我が身可愛さ余りに、他人の窮地をそ知らぬ顔で見つめ振りをする女なのか。

「情けない……」

心配すると言っておきながら、結局…… 私は戦えなかった」

そうだ、その結果がこれだ。

醜い自分を認めざるを得ない現状が、今まさに自分の目の前でそれを物語っている。

助けることができなかった。

支えてあげられなかった。
怒つてあげられなかった。

私が手に入れなければならぬ本当の強さは、ステイタスなんかじゃない。
そんな仮初めの力なんて、戦場でしか役に立たない。

自分にとつて一番求めなければならぬ力は、そんなものじゃない。
もつと、人として持たなければならぬ大切なもの。

私は、今一度自分を見つめ直さなければならぬ。
眠る少年の額に、そつと口づけを添えた。

迪々しくはあるが、これは私なりの誠意だ。

「勝手……ですよね。」

すみません、私は本当に不器用のようです。

でも……これだけは、譲れません。

私はきつと、今度こそ、貴方を守り抜いてみせます。

例えば私がどうなろうと、命に代えて貴方を守る。

その小さな体も……ボロボロになったその心も」

これは誓いだ。

今度こそ、自分の大切なものを守り、思いやる心を忘れない。

例え自分の身がどうなろうと、首だけになろうと戦い抜く。

決意を胸に、彼の手を優しく握る。

無事目を覚ましてくれるだろうか。

不安だ。

また元気な姿を見せてくれるだろうか。

心配だ。

あの穏やかな日々を、また一緒に過ごすことができるだろうか。

その夜、私は声を押し殺して涙を流した。

私がしっかり、しなければ。

「ラジ…… エ、ル」

聞こえる。

怒りと嘆きを纏った、彼の叫びが耳に届く。

憎しみで塗り固めた彼の心の声が聞こえる。

これは、泣いているのだ。

本当に子どものように、泣き叫んでいるだけなのだ。

この広い世界に、独り置き去りにされてしまったことに対して、涙を流しているだけなのだ。

難しいことじゃない。

今ならあの子の心が理解できる。

私は、今こそ立ち上がらなければならない。

あの子の心の一部を理解できたと、行動を持ってして示さなければならないからだ。

「うっ……… ああ………」

何て……… 無様な、姿」

確かに今の私はとても見るに耐えない姿だ。

先陣を切って大口を叩いていながら、気を抜いて不意打を食らうような恥ずかしい有

様だ。

骨折はないが、大質量の攻撃を受けたことで内臓のいくつかが損傷した。血が口から込み上げ、思わず吐血する。

満身創痍。

今の私を例えるのなら正しくそれが該当するだろう。

だが、かといって呑気に寝ている訳にもいかない。

再来した弟の窮地だ。

怒りと憎しみに全てを委ね、周囲だけに留まらず自らをもその炎で焼き尽くそうとしている。

あれでは数分と持たず灰になってしまおうだろう。

それだけは、絶対に止めなければならぬ。

あの時見た血塗れのラジエルの姿が脳裏から離れない。

あんな痛々しい彼の姿はもう見たくない。

だからこそ、私はここで立ち上がらなければならない。

彼を、支えてあげなければならぬ。

今こそ、あの時の誓いを示す時。

「…………… はあ、はあ。

力…………… なんて、なくても。

戦う力なんて、なくても…………… 私は、立てる。

あの子を、支えてあげられる」

今この時なら、まだ間に合う。

血と涙を流して暴れまわる駄々っ子を、抱き締めてあやしてあげることくらい、今の私にでもできる。

あの子には故郷を焼かれ、家族を焼かれ、友を焼かれ、記憶を焼かれ、感情を焼かれた過去がある。

原型を留めないように自分の存在をも焼かれたあの子に比べれば、私の痛みなど取るに足らない。

霞む視界でも、彼の姿だけははっきり見える。

震える体でも、立ち上がるだけの力は残っている。

傷だらけでも、歩み寄ることはできる。

我が主神、女神アストレアよ。

戦う力はいらない。

代わりに、誰かの為に寄り添える本当の優しさを下さい。
道に迷い、孤独になってしまった子どもを、優しく包み込む力を下さい。

「……………」

阻むは猛々しく畝る炎の奔流。

緑豊かで沢山の草木で生い茂っていた空間は、まるでひと時の夢だったかのような有様になっている。

それは憎しみの体現。

憎悪は周囲に伝播していき、最終的に破滅を齎らす。

これは、その結末を再現している。

炎とはそういうことなのだ。

憎しみや怒りを薪にして燃え上がり、飛び散った火の粉がそれを周囲に広げていく。そうして憎しみが満ち溢れていくのだ。

その光景を見ているだけで、心が折れそうになる。

悲しみに打ちひしがれそうになる。

涙が勝手に溢れてくる。

それでも、私はこの足を止める事は出来ない。
彼を助けたい。

心にあるのはそれだけ。

その一心で私は立ち上がり、痛む体を引き摺っている。

未だに、あの答えは出せていない。

何が本当の正解なのか、未だに判断できないでいる。

だからこそ、その答えを知る為に歩みを進め続けているのだ。

彼と共に生き、沢山の思いを分かち合う事でいつかそれを見つけられる。

私の生には、あの子が必要なのだ。

「こんな……もので、私を拒めると、思っているのですか……？」

この炎は憎しみであると同時に、他者を寄せ付けたくない心の表れ。

拒絶なのだ。

もう独りになる感覚を思い出したくない。

味わいたくない。

だから、誰も自分に関わって欲しくない。

ならば一層のこと、誰も自分に近づけさせなければいい。

私は直感的にそう悟った。

勿論、彼の口からそう語られたことなどない。

全ては私の妄言と偏見なのかもしれない。

それでも、一概にそうではないとも断言できる。

だって、彼の全てがとても悲哀に満ち溢れたものだったからだ。

だからこそ、寄り添ってあげる相手が必要だ。

私が、その役目を引き受ける。

喜んで彼の姉として隣に立ち続けよう。

その在り方受け入れ、正し、導き、戒めよう。

「……………」

いつしか叫び声は収まっていた。

死に体に近い体を引き摺って歩を進める私に対して、多くの視線が集まるのを感じる。

その中に、一番伝えたい相手のものが混じっていたことも、ちゃんと感じられた。

炎が、その猛りを潜めた。

際限なく燃え上がっていた炎は、いつの間にか勢いを失くしつつあった。

それもそのはず。

この炎は彼そのもの。

彼の心の表れそのものなのだから、彼の反応次第でそのあり方を変えるのは至極当然のことだ。

私を見なさい、そしてよく聞きなさい。

声に出せずとも、視線だけはずっと向けた。

彼は私を見てくれていたのだろうか。

こんな情けない姿を晒している私を、しっかり見てくれていたのだろうか。

例えばちゃんと私を見てくれていなくても、この声だけは絶やさないうようにしなければ。

「貴方は大変頑固、ですが……私も、大概です。

一度言った事は簡単には曲げませんし、性格も……堅つかしい。

融通も、効かない……上に、とても生真面目……です。

……そんな私だからこそ、譲れないものがあります」

貴方を、守りたい。

私は、自分の命と同等以上の存在を見つけられた。

それは夢くて、とても脆い存在。

触れればすぐにでも壊れてなくなってしまうような危うげな子。

明確な根拠は自分にも分らない。

でも、守りたいと思つた。

そんな存在を、守りたいと思えた。

「貴方が人を拒み続けるというのなら、私はそれを諦めさせるまで…… 寄り添います。」

貴方に、誰も何も言わなくなったとしても、私はずっと口煩く説き続けましょう。

貴方の隣に、誰も立たなくなつたとしても…… 私はずっと貴方の隣に、立ち続けま

しょう。

自分でも変なことを言っていると、自覚はしています。

……でも、どうしてでしょう。

止められないんです。

この心が、私を突き動かす。

……ふふつ、リーヴァのいう通り、かもしれないね。

私は、いや……私たちは、そういう風に見られていたのでしょうか。

今ならはつきり分かる。

今はつきりと自覚できました。

ねえ……ラジエル、貴方は決して独りなんかじゃない。

少なくとも、私が保証、しましょう。

だって、だって私は……世界でたった一人の

「……………」ア

少年の涙が、あか抜けていく。

おどろおどろしい血涙が、透き通ったものに変わっていく。

それは、思われてはいたものの、決して本人の口から出てくることのない言葉。

自分が言われて、一番嬉しかった言葉を、今こそ彼に伝えよう。

そつと彼の顔に触れる。

ようやくはつきり見えた。

戸惑って、まるで幽霊でも見ているような間の抜けた幼い顔。
私はその小さな体を、優しく包み込む。

出会ったその日にしてあげた、悲しきを含んだものではない。

愛しい気持ち勝った、本当の優しさからしてあげられる暖かい抱擁を。

——
貴方の、お姉ちゃんですから

第29話 少年、首を啜えられる

「暴走と思い待機していたが、どうやら杞憂に終わったようだ。

この短期間で力を着実に付けてきているな。

フツツ、いや実に結構。

そうでなければ面白くない」

静寂が階層を包む中、オツタルは遠くから戦場の跡地を眺めていた。

いや、正しくは少年を見ていた。

初めて手合わせを行ってからそう長い時間は経っていないというのに、何故だか彼の成長具合を確かめたくなったのだ。

短い時間で、随分と腕を上げたようだ。

以前より技のキレも増しているし、動きも随分と大胆になった。

あの時は慎重さが際立ったせいかな、決定打に欠けていた。

無意識下の恐怖心が出たのか、正確に打ち込むことに拘りを持っていたのかは分から

ない。

だが、オツタルは今日の少年の動きを見て考えを改めた。あの少年なら、自分とやり合うに値する者になると。全力で拳を合わせる機会も、そう遠くはなさそうだ。

「いやはや、楽しみだ。

興奮で震えるなどいつ以来だろうか。

だが、やはりこのままでは物足りんな。

急かすなど俺の性分ではないが、余りにも待ち遠しい。

もっと別の方法で奴を伸ばせないものか……」

オツタルはこと好敵手となり得る相手に対して、その力を伸ばすことに関して妥協しない。

持てる力全てを引き出させ、且つそれを上回ってみせる。

勝つことを前提としているのではない。

オラリオで頂点に上り詰めてしまった自分に、まだまだ高められる何かを探している。

究極的に言えば、負けることを望んでいる。

敗北することで今まで気づけなかった新たな発見を見つけ出したいのだ。

武人は決して現状に満足しない。

生ある限り、どこまでも上を目指す存在だ。

だからこそ少年に期待している。

自分を打ち負かすかもしれない存在に、期待を寄せつつあるからだ。

「やはり、アレしかなさそうだ。

フレイヤ様はお許しになるだろうか」

何かを思い立ち、早々に地上へ戻るオツタル。

彼の胸中を理解できる者は、果たしているのだろうか。

強さのみに固執し、狂喜乱舞して自ら死地へ赴く姿勢を、果たして誰が理解できるだろうか。

最早第三者が何を思い、何を口に出そうが関係ない。

ただ自分を目指すだけだ。

果てのないその先にある、武の極地というものを。

赤いゴライアスとの決戦後は、静かなものだった。

倒したことに關してホツとはするものの、皆一概に手を挙げて喜びを示す気になれなかったからだ。

それもそのはず、自分たちを追い詰めていた巨人をたつた1人の少年が終わらせたのだから。

それはそれは途轍もない光景だった。

髪を振り乱し、血の涙を流して一心不乱に暴れ回る鬼がいた。

激情に駆られ、慟哭を漏らしながら巨人を一方的に焼き殺したその姿は、冒険者たちの畏怖を買うには十分だった。

腕の一振で大地を砕き、あらゆるものを焼き尽くした。

まるで御伽噺に現れるもののようなだったとのこと。

最後はあるエルフに諭され、糸の切れた人形のように伏したという。

事情をある程度知っていたロキ・ファミリアの団員であるリヴェリア・リヨス・アー
ルヴによってギルドへ嘆願書を提出。

少年の働きにより変異種を撃退したこと、運良く他の冒険者に傷害を負わせなかった等の事実を鑑みて、少年について触れ回らないよう箝口令が敷かれることとなる。

後に意識を取り戻したアストレア・ファミリアの眷属であるリユー・リオン、並びにアテナ・ファミリアの眷属であるラジエル・クロヴィスに対してギルドより事情聴取。

変異種となったゴライアスについて詳しい実態を聞くことは出来たものの、肝心の少年の暴走においては意識がはつきりしていなかったため詳細は聞けず。

当の本人に聴取をしようにも未だに意識不明でこの詳細を聞けず。

様々な謎と隠蔽によって、今回の事件は霧のかかったような結末で閉じられることとなった。

それから数日の時間が流れてアストレア・ファミリアの安静所。

「どう、リユー？」

「ラジくん起きた？」

「アストレア様。」

「いえ、まだ目を覚ます兆候はありません」

「そ、そうか……やはりまだ起きないか」

「アテナ様まで、わざわざご足労痛み入ります」

「なに、自分の子どもが大変な目にあっただのだ。

親としてどんな具合か確かめるのは当然だろう。

貴殿の調子はもう良いのか？」

「はい、お陰様ですっかり。

リーヴァには絶対安静と怒られたので外出は出来ませんが、私は元気です」

リユーは朗らかに笑うものの、その裏には心配が張り付いている。

変異種のゴライアスを倒した小さな英雄は、今もずっと眠りこけている。

無理もない。

初めて魔法を行使したせいで加減が利かず、自身をも焦がす炎を浴び続けたのだ。

アレほど大規模な魔法を長時間発動すれば、精神力と体力の消費は想像を絶するほど

激しかったに違いない。

そして、あのラジエルらしからぬ人格の激情。

一部始終しか見ていないが、アレは一体なんだったのだろうか。

一番考えられる線としては、溜まりに溜まった負の感情の爆発。

子どもの表現としては癩癪が一番近いだろう。

そんな可愛い表現で収まるものではないが、恐らくそれが近い。

「もう三日も目を覚まさないから尚更心配ね。」

お医者さんは呼んだの？」

「その事ですが、もうじきにある方に診ていただくことになっています」

「それって」

「済まない、遅れたか」

「あら、これはまた適任を呼んだのね。」

貴方なら安心だわ」

「ああ、貴公なら全く問題ないだろう」

ノックの後に現れるのは長駆の男性。

医療の神であるディアンケヒトを父に持ち、その父をも凌ぐ才覚を有する偉大なる神のうちの一神。

神ミアハである。

神の力を封じられていなければ、あらゆる傷を治療し、どんな患者であろうと立ち所に治せる。

有名な逸話では、万能薬なしで千切れた腕を完全に結合させるほどであったこのこ

と。

力を封じられていようとその診察観は以前のまま。

少年の現状について最も適切な診断を下してくれるだろう。

「ミアハ様、わざわざご足労頂いてありがとうございます。ごぎいます。

すみません、お忙しい中往診など依頼して」

「気にするな。」

役職柄不適切なことだが、仕事が貰えて嬉しい限りだ。

それに、お前たち子供らを診ることに不満などない。

いつだって元気であるべきなのだからな」

「勿体無いお言葉です。」

急かすようで大変恐縮なのですが、早速彼を診ていただけませんか？」

「もちろんだ。」

これは……随分とまた珍しいものを背負った子だ。

到底その身で背負い続けられるものでもなかりうに」

「つまり？」

「うむ、肉体に関しては全く問題ない。」

外傷はおろか臓器一つ損傷していない。

目が覚めないのは初めての魔法行使による魔力枯渇マインドゼロで間違いないだろう」

「では、目を覚ますのも時間の問題と？」

「ああ、その見方で問題ない」

「はあ………よかった」

「だが………」

リユーは胸を撫で下ろし、安堵の溜息をつく。

医療に長けた神ミアハが言うのだから間違いはない。

彼は金儲けのために医療の力を振るうことはないと評判の持ち主だからだ。

富より人々の健康を。

万年零細ファミリアではあるが、彼はそのことに関しては全く問題視していない。

根っからの善神でお人好しなのだ。

だが、最後にミアハがその口を莎もらせる。

「ミアハ、身体以外に不調が見られるの？」

「どういふことだアストレア？」

「いや済まぬ。」

彼のような状態の子を診るのは実に久しぶりでな。

なんと言い表したのか……。

そうだな、強いて言うのなら彼は間違いなく健康で、信じ難いほどに重症だ」

「……重症？」

「先に言った通り肉体面に関しては全く問題ない。

内面がどうもおかしい。

診断前に聞いた彼の特徴は把握している。

データにある年齢と身体の成長具合がどうも一致しないため、少しばかり疑問に思っ

ていたのだ。

彼と直接話をするまで確信は持てなかったのだが、姿を見て確信できてしまった。

彼は違う意味での重症だ。

心の大半が死んでしまっている」

「心の大半が、死んでいる？」

思わぬ診断を下され、意識が真っ白になりかけるリユーとアテナ。

心が死んでいる。

それはつまり廃人と同じ意味を指す。

あらゆる欲求を失くし、ただ虚ろに彷徨うように行動する。

それは、年端も行かない少年に対して余りにも残酷な結果。

思い返せば彼の言動がミアハの診断と一致する。

薄れた危機管理能力、凍りついたように動かない表情。

彼から直接聞いていたはずだ。

なのに、ミアハからの言葉が深く心に突き刺さる。

「確か、ラジエルの年齢は」

「14歳です」

「年齢の割に身体が幼過ぎる。

個人差はあるが、彼の成長具合は誤差の範囲内にも届いていない。

触診を試してみた結果、やはり十分に育っていないな。

食事は申し分なく摂取され、睡眠も十分。

不摂生でないにも関わらずこの身体。

やはり精神面が身体的成長を阻害していると診てまず間違いない。

辛い宣告をするだろうがよく聞いてくれ。

彼の身体は、恐らくこれ以上成長することはないだろう。

まるで成長の時間が止まっているようだ。

仮に堰き止められたものがなくなつたとしても、身体が急激に成長することは有り得ない。

人の成長ホルモンの分泌は決まっているのだからな」

リユーは、頭を鈍器で殴られてような錯覚に陥つた。

目の前は歪み、思考が完全に止まる。

少年の身体はこれ以上成長することはなく、心が以前のように元どおりになることもない。

医師からそう診断されてしまった。

自分が以前感じていたあの兆候はただの気のせいだったのだろうか。

不器用なりに誰かのために動いたあの時の彼の姿の姿から感じたものは、間違いだったのだろうか。

「ちよつと！

勝手にズカズカ上がり込んで、勝手に寝室に進むんじゃない！

いくら貴方でもやっていいことと悪いことくらい……!」

「退け、貴様に用などない」

「騒がしいわね?」

「ここか、漸く見つけたぞ小僧」

「あらあら、フレイヤの子の」

「……『おうしや猛者』?」

「少し見ない間に情けない面をするようになったな、女」

息を吐くように皮肉を口にし、悠々とこちらを見下ろす大男の姿がそこにはあった。

この場に似つかわしくない猛々しい雄。

弱者を歯牙にも掛けない自尊心を存分に振るい、己の目的にしか興味を示さない生粋の狂人。

「礼儀も礼節も弁えない輩にそんなことを言われる筋合いはない。

今日の私はひどく虫の居所が悪い。

早々にお引き取り願おうか」

「貴様の問題など大体察しがつく。

神ミアハから小僧の精神の真相を知ったのだろう」

「貴様っ！何故それを!？」

「悔るな。」

そんなこと、小僧と最初に拳を合わせた時に理解した」

「……だが生憎ラジエルはまだ起きない。」

「貴様もそれでは用も何もないだろう」

「フン、子どもを起こすことなど造作もない」

起こすと言いつつ、オツタルは扉の前から一步たりとも動こうとしない。

ますますもって怪しい。

突如として他ファミリアのホームに足を踏み入れ、意識不明の少年に用件を押し通そうとする。

やはりこの男たちの考えることは想像できないし理解もできない。

自分たちの目的のみしか考えないのだ。

怒りを通り越して呆れていると、オツタルの面持ちが一瞬変貌する。

殺気だ。

ホーム中の眷属たちを即座に臨戦態勢にさせるほどの殺気を躊躇いなく放ったのだ。

「起きろ、ラジエル」

「っ!!!」

.....アレ、リユール？

アテナさまもアストレアさままで？
なんでオツタルがここにいるの？」

殺気に当てられ覚醒を果たす。

その流れはまさに条件反射のようで、一瞬で攻撃体制に移る。
そしてすぐさま自身の状況を確認する。

出てくるのは当然の疑問だった。

「ラジエル!？」

「寝過ぎだ馬鹿者。」

休息以外の睡眠は不要だ。

武の真髄を志す者ならばそれくらい食欲になれ。

まあ、今回はいい。

「そういつた面も踏まえて俺が一から鍛え直してやる」
「どういうことだ。」

話が飛躍し過ぎていて理解できない。

おうじや 猛者、説明してもらおうか」

「貴様には関係の無いことだ疾風。」
リオン

小僧を暫く借りる、ただそれだけを伝えるに来た。」

「…… 貴様のような狂人に弟をみすみす渡すと本気で思っているのか？」

「伝えるべきことを伝えたに過ぎない。」

故にお前からの返答はいつでもよいこと。

問題は小僧の返答だ」

「なにになに？」

みんな怖い顔してどーしたの？」

話の流れについていけないラジエルは首を左右へ振って当然の疑問を口にする。

問答を繰り返す二人は互いに牽制し合い、一步も譲らない雰囲気醸し出している。

立场上口を出しづらい神たちを差し置いて、三つ巴の小さな争いが行われた。

「時に小僧、お前いつも身につけていたはずの防具はどうした？」

「え？」

あ、そういえばない。何でだろ。

リユ-知ってる？」

「え、ええ。」

以前対峙したゴライアスとの戦闘時に破損したようです。

回収してくれたヘファイストス・ファミリアの眷属が持ってきてくれました。

ラジエルには酷な話だと思いますが……その、もう修復不可能なレベルだそうです。

これがそうです」

差し出された布の包みには完全に粉々に砕けてしまった少年の防具。

元々あつた劣化に加え、自身の魔法による炎で所々炭化しており、到底直せるレベルの問題ではないことが如実に示されていた。

最後の最後まで少年に付き従ってきた名もなき籠手と脚具。

無残にもこの有様となつてしまつたが、最後まで少年を守り切つた。

これらがなければ少年の体はもつと痛々しく傷ついていたことだろう。
ある種本懐を遂げたのだ。

防具としてこれ以上の最後はない。

「そうか、いや惜しい物を無くしたな」

「うん、気に入ってたんだけどね。」

リユー、これじゃあダンジョンに行かせてくれないよね？」

「ええ、最低でも防具を揃えなければいけないという条件でしたからね」

「ならば俺が見繕ってやろう」

「……聞き間違いか？」

今貴様がラジエルの防具を見繕うと、そう言ったのか？」

「その通りだ。」

俺が小僧の防具を見繕う。

条件として小僧を暫く俺に預けることだ」

「そんな条件……！」

「無論、俺が揃えると言った以上生半可な物は与えん。」

こいつの素材は一級品に勝るものがある。

ならば、それに相応しいものを身につける義務がある。

ヘアイストス・ファミリアにて正式に依頼し、後に伝令役をこちらに寄越せばいいのだろうか？」

「そういう問題ではない！」

この際だからこそ言わせてもらおう。

貴様たちは最も信用できない。

あの方には他の追従を許さない魅了があると聞く。

ラジエルに危害の及ぶ可能性がある以上許可は出来ない」

「貴様は何か勘違いをしているな。」

今回我が主神はこの件に関して関与していない。

言うなれば俺の提案に許可を下していただいたまでのこと。

それ以上は俺の采配に全てを任せると仰ってくれた。

故にこれからの行動は全て俺の独断だ。

貴様も理解しよう。

俺が他ファミリアに危害を与えれば、その責め苦を受けるのは当然我がファミリア。

それは敬愛する我が主神のお顔に泥を塗ることと同義。

俺が、そんな大罪を犯すと思うか？」

「そ、それは……」

それは彼らを知る者ならば誰もが理解できる理由。

フレイヤ・ファミアの面々は全て女神フレイヤの虜。

彼女の顔に泥を塗るような真似は決してしない。

自身の命と不敬を招く行為どちらかを取れと言われれば、皆二つ返事で自害を選ぶ。

それほどまでフレイヤを崇拜しているのだ。

そして、今リユーの目の前にいる男はその崇拜対象の女神の側近を唯一任された男。彼女に対して危害を加える者がいれば一切の容赦なく鉄槌を下す。

どんな有権者であろうと関係ない。

危害を加える者は例外なく殺す。

そんな彼が彼女に対して不敬を働く行為などする筈がない。

リユーにとって、これ以上ない説得力を持った発言だった。

「フン、理解したようだな。」

ならばこれ以上この件に関して話すことはない。

では小僧、改めてお前に問おう。

期間は今の所未定。

目的はお前を俺自らの手で一から鍛え直すこと。

無期限の修行となる。

その際に掛かる費用等は全て俺が受け持つ。

来るか来ないか、今ここで返事をしろ」

「それって、俺を強くしてくれるの？」

「鍛錬の果てにお前がどうなるかはお前次第だ。

弱くなるも強くなるも全てはお前にかかっている。

色々無理難題はするが、それに応えられればお前は以前の自分とは比べものにならない

い力を得られることだろう。

見果てぬ過酷な鍛錬だ。

お前ほどの器なら、当然命を危険に晒す機会が山のように立ちはだかる。

それに、お前は立ち向かう意思があるか？」

「ねえリユール？」

「……… なんですか？」

以前のラジエルなら二つ返事で頷いていたことだろう。

自分を高めることに関して一切の妥協をしない子だ。

どんな危険でも簡単に飛び込んで行ってしまおう。

その先にある未知の力を得るためなら、彼はオツタルの提案を受け入れるだろう。

だがあろうことか、少年はすぐには頷かなかった。

自分の心配をして止まない姉を見て、ある提案をする。

「リユーも一緒に来ない？」

「……………はい？」

第三章

第30話 少年、彷徨く

「済まん小僧。

やはりいきなり遠出の旅に出るのは無理があつたようだ」

「えー、俺すつごくはりきつてたのに。

オツタルうそついたー」

「嘘ではない、ちゃんと旅に出てお前を扱き上げる鍛錬は必ずするとも。

だが、流石に我が主神フレイヤ様も、こんなに早く発つとは思わなかつたようだな。

我ながら張り切りすぎていたようだ。

オラリオの外へ長期的に外出するためには様々な手順が必要なことを失念していた。

まあ、それは俺の部下に段取りを踏ませているため時間の問題ではあるのだが、如何

せんそれでは時間を無駄にする。

よつて許可が降りるまでの間、ダンジョンにて鍛錬を行うものとする。

雑魚をいくら相手にしたところで積めるものなどたかが知れているのだが、ないより

はマシだろう」

オツタルがアストレア・ファミリアへ乗り込み、ラジエルとリユーの前で衝撃的発言をしたその翌日、ラジエルは再び彼に呼び出されていた。

彼の思惑は、ラジエルを自らの手で叩き上げ、今一度戦いを行いたいというものである。

基本的に、冒険者たちは他ファミリアへの干渉を避けるのが一般常識であるという風に広まっている。

それは自分たちファミリアの情報が外部に漏れるのを避けるため、要らぬ諍いを回避するためといった理由が主に占めているからだ。

自分たちのステイタスのデータは勿論、極力弱点となる情報を隠すのが普通だ。

いくら親しいからといって、自分たちの内部情報が露呈されてしまえば夜健やかに眠ることは叶わなくなる。

その安全を常に確保するために、各ファミリアは秘匿主義を貫いている。

だが、事そうだった話はこの二人にとってはあまり意味を成さなかった。

「俺じよーそーの敵あきたよ。」

ちゅーそーもそんなに強くないでしょ?」

「ああ、あんなものその辺に転がる石と何ら変わらん。」

蹴ろうが殴ろうが何の足しにもならん上に時間の無駄だ。

俺とやり合ったお前なら、どれを相手取つても退屈するだろう。

下層の奥深くならまあまあやりごたえのある輩はいるがな」

「じゃあそこへ行こーよ。

あ、その前に俺あのおっきい奴と戦いたい。

ごらいあす、だっけ？」

「やめておけ。

あんな独活の大木を殴るくらいならサンドバックを殴っていた方がずっとマシだ。

動きは鈍間過ぎて欠伸が出る、攻撃は単調過ぎて避ける気も失せる。

結局他の雑魚と何一つとして変わらん。

それにお前は一度あいつを沈めているだろう」

「あんま覚えてないからまた戦いたいんだよう。

ねえねえオツタル、じゃあかそーに行こうよ」

「今のお前では一掠りの攻撃を受けただけで簡単に死ぬ。

力も経験もステイタスもまだ何一つとして足りていない。

まあ何体かは殺れるかもしれないが、あまりにも効率が悪すぎる。

俺はお前の指導はするがお守りはせん。

却下だ」

「ええー。」

もうさつきからそればつかじやん」

先程からこういつた問答ばかり繰り返している始末だ。

ダンジョンにて鍛錬を行うとオツタルは言ったが、結局のところどれも相手にならぬ
い上に大した力も得られない。

自分から言っておいてラジエルの提案は悉く却下という判を押し続けている。

これもまた彼の意外な一面。

やると言つた以上、半端なことは許さない。

やるならば全力で効率よく、且つ常に命を危機に晒し続ける状況でなければ納得しな
い。

オツタルもまた融通の利かない頑固な一面があるのだ。

「だからこうして昼飯を奢ってやろうと店を探してる。

まずは飯だ。

腹が減つては戦はおろか鍛錬も出来ん。

お前もどこか良さそうな店を探せ」

「俺この街に来たばっかりだよ？」

おいしそうなお店なんて分かんないよ」
「じゃあ勘だ。」

「ここが美味そうだと直感で知らせろ」

「あ、それならいくつかあつたね」

「早く言え」

「おい……………何なんだありや？」

「何で猛者がこんなところにいるんだよ……………」

「あの子、猛者が怖くないのかしら……………」

「てか、何で肩車なんかしてんだよ。」

猛者おうじやもスルーしてるし……………訳がわからん」

「というかそれより」

「もう別にどこだつていいんじゃないですか？」

さつきからこの問答を上から下へ、下から上へとずっと繰り返しながら歩いている。

正しくはオツタルだけが。

ラジエルはオツタルの肩に飛び乗り、勝手に肩車を成立させている。

歩くことに飽きたのかどうかはわからない。

ただいつの間にか肩に乗っている。

オツタルはどうでもいいといった感じを相変わらず周囲に振りまいている。

二人にとつて、周りがどう囃し立てようが興味がない。

いつだって根本は強くなることだけ。

それ以外はもうでもいいのだ。

そんな二人を後ろからしつかり見守っている影があつた。

「疾風^{リオン}、今の言葉は聞き捨てならんな。

いいか、食物の摂取は体を作るため必要不可欠なもの。

そんじよそこらの適当な店の出す飯ではいくら食おうがいい筋肉は作れない。

貴様も理解していよう。

飯とは自らの血肉を作り、且つより強靱な体を作るために欠かしてはならないということ。

故に、半端な飯屋ではならんのだ」

「変に力説されても返答に困るんですが……」

ラジエル、本当にこんな男に付いていって大丈夫だと思えますか？」

「でもオツタルしゆぎよー見てくれるっというし」

「鍛錬なら私がいくらでも見ますよ？」

「リユーはお姉ちゃんだからあんまり戦いたくない」

「……………っ!!

猛者おうじや…………… テイツシユ、持っていないか?」

「好きに使い切れ」

不意打ちに鼻血を出して悶絶気味のリュウを無視して再び店を探そうと歩き出すオツタル。

少年も再びしきりに頭を左右に振りつつ辺りを見回す。

リュウが何故オツタルに着いてきたのかは至極単純。

そこに着いていこうとする弟、ラジエルがいるからだ。

戦闘以外において危機感が綺麗に抜け落ちているため、本人の知らない間にトラブルに巻き込まれるのを事前に防ぐため彼女はここにいる。

要するに少年が心配で着いてきただけの話だ。

「…………… んんっ!

お店を探すのはまあいいとして、ラジエルは今防具がないためダンジョンに行くことは出来ません。

ヘアリストス・ファミリアに依頼してもすぐに用意出来る訳では無いんですからダンジョンも却下。

よって鍛錬は地上で行うべきです」

「地上では周囲に被害が出る。

加えて軟弱者共が彷徨っているしな。

変に触れ回られても動きづらい。

却下だ」

「周囲に被害を及ぼすほどの規模なのか……？」

どちらにせよ装備品がない以上迂闊には潜れない。

最近多発しているモンスター暴走化の件もある。

ラジエルの身の安全の為に私としても許し難い」

「常に自身を危機に晒してこそ手に入るのが力だ。

ぬるま湯に浸かって得られるものではない。

貴様の考えは余りにも甘いぞ疾風^{リオン}」

「向こう見ずの行動の方が余りにも危険だ。

貴様とラジエルは違う」

「……………」

「……………」

「ねえねえ、なんで2人とも怖い顔してるの？」

空腹が招くものなのかは定かではない。

だが、それ以前に2人の考えは異なり、少年を導く方向性が全く別の方向を向いている。

姉として、少年をなるべく危機に晒したくはない。

凄惨な過去故に変わり果ててしまった彼を、これ以上歪めたくないのだ。

真つ当に生きて欲しく、正統な冒険者として育つて欲しい。

少年が立派に成長するまで、最後の時を共にするまで目を離したくない。

それがリユウの考え。

反面、武人は否が応でも少年を強くしたい。

長年燻っていた自分の闘志に火を付けられる相手を、漸く見つけたのだ。

何処までも強く、自分を殺せるだけの男に伸ばしたい。

忘れかけているあの高揚感を、命を天秤に掛け続けるあの興奮を与えてくれるかもし

れない子をこの手で導きたい。

それがオツタルの考え。

「変な2人。

あ、あそこからすごくいい匂い。

あそこにしよーよ」

「ん、どれだ？」

「アレじゃないのか。」

えっと、『豊穰ほうじょうのおんなしゅじんの女主人』という店名のようだ」

「……………なんだと？」

「どーしたのオツタル？」

「なんか変な汗かいてない？」

「かいていない。」

「ああ、かいていないとも。」

「今日は汗をかくほどの気候ではない。」

「たかだか徒歩程度で暑くなれるはずがないだろう。」

「そうだなあの店にするか。」

「俺の耳にもあの店は評判が良いと聞いたことがある。」

「小僧、お前の直感おうじやは正しい」

「どうした猛者おうじや。」

「評判が良いと聞くのなら何故そんなに狼狽ろうたいえる？」

「狼狽ろうたいえてなどいえない、貴様の目は節穴か。」

「余りにも芳しい匂い故に興奮きうふんを覚えたただけだ。」

「グズグズするな、さっさと行くぞ」

「わーいご飯だー」

豊穰の女主人。

冒険者だけに留まらず、一般庶民に対しても人気が高い飲食店。

ポリウム感満点の料理を始め、各種酒類も多く取り揃えているためこの店を目当てにやってくる客が後を絶たない。

価格も比較的高価過ぎるというでもないため、それらも含めて人気の要因となっている。

この店の名物と言えば聞こえが悪いのだが、店主が誰もが目を引くほどの人物という話がある。

何故オツタルの表情が僅かに強ばったのかは不明だが、店に入ること自体は不服ではないらしい。

不審に思うラジエルとリユーではあるが、そんな2人の気持ちを他所に堂々とした足取りを装ってオツタルは店へ進んでいく。

「バカなこと抜かしてんじやないよ!!!」

「ぐほおおおあああああ!!!」

「っ!!!」

「な、何事ですかっ!?!」

「ぬえ？」

「なんか飛んできたよ？」

「散々食い散らかしておいて挙句の果てに金が足りぬえだあ？」

「寝言を聞いている暇なんてこつちにはないねえ。」

「常に猫の手も借りたいほど忙しいんだ。」

「アンタ、ウチを配給所かなんかと勘違いしてるんじゃないだろうね？」

「ほ、本当なんだ！」

「勘定完全にしくじつちまつただけなんだ！」

「今日中に耳揃えて返すからどうかご勘弁を!!」

「ほう、そいつは殊勝な心掛け……………なんとでも言うと思ったのかい!!!」

「こんの食い逃げがっ!!!」

「まだ逃げてぎゃああアアア!!」

「……………」

「途轍もない迫力……………ですね。」

「いや、あの方向処かで見えた覚えが」

「あの人すつごく強そーだね」

店の戸を吹き飛ばして飛び出してきたのは冒険者と思われる身なりをした男。

冒険者をも殴り飛ばすほどの存在は、同じく冒険者でもなければ難しい。悠々と大地を踏みしめ、烈火のごとく怒り狂った表情をした店員がその面貌を明らかにする。

彼女の名はミア・グラント。

ここ豊穡の女主人の店主にして元冒険者。

この店のルールは彼女自身。

無銭飲食など、例え神が許そうが彼女は絶対に許さない。

不埒で軟弱者の冒険者には、この店のルールに則り然るべき措置を取る。

それ即ち。

「さあ、所属ファミリアが何処なのかとつと吐きな。

それが済んだら掃除に皿洗い、諸々の雑務を一人でこなすんだよ！

キツチリ代金請求してボロ雑巾のようにこき使つてやる。

ここじやあたしがルールだ。

ギルドとファミリアにチクられたくなきやキリキリ働け。

勿論その間一ヴァリスたりとも出さないからね!!」

「クツ、調子に乗りやがってクソが！

こちとら毎日危険な冒険繰り返してる冒険者様だぞ！

おいテメエら！

このババア袋にしてトンスラこくぞ!!」

未だテーブルにて座っていた数人の冒険者が重い腰を上げる。

周囲の客は怯えきり、巻き込まれないように声を押し殺すだけ。

こうした諍いはよくあることではあるが、今回ばかりは少しばかり状況が異なった。

ミアの機嫌が悪かったこと、相手方の暴言が思った以上にひどかったこと、支払いの額が普通より多かつたため。

様々な要因が重なり、状況をより混沌にしてしまっていた。

「ちよつと力を持つていい気になつてるクソガキどもが。」

まだ世間をよく知らないようだね。

社会勉強がてらに、ちよつとキツイお灸を添えてやろう……か?」

「ぐああああ!!」

「何だこのアマ!」

いきなり何しやがる!!」

ミアと冒険者たちとの間を風のように流れる影が一つ。

淀んだ空気を掻き出し、発生源である悪漢どもの一人の意識を一撃で刈り取る。

「不逞な。」

横暴はそれくらいにするべきだ。

貴様らのような下賤な輩が冒険者を語るな。

これ以上の狼藉、働くならば容赦はしない」

「おうおうエルフじやねえか。」

流石にいい女だなあ……ちよつくら遊び倒して売つぱらつちまえば当分は遊んで暮らせるぜ!!

ヒヤハハハ!!

カモがネギ背負つてやつてきたつてか!?

さつさと頂いちまおぶへあ!!」

「おじさんたち気持ち悪い。」

リ्यूには触らせないよ」

「こゝこのクソガキ!!

やつちまえ!

おい!なにボサツと突つ立ってんだ!!」

「いや……………あれ……………」

「は!!?」

「俺の恩人の店で、随分とはしゃいでくれたものだ。

新参者にして無知とは救い難い。

どうあれタダで返すわけにはいかんな。

このツケ、簡単に払いきれれると思うなよ雑魚ども」

「うああああああああああ!!!」

お、おお……お、おっじゃ猛者アアアアアアア!!」

少年の背後に佇む最強の冒険者。

彼が一瞥でもくれれば、どんな悪党も揃って口を閉じる。

そして、決まってその後は凄惨な末路を辿る。

「小僧、5秒以内にこいつらを捕らえろ。

全員まとめて吊し上げだ」

「おっけ」

「「「ああああああああああ!!!」」」

「あつははははは!!」

そうかいそうかい、タル坊の連れだったのかい!

みつともないモン見せちまって悪かったねえ!

その上お代以上の代金搾り取ってくれるたあいい子たちだ。

感謝するよお前たち」

「いえ、見過ごせなかつたものでつい動いてしまいました。

お店も特に荒らされていないように安心です。

………ラジエル? どうですか?」

「すごいよリユ。」

ちよきん箱みたいにどんどん出てくる」

「小僧、逆さ吊りのまま上下に振ってみろ。

まだまだ落ちてくるかもしれん。

鏝一文残すんじゃないぞ」

愉快痛快とばかりに盛大に笑い飛ばすミア。

不正や揉め事を起こさず、金勘定がしっかりしていればどんな相手だろうと客として

歓迎する。

その出で立ちは大の男より大きく、オツタルにすら引けを取らない屈強な肉体を持

つ。

彼女の種族はドワーフ。

女性でありながら男性顔負けの膂力を誇り、どんな相手に対しても一歩も引かない強靱な精神力も兼ね備えている。

その正体はL v. 6の元冒険者にしてフレイヤ・ファミリアの元団長。

小巨人^{デミ・ユミル}の異名は、彼女が一線を退いた今でも色濃く冒険者たちの間に残っている。

「騒がせて悪かったね。」

たんとご馳走してあげるからゆつくり寛いでいきな。

あたしはミア、ミア・グラントさ。

騒ぎを起こしておいて何だけど、これからもご最真にしてくんない！」

「これはこれは申し遅れました、リユー・リオンと申します。」

あの豪快な姿、合点がいききました。

フレイヤ・ファミリアの団長にしてL v. 6の一流冒険者。

引退したと聞いていましたが、まさか開業していたとは驚きました。

L v. 6にしてお店をも開ける料理の腕前があるなんて………
心底羨ましい

です」

「二元だよ元。」

今はフレイヤ様のご好意で一線から引かせてもらって、こうやって元気に店やらさしてもらってるだけさね。

アンタも相当腕の立つ冒険者らしいね。

…… ああ！こつちも合点がいったよ！

アンタが話に聞く魔法戦士かい。

こんな可愛い子だとは思わなかったよ。

ふんふん、見れば見るほどいいじゃないか。

どうだい？あたしの店で働く気はないかい？」

「い、いえ…… ご好意は嬉しいのですがお断りさせて頂きます。

今はちよつと手の掛かる子から目が離せませんので」

「そうかいそりや残念だ。

まあ気が変わったらいつでも言ってくるな。

いつだって歓迎するからね！」

「それにしても、何だか新鮮なものですね」

「うん？」

リユーが後ろをチラと見やると、そこには猛者と少年の姿があった。

悪漢共を吊し上げ、折檻をしている姿はどうにも穏やかなものではないが、それ以上に新鮮味を持っていた。

あのフレイヤの側近であるオツタルが高圧的になれない人がいるなんて。

「まとめてばーい」

「伝令は既にしてある。

直にギルドの使いが適当に処理するだろう」

「全くこつちを見ようともしません」

「ああいいのさ。

昔にね、ガキの頃から扱き過ぎちまったせいとか、どうもあたしには頭が上がりなくなつたみたいでねえ。

別になんとも思つちやいなんだから普通にすりゃいいのに……コラア！アーニヤ
！

くつちやべつてないで仕事しな！

尻尾とつ捕まえて振り回すよ!!」

「ニッ ヤニヤ!!」

「ゴメンにやミア母さん！」

「どーしたのオツタル？」

急にふるえて、さむいの？」

「戯け、そんなわけが無いだろう。」

「武人足る者戦える状態を常日頃から保つ必要があるのだ。」

「これは武者震いというやつだ。」

「軟弱者では務まらないからな。」

「お前もよく分かっているはずだ」

「……なんだろう、揺れてる。」

「ねえリユー、ダンジョンでもないのに地面が揺れてるよ」

「筋金入り、のようですね」

「あちらの状況を知った上で、リユーはにこやかに手を振る。」

「猛者にすら苦手な人物は存在した。」

「別に他人の秘密を知ったからどうという事ではないが、何となく心が晴れやかになっ

た気がした。」

「何かとまでは言わないが。」

「……さて、ゴミ掃除も片がついた。」

「団長、早速注文いいだろうか？」

「っはは!!」

まあいいさね。いいよ、なんでも言いな！」

「ラジエル、さあここに座つて。

足がつかず落ち着かないかもしれませんが我慢してください。

どれを注文しますか？

この「緑野菜の激流」という料理が私はすごく気になっていますが」

「馬鹿を言うな、肉一択に決まっている。

メインは必ず肉。

前菜やオードブルも必ず肉を入れるべきだ。

小僧、肉を食べ肉を。

食うならこの「激・肉のカーニバル」にしろ」

「何処ぞの筋肉ダルマと一緒にするな。

バランスよく食べてこそその体づくり、偏った食事は断固として反対だ。

特に野菜は食べるべき。

体の調子が改善される野菜を中心にするのが正しい」

「これおいしそう。

ねえねえネコのお姉さん、これなんて読むの？」

「どしたちみっ子？」

あアコレか。これはあたしが考案した自信作だ。

考えに考え抜いた至高の一品！

ミア母さんも領いた最高の魚料理ニヤ！

名付けて「悪魔鮭一本釣り」！

ちみつ子は分かっているニヤ、今のあたしの気分はとても晴れやか。

サービスで「悪魔鮭の卵」をふんだんに使った丼もつけるニヤ」

「そのような考えは最早古い。

否、原始時代の考えに近いな。

いいか、人とは本来肉食生物なのだ。

多くの肉を食らってきた生物こそ覇者となれる。

学者の戯言を信じる方がどうかしている。

あれは軟弱者の泣き言を正当化しようと言いつて並べているに過ぎん」

「バカなことを… 愚かしい。

肉を喰らい続けたせいで脳まで筋肉になってしまったようだな。

肉類も確かに食べるべきだ。

だが、それは隣に野菜があつてこそその話。

あの草木から齎される恩恵こそ、ヒトの体を清く正しく作る。

豊富なビタミン、栄養素、潤沢なミネラル。

全てを兼ね備えているこの食材に死角などない」

「やった、それ食べたいな」

「おっけ任せろニヤ！」

汗物に「海を飲み干せ」もどうかニヤ？」

「いいよー」

「草など食したところで何の足しにもならん。

そんなもの家畜にでも食わせておけ。

我ら武人が食すものは肉中心。

特に鶏肉がいい、良質なタンパク質が豊富で素晴らしい筋肉が作れる」

「貴様！」

今の発言は聞き逃せんぞ！

そこに直るがいい！

薬草を煎じて飲まなければ辛い体にしてくれる！」

「グダグダ喧しい!!」

全部作ってやるから待つてなガキ共!!」

食事は当分先の話らしい。

だがこれもまた食事の醍醐味。

多くの者と共に食べるからこそが食の本当の楽しさ。

そこで様々な話に花を咲かせて、賑やかに食べることに。

こうした場所に行儀はさほど気にしなくていい。

ただ楽しめればそれでいいのだ。

最も、この面々でそれを理解する日が遠いことは確かだ。

「ラジエル小僧、野菜肉を食食べなさいえ」

「どつちも食べるー」

第31話 少年、鳥と戯れる

木の葉が風と共に舞い上がる。

自然に起こったものではなく、人為的に舞い上げられた風。それは荒々しく、時に緩やかに流れる。

風は波のように緩急をつけ、周囲に対して風を巻き起こす。

ここは木々が生い茂る町外れにある森。

耳に届く音は全て自然の声。

人工的な声は一切届かない限られた場所。

リユーに教えてもらった人の出入りがない数少ない秘所のうちのの一つ。

瞑想や鍛錬を行うには最適の場所であり、ダンジョンに潜れない時によく利用している。

共に大地が鳴動する。

強く、激しく、猛々しく揺れる。

暴風や地鳴りといった現象を引き起こしているのはとある少年。

ここは彼だけに与えられた舞台。

武を演じ、己が鍛え上げた技を披露する。

突きは角のように真つ直ぐ正確に。

下段の蹴り払いは蹄を着込ませるように決る。

引きつつ手刀を交差して鳥の羽ばたきのように肩を切る。

左脚を踏み込んで全霊の突進のように中段へ拳打。

更に前へ踏み込んで、畳み掛ける捕食者のように胴を左で打つ。

回避はとんぼ返りのように後方回転して、顎目掛けて蹴り上げる。

懐へ忍び寄る様は蛇のごとく滑らかに。

牙を突き立てるがごとく指を獲物へ食い込ませる。

熊のごとき重量を両手の掌底でもって表す。

獅子の咆哮を震脚で示せ。

一見すればただの演武にしか見えない。

ただの熟練した武闘家が披露するものにしか見えないだろう。

しかし、それを行なっているのは年端もいかない童。

洗練された動作は並大抵の武人を置き去りにしてしまう。

鍛え上げた肉体に武器など不要。

突きや蹴り、掌打、手刀、足刀、掌底、拳打はそれだけで凶器となる。

一薙ぎすれば首が飛び、打てば風穴が開く。

代わる代わる飛び交うは無数の獣たち。

その有り様まさに千変万化。

振るうは一人の少年。

振るわれるは殺人拳。

奇怪な動作は獣の動向。

振るうことに躊躇いなどなく、息をするように獲物の首を取る。

獣が戯れている様を表し、無邪気に遊び殺す。

我が披露する拳技は獣の戯れが如く。

弱肉強食の理に従い汝を食い殺し、その骸を恵として弔おう。

これこそ我が生涯、我が修練の極地。

全てを引換に手に入れてしまった人を殺めし技法。

立ち塞がる獲物全てを喰らい、全てを我が糧とせん。

さあさ、皆々様御照覧あれ。

坊主も慌てふためく浮世にて、森羅万象に感謝し預り奉る。

童の児戯が、獲物を喰らう鬼の所業と成り果てる世にも奇妙なお立ち合い。

生半な見世物ではありませぬ故、固唾を？んでも狂気に吞まれる事なきよう。

潜る暖簾は獄門、舞台は畦道あぜみち、席は今生、唄い手は七人の童子、御帰りは冥土。

儂き焰が刹那に放つ輝きをお見逃しなきように。

ささやかなお代として、そのお命を頂戴仕る。

然らば生涯をもつて、この戯拳で舞い続けよう。

この片生かたなりが焼け落ち、灰燼と帰するその日まで。

戯拳 “弔獸戯我”
ちようじゆうぎが

—— 震えるな。

俺たちの中にある黒い感情が、独りでに暴れ回つてゐるのを感じるぞ。

「…… また聞こえた」

演武に集中していたせい、不意に掛けられた言葉に周囲を見回す。

しかし辺りには誰も居らず、周辺にも人の気配は一切感じられない。

耳に響くは時折聞こえる鳥の囀りと、風で聞こえる木々の葉鳴りの音だけ。

気を張り巡らせてみても、やはり人の気配は感じない。

それに先ほどの言葉、外部から掛けられたというより、頭の中に直接響いたかのよう

な感覚だ。

「おかしいなー」

おかしいとは思いつつも、気のせいなのだと思うことにした。

実のところ、こうした現象は今回だけに限った話ではない。

赤いゴライアスとの戦闘後、体の調子が以前と異なっていたからだ。

不備があるということではない。

寧ろ以前より身体能力が向上しているのを実感している。

自分の中にある自身の動きと、実現できる動きが上手く同調していないという表現が適切かもしれない。

主神であるアテナ曰く、ステイタスの向上が身体に作用しているとのことだった。

始めたての冒険者の成長によくあることらしく、更新後のステイタスで鍛錬を行って
いれば次第と薄れていくものだそうだ。

だが、少年が感じているのはそれだけではない。

体の調子は時間の問題として割り切る事はできる。

それよりも強く存在感を示しているのは胸に感じる熱。

燃えるような煮え滾るような何かを、あの時から常に胸に感じている。

されど気にすることなく体を慣らす。

気にかけたところで難しいことは分からず、答えなど出ない。今はただ無心に務め、日課である鍛錬に勤しむ。

そうして再び、少年は舞う。

密かに見守る動物達を観客に、舞台は再度幕を上げるのだ。

本日は晴天なり。

白き雲が空を彩る心地の良い日であった。

赤き飛沫もそれを彩るほどに美しい。

「うーんいい天気！」

ハイキングにぴったりの青空！

たまにはこんな日もいいよねえー」

「そうだね。」

まだダンジョンに行けないのが、ちよつと残念だけど」

「まーだ言ってるの？」

ギルドがダメって言ってるんだからしよーがないよ。

こないだのゴライアス以来、なんかみんなピリピリしてるんだから」
「うん、分かってる。」

だからフィンは休みをくれたんだよね？」

「そーそー。」

最近働づくめだから丁度いいだろうって。

まあ一人着いてきたのは意外だったけど」

「どうしたの、ベート」

「……………なんでもねえよ」

「青空の下に似合わないぶつちよー面。」

無理して来ることなかったのに」

「ンなじやねえ。」

目的が一致しただけだ」

「ふーん。」

まあいつか、ねえねえ疾風^{リオン}さん。

あとどれ位でラジエルの所に着くの？」

「もうそろそろですよ。」

それと、私のことはリユーで結構です。

知らない仲でもなし、あの子の友達なら尚更構いません」
「ほんと!？」

じゃあ改めてよろしくねリユーさん！」

「はい、よろしくお願いします」

草むらを掻き分けて歩く一行。

青空の下、柔らかな陽射しが木の葉を透かしていく中、彼女たちは少年の元を目指していた。

目的ではないにせよ、ちよつとしたハイキングは気晴らしに持つてこい。

各々伸び伸びと歩き、自然の恩恵を受けながら闊歩する。

気晴らしになり、日光浴と森林浴を同時に行える。

散歩好きには贅沢な要素が満載だ。

「ラジエルとリユーさんって、いつもここで鍛錬してるの?」

「そうですね。」

私は随分と前からこうした森の中で鍛えていました。

ラジエルも、オラリオに来る前までは山の奥地にて暮らしていたようなので波長や環境が合っていたのでしよう。

「ここを教えて以降、頻繁に通ってますね」

「確かに、集中できていいところ。

私も結構好きかもしれない」

「自然を好めるといふのは良い事です。

草木がなければ人類は繁栄はおろか、存続さえ難しいのですから」

「うんうん、私たちが住んでた村も自然がないと何にも出来なかつたしね」

女集まれば姦しい。

決して悪い意味ではなく、集まると自然と話が尽きないという諺のうちの一つ。

こうして話に花が咲くのは必然と言つてもいいほどに。

先程からあまり言葉を発しないベートは、ただ面倒臭いから話さないのであつて、決して入りづらいということではない。

聞き耳を立てて、自分の意見があつても口には出さない。

入りたくても入れないのではない。

入りたくないだけなのだ、恐らく。

「今更なんだけどき、私たちお邪魔じゃなかつた？

ラジエルにご飯買いに行く途中だつたんでしょ？」

「問題ありませんよ。

折角ですからね、こうした時間をラジエルに過ごさせるのも大切です。

あの子には、もっと同世代の友達と居るべきなのですから。

血腥い戦場になど、叶うのなら大手を振って行かせたくありません……」

「心配性だなありユーさんは」

「なんだ？この先から薄らと血の匂いがしやがる。

あのがキ誰かとやり合ってるのか？

いや、考えすぎか。

そもそも殺気自体感じねえしな」

「いや、お見事」

まるで近所の住民に挨拶を告げるように、男は現れた。

雅な出で立ち、オラリオではあまり見かけない独特の服装、整った相貌。

あまりにも自然。

風が道理なく吹くように、男は何の前触れもなく姿を見せた。

抜き身の剣を携えて。

「殺気を断ち斬りかかったにも関わらず、当たり前のように斬り返されるとは思わなん

だ。

身一つで我が身体を殺傷せしめるのにも恐れ入った。

はは、単なる手刀とて侮るものではなかったわ。

ただの露払いとて油断した、浅いとはいえ確かに斬られた。

剣を弾かれて手傷を負うなどいつ以来であろうか。

よもや本当にその身を武器とし振るう強者が居たとは……この世はまだまだ捨てたものではなかったな。

かの名高き武闘者も其方には劣ろうよ。

やはり、なかなかの稀有な使い手よな」

「だれ？」

それは、風が吹くのと同時に煌めいた。

自分を自然の一部のように身を滑りこませ、殺気も感じさせずに流れるようにその刃は振られた。

まるで何も感じなかった。

辺りの動物たちと同じような気配しか感じなかったからだ。

辛うじて対処できたのは風切りの音を拾えたから。

刃が振るわれる時に発せられる独特の音。

それが聞こえなければ、何も分からずに死んでいた。

先程の一太刀はそれほどまでに自然で、今までやり合ってきた者達の中で最も洗練されたものだつた。

目の前にて妖しく笑みを浮かべるこの男、そこらのならず者とは訳が違う。

反射的に手刀を振り抜かなければならない程に。

「大した者ではない。

強者の匂いに惹かれてふらりと足を運んだ一介の剣士に過ぎんよ。

宛もなく彷徨う最中、珍しい舞台があつたのでな、無礼を承知で立ち見をさせてもらつていた。

いやいや誠に奇つ怪な使い手が居たものよ。

あらゆる武具を操る武芸者は数多く見てきたが、身体そのものを本物さながらの武器にして戦う者は初めて目にした。

そのような使い手など、そう多くはおるまい。

相手が幼子に等しい童子であつたにも関わらず、つい我を忘れて斬りかかつてしまつた」

「そうなんだ。

いきなり出てきたからびつくりしたよ。

びつくりして斬っちゃった。

お兄さん俺と戦いにきたの？」

「応さ、立会いを臨めるのなら是非もなし。

妖術の類でないともなれば尚のこと、これ程稀有な相手であるならば一武芸者としてお相手仕りたい。

私の我儘に今一度付き合ってはもらえぬか。

なにタダでは言わぬ、礼は弾むぞ？」

「お兄さんの言ってることは難しくてよく分かんない、でも」

少年は構える。

最早数えることも出来ないほど構えられた型を、いつも通り形作る。

彼にとつてそれは習慣の一部であり、己が人生の体現でもある。

生まれ直したあの時から始まり、戦場の中で華として散るまで続けるであろう武人としての心意気。

強い相手と戦える。

こちらこそ臨めるのなら是非もない。

獲物を使う相手であろうがなかろうが関係ない。

強者相手に戦える、少年にはそれだけで十分だった。

「俺と戦つてくれるのなら、それでいいよ」

「内に秘めたその闘志、心意気や良し。」

私も久方ぶりの新手に心を踊らせている。

であるならば、加減など無用そうだな」

そして、男もまたその嫻たおやかな目を研ぎ澄ます。

劍のごとき鋭さを放つ視線は、直面しているだけで斬られるのではないかという錯覚さえ覚えさせる。

握った獲物にも薄らと力が籠る。

いつ振り抜かれてもおかしくないほどに、彼の出で立ちは氣迫に満ちていた。

拳技に相對するは劍技。

一刀と打ち合うは無刀。

青年と睨み合うは童子。

予兆もなしに始まったこの立ち会い、軍杯が上がるはどちらか。

先に動いたのはラジエル。

不規則に縮地を縦横無尽に繰り出し、攪乱した上で突進。

左脇腹を捉え、その腹部目掛けて突きを放つ。

だが、男は狼狽えない。

対峙する者が視界から消え失せようと、此方を捉える視線は消えることは無い。ならば無闇矢鱈に動く必要は無い。

必ず自分の身体を捉え、攻撃する際に姿を自ずと現すからだ。

「む……」

突いたつもりだった。

いや、突くつもりだった。

目前で男は羽虫を払うがごとく攻撃箇所を事前に薙いだ。

あのまま踏み込んでいたらと思うと肝が冷える。

防具も付けていないこの身では呆気なく両断される。

打撃は通用しないと見ていい。

伸び切った手足を晒したが最後、五体満足で明日を迎えることは叶わない。

「やっ」

なれば斬るのみ。

手刀と足刀を持ってして、お望みのままに斬り合おう。

胸部に向けて右振りを一閃。

易々と食らうつもりはない男は、手刀を容易く斬り払う。

無駄のない動作だ。

足踏みは必要最低限。

半歩引き迎撃に転じ、一步踏み込んで追撃に転じる。

まるで押し込めない。

間合いの取り方が完璧な相手なのだ。

常に己が有利に立ち回れる距離を保ち、決してその領地に相手を寄せ付けない。

「でやっ!!」

緩やかな曲線を描いて、剣は走る。

早く、鋭く、振れず、迷うことなく閃く。

少年の刀をいなし、鮮やかに流しては斬らんと迫る。

少年を直線と例えるのなら、男の太刀筋は曲線。

線を避けて元を断ち、逃げ場を徐々に無くしていく。

それはまるで一つの狩りの様。

囲い込み漁のごとく、獲物を追い詰めていくのだ。

追い詰められる獲物の感覚を味わっているかのよう。

退く姿勢を見せたが最後、文字通り真つ二つとなってしまうだろう。

——面倒だな。

回転数を上げて網を突き破れ。

今のままでは余りにも遅過ぎる。

包囲網が展開されるのを黙って見ているほど悠長な戦いはしてきていない。網が目前にて広がるのなら、獲物諸共斬り伏せろ。

ただで捕まる程この首、安くはない。

一刀だけに留まらず、二刀ならぬ三刀目を重ねろ。

もつと早く。

追撃の隙間もない程に切り結べ。

もつと疾く。

僅かでも後退する足を見逃すな。

もつと速く。

腕も脚も存分に振るわせろ。

もつともつと、その先へ踏み込め。

「……！」

男に僅かながら驚愕の表情が浮かぶ。

先程までの直進的な動きがなくなつた。

いや、直線的なのは変わっていない。

より細かく、より早くあらゆる方向に曲がっていく。

合わせられる速度がなくなれば囲いも何も無い。

当初の目論見は失敗した。

——まだまだ足りん。

全力で足掻き、藻掻いて見せる。

「うるさい。

弔獸戯我

〃おうちょうひじん
鳳鳥飛刃〃」

「なんとー！」

身体を斜めに高速回転させて真空の刃を形成。

幾重にも広がる無数の斬撃は、たちどころに男向けて襲いかかる。

単なる手刀ではない。

高速の手刀が繰り出す飛ぶ斬撃。

肉眼では捉えられない真空の刃だ。

「見えないというのはほとほと厄介なものよ。

つくづく摩訶不思議な技の数々。

其方の力、まだまだ引き出させて貰うぞ」

見えないが、迫り来る死線は確かに感じる。

己が勘をもってこれを弾いていく。

不可視の攻撃だろうと男は反応する。

やはりこの男、只者ではない。

どう見てもその筋の達人。

これでただの剣士とは笑えない。

技術なら師を除き、今までやり合ってきた中で最も危険な相手だ。

こちらの技に対して瞬時に順応し、且つ抜け道を見つけてこちらを出し抜いてくる。

——攻めて攻めて攻め抜け。

攻撃を止めたが最後、それがお前の最期となろう。

「だから、うるさいってば」

「……………手数が更に」

ならば此方も増やすまで！」

両者は加速する。

振るう刃は数知れず、既に幾度となく交わされた。

受ける刃は次第にがたつき、互いに刃こぼれを生じさせる。

金属の剣は芯が揺らぎ、生身の刀は刀傷が重なる。

それでも、止まることは許されない。

命ある限り、戦意ある限り振るい続ける。

それが彼らに定められた宿命。

己が命の終わりまで戦い続ける呪われた運命。

——頃合いだ、そろそろ決めろ。

「いくよ。」

弔獸戯我

〃けんかくぶどう 劍鶴舞踏〃

」

舞う様、鶴のごとし。

短距離高速移動の縮地と、並外れた体幹より繰り出される連続斬撃。

その目に追えない高速移動で翻弄し、瞬時に獲物を八つ裂きにする対郡殲滅奥義。

個人に向けられた際、何人もの刺客から斬られる錯覚に陥る四方八方斬撃の嵐。

逃げ場など何処にもありはしない。

「分身に近い、まるで忍の身のこなしか。

だが、それではまだ足りんよ！」

男の動きにも、更に磨きがかかる。

大人数を一人で捌いているに等しいのに、的確に打ち合つていく。それだけでは足りない。

数手打ち合い、その最中にもしつかりと迎撃に転じている。

数の理などものの足しにもならんとばかりに剣を走らせ続ける。

長時間の戦闘を続けても尚、その剣筋が鈍ることはない。

激しくぶつかり合う刃は波紋を呼び、周囲の草木を切り捨てる。

木々は削れ、花は散り、草々は千切れる。

彼らの後を追ひ、土に還るのは集中力の切れた時。

抗いたくば戦え。

生き残りたくば存分に斬り合え。

「落鳥!!」

男の返し斬りが、少年を大きく弾き飛ばす。

技量の差で劣つてはいないものの、体格差はどうしても覆すことができない。

大の大人が本気を出せば、軽い体重の童子など簡単に跳ね除けられる。

追撃とばかりに振られる刃。

差し迫るは無情なる一撃。

否、それだけの表現では余りにも不足している。

「其方の力に敬意を表し、私も取っておきを出そう。

凌げるか、我が秘剣から！」

上を見やると振り下ろしが見えた。

いや、何かが違う。

あんな大口を叩いておきながら、繰り出すのがただの振り下ろしなものか。

自分の中にある危機察知の勘が警鐘を鳴らしている。

そんな生温いものではない。

反射的に視界を全開にし、五感と全神経を周囲に張り巡らせて状況を確認する。

左から横薙ぎの一太刀、いや右からも同じような振り抜きがくる。

獲物は一人、されど太刀筋は三閃。

それも全く同時に一太刀三つ重なっている。

左右への回避を許さない二閃に加え、頭上へ飛ばせない落とし蓋。

間合いの中であるならば決して出ることの出来ない三つ太刀筋。

一呼吸の間に三つの軌跡を同時に描くなど有り得ない。

それでも男は、平然とそれをやってのける。

「——っはあ!!」

目の前に広がるのは不可避の鳥籠。

迫り来るは避けようのない死の恐怖。

三つの軌跡が同時に織り成す必殺の一撃。

正しく秘剣と名付けるに相応しい。

放たれたが最後、避けることは叶わない。

——退路はない。

が、活路ならまだある。

理解出来るはずだ。

お前が行くべき道は、何時だつて目の前にしかないのだ。

「……………弔獣戯我」

避けられないのなら、選択肢は一つしかない。

秘剣という切り札を切ってきたのなら、こちらもそれ相応に相応しい奥義を繰り出すまで。

目を閉じ、気を溜める。

目前に迫る死を前に臆したかと思うだろう。

何もかもをここで全て諦めたと悟るだろう。

否、力を求めるこの身のなら、例え避けられようのない死であろうと諦観してはならない。

今の少年はまさに追い詰められ、袋小路に追いやられた一匹の鼠。悔るな。

追い詰められた獲物として、一矢報いるだけの牙は持ち合わせている。

連なる三閃と一刀が擦れ違う。

二人は動くことなく察する。

戦いはここに決した。

両者は獲物を振り抜いたまま静寂を保つ。

一刻遅れて飛び散る鮮血が、勝敗を決めたのだ。

「我が秘剣を前に、逃げる姿勢を見せなかつたか。

賞賛に値しよう。

其方は、今まさに定まった死の運命を覆したのだ」

「……………」

鮮血を吹き出したのは少年。

振り抜いた姿勢のまま微動だにすることはなかつた。

それは敗北を喫したからではない。

あの時とは違う、確信めいた手応えに残心をもつて敬意を表したのだ。

「いやいや、目を見張る凄まじき奮闘ぶり。

鬼気迫るものではあったが、その裏に積み上げた時間を確かに感じたぞ。

子どもとは斯くも、恐ろしきものよな」

「……」
《窮鼠懐刀》

そうして、男の身体に大きな裂傷が走る。

二人はこの時悟っていた。

戦闘不能の傷を与えられたのかはどちらなのかを。

果し合いに勝したのは、一体どちらなのかを。

「小柄な体格を生かした目にも止まらぬ神速の抜刀。

敵の速度と体重差を利用した返し手とは、本当に恐れ入った。

私の秘剣の穴を確かに見抜き、臆することなく飛び込むとは。

追い込んだつもりが、まんまと誘い込まれたという訳か」

「お兄さんこそ、あんなすごい技もってるなんて」

「ふ、その賞賛素直に受け取ろう。

敵ながら天晴れ、実に心躍るひと時であった。

また機会があれば、是非とも立会いたいものよ……」
「……………あれ？」

出会った時のように、男は風の音と共に消えていた。

夢の一時と錯覚するほどに、その姿も気配もなくなっていた。

しかし、少年の身に刻まれた傷を、経験、辺りに散らばる血痕や荒れてしまった自然が夢ではないと物語る。

男は確かに存在し、この場にて命のやり取りを交わしたのだ。

足元に転がる艶やかな布で包まれた物も、立会いの時にはなかった。

そう、少年は確かに夢にも勝るひと時を過ごしていたのだ。

「あ……………」

そよ風がたなびくと共に何かが目の前を過ぎる。

行先を見やればその青空に、燕が一羽宙を舞っていた。

「いや実に有意義なひと時であった。

流石は其方が目にかけてた男子よ。

まさかあれ程までに私を昂らせてくれるとは思わなんだ。

ああ、何も言わずとも良い。

腑抜けてなどおらんよ、寧ろ話に聞くよりも遥かに磨かれておったわ。

本気ではなかったとはいえ、私の秘剣を潜り抜ける程の気概の持ち主。

余程あの街で良き出会いに恵まれたのだろう。

肝を冷やすなど久方ぶりだ。

私はあの子を気に入ったぞ。

同時に非礼を詫びたいぐらいだ。

叶うなら、次こそはこの長刀で一戦交えたいものよ」

第32話 少年、口が回る

「……………」

諸君は母や目上の人の一側面を垣間見たことがあるだろうか。

常日頃から見ている側面ではなく、普段見せることのないその者の秘められた顔。別段例に挙げた二つに限らなくてもいい。

友達でも知人でも構わない。

問題は、その者の見たことの無い一面を見たことがあるかどうかだ。

例えば、自分が何かしらのミスをしたとしよう。

それが第三者にとって不都合のある重大なミスだ。

そのミスが発覚し、目撃されたとしよう。

さて、向けられる顔とはどんなものか。

「……………っ」

別に怒ってるわけじゃない。

その者はまるでマニュアルでもあるかのようにその一言を付け加える。

では何故怒りを秘めた顔でこちらを覗き込むのか。

何故怒つてないと言いつつ槍で抉り込むかのように質問攻めをするのか。

何故眉間を執拗に指で押してくるのか。

かの救世主が槍で貫かれた気持ちはこんな感じだったのだろうか。

否、そんな安っぽい感覚ではないのかもしれない。

どちらにせよ、答えは明白だ。

「どうしましたラジエル？」

私は怒ってるわけじゃないんですよ？

ただ、何故貴方の身体が傷だらけで血塗れになっているのかについて聞いていただけです。

不思議な話ですネ。

動物と遊んでいただけなのでしょうか。

随分と綺麗な傷をつける動物がいたのでしょうか。

少なくとも私は見たことがありませんし、ここ数年出入りしてそんな不思議な動物は見たことがありません。

勿論モンスターもいませんよね？

モンスターフリーア
怪物祭の時期でもないのでモンスターが彷徨く道理もありません。

おかしいですね、何者かと戦闘にでもならない限りそんな手傷を負うことはないと思うのですが。

ここまで話しておいてなんですが、もう一度だけ聞きましょう。

何故、怪我をしていたのですか？」

「変なお兄さんとたたかってました、ごめんなさい」

リユーは怒っていた。

平静を装ってはいるものの、その口調は若干怒りを隠しきれていない。

彼女が怒るのも無理はない。

過保護の度合いが増してきているせいもあるが、今回に至ってはそういうことではない。
い。

以前少年は彼女と約束をしている。

防具が壊れてしまった状態でダンジョンに潜ること、他者との戦闘を避けることと。

リユーが見届けられる立会いならそれでいい。

少なくとも鍛錬の範囲であるならば。

今回に限っては彼女は不在中で、少年が行ったのは全力の戦闘。

文字通り命のやり取りだった。

「……………はあ。

素直なのはいい事、ですが貴方は素直過ぎますね」

「いめん」

ラジエルの眉間を指先で小突くとともに、リユーは溜息をひとつついた。

少年は彼女との約束を破るような性格はしていない。

寧ろ守る傾向にある。

少年が唯一信頼を寄せる彼女を相手に、簡単に約束を反故にするとは思えない。

リユーも内心気づいてはいた。

気づいてはいるが、何故理解した上で戦闘を行ったのかを知りたかった。

「でもね、そのお兄さんすつごく強かったんだよ？」

何してくるか全然分かんないし剣が増えるし思ったように戦えないし」

「ああ……… また貴方の戦意を煽る相手に出会ってしまったのですか」

「それでねそれでね」

少年の話でリユーは理解した。

また猛者おっしやのような相手に出会ってしまったのだ。

彼は誰彼構わず戦闘を吹っかけるような戦闘狂ではない。

が、自分に向けられた感情に対してはその限りではない。

純粹に立会いを臨む者、邪な感情を孕む者等の相手にはその拳技を振るうことを厭わ

ない。

当然の帰結のように戦いをもって応えるのだ。

そこに少年が抱く感情はない。

まっさらであるが故に、求められれば素直に応えてしまう。

「人が近寄らないあの場所だからこそ一人にしたのに……」

「すっごいんだよりユー。」

そのお兄さんいっしゅんで三回斬ってきたの。

どーじにだよどーじに。

がんばってみたけど避けきれなかったよ」

「浅くて本当によかった……」

傷だらけのラジエルを見て驚愕した4人だったが、本人は何事も無かったかのように片手を上げて挨拶をした。

意味不明とばかりに唾然とするベートを尻目に、リユー達はラジエルに回復薬ポーションをぶちまけて治療を図った。

体調を万全にするためホームに戻ると告げるとテイオナは露骨にガツカリしていた。

アイズが彼女を宥めてくれなかったら、事態はもう少し複雑化していただろう。

珍しく興奮しているのか忙しなく、たどたどしく言葉を紡ぐ彼の姿をリユーはただ見

つめていた。

動機はあまりにも物騒。

話の内容もあまりに血腥い。

だが、振り返ってみればこの変化は驚いている。

あれ程までに無頓着だった少年が、本当に子どものように身に起きた出来事を懸命に話す姿は、いつまで眺めていても飽きがこない。

不思議なものだ。

多くの人と触れ合うことで、抑圧されてきたものが浮き彫りになってきたかのよう。以前の禍々しい姿を目にしてしまったため、諸手を挙げて喜ぶとまではいかない。

それでも、彼女はその耳を塞ごうとしない。

「こうびゅーんて抜けようとしたんだけど」

「……………ええ、それからどうしたのですか？」

眷属たちの談笑が流れる中、リユーは少年の話に耳を傾ける。

割り切つて、今はただ楽しむことにした。

彼が危機を潜り抜け、死線を交えた相手の話を。

そして今はまだ待とう。

いつの日か、戦いの話ではないありふれた日常を語れる日を。

彼女は頬杖をつきながら呆れたように。

口元の微笑を隠すように。

目を細めて少年の話を聞くのだ。

あらかた話しも聞き終え、話し終えた頃。

ホーム内はやや騒めきを強めつつあった。

ダンジョンに向かっていた眷属達がちらほらと帰還してきたからだ。

そして、ややという表現では余りにも足りない者が一人。

アストレア・ファミリアの騒々しさの大部分を担う彼女が帰ってきた。

「きゃーラジくんたっだいまー!!」

ほらほらリーヴァお姉さんが帰ったよ!

お帰りのハグをギューってしてー」

「隊長、ただいま戻りました。

おお、やっぱりチビ助もいたか。

ああー疲れた」

「うん、おかえりリーヴァ、セラ」

「二人ともおかえりなさい」

「ただいまリユー!」

っはあー!

ここ何日かの疲れが吹き飛ぶう……。

てかラジくん怪我してるじゃん!!

大丈夫?!

「もうほんとんど治ったよ。

リーヴァ、苦しい」

「ん、それにちよつと汗くさいかな。

じゃあこのままお姉さんとお風呂に行こう!

セラも入るよね?

リユー、ちよつとラジくん借りるよ!」

「ラジエルのお風呂なら私が」

「さあさ行こう行こう!」

終わったらベットでいいいいいいこしてあげるからねー」

「リーヴァ、苦しい」

帰ってくるなり人の話を聞かずそのまま少年を引き込んでいった。

別の意味で少し心配ではあるが、すぐ後ろに目を光らせ、拳銃に手をかけている彼女がいたため心配は無用と判断した。

「……………（大丈夫っす、代理がなんかやらかしそうになつたらあたしが最初にやらかしておくんで）」

無言の意思表示を汲み取り、リユーは軽く手を挙げてミセラに後を任せた。

リユーが先程から気になっているのが目の前の包み。

ラジエルが謎の青年との交戦後に残されていたもの。

開ける前に検分したところ、どうやら爆発物等の不審物ではなさそうだ。

いや、素性も知らない相手からの品という時点で不審物なのだが、こちらに害を与え
るような代物ではないらしい。

「随分と綺麗な箱ですね」

それは艶やかな色をした漆の箱。

装飾に金箔で彩られた花や鳥がこの箱の価値を物語っている。

箱自体も紛れもなく高価な代物。

それ故に、中に入っていた物にギャップを感じた。

見たことがない謎の物体。

暗い色をした紫色。

触れてみたところ、鉱物であるのは間違いなさそうだ。

そして、その横に添えられた一枚の紙。

何かが記した手紙のようなものだった。

「手紙？」

「一体誰に宛てたものなのでしょうか」

何気なく広げ、当たり前前に文字を目で追っていく。

この手紙自体に不審な点はない。

見慣れないものではあるが、これ自体はただの和紙。

筆で書かれてはいるが読めない文字ではない。

だからこそ、リユーは何の警戒もなしに読み進めた。

そして、自分がその文字から目を離せないことにも気づかなかつた。

「……………」

言葉が出せない。

彼女は元々口数が多いという訳でないが、それを抜きにしても言葉が出ない。

時候の挨拶から始まる丁寧な形。

誰が見ても同じように感心してしまうほどに丁寧に綺麗な文字。

言ってしまうえば、ただそれだけの何の変哲もない手紙。

そしてそれも、書いた者が普通の人物であつたらの話。

「……………」

惹き込まれる。

ただその一言に尽きる。

リユーを魅了する文章がどうかではなく、文字の配列や行間。

空白さえも凝視してしまうほどの力がそこにはあった。

これは文字で伝えるだけのものに在らず。

文字を通して相手に直接訴えかける代物。

字がひとつづつ剥がれていく。

それ自体がペラペラの紙になったかのように波打ち、生き物のように宙を浮く。

次第にそれは規則正しく列を為し、渦を巻いて読者を誘う。

リユーの目に映るものは最早字だけでなく、手紙の内に宿る風景になっていく。

斯くして文面が織り成す世界への扉は開かれた。

臓器が浮き上がるほどの不快感と、未踏の地に赴く高揚感を携えて、彼女はその世界

へ招待された。

—— おや、どうやら上手く招待できたようだ。

一方、ハイキングを途中で断念させられた彼女らはというと。

「なんでテメエと肩並べて歩かなきゃなんねエんだ」

「文句があんなら先に帰ればいいでしょ。」

それとも何？あたしの憂さ晴らしに付き合ってくれんの？

結構溜まつちやつたから骨の1本や2本じゃ済まないと思うけど」

「洒落にならねエこと言うんじゃねエよ……」

「あーあ、折角の休みだつていうのにさー。」

なんだかなー！

つままないなー！」

「…… あー、うぜエなー」

テイオナはただ、不貞腐れていた。

それに付き添うベートもまた、げんなりとしていた。

最初は彼女を宥めていたアイズは、空腹に耐えかねてじゃが丸くんを買いに走ったきり戻ってこない。

この間買った新商品の感想でも聞かれているのだろう。

特に行きたい所もないため、二人は沸々と湧き上がる感情を持って余して早すぎる帰路に着いているのだ。

「それよりさあべーと」

「あア」

「最近また変に嗅ぎ回る奴らが出てきたらしいじゃん」

「みてエだな」

「それとき、あたしらもけっこー目立ってきたじゃん」

「あア」

「フアンの子とか着いてきたりする感じ？」

「……………ケツ、暇なヤツらに付き合ってられつかよ」

「あ、あたしこつちだから」

「俺も飯買ってくるわ」

互いに面倒くさそうに会話を重ね、飽きたように別れる。

方や商店街へ向かい、方や近道とばかりに路地裏へと進んでいく。

二人で歩く意味は最早ない。

テイオナが暗がりへさしかかろうとすると、目の前にフードを目深に被った人物が道を塞いでいた。

その様は通行人に見えず、まるで暗躍を目的としたような外見だった。

「ちよつと通りたいんだけどさ、道を空けてくれないかな？」

「……………」

されどその者は語らず、動かず。

テイオナの声など最初から聞いていないのかもしれない。

不審がるのも無理はない。

目の前の人物は未だに言語を発せず、顔はおろか体の線までをも覆い隠す外套を身につけていたのだから。

場所が路地裏ということもあり、尚のこと顔が見えにくい。

その姿は不格好なてるてる坊主と表した方が的確かもしれない。

最も、不吉を呼び込む身なりをした坊主がいればの話だが。

「聞こえてない…… なわけないよね。

とおせんぼしてだんまり？

ちよつとそれはどーか」

彼女が僅かに怒気をちらつかせる。

すぐにもその暑苦しい衣服をひつぺ返してやろうかと考えた矢先、背後に感じるも

う一つの気配。

「あー、やつぱり」

やはりと改めて自分の勘が当たったと実感するテイオナ。

無論誰がとは分からない。

外見は相も変わらず見せようともしないのだから。

ただ、ハイキングに行く前から。

正確に言えばその数日前から不穏な視線は感じていた。

今の今までこちらに危害を加えるような気配はなかったため無視していたのだが、今

日に至っては異なつた。

「(殺気、とはいかないけど敵意と戦意はあるか。

めんどくさいなあ……！)」

尾行の距離感がいつもより近く、接触したとしてもおかしくない異様な気配を醸し出

していたからだ。

こちらの動向を伺っているのか、襲いかかって来る気はまだない。

だがそれも時間の問題。

時間を稼いでまでテイオナを足止めする理由がない以上、こちら側の戦意を確認しなければ無闇に突っ込んで来ることはないだろう。

そう思ったのも束の間。

「……………」

「…………… あはっ、やる気出しちゃう？

だって、ベート」

「オラツア!!」

僅かな光を反射して鈍く発光する短剣。

暗殺や近接戦闘に特化したそれは、テイオナに対して露骨に敵対行為を示す。

話し合いの余地は、最初からなかったようだ。

最も、やる気以前に彼は既に待機していたのだから尚のこと話が早い。

臓器を抉り取るような延髄蹴りがテイオナの背後の敵めがけて振るわれる。

「チツ、流石コソコソ嗅ぎ回るだけが得意の雑魚だ。

避けるのが随分と上手だなア」

「うるさいんだよベートって。

ラジエルみたく最もすまーとにやらないとバレるじゃん」

「うっせ。

スマートのすの字も分かってねエちんちくりんにだけは言われたくねエよ。

それよりコイツら、一体何なんだ？

テメエのファンにしちや随分と陰気くせエな」

「……………」

軽口を互いに叩きつつも警戒は怠らない。

ベートの奇襲を避けたことで確信した。

こいつらは間違いなくLv.1^新ではなく、自分たちかそれ以上の力量を持っている。

身体能力の高さには確かに驚いたが、何故むぎむぎと後方から現れたのが解せな

い。

その気ならテイオナの首を搔くこと機会はいくらでもあつたはず。

「何なのコイツら。

全く喋らないし目的も全然見えてこないんだけど。

ただの腕試しって訳でもないんだろうけど)」

「(完全に気配を消して近づいたはずだ。

なのにあっさり避けられた。

まるでオレが来るのが分かってたみたいで腹立つなア」

追い討ちをかけるか否かで考えていた中、後方の暗殺者が大きく跳躍し、ティオナの前方に2人が肩を並べる形で並び立つ。

怖気付いた訳でもないのに一步、また一步とその足を引いていく。

「オイ、()まで招待しておいてもうサヨナラか？」

つれねえなア、もう少し踊ってけや」

「……………」

「…………… あア？」

一息に彼らは目の前から消えた。

気配もなく、奇襲を仕掛けて来るような素振りもない。

完全にこの場から離脱したのだ。

目的も告げず、大きな戦闘になることもなく状況は終了した。

怪しげな印象をティオナたちに植付け、謎の2人は姿を消した。

「ねえベート、あの二人どう思う？」

「少なくとも同盟関係のファミリアの仕業じゃねエのは確かだな。

あの短剣、随分とくたびれてやがった。

ウチの周りにや武器の整備を欠かす奴はいねエ。
動きといい成りといいただのゴロツキでもねエ。

「訳わかんねエな」

「だよね。」

恨まれるようなこととした覚えないし、やっぱり熱烈なファンってわけじやなさそう」

「まあいい、戻ンぞ。」

報告案件も出たことだ。

「フィンも何かしら掴んでんだろ」

「うん、帰ろつか」

テイオナが名残惜しそうに振り返るもそこには何も無い。

証拠のような類の物もなく、残ったのは胸中を覆う不穏な空気。
もうこの場に用はない。

光射す大通りへ足を向ける。

いずれその光さえ覆い尽くす強大な闇が迫ることさえ知らずに。

「(こいつらではない?)」

チツ、最後に余計訳わかんねエこと抜かしやがって」

「遅れて済まない」

「問題ないよ。」

「丁度今から始めようと思っていたところさ」

「どしたん？」

「リヴェリアたんが遅れるなんて珍しいなあ」

「ああ、ちよつとな。」

「それは後で話そう。」

「ガレス、人払いは済ませているのか？」

「ガハハ！無論だ！」

「内緒話をするからお前らこの部屋には来るなよと念を押しておいたわ！」

「お前も摘み出すべきだな」

「まあまあ、人数も揃ったことだし始めようか。」

「クエストに顔を出さずオラリオ中を練り歩いた甲斐があったよ。」

「結構情報が集まったんでね、これで対策を立てようじゃないか」

「これは…… やはり、争いことになるのは時間の問題か」

「せやなー、相手が相手やしこれはもう避けられん。」

根回しも連絡も済んどる。

寝首でも搔かれん限りはすぐにも始まるわけやない。

いつちゃん危ないへファイストスにもゆるたしギルドにもゆるといた。

次に準備すべきなんは返り討ちの仕方や」

「表立つことなくか、うむ厄介だな。」

物事はシンプルに行くべきだ。

「こつも入り乱れては混乱するわ」

「致し方あるまい。」

「街人たちの混乱を招くよりかはマシな話だ」

「デナトウス神会まであんまし時間ないから簡潔にしてや。」

「エルさんの二つ名考える大事な仕事があんねん」

「何を呑気なことを……。」

「二つ名などいつ決めてもいいだろうに」

「善は急げ、や！」

あの子目立たせて最終的にウチに勧誘するための第一歩やねんからコレだけは外せ

んで！」

「はあ…… まあいい。

フィン始めようか」

「うん、では諸君。

イヅイルス
闇派閥迎撃作戦について話を進めようか」

第33話 少年、その2つ名は

ここは何処だ。

何も見えない。

見えるのは一滴の汚れさえない白一色。

音も匂いも風さえ感じない無感の空間。

活字が織り成す世界へと誘われた後、リユーは身動き一つ取れないまま白紙の世界で棒立ちにさせられている。

ここは何処だ。

あれからどれ程の時間が経過したのだろうか。

一ヶ月、いや数年もの間こうしてただ立ち竦んでいたかのようにだ。

時間の概念さえ朧気になる。

指一つ動かない。

瞼すらびくつかない。

白く閉ざされた奇妙な世界に、一体いつまで囚われればいい。

ここは何処だ。

随分と前に誰かに宛てた手紙を開いてから、私は長いことこの空間に取り残されたような気がする。

まるで小説の世界のようだ。

とんとん拍子に話が進み、登場人物の反応など鑑みない。

何もかもが否応無しにただ進んでいくだけ。

完成された絵画をなぞっていく模写作業のようなものだ。

ここは何処だ。

つくづく奇妙な世界だ。

心や感覚は置き去りに、体と動作がマッチしない。

過ぎた時間、感覚はその場では感じず、長い時を経て忘れた頃にそれはやってくる。

ちぐはぐになる体と心を懸命に寄せ集めようとする。

そう、彼のように。

はて、彼とは一体誰のことだっただろうか。

ここは何処だ。

私はどうなった。

一体この世界はなんだ。

私は一体——

——リユー？——

聞き覚えのある幼い声。

それは、白く染まりかけていたリユーの心にひとつの波紋を生み出す。

波打つ心が、忘れかけていた自我を呼び覚ます。

語りかけるように、揺さぶるように、継り付くように彼女の心を持ち主の場所に引き戻す。

彼女は、その声をよく知っている。

短くも多くの時間を共にしたその人を。

反射的に、その声の主に向かって振り返る。

リユーはようやく、体の自我を取り戻したのだ。

「自力で抜け出しましたか。

やはり、貴女は強い人だ」

「えっ?」

そこに白の世界は既になく、在るのは嗅ぎ馴れた草木の香り。

見慣れた青空、風に乗って流れていく白い雲。

耳に心地よい葉鳴りの中に混ざり込む息づく動物達の声。

先程とは真逆の、リユートのよく知っている自然の姿だった。

そして目の前には、呼び声の主ではない初めて見る人物が。

「初めまして、そしてようこそ私の世界へ。

貴女が来るのをずっと待っていました」

「貴方は、一体……」

「立ち話もなんです、どうぞ此方へ。

案内しますよ、私たちの家に」

その者が一つ指を鳴らすと、景色は再びその有り様を変える。

山小屋なのだろうか。

見た限りその一言に尽きた。

周囲に聳え立つ竹林が休みなく葉を鳴らし、心地の良い音を立て続ける。

その景観は古めかしい外見ではあるものの、その姿に弱さは感じられなかった。まるで歴戦を潜り抜けた翁のよう。

歳を取ろうとも、磨き抜いたものはそう簡単に腐ることはない。

そんな印象を受けた。

謎の人物に導かれるまま、リユーは小屋へと足を運ぶ。

それはそうと、この者は一体何者なのだろうか。

一見しただけでは判断がつかない。

彼なのか彼女なのか。

声の低さからして男と取れるが、長い髪と柔和な顔立ちからは女性を思わせる。

「……………っ」

「私が誰か、何者なのか気になりますか？」

「…………… はつきり言えば、気になります」

「正直なお人だ。」

有限とはいえ、語る時間は十分にあります。

焦らずゆっくりとお話致しましょう」

「……は貴方の世界と言いましたね。」

一体どういふことなのか。

私は確かに、自分の家にいたはずなのですが」

「お話ししましょう。」

こうでもしなければ私は表舞台には立てないので」

寂しげに、楽しげに目の前の人物は語っていく。

木々が甲高い軋む音を立てて、重苦しい扉は来訪者を歓迎する。

何もかもが古めかしい。

一言で表すならば、それが該当するだろう。

中央にて鎮座する囲炉裏。

敷き詰められた灰、数えきれないほどに積まれたと思われる薪の末路たち。

小屋の完成とともに永らく吊り下げられてきた自在鉤。

実に多くの熱を浴び続けてきた鋳物たち。

木製で造られた机や椅子、本棚等は磨り減り、虫食いの跡が目立つ。

そして鼻腔をくすぐるは慣れ親しんだ草木の薫り。

所狭しと敷き詰められた床材が、リユウの心を落ち着ける。

常に安心感を漂わすは、イグサの深緑だからこそ成せる生命の神秘。

長い時間が経とうとも、輝きがくすもうともその在り方は消えることはない。

気の遠くなる時間が流れようとも、その恩恵が薄れることはなく、その空間に居る者

に安堵をもたらす。

「改めて、歓迎致しましょう。」

「粗茶ではありますが、どうぞ」

「……………」

「あ」

何も喋っていないのに、朗らかな笑みを浮かべる。

草木の色をそのまま映したかのような深緑。

渋くはあるものの、そこには確かにリユウの求める旨味がある。

これは、ある種の極地。

完成され、幅広く、極めて広範囲に認知され親しまれた物品としての極み。

リユウは今まさに、それを正しく実感している。

「その反応が見れば結構です。」

今の貴女の反応は「目は口ほどに物を言う」とこの地では言い表します。

何も語らずとも、伝えたいことがその目に映るとい意味合いです。

言い得て妙と本人の腑に落ちる言葉を「諺」と言い、これを永きに渡って親しまれる

ことを「文化」と言います。

他国にも似たような風習はありますが、この国ではそれが顕著に表れ、多くの人々に

伝わっています。

何故と言いたげな表情をしていますね。

元を辿れば信仰が広まった副産物、とでも言いましょうか。

この国では口にした言葉には力が宿ると古くから言い伝えられています。

力強く、且つはつきりとそれを口にすることにより、概念に確固とした意味を見出すこと。

それが「言霊」というものです」

「言霊……」

「そう、形には残らずともその概念には力が宿る。

他人に言われた言葉が胸に突き刺さるような感覚に陥った経験はありませんか？

鼓舞や叱咤激励、心に響かせる言葉には全てその力が宿っている。

当たり前のように感じているものは、元を辿れば風習によって広まり、日常の中での常識として居着いてしまっているものが大半です。

意識せずとも、その者の影響されたものは無意識的に周囲に振る舞う。

それに共感し、独りでに広まっていく。

まあ、噂の一人歩きと大差ありませんね。

違いとしては、それが多くの人の胸に根付くかどうかの話です」

「は、はあ……」

「そして、人の生活が移り変わり、変化していくと共に言葉もまた形を変える。

言葉というのは目に見えませんが。

時と場合によってその言葉の意味は無数になる。

概念に対して限定的な断言は誰にもできず、その意味を縫い止めることはできない。

固定されているように見えてその実、誰にも気づかれずひっそりとその意味を変化させているのですよ。

私の持論ですけどね」

紡がれるは教授のような弁舌の数々。

いや、おそらく正しく物を教える姿勢だったのだろう。

言葉の端々から他者へ諭す物言い。

何かの話術なのではないかと思えたのは、話を聴き終え、言葉を咀嚼し飲み込んだ後のことだった。

「いやこれは失礼を。」

久方ぶりの客人を前についはしやいでしまいました。

困った癖です、対面している相手に長々と話してしまう。

だいぶ本題からずれてしまいましたね」

「いえ、お気になさらず。

突然のこと故放心してしまいました。貴方の話はとても興味深かったです。特に、他国の文化について触れることなどは。

私は知識でしか知り得ませんでしたから」

「そう言つて頂けると幸いです。

無礼をはたらいた上に感謝されてしまえば私はもうお手上げです。

皮肉ではなく、私の素直な賛辞として受け取つてください」

掴み所がなく、物腰が低く、柔らかで丁寧な人物。

物をよく知り、それを広め伝えていく伝道師のような印象を受けた。

謎の人物の一面を知ることではできたものの、肝心の箇所が掴めていない。

「長々と余計なことを話してしまいましたね。

私から問うては貴女の納得には届かないかもしれません。

どうぞ、何なりと私へ問うてください。

答えられ、話せる範囲でお応えしましょう」

「でしたら」

—— 貴方は一体何者か

「私はただの旅人に他なりません。

多くの街々、数々の国々、数多の地へと旅を重ねてきたに過ぎません。

道中名前を変えて生きてきましたから、私は特定の名を持ち得ていないのです。

私のことはどうぞご自由にお呼びください。

名前に拘りは持っていませんので」

—— 貴方の世界とはどういう意味か

「あの手紙を覚えていますか？

あの手紙には読んだ者の精神を私の精神と同調させる術式が組み込んであります。離れた者と対話する私の数少ない取り柄です。

え、他の誰かが読んでいたらどうしていたのかですって？

ははっ、それについては偶然であり必然なのでしよう。

彼に最も近い者であるならば、誰が定めずとも自然とそれはその者に渡る。

使い古された表現としては、運命とでもいうのでしようね」

—— 少年を師事したのは貴方か

「ええ、間違いありません。

あの肉体や技術、戦う者としての心得などは私が与えました。

時間の都合上限度がありました。可能な限り童の身体を徹底的に鍛えました。そうする理由が私には、彼にはあつたから」

——あの殺人拳を師事したのも貴方か

「結果的に見れば、ですがね。

ただ強さを求め続け、私の知り得る限りを伝え、自らの可能性を可能な限り昇華させた結果がああ殺人拳です。

彼に残つた闘争本能がそうさせたのでしよう。

私が教えたのは基礎や技術であつて、技ではありませんでしたから」

かつてより疑問に思つたことをいくつか聞いた。

それは確かに私の中にある疑問をある程度解消してくれただろう。

この者が一体何者なのもある程度は掴めただろう。だが、それだけ。

本当に聞きたいことだけが、喉の奥から出てこない。

あの子の過去に一体何があつたのか。

あのような痛々しい生き方をするようになったのか。

何故、命を奪うことに躊躇いを無くしたのか。

「……あの」

「やはり、貴女は優しい方ですね」

「……は？」

それは、いつか彼が口にしたことと同じ言葉。

突拍子もなく、つい口から出たようなそんなもの。

あの子は間違いないくそう言ったが、目の前の人物は違う。

目に優しさを宿し、変わらず笑みを浮かべてそう言った。

まるで、こちらの心を見透かしているかのように。

「随分と当たり障りのない質問ばかりするので、どうしたものかと考えていました。

まだ私を疑っているのかも思いましたが、どうやらそれは違う。

根本を見据えておきながら、本心ではそれを避けようとしている。

恐れているのですね、あの子の過去を知ることを」

「そ、それは」

「隠さなくても結構ですよ。

確かに人の過去を知らずのうちに話されるのは誰も快く思わない。

ですが貴女はそれ以前に、彼の凄惨な過去を、心の傷を暴くような真似はしたくない。

知りたいが、同時に知りたくない。

そんなジレンマが貴女の中で渦巻いている。

後の彼への対応が変わってしまうことを、関係性が変化してしまうことを貴女は一番に恐れている。

他人を第一とする心がなければ、決して抱かない感情です」

やはり、この者は人の心を見透かす。

遠目で観察するだけならまだしも、対面した者であればその全容を明らかにしてしまう卓越した観察眼。

言葉をもつて解きほぐし、知識をもつて明らかにし、経験をもつて詳らかにする。

尋問すれば、どんな口の堅い者も口を割ってしまうだろう。

「ですが、あの子を本当に想うのなら、貴女は聞くべきでしょう。

幼くして世界の不条理に直面した残酷な少年の話を。

耳を疑う出来事の数々、顔を背けたくなるほどの痛ましき、胸に深々と刺さり続けるであろう真実を、貴女は知らねばならない」

そうして、彼の師はゆっくりと語り始める。

残酷ではありつつも、世界にとっては日々起きていた出来事を。

ずっと気にかけていたラジエルの過去の詳細を、リユーは知ることになる。

それは、意図せず誕生した鬼の物語

「でね、子どもたちの成長を祝って、この神会デナトウスでその証である2つ名をみんなで決めることになるのよ」

「…………… ああ」

「Lv. 2の子たちが多いからね、みんなハラハラドキドキで待ってるの」
「…………… ああ」

「ちよつとどうかしらって名前になっちゃう子も居るには居るのよ？」

でもそんなに多くはないわ。

だからそんな顔しないの。

ね、アテナ？」

「…………… ああああああつ…………… どうすればなかったことに出来るのか。」

ラジエルだけでも手一杯なのに、周囲の者達からの見世物のような視線を付け加えられてみる。

天界に戻るレベルの血を吐いてしまうかもしれない！」

感情の振幅が著しい少年の主神、アテナは折角セットした髪を惜しげもなく振り乱す。

ここ神会では冒険者たち関する事柄、即ち大規模なイベントの企画や役割分担等の取り決めを行っている。

無論最終的な決定はギルドの答え次第なのだが、余りにも無茶な企画以外は基本的に認可される。

季節に応じたイベントの企画や改善等も勿論行っているが、それ以外に神々が狂喜乱舞する企画が存在する。

「ぬえつと…………… アレ、カンペどこいったんかな。」

まあええか、ドーセロクなこと書いてへんしな！

さあ、そんじや一丁始めよか！

紳士淑女たちお待ちかねの企画、『2つ名決定戦』開幕や!!」

「「「「「イエエエエエエエエエエエエエエエエエエい!!!」」」」」

「ああ……聞こえる、バカたちがはしゃぐ声が」

「落ち着いてアテナ。」

「ほらいつも通りやりましょう?」

「はい、しんこきゅー」

「とても祝う側の顔じゃないわね……」

「あらへファイストス、貴女も一緒にどうぞ?」

「アテナ、はいしんこきゅー」

「ハツハツハツハツ……」

「それ以前に過呼吸なんじゃないかしら?」

「にしても早いわね貴女のところの子、ラジエルもランクアップしたんでしょ?」

「やっぱり凄い子だったのね」

「へファイストス、あの子に会ったことあるの?」

「ええ、前に貴女のところのリユーと一緒に歩いてるのを見かけたの。」

「見れば見るほど掘りだ……いい子よね!」

「き、気に入ってくれたのならあの子にも喜ぶわ」

「さあて、記念すべき第一号と行こか?」

『??^{セイント・ナイト}聖騎士??』

「「「それだ!!!」」」

「やめてくれエエエエエ!!!」

「ハツハツハツハツ、心臓が痛い。」

「胃が痛い、息が出来ない、目が回る」

「ねえアストレア、彼女もう限界じゃない?」

「あらあらまあまあ、どうしましょうか」

しかし、時は残酷である。

いくらアテナが遠ざけようとしても、その時は刻々と近づいてくる。

神といえど時の流れはどうしようもない。

それでも耐えなければならぬ。

2つ名に関して異議を唱えることはできない。

満場一致でそれだと判を押されてしまえばそれまでなのだが、付け入る隙は確かにある。

肯定の意を下される前に食い下がるべきだ。

例えばその姿が無様であろうと、必ず恥じぬ名前を勝ち取ってみせる。

彼女はただ、健気であつた。

しかし、加勢は思わぬところでやって来た。

「ほんじゃまあ次行こか…… っても最後かいな。

ん、アテナんとこのエルたんの番や。

ウチが今回イチオシの子やからええの考えたってやー」

「…………… なに？」

「あ、正気に戻った」

「丁度よかつたわ、間に合ったのね」

「…………… なんや、珍しいな。

今回も欠席やと思うとつたんやけど、来たんか」

「あら、随分な物言いね。

私だつて好きで欠席してる訳じゃないのに」

「まあ、ええけど。

そんで？ウチのイチオシの子の名前、考えてくれるんか？

フレイヤ」

「…………… フフっ。

アテナ、ちよつと耳を貸して貰えるかしら？」

「あ、ああ」

彼女はいつでも自由奔放で、大概思いがけないタイミングでやって来る。

下界にのみ留まらず、天界においてもその美貌を知らぬ者はいない。愛を体現した神。

女神フレイヤは、必ず男性に歓迎される。

凡そ暴力のような、避けようのない天災の如く、その美貌に抗うことは出来ない。

それが、決して手の届かない高嶺の花だとしても。

彼らは嬉々として女神に全てを捧げるのだ。

「な、その名はいくらなんでもー」

「どうかしら、私としてはなかなか良いものを用意したつもりではあるのだけれど。

オツタルから話は聞いたわ。

あの子が目を掛けた珍しい子ですもの。

私もそれに応えるべく、見合つたものを考えてきたわ」

「それは嬉しい心遣いなのだが……………」

「強大な力を秘めていても、彼はまだまだまだ子ども。

どうあつても燻り続けるのが定めよ。

でも、いつか近いうちその名以上になると思うわ。

それまで燃え尽きなければ、ね？」

「……………っ」

「私は候補を出しただけ。」

後は、貴女次第ではなくて？」

生真面目なアテナの脳内は、迷いつつもその先を指し示した。名は体を表し、周知されればその名は定着する。

彼女もまた、中層での話は聞いている。

少年の暴走を、激怒を、表し難い激情の話を。

真実だからこそ、その名が定着することは余りにも悲しい。

あらぬ誤解や因縁を付けられてしまうかもしれない。

だが、それは2つ名に限った話ではない。

いずれそういった場面に直面する可能性は十分にある。

ならば、主神としてすべきことは守ることではない。

守つてばかりでは、真の冒険者になることは叶わない。

そればかりか、いつの日か守りきれなくなる日も来る。

ならば、明確な形として、名前という強さを与えてあげよう。

ゆくゆくはその意味を知るだろう。

それに耐えられるような心身の成長を願つて。

いつの日か自分だけで、その身を守れるように。
「拜命しよう、女神フレイヤ。

貴殿の候補、我が眷属たるラジエル・クロヴィスの2つ名として、今日より名乗らせ
てもらおう」

「…………… フフっ、気に入って貰えたようで何より。

じゃあ、その後の活躍を楽しみにしているわ」

そうして女神は、名前という贈り物を置いて去っていった。

後に聞いた神々は驚愕を露わにする。

きつと彼女も、こういった反応になることはわかり切っていただろう。

それを含めての楽しみと彼女はそう言った。

そして、神々はその名を祝福する。

奇しくもその名に相応しい少年を讃えて。

ラジエル・クロヴィス。

2つ名『子鬼』と命名。

第34話 少年、渴望す

死神は、決して超常的存在などではない。

そこに一体、どのような外見を想像させるとお思いか。

頭から足の先までをすっぽりと覆う黒いローブを羽織っているか。

凡そその身体に肉はなく、ただ喧しく響く骨だらけの存在か。

誰かを裁くかのような巨大な鎌を携えているか。

死期が近い者にか見ることのできない幻想のようなものか。

残念ながら、そのどれもが間違いだ。

死神という存在は、もつと我々の近くに漂っている。

そこに存在しているのが当たり前のように、我が物顔で世界を飛び回っているのだ。

耳を澄まさずともそれは聞こえてくる。

死肉を貪る、黒い影が。

それは決して超常的存在でもなければ精霊でもなく、神話の中にのみ息づくものでも

ない。

奴らは現実世界で、はつきりと目にすることが出来る。

弱り切った魂を見つけては、それを刈り取る瞬間を絶えず待ち侘びている。

黒き影をたなびかせ、死を舞い込む声を轟かせて賤しく舌舐めずりをしている。

疑うのなら仰ぐがいい。

それは小さな命を掠め取ることだけを考えて彷徨っている。

その影の下には灰に埋もれた小さな命が在った。

華奢な身体を無理矢理起こし、声がする方向へ顔をあげる。

いつか見たような気がする光景に既視感を覚えたが、感じられたのはそれまで。

はて、前にもこんなことがあったか。

少年の胸中には覚えなどなく、無意味に思考を走らせるだけ。

考えるだけなら、まだ出来よう。

だが、結局のところそれまでだ。

何も思い出せない。

いや、思い出すことなどないか。

この空と同じなのだろう。

元のキャンバスに適当に黒のインクをぶちまけられたのだ。

色が滲むことはあれど、元に戻ることはない。

そう、もう思い出すことなど何もないのだ。

相も変わらず、暗闇ではない黒が空を絶えず飛び回る。

奴らが彷徨いてからどれほどの時が経過したのだろうか。

どれほど無意味にな問答と思考を、少年は繰り返したのだろうか。

忙しなく飛び回る奴らは、未だに地に降り立たない。

期ならとうに熟しているはずなのに。

此処はとある村。

何処にでもあつた何の変哲もない村があつた場所。

かつて村人たちの活気に満ち溢れていた、村だった地。

今は、名も無き数多の死者たちの墓地と化した村の名残りだけが残つた所。

その中心にて、力なく空を眺め続ける。

何かをする氣力を無くし、命の匂いを薄れさせ、生氣を抜かれてしまった童子が、ただただ顔をあげているだけ。

「……………」

言葉の出し方を忘れた。

自分の過去に何があつたか忘れてしまった。

此処にいる意味を忘れた。

此処が何処なのか忘れてしまっている。

そも、自分とは一体何なのか覚えていない。

呼吸すら、意識しなければ忘れそうになる。

目の乾きさえなければ、瞬きすら忘れるだろう。

冷たい雫がこの身を濡らす／焼け跡を滲ませていく

身も心も凍えそうになる筈なのに、この身体は何も感じない。

焼き尽くすような日照りがこの身を焦がす／焼け跡を出鱈目に乾かしていく

身も心も潤いを欲する筈なのに、この身体は何も感じない。

降りしきる白玉がこの身を凍らす／焼け跡を真つさらに塗りつぶしていく

身も心も震え上がる筈なのに、この身体は何も感じない。

死神が身体を突つく／焼け跡唯一の痕跡さえ奪おうとする

止め処なく流れる血が、焼け跡へと広がっていく。

広く、深く、赤く染まっていく。

それを眺めていると、胸にも何かが広まっていくような気がする。

これは痛みか、苦しみか、嘆きか、悲しみなのか。

分からない。

ただ、どうしようもなく熱いものを感じる。

種のようなものが、胸に落ちたようなそんな錯覚。

「……………」

やがて死神は去っていった。

何をしても反応を示さないそれに飽きたのかもしれない。

何をしても反応を示さないそれに気味の悪さを感じたのかもしれない。

そのいずれかだったとしても、少年にしてみればどうでもいいことだ。

ただ黙して、空だけを延々と仰ぎ続ける。

”初めて彼を見たとき、それはもう凡そ生者の在り方ではありませんでした。

何に対しても反応せず、ただ空を眺め続ける。

最早その姿に生き物としての面影はなく、在るのは生き物であった何か。生物として大切な何かと引き換えに、彼は辛うじて人の姿を保った。

それは感情、記憶、自身にとって大切な人々。

世界において、それらは総じて心というのでしょうか。

彼にとつて、この世に生きる人全てにおいて、それは掛け替えのない唯一無二のもの。それを失った時、貴女は人としての在り方を保っていられますか？”

失ったものは、あまりにも大き過ぎた。

人としての形を保つために、それを構成してきた要素を全て捨てざるを得なかったのだ。

その結末を体現したものがそれだ。

止めどなく溢れる憎悪が成り代わったのだ。

全てを一夜にして失くした。

灰の中から新たに生れ出づるものは、決して神々しい神秘ではなく、それと正反対の禍々しいものであった。

人の心に粘り付く黒々とした影が、彼の心に根を張り、その本能を代弁する存在を作り出す。

誰かの介入によるものではない。

無意識のうちに芽生えた、生物として当然の感情。

仕掛けられたのなら、それ相応、又はそれ以上の報復をもって仕返しをする。

至極当たり前、子どもですら感覚的に知っている報復の心。

やられたのならば、やり返せ。

傷付けられたのなら同じ傷を付けよ。

親を殺されたのなら相手の親を殺せ。

かつてその行いを大々的に、かつ常識とばかりにその行いを良しとする法律があったとされる。

余りにも稚拙で、短絡的な発想だろう。

だが、当時の政策者はそれを良しとしたのだ。

当然のことであると言わんばかりに、自らの考えが一点の曇りなき正統な主張であると。

秩序を正す側からすれば、その行いは間違っている。

が人はよく思い悩み、思考が行き詰ると短絡的思考に逃避する傾向がある生物だ。

簡潔に表すのであれば、楽をしたがる生き物なのだ。

楽を欲し、怠惰を渴望する。

その思考は一度容認してしまうと、その者を雁字搦めに縛り付け、その在り方を退化させていく。

何をしようにも自身の判断に自信を持ってなくなり、最終的には周囲の判断に身を委ねたがる。

やがて思考をするという行為その自体を忘れ、ただ流れに身を任せて生きているつもりになって無意味に生を終えていく。

故に、上記の古来の制定は受け入れられた。

政策者の訴えに感化されたのではなく、発言力の高い者に乗り掛かった。

考えに考えた上での支持ではなく、彼らの言うことに間違いはないという盲目的思考に囚われたが故の答えなのだ。

であるならば、その行いが支持されるのは必然。

そして、後に後世に継がれることなく撤廃されるのもまた必然。

正しくなかったのだから。

少年の心は、それが行き過ぎた。

通常なら共に死ぬか、時間をかけて飲み込んでいくかの二択。

しかし彼はそのどちらとも拒否する結果となる。

両親によつて生かされ、形容し難い負の感情を持つて復讐を誓つた。

“憎かつた、ただそれだけの事です。

悪事が蔓延るのは世の常。

罪のない人々がそれに巻き込まれ、罪なき命が散るのも世の常なのです。

遠い国の話であるならばそれもそうかと思つたでしょう。

遙か昔の話であるならそうなのだと思つてでしょう。

誰もが当事者にならなければ、その後の本当の自分の意見は出ません。

元の自分を忘れさるほどの激情を持つた、持たなければならなかつたから強さを求めた。

自分たちと同じ末路を辿らせるため、彼は復讐を誓つた。

他の子達と比べれば、あの子は特殊でした”

必ず報復してみせる。

彼らと同じ末路を辿らせ、必ず罪を贖わらせてやる。

その復讐心を内に、ただ貪欲に強さを求めた。

全ては復讐のため。

完遂出来るかどうかは考えていない。

何がこの復讐の終着点なのかも分からない。

それでも、慟哭を上げずにはいられないのだ。

家族を失ったそれを、嘆かずにはいられない。

歯が碎けるほど、怒れずにはいられない。

涙の川ができるほど、悲しまずにはいられない。

故に、憎しみを抱かざるを得なかった。

— 殺してやる

— 壊してやる

— 奪ってやる

— 燃やしてやる

こんな救われぬ世界など、燃やし尽くしてしまえばいい。

誰に願う訳でもなく、誰かに頼る事でもなければ、誰に縋る訳でもない。

歪んだ世界を道連れに、その日をこの手で沈めてみせよう。

この慟哭で足りないのなら血を渡そう。

それでも足りなければこの命、この魂全てを対価として捧げよう。

願う事なら、この憎しみに行き場を。

”その小さな心に決して消えない大きな炎を宿して、あの子は私に言いました。当然の事ながら、譫言のように口走るそれを、彼は覚えていません。

無理ありません。

今よりずっと幼く、バランスもろくに取れていない不安定な存在でしたから。

ただ、私ははつきりと覚えています。

涙を血に変え、髪を振り乱し、喉を潰すほどの慟哭を私は覚えている。

あれがきつと、ラジエル本来の叫び。

人格が完全に抹消される前に吐き出したかった、ラジエル最後の駄駄。

それから先は死んだように眠り続けました。

眠り続けて、そして一月ほど眠り続けてようやく目を醒ましました。
酷く悪い意味での別人になった顔つきで”

………
?

”言葉をも忘れてしまったのでしよう。

口は動けども、声はおろか音すら出せなかつたのですから。

心身ともに衰弱してしましたから、体調が万全に近づけば或いはとも思つたのですが
そうではなかつた。

もう、全てが彼の中から消去されてきました。

人格の再構築、別人格の生成、記憶媒体の浄化、感情の欠落。

彼はもうあの頃の彼ではない。

無邪気に駆け回っていた、親の愛を一心に受けていた、残酷な結末を突きつけられた

ラジエル・クロヴィスは死にました。

復讐の業火に身を窶し、世界の不条理に対し怒り続ける鬼。

全てを自身諸共に焼き尽くすことを誓ったラジエル・クロヴィスが新たに生まれたのです”

師の施しにより体調を回復させ、動き回る程にまで至った。

一から言葉を教え、一からある程度の教養を身につけさせた。

少年の願いを口に出させるには、そう時間は掛からなかった。

——ししよー、強くなりたい。

”そこから私たちの修行は始まりました。

血反吐吐き、血潮沸き、血肉削る醜悪な修行をひたすら続けました。

その間凡そ約10年近く。

未熟極まる童子にして、身体すらロクに作れていない年頃からのスタートでしたからね、それ相応の時間はかかりました。

一言二言小言を言うことはありましたが、彼は修行を拒否する素振りは一度も見せな

かった。

私の言葉を何処までも信じたが故なんでしょうね。それはそれでやりやすかったからいいんですが”

——もつともつと、強く

小鬼はひたすらに力を求め、師の教えを余す所なく吸収した。

貪欲に力を蓄え続けた。

修行重ねてはならず者で実践し、修行を重ねては山賊で試した。

時には武芸者をも相手取り、血みどろになりながら拳を振るつた。

——まだ、まだまだ

そして、未熟者は己が内の才覚を開いていった。

突きを放てば大気を弾く。

蹴りを振るえば風を断つ。

貫首を繰り出せば岩を穿つ。

脚を踏み降ろせば大地を揺るがす。

手刀を抜けば空すら斬る。

一度駆ければ山を越す。

自身の肉体のみで、あらゆる武具を操る者に肩を並べるほどにまで登り詰めた。

——もつと、強く……

誰よりも強く、何者よりも夙く。

ただそれだけを目指して己を磨く。

あの耐え難い屈辱を二度と味合わないため、絶望の淵に二度と墮ちたくないため、目に見えぬ恐怖から逃れるため、ただ強さを求めた。

何に恐れているのかは自覚出来ない。

それを振り切るためにはただ力を付けなければならぬ。

他人の命を奪ってでも、力を求めなければならぬ。

「……………」

それは子どもがというより、一人の人が持つには余りにも惨たらしい背景であった。

ただ憎しみを晴らしたいがまま、ラジエルは貪欲に強さのみを求め続けた。

であれば最初に手合わせした時の強さもまた納得出来るだろう。

いつ何時も己の命と引換に、全てを道連れにする狂った覚悟を持ってしまったのなら、その強さも納得できる。

だが、彼の身を案じているリユーにとって、その背景は想像を遥かに越えた凄惨な過去。

大切な者を殺され、世界に取り残され、忘れ去られようとしていた小さき灯火。

それが、リユーが今まで知りたくて仕方なかった真実。

知った上でその傷を埋めてあげたかったこと。

そしてそれが如何に浅はかな考えであり、最早全てが遅すぎたと知らしめられた。何もかもが遅いのだ。

彼の内に巢食う憎しみを取り払うだと。

人の暖かさを思い出させるだと。

また一から始めようだと。

そんな生易しく、中身のない言葉など、到底かけられるものではない。

『アレをゼーいん?』

『はい、倒すも殺すも君次第。』

目標時間は三分、数はざっと百名余り、距離約300m。

では、行きなさい』

走る閃光は、無慈悲に目の前の命を奪っていく。

吹き荒ぶ旋風は、草木を舞い上がらせるように命を攫っていく。

獐猛に煌めく牙は、屈強な男たちを容易に噛み殺していく。

『まだまだ遅く、無駄が多い。』

もつと鋭く蹴りを振り切れば、余波で三人は巻き込めました。後方の敵の距離感がいまいち掴めていませんね。

近くの敵から順々に片していけば、さらに効率よく仕留められます』

無邪気に、無機質に突き詰められていく技術が、リユウの心を抉っていく。

凡そ少年が振るうべきでない殺人拳を、悪意のない顔で人々へ向ける姿を見ているのがあまりにも辛い。

不意に、初めて彼と出会った日のことを思い出した。

その鉄仮面の内に秘めた過去の片鱗に触れた、あの日のことを思い出した。

『腰はその位置から動かさず、移動の際はそのまま滑らせるように。

溜めた力を出し尽くすまで、姿勢は変えないように。

力を入れ直す時にだけ、初めて構えを解くことを許します。

そうして振り抜けば、人体など容易く穿てます』

故に押し寄せる涙を止める術などなく、嗚咽を漏らさないようにするだけが唯一の抵抗だった。

浮かぶその光景は極めて異質で、途轍もなく現実離れしたものだ。だからだ。

子どもの戯れに付き合うとばかりに現れる遊び相手。

彼らは、永遠にその光景だけを目に焼き付けたまま、この世を後にした。

ただの一人も生存者を残さず。

『振り抜きにまだ雑さが残っていますね。』

即死させられるものでなければ全て失敗と思いなさい。

君にはもう、失敗する余裕などないのですから』

『もつと……もつともつと、強く』

その言葉の真意が、未だに腑に落ちないまま、映像は流れ続ける。

——
ボクは、ただ強く在りたいんだ。

第35話 少年、自覚を深める

繰り返し、繰り返し流れる夢。

幾度となく再生は繰り返され、刃を焼き直すかのように在り方を刷り込まれる。

一面に広がる赤い炎、嘆きとばかりに吹き出す黒煙、何もかもが荒廃しきった瓦礫の山々。

そこに伏すのは戦士か、はたまた罪のない市民か。

どちらなのか、どちらでもないのか、どちらでもあるのかそうでないのかは分からない。

何もかもが焼け爛れてしまったその有り様では、最早個々人が一体何者かだったのかすら不明だ。

ただ、はつきりしていることがある。

これは戦火だ。

また戦火で罪のない人々が焼かれたということだ。

そして、これは今まで見ていた光景と少し異なる。

此処はあの村ではなく、少し見慣れた街の風景。

何かを販売しつつ移動していた屋台らしきものが横転し、破壊されている。

武器を取り扱っていたと思わしき店が、軒並み荒らされている。

人々で賑わっていた商店街の代わりに、夥しい炎が居座っている。

そこは、いつか自分が流れ着いた街の姿。

師に導かれ、辿り着いた輝いていた場所。

かつて文明を築いていた名残。

変わらず繁栄を続けてきた今は亡き故人達。

その災禍の中心に立ち尽くしているのは、紛れもない自分自身だ。

変わり果てたその姿を、他人事のような顔をして、いつも通りの表情でその一様を眺めるのだ。

友好の意を示してくれた者も、心から愛してくれた者も、いつも傍にいたと言ってくれた者も、等しく瓦礫に埋もれ炎に包まれた。

いつか辿り着く道だと言わんばかりに、光景は見返す度に鮮明になっていく。

あと何度見れば、それはより鮮明になるのか。

あと何度繰り返せば、それは現実になるのか。

未来への暗示なのか、ただの記憶の混濁かは分からない。

ただ再び、また記憶を焼かれていくだけだ。

身体だけでなく、魂をも武器として振るえ。

かつて師に言われた言葉が頭を過った。

物理的にとという意味では勿論なく、それくらいの気迫をもつて敵を圧倒しろという訓え。

拳であれば更に強固に。

手刀であればより鋭く。

蹴りであればより柔軟に。

その極意され飲み込めれば、敵の大半など有象無象に過ぎない。

猛る炎がもまた語りかけてくる。

怒れ、憎め、嘆け、狂え、猛れ、燃やせ、殺せ、噛え、叫べ、爆ぜろ、足掻け!!

心の思うまま奮うがいい。

後の事など考えるな。

眼前の敵を斬り伏せ、打ち砕き、焼き尽くすことに力を注ぎ続ければいい。

そのための積み重ねてきた力だ。

激情の流れに身を任せ、失意の底へ滑走していけばいい。お前に残された選択肢など、それくらいしかないのだと。

風を切るように、刀が踊る。

特有の風切り音を立て、道すがら全てを切り裂いていく。

縦横無尽にして振るわれる刀はどんな業物よりも洗練され、相手を惑わし、その命を断ち切る。

だが、対する鋼は未だに切れそうにない。

轟音を響かせて、槌が落ちる。

大気を震わせ、避けようのない無慈悲な暴力という名の一撃を持って、障害物を薙ぎ払っていく。

振るわれるそれは鬼の棍棒が如く大きく、且つ強靱にして豪胆さを併せ持つ。

だが、その巨木は未だに倒せそうにない。

狂い舞うかのように、大鎌が唸る。

その様まさしく災害の如く。

風さえも刃へと変え、周囲の命という命を根こそぎ刈り取っていく。

死刑囚であれ、罪なき者も関係なくその首を落とすだろう。

だが、対する男の首は未だに落とせそうにない。

あらゆる武器、あらゆる手法、あらゆる技術をもつて真摯に打ち合った。それこそ、殺す気で何度もだ。

顔にこそ出ることはないが、内にて暴れ回る激情に突き動かされるまま、必殺の奥義を躊躇いなく放った。

しかし、その男を未だに傷らしい傷を負わせるまでに至れていない。

ここまで来ると、疑いの目を向けても仕方のないような気がしてくる。

剥き出しの刃を向けられても平然と対処し、容易く人体を貫く槍を振るっても小枝を払うかのごとくいなされる。

体へ打ち込めたとしてもまるで手応えがない。

大きな岩に打ち込んでいる、というよりもつと大きな規模のものに向かつていつている気がしてならない。

さながらこの星そのものに打ち込んでいるような。

—— 弔獸戯我 貫首一角 かんしゅいつかく

渾身の力を込めても尚貫けない。

—— 弔獸戯我 烈火羊盾 れつかやうどん

やはり、貫くことは叶わない。

—— 弔獸戯我 百舌百景もずひやつけい

瞬きのうちに百近くの貫首を放とうとも、それは決して貫けない。

先にこちらの両腕が音を上げてしまう。

ならばその寸前にまで迫ろう。

細かいことを考えるのは後回しだ。

加減など微塵も考えるな。

今持てる全てをぶつけ、殺すことだけを考えていればそれでいい。

—— 共生・弔獸戯我 群雄鳥風ぐんゆうちようか

呉越同舟か……… 目的を達せられるのなら、誰とでも手を組もう。

例えそれが、己を蝕む黒きナニかであったとしても。

【幾らあつても、薪は足りぬな】

赤黒い炎が眩く。

以前よりはつきりとした声音で、確固たる意思を表しながらそれは揺らめく。それは嘆く。

幾ら薪を焚べ羅れようとも満足できない自らの欲深さを吐露する。
足りない、不足している、満たされる兆候が全く見えない。

【その上、オレたちの頭上にて見下ろすあの猪武者。

まったくもつて忌々しい限りだ。

燃やし甲斐があるのは結構なことだが、この様ではやはり齒痒いな】
内にてそれは眩く。

少年が持ち得ない感情をもつて、あらゆるモノに対し負の感情にて評価を下す。
【ああ、力不足は承知の上。

オレたちは未だ燻る燃え滓に過ぎん。

この程度ではあの巨木を焼き尽くすことなど夢のまた夢だ。
だが】

——でも、まだ強くなれる。

【その通りだ、俺よ。

オレたちはまだまだ燃え上がれる難という名の火種なのだ。

いずれ全てを灰へと還す加減になるその時まで、今はまだ溜め込め。思うがままに拳を振り続け、刃をただ磨け。

そして、場合としてはオレを呼べ。

俺に成り代わり、オレが殺す。

必ず、俺の障害を完膚なきまでに焼き尽くしてくれ」

——まほーを使えばいいんだよね？

【そうだ、アレはオレが表に出る最後の条件。

俺が溜め込めし不浄を解き放つ門のようなものだ。

今はまだ、俺が自由に扱うには些か持て余すが、いずれは手足のように使いこなせる。

ただ、今はまだ待て」

——分かった。

【それでいい、我が復讐者よ。

右も左も分からなかった頃に比べ、今では自覚を深め、オレを自覚できるようになった。

力は着実に伸びつつある。

移り火の如く恐ろしいほどの速度でな」

赤黒い炎は、この上なく上機嫌だ。

愉快に嗤い、少年の伸び具合を讃える。

少年が魔法を解放し、自身の心に向き合ったことによりそれは意志をはつきりと形にさせた。

そして、少年が抱くはずの負の情念を代弁する。

——自分にほめられるのって、すぐく変なきぶん。

【オレは、俺だ。

報復に燃えるその炎を唯一肯定し、許容し、代弁するのがオレの役目だ。

オレたちの心は誰にも理解されん。

誰一人としてはおろか、世界はオレたちを決して認めん。

何故だか分かるか？

オレたちが抱く復讐の業火は、常世の秩序を乱す異分子だからだ。

場合によっては、世界より抑止力が働きかねんな。

故に、この炎を手放さない限り真の理解者は永遠に得られることはない。

ならば、必然的にオレたちを認めることができるのはオレたちだけ。

オレが俺を許容出来ずに、一体誰が認めようか！

——うん、俺は必ず強くなるよ。

【そうだ、その在り方でいい。

表現は出来ずとも、伝えられずとしても、俺はそのままでもいい。内にて煌々と怒りを燃やすその在り方こそ俺だ。

復讐の代弁者たるオレは、それでこそ意味がある。

フハハハハハッ!!!

自身の心に、また一つ誓いを新たにす。

世界を焼き尽くすという途方のない報復を実現させるまで、あらゆる負の情念を溜め込むと。

そしていつの日か、世界をも飲み込む炎火となつて全てに報復すると。

【目覚めの時だ、俺よ。

薪焚べに精を出し、存分に溜め込むがいい】

そうして、虚ろの空間から灯りが姿を消す。

—— ああ、伝え忘れていたが、標を残してきた。

俺相手ではあの女も苦勞しよう。

これより先は、案内人が必要だ。

朝日が顔を見せ始める。

まるで条件反射のように、日の出とともに目が覚めてしまう。

食料を取りに行く必要も無いというのに、早起きが習慣となつている身体は否応なしに覚醒していく。

隣にはもちろんリユーが眠っている。

彼女も基本的には早起きする部類だが、比較的にはラジエルの方が早い。

「……………あ……………はん」

リユーを起こさないようにゆっくり、ふらつく足取りで廊下を歩き、階段を降りる反動で眠気を払う。

未だ誰も起きる気配はなく、朝特有の肌寒さと遠くより聞こえる鳥の鳴き声だけが妙に際立つ。

キツチンへ赴き、スライスされた食パンを適当に取り、ミルクを注いで定位置である窓辺に腰掛ける。

朝は決まってそうする。

誰もいない朝は決まってこの位置に座り、起きていく街並みの風を感じながら朝食を

取るのだ。

「顔あらおつと」

小休止は文字通りすぐに終わる。

面倒とは思いつつも、洗面台へ向かっていく。

目を覚ますだけなら冷水で顔を洗うだけで十分なのだが、リユーは妥協を許さない。

寧気を引き締めるという意味合いを朝一番にすることが重要なのだと彼女は言っていた。

面倒だが、目を光らせている姉が見ているかもしれない。

素直に従っておけば雷は落ちない。

「……………ぬえ？」

別段寝起きの顔がひどいという訳では無い。

子どもらしい小さな顔に青い大きな瞳、健康的な肌色。

艶のある黒髪に、寝癖があちらこちらにあるだけ。

隈があるわけでもなく、顔には異常は見られない。

ただ、黒一色のはずの頭に、見慣れない赤黒く変色した髪が頭頂部にて生えている。

1本や2本なんて生易しい数ではなく、数百本の髪が毛束となつて触覚のように跳ねていた。

「……………え、これなに？」

とにかく自分の体に起こった異常を確認するため、その触覚に触れようとする。

「いたっ……………え？」

叩かれてしまった。

勝手に生えていた触覚に、気安く触れてくれるなど言わんばかりの意思表示をされてしまった。

そもそもコレは一体なんだ。

勿論昨日まではこんなものなかった。

見るからに触覚なのだが、奇妙なことに意志のようなものを持っている。

でなければ、ラジエルの手を払い除けるものか。

「ぬえ？」

え、ちよつといたっ」

「……………」

「まてー、いた」

「……………」

「むう、このこの」

「……………！」

「さて…………… ころ逃げな〜」

「ラジエル？」

鏡の前で一体何を……………」

「あ」

「……………」

全く身に覚えのないこの触覚に対し、自分の持てる限りのちからを振り絞ってリユーに説明した。

説明になったかどうかは定かではない。

「なんか…………… すごく疲れた」

「……………！」

「え、次はこつち？」

もうなんなんだよおまえー、朝からおまえのせいで大変だったんだぞー？」

触覚に導かれるまま通りを進んでいく、奇妙な少年の姿がそこにはあった。

忙しく外へ出たがる謎の物体に急かされるまま飛び出しまではいいのだが、少年には一つ気掛かりな点があった。

『すみませんラジエル。』

私今日は別件があつて一緒に行けません。

遅くならないように帰ってきてくださいね』

いつもなら何も言わずに一緒に来てくれるはずの姉が、今日に限っては別件で手が離せないと告げてきた。

急務が入つたと言われればそれまでなのだが、どうも引つかかる。

数日前から妙によそよそしいというか、距離を開けられたような気がしてならないのだ。

時折声をかけられるまで気づかないほどに上の空になっていたりするし、最近のリューは少し様子がおかしい。

他人に対して特に関心が持てないラジエルだが、今回のような反応は特に気になつてしまつた。

【その直感、思い当たる節はないか俺よ？】

「え、やっぱり話せるの？」

【当たり前だ。

ホームで安易に話しかけられない故にあのような動きをする羽目になったのだ。

言っただろう” 標を残してきた”と】

「ああーそっか。

それで生えてたんだ」

【それは特に重要な案件ではない。

思い当たる節はないか？

俺が、こいつも関心を示す人の反応の変化に】

突然そんなことを言われてもと困惑する少年。

だが、言われてみれば確かに似たような感覚は以前にも感じていた。

アレは確かりューと模擬戦をする前に、リーヴァより鍛錬用の武器を差し出された時。

ダンジョンに初めて潜った時。

オツタルと初めて対峙した時。

ティオナとなし崩し的に組み手を行った時。

【順当な回答だ。

やはり、ここへ来て感知力も相応に上がっている。

分らないか？

俺は、“他者より向けられる負の感情”に対し敏感になっているのだ】

「ふのかんじよー……ん」

【最初にあの女より向けられたモノは猜疑心。

人を疑うある種不信を表すモノだ。

それが始まりだ。

後はそれより底へと繋がっていくモノ。

より強く、恐ろしく、悍しく簡単に人を変貌させる七つの罪】

それは、師から聞いた事のあるものであった。

人が持つ自身を墮落させる七つの罪。

基本七つ全てを人は持ち得ており、その者が最も落ちやすい罪が一つ必ず表れるという。

【魔窟へ初めて赴いた時に感じたモノ、それは“強欲”。

己の欲望を満たすために集う魔窟がダンジョンだ。

金銀財宝、力の追求、弱者を痛ぶる格好の場。

冒険者とやらはそれらを求める者共なのだろう？

ならば、それが集約する箇所は一つだけ。

あそこには、多くの者の欲望が詰まっている】

【あの忌々しい猪武者と対面した時に感じたモノ、それは“憤怒”。

業腹だが共感はできる。

あの男はアレほどまでになろうと力を求めている。

力は鍛錬次第で伸ばすことができるが、武を追求する者というものは基本的に他者と

の邂逅を望む。

互いに命を削り合うことに対し喜びを感じるもの。

ところがあの男の周りは果たしてどうだ？

ひと睨みすれば即座に散る塵芥のようなゴミばかりではないか。

奴は憤っている、己を示す事のできない弱者に対して】

【あの好戦的な小娘と出会った時に感じたモノ、それは“嫉妬”。

この世界ではLvというものが強さの基準となっているのは分かっているな？

あの娘は俺よりも長くこの街に滞在し、力を示してきた。対して俺はここへ流れ着いてひと月程度。

基準をもって計れば力の差は歴然、そうだな？

だが、かの組手の結末はどのようなものだった？

結果は物の見事に完勝。

感情を掻き回されていたとはいえ、臂力では向こうが勝っていた。

俺はそれを覆した。

故に、娘はその理解の範疇を越えた俺に嫉妬した」

知性ある者だからこそ陥る墮落の罪。

今まで出会ってきた者たちには総じて欲がある。

そして、その中でも突出したものがある。

自分が評価を下した相手には、正しく七つのうちのどれかを色濃く示していた。

【特に珍しい、ということでもない。

人は誰しもがその内に欲望を抱く。

どのような聖人であれ、行動理念の核は欲望なのだ。

人を人たらしめる象徴にして、決して消せない罪。

欲自体に罪はないが、それが周囲へ向けられれば罪となる。

当然だ、己が欲望のまま振る舞い、他者を傷つけければ秩序の名のもとに罰せられる。

だが、果たして人が蔓延る世とはそんな単純な理由で縛れるものか？」

「それは、多分まちがってる」

「そうだ、無垢となつた俺ですらその考えに行き当たる。

罪であるとは知っておきながら手を出し、罰せられると知って尚自らの欲望に従おうとする。

常に自らの行動を思索し、迷い、葛藤する生き物だ。

客観的に見れば面白くもあるが、惨劇に巻き込まれた当事者であるオレたちにとつては醜悪で悪趣味な世界だ。

欲を満たすために全てを傷つけるのか？

そして、それは正当化されるのか？

賛同する者が多いというだけで許されるのか？」

炎が怒る。

沸々と燃え滾るその強い憎しみと怒りが炎となって全身を駆け巡る。

世界の不条理こそ報復の対象。

数の暴力が罷り通る世界へ向けられたただ一つの憎悪。

「フン、脱線してしまったな。」

俺は深く考え込む必要は無い。

ただこの世で蔓延っている憎しみの種類を覚えておけ。

それだけで、行き着く答えの真意が見えてくる。

そら、着いたぞ」

「……………どこココ？」

「時の終わりまで消えることの無い熱であると自負はしているが、このままの歩みでは物足りん。」

故に、一足先に必要なモノを頂戴する。

ああ、俺は聞いていなかったか？

あの猪武者はオレたちを鍛えるついでに、無くした武器を見繕うと宣ったのだ。

奴程の男の言葉であるのなら完成にまでさほど時間は掛からん。

加えて俺はその手助けを間接的にした。

そういつた契約を結んだはずだぞ？」

「そんな」と……言ったかなあ」

「オレは俺だ。」

聞き逃したことは全てオレの耳に入っている。

案ずるな、何もかもが順調だ。

来るぞ、例の取引相手がな」

「誰？」

私の工房の前でぶつくさ独り言言ってる子は……… って、あら？」

「あ、へフアさまだ」

いつか交わした約束を果たすため、邂逅は成される。

善意と娯楽で持ちかけられた話を、少年は己が目的のための薪とする。

全ては、途方のない目的の完遂のため、あらゆるものを利用する。

その相手が、例え神でさえも。

第36話 少年、一新する

今のままで、あの日の出来事を忘れたことなどない。

和氣藹々とした空気の中であろうと、過去の出来事だと世界がそれを塗り潰そうといくら時間を与えてこようと、消して忘れられない。

あの時と正反対の光景に身を窺っていていようと、瞬き一つで世界は一変する。

一面に広がる果てしない炎。

肌を焦がす無情の熱。

変わり果ててしまった居場所。

蹂躪された大切な時間。

略奪の限りを尽くされた現実。

もうあの日は戻ってこない。

魂にまで犯し尽くされたこの呪憎しみいは、どれほどの幸福と癒しを与えられたとしても忘れられないだろう。

だからこそ、この炎は生憎しみまれたのだ。

新調された籠手の性能を確かめるべく町外れの岩場で、簡単に動作を確認する。
指の稼働に支障なし。

圧迫感に違和感なし。

重量も問題なし。

吸い付くような触り心地に、あらゆる衝撃に耐えられる程よい安心感。

淡く輝く籠手が、所有者である少年を歓迎する。

そして、ラジエルは新しくも懐かしき領域に踏み込む。

猛る炎が囁く。

血湧き肉躍る血腥い修羅の道へ誘うように。

【そう、そこだ。

まずは掌に意識を集中させ、解き放つイメージを固める。

魔法の詠唱？ 必要ない。

本来アレはオレが表面化する為のものであり、力を行使するに必要なものではない。

力そのものはとうの昔に備わり、既に邪魔な枷も外れている。

続けるぞ、掌に力を集め解き放て」

掌より噴き出される炎。

放射されるというより爆破のイメージに近い。

ゴライアスの変異種に止めを差した黒い人格曰く、爆破の方が使い勝手がよく、尚且つ出が早いための隙も少ないとのこと。

勿論その気になれば放射や火の粉を撒き散らすことも出来る。

だが今は試運転故、応用を効かせるのもう少し先になる。

【よし、一応ものにはなつたな。

急造だが十分使えるだろう。

だが、意識の配分には注意しろ。

手網を離せば、辺りは一面焼け野原となる。

それも悪くはないが、力の暴走でしかした事などに意味は無い。

意志を持ち、覚悟を持って目的を遂行する。

その事を常に忘れるな」

「うん、わかった」

【それでいい。

それにしても、いい具合のようだな」

「すぐく動きやすい」

【最上ランクの炎耐性、並びに二度と壊れんよう不壊属性デュランダまで織り込むか、鍛冶師の神とはよく言ったものだ。

俺にとって相応しいもののみが込められている」

未だ力の感覚が定まっていなため、全力解放は難しい。

しかし、それは時間の問題。

解放の仕方さえ覚えれば後はすぐにも身につく。

そして、鍛冶神へファイストスより贈られた籠手。

オツタルより情報が行き届いていたためか、要求もしていないのに最高ランクの炎耐性と、決して壊れないレアスキル「不壊属性」まで付与されていた。

「不崩剛拳」。

ラジエルが師より送られた手紙の他に添えられていた謎の鉱石、不壊鉱石エルティニウムをベースに作製されたもの。

どんな方法を用いても壊れることはなく、触れた属性に対して順応し同調する性質から、あらゆる属性に対して擬似的な全耐性を有する。

暗色の紫色をしていて、どこまでも光を飲み込み続けるような印象。

砕けることなく、全てを己の手で薙ぎ払う意味合いを込められたオーダーメイドであ

る。

【やはり感応率の飛躍的伸び具合が常人のそれではないな。

この短期間で解放が使えるれば、すぐにでもあの奥義が使えるぞ。どうだ？上層の雑魚どもで試し打ちするか？】

「え？でもリユウがダメって」

【そんなものどうとでもなる。

危険さえ冒さなければ、あの女とてそう事を荒立ては済まい。

それに、力の確認は冒険者としての当然の責務でもある。

そろそろ覚えておくべきだ、我らの火悪戯ひあそびをな】

「じゃあ、ちよつと行ってみようか」

【それでこそだ】

そう黒い人格に唆されてダンジョンへ向かう。

悪魔のごとき囁きが少年の抑止力を融かしていく。

問題は無い、上層のゴブリン相手に力の確認をするだけだ。

冒険者として、自身の力は常に把握しいつでも使えるようになっておかなければならない。

慢心とも言える感覚を抱きながら、少年は久方ぶりに魔窟を目指す。だが幸運か不運か、道中にて見知った顔が近づく。

「ラジエル」

「あ、アイズだ。やつほー」

「うん、やつほー。」

何処かへ行くの？」

「ほう、これは僥倖かもしれないな。」

同伴者がいれば言い訳の役にでも立つだろう。

誘ってみろ」

「ねえアイズ、今からダンジョンに行くんだけど一緒に行く？」

ちよつと試してみたいことあつて」

「ん、いいよ。」

今日はまだ体を慣らしてなかったし丁度いいかも」

道中雑談に交わしつつ、屋台の暖簾を潜るように上層1階へ赴く。

明るかった外の世界より一変。

薄気味悪い空間、湿った空気に充満した死の匂い。

今にも吐きそうになるほどの空気は、暫くダンジョンより離れていた肉体に喝を入れ

るには丁度いい塩梅だった。

久々の死の匂いを懐かしみつつ、足早に進んでいく。

適当なモンスターを見繕い、少々技の相手をしてもらおう。

「ねえラジエル」

「ん？」

「前にゴライアスと戦った時に、貴方が使った魔法って何？」

「これまた直球な質問。」

アイズもラジエル程ではないが、他人の感情の機微に疎く、少々マイペースな性格をしている。

だが、内にて秘めた闘志はファミリア内でも随一。

決して現状に満足せず、どこまでも強さを求める彼女の姿勢は、ある種武人と似通ったものがある。

ロキが鼻屑目で見ても仕方無い程に、アイズの力量は目を見張るものがあるからだ。

そんな力に飢えている彼女が少年の伸び具合を見て、気にかけるのもまた必然の事柄であった。

「ごめん、あの時のこと全然覚えてないんだ」

「そうなの？」

アイズは露骨に表情を曇らせがっかりする。

むにと口を歪め、眉は八の字を描いて落胆を表す。

そういうった意味合いで彼女は非常に素直だ。

それでもと、ラジエルは付け足す。

「うん、でもアイズの見たいもの、多分見れると思うよ」

「うん？」

向き直るダンジョンの通路にて犇めくは無数の敵。

やはり現在のダンジョンは異常だ。

群れをなす個体自体は確かにいるが、今回に至ってはあらゆる個体が文字通り魑魅魍魎としてゐる。

弱き個体は喰われ、蹂躪される。

そうして弱肉強食のサイクルを経て、残った個体たちが次の獲物を待ち構えている。

我先にと、猛る戦意を全面に出して、狂ったように冒険者たちや弱き個体を襲うのだ。

今ではギルドによる厳戒令が敷かれており、Lv2以上の冒険者以外は立ち入りを禁じられている。

前年とは比較にならないほどの被害が、後を絶たないからだ。

「ひさしぶりだなあ、この空気」

【ああ…… 実に久方ぶりの殺気だ】

見るがいい、ただ殺戮を求め続けたその姿を。

欲望の赴くがまま蹂躪を繰り返し、悪戯に力を溜め込み、傲慢を体現した存在こそ奴らだ。

とはいえ、本能はそう簡単に腐るものではない。

目の前に広がる有象無象は今すぐにも飛びつきたい反面、己の力量を超えた獲物相手に尻込みをしているのだ。

欲と自制が葛藤し、危うい綱渡りをしている。

そうした連中相手には、時間という毒を塗り込む。

時を重ねるほど、それは次第に身体を侵食し、最終的に理性という籠を外してしまう。気を伺っているのではない、欲が自制を上回る時を待っているのだ。

そして、緊張という綱が途切れた時、初めて生死の選択を迫られる。

「弔獸戯我——悪鬼燈籠」
あつきとうろう

「——ッ!!!」

食い殺さんとばかり飛びついた。

だが目の前に広がるのは鏡に他ならなかった。

深く濁った瞳にでも分かるほど、眼前に飛び込む景色は、自分たちと同じように此方を食い殺さんと突貫してくる。

赤い何かが、獰猛な牙を突き立て襲い来る。

避けられぬ個体は尽くがその牙に貫かれ、身体を灰へと変えていく。

【まずまずといった具合だな。

さて、次はどうする】

「やっつけよう、てつてー的に」

それでも勇あるものは獲物とする少年に飛びかかる。

数えるのも面倒になる程の数ではあるが、有象無象がどれほど集まろうと所詮は烏合の衆。

恩讐の炎を操る少年相手に、凶暴化しようと止められる相手ではない。

【ならば、軒並み焼き尽くせ】

「弔獸戯我——獸王爆現」
じゅうおうぼくげん

大地を強く踏み鳴らすと共に、眼前の地が爆炎とともに爆ぜる。

震脚がより強く、恐ろしいほどの火力をもつて敵を一掃する。

大地から吹き上がる爆炎は、光を目視した後では回避もままならない不意打ちとなる。

たかが炎とて侮れるものではない。

何しろ、少年が扱う炎はあらゆる手段をもつてしても消すことの出来ない不浄の呪い。

対象を焼き尽くすまで、水を掛けようが転がろうが魔力を途絶えさせない限り決して消えない。

「弔獸戯我——とかげこうえん 蜥蜴咬炎」

「すごい、あの時と同じくらいに………」

腕を口に見立て、食むように振るう。

炎を爬虫類のように変化させて纏い、触れるものを平等に散らしていく。その様まさしく爬虫類の如し。

しなやかに懐に入り込み、その無防備な脇腹を食らう。

燃え滓を目くらましに意表を突き、頭を丸呑み。

陽炎を味方につけ、自身の姿を誤認させ背部に牙を突き立てる。掌で踊らされるとはこのこと。

血走った眼では、童子一人に手玉に取られる。

炎が加わることにより、これまでより美しく且つ大胆に舞う。

突き進む道を照らすように、手探りで障害を跳ね除ける。

【もつとだ、もつと存分に薪を焚べろ！】

「弔獸戯我——ひばちせんえい緋蜂尖銳」

貫手を全体重を乗せて振り抜くことで、自らを槍として突貫。

風圧をもつて八つ裂きにし、炎をもつて灰にする。

その熱風にすら触れてはならない。

ラジエルの振るう全てが一撃必殺と同義。

幼年にして一個小隊に匹敵するラジエルの様は、正しく一騎当千そのもの。

一息に振り抜いた貫手は、苦もなく狂暴化したモンスターの波を掻き分ける。

凶暴化したモンスターなどなんのその、立ちほだかるのなら軒並み沈めてご覧に入れよう。

燃え盛る大地にて平伏すものはおらず、ただ災害が過ぎ去ったことを表す燃え滓が漂うのみ。

そこに僅かな戸惑いを見せる。

自分でもどうかとラジエルは先程の手応えについて考えていた。

「ラジエル」

「ん、来たね」

【燃やし甲斐がありそうだ。

あの猪武者の知己か？】

「オオオオ!!!」

少年はおろか、アイズをも悠々と越える体格を持ったモンスターが意気揚々と馳せ参

じる。

黒々とした短い体毛に、全身を鎧のように覆う発達した筋肉。

太く短い一對の角を掲げ、冒険者へ挑戦状を叩きつけるように吼える。

普段以上に滾っているミノタウロスは荒々しい息遣いを漏らし、血走った目をラジエ
ルたちへと向けた。

「上層まで登ってくるなんておかしい。

それに、前の遠征時にあらかた掃討したはず」

【生き残りがいた、ただそれだけのことだろう。

何ら珍しいことではない、現にここにも生き残りがいるのだからな】

「うん、生き残って強くなつてたんだよ」

それはかつての再現。

名も知らぬ村に立ち寄り、名も知らぬ山にて名も知らぬ少女を背に、名も知らぬ怪物
相手に立ち回つたあの日の再現。

死と隣合わせだったいつもの出来事。

ただ何となくそう思えた。

いつ死んでもおかしくない場所に身を置いていたのに、ふと懐かしいと。思えば、アレがラジエル・クロヴィスという少年にとつての始まりだったのかもしれない。

誰かの為に戦う場所を設けられたのは、恐らくあれが最初だったのだろう。

それでも、いつかは擦り切れ燃え尽きてしまふ記憶の残滓に過ぎない。

生きている限り、少年は人殺しの術以外は摩耗していくのだ。

だからこそ、かけがえのないものを書き留めるように、魂に刷り込むように戦いに死力を尽くす。

それだけが、数少ないラジエルにできる事のうちのひとつなのだから。

意識をミノタウロスに戻す。

かつての己を見るように、ラジエルはそのミノタウロスを眺めていた。

掃討から命からがら逃れ、力を蓄えて報復の時を待っていたのだろう。

同種と比較にならない体格に無数の傷。

さぞ多くの死地を潜ってきたのだろう。

同情もしよう、憐れみもしよう、自分も同じだと慰めもしよう。

だが、それでもこちらにも譲れない道がある。

境遇似たもの同士であつたとしても、立ちほだかるのならその屍を乗り越えるまで。

「弔獸戯我——虎指爪葬」
こしそうそう

手刀を振りかぶり、斜めに半回転しつつ振り下ろす。

また同じ右腕で振り上げ、追撃に左腕も振り上げる。

獲物を弄ぶかのように転がし、悪戯に無邪気に殺すのだ。

だが、流石鍛え抜かれた鋼の肉体と讃えるべきだろう。

切傷にはなれども、深手には至っていない。

寧ろ意識すればするほど鎧は堅く、敵の攻撃を弾こうと躍起になる。

鋼の肉体の特権を思うままに、ミノタウロスは其の剛腕を振るい追い詰める。

【戯れよ、燃ゆる我らが魂は怨嗟のごとく】

「弔獸戯我——炎戯・虎指爪葬」
えんぎ こしそうそう

「ッッ!!」

炎が灯るだけで手刀は激変する。

切傷と火傷が伴い、肉壁を強引に焼き焦がす。

筋肉繊維がみちみちと千切れ、ぶすぶすと悪戯に焼いていく。

骨にまで伝わる有り得ない炎熱が芯にまで届く。

苦痛を伴わない筈がない。

先程とは全く異なる獲物と対したミノタウロスは、漸く己の考えが通用しない相手であると悟った。

自分より小さくあろうと、目の前の人間は畏怖すべき対象。

表情を一切変えず、ましてや雄叫びを上げるでもない。

無機質な人間機械を相手取っているかのような、そんな気味の悪い感覚が纏わり付く。不快感がこの身を揺さぶり、切傷が絶え間なく苦痛となつて形になる。

最早ミノタウロスに残された時間などない。

この拭い切れぬ不快感を消すためには殺さねばなるまい。

それ以上に、早々にこの薄気味悪いモノを葬らねば、腹の虫が収まらない。なればこそ、自身が持てる限りの全て。

全身全霊の一撃を使わなければこいつは落とせない。

出し惜しみなど考えるな。

今出せる力を最大限引き出し、眼前の敵を完膚無きまでに粉碎する。

本能の赴くがまま従う。

重心を落とし、前傾姿勢を維持。

右脚で地を二三度蹴り抉り、自身にとって程よい発射装置をすぐ様設ける。

射出する直前に息を大きく取り込み、全身の肉体を活性化させ、内にて秘めた闘志で最高の一撃を上塗りしていく。

先程より鋭くなつた眼光を放ち、静かに唸る。

対峙する人間の表情はやはり変わらない。

忌々しいが好都合。

その澄ました顔が癪に障るが、ソレ怒りが自身の力を更に増大させる外的要因となり得る。

数多ある種族の中ではあるが、今のミノタウロスの力は紛れもなく種族の中で頂点に位置する。

薄気味悪い感覚も、目障りな佇まいをも見るのもこれで最後だ。

「オオオオオ!!!」

立ちはだかる全てを粉碎する一撃が射出される。

堰き止められていた濁流が一気に流れ出すように、ミノタウロスは階層全体に響き渡る咆哮を轟かせながら猛進した。

火傷が痛みを滲ませるが気にする事はない。

灼熱の空気が肌を焦がすが怯む事などない。

未だ狼狽えない相手の顔など、見る必要などないのだ。

この滾る闘志が赴くがまま突き進め。

ミノタウロスが放つ渾身の突進攻撃が、冒険者を葬らんと迫る。

『すごいとは前々から思ってた。

でも、なんだろう……… なんか見えて怖い気がする、かな?』

『ああ、鬼気迫ると言う言葉と共にあの子の顔が浮かんでしまう。

ニスヘグ子鬼か……… 言い得て妙な二つ名だ。

アイズもそう感じたのは当然の反応だろう。

ラジエルは見ていてとても危なっかしい。

好奇心のままに火遊びに興じる子どものようだ。

私が最初にあの子と出会った話をしただろうか?』

『うん、ラジエルの前で魔法使ったんでしょ?』

『私の中で最大級の炎属性の魔法を使ったんだ。』

私が目を引いたのは倒したモンスターでなければ、インファント・ドラゴンでもない。

一番気になったのは、私の炎を見るあの子の眼だ』

『初めて見る魔法だったからじゃないの?』

『私も初めはそう呑気に考えていた。』

『そうであれば認識も変わってたんだが……』

『思えるんだ』

『?』

『なんと言えばいいのかな……』

『私の見解から言えば、あの時のラジエルは』

セーフティエリア
安全階層での一件からそうではないと

『炎を鏡に映る自分のように眺めていたよ』

—— 「弔獣戯我—— 炎戯・龍墜崩拳」

リゆうつひほうけん

全てをかき消して、その拳は爆ぜた。

アイズは言葉を忘れて見惚れる。

直撃した刹那にミノタウロスの全身に爆破が駆け巡り、骨も残さず消し炭に変えてしまった。

少年の放った一撃がミノタウロスの頭蓋を捉え、身の丈以上の敵を屠ったのだ。

後方で見えていた自分をも吹き飛ばし兼ねない風圧に耐え、ほんの少し身構えただけで、ミノタウロスであったものは跡形もなく焼失した。

突きを受けた瞬間に爆散したのだ。

「……………子鬼ニスヘク」

咄嗟について出たソレは、誰の耳に届くことなく霧散した。

陽炎の奥にて佇む少年の姿は、最初にあつた頃と変わらない顔をしていて、ひどく遠くに行つてしまったような感覚。

あの時間いた悲痛な慟哭。

その言葉が真意であるのなら、いつか彼は同じような惨事を起こし、自身諸共炎と共

に消えるだろう。

赤き炎と共に靡く黒い服が、あの時の記憶を思い起こさせる。

それ以上にアイズは、ラジエルの飛躍的成長を羨んでいた。

自分ももつと、強くなりたい。

ただそれだけを胸中に秘め、その強さの真意を確かめようと思った。

「知りたい、貴方の強さを——」

劍姫^{けんぎ}は当てられ、子鬼^{ニスヘグ}の強さに魅了される。

それがどれほど恐ろしい世界なのかも知らずに、アイズは知らず知らずのうちにその深淵を覗き込む。

これもまた、アイズにとっての始まりにも過ぎないのだ。

「どう見えた？」

「どうって、いや変わった奴だなくらいにしか感じなかったつすよ。」

年変わんねえのに妙にガキだなとかそんな感じすかね」

「そうよね。」

普通はそう見えるわよね」

「どうしたんすか？」

ヘアリストス様が他のファミリアの奴に興味持つなんて珍しいつすよ。

しかも手製の防具まで作るし、何つーか……… 入れ込んでるつーか」

「あら、妬いてくれるの？」

いつも無愛想な顔をする割に可愛いところもあるのね」

「いや！そんなんじゃないつすよ！」

「なんじゃなんじゃ？」

一丁前に主神様に色目なんぞ使いおつてからに、アレか？

思春期特有のお盛りというやつか？」

「やめろ生々しい！」

てか盗み聞きしてんじゃねえよこのつ……… やめろ引つ付くな……… !

ああ！ちよつと気晴らしになんか打つてきます!!

入つてくんじゃねえぞ！」

「こら待たんかヴェル坊！」

「いいのよ椿、やりたいようにさせてあげましょう。

ただでさえあの子には退屈な思いをさせてるの、自分の家ホムの中でくらい自由にさせてあげなさい」

「まあ、それもそうか。

それより主神様よ、手前は前から疑問が拭えぬ。

何故あのような童相手に、主神様自らが槌を振るう？

訳ありなのは百も承知だが、このオラリオではそのような者たちなぞそれこそ吐いて捨てるほどいる。

言いつ方の悪さを承知で申すぞ、少々他フアミリアの眷属に肩入れしすぎなのではないか？」

「…………… そうね、否定してもただの言い訳に過ぎないものね。

認めるわ、確かに私は少々…………… いえ、あのラジエルという子どもにだいぶ入れ込んでいる。

でも仕方ないじゃない、防具だけで完結する冒険者なんて珍しいもの。

私たちが興味を持たない筈がないわ。

口約束とはいえ約束してしまっただもの。

気まぐれが変に働いちゃったのかもね、それでも一応神なんてやってるから反故には

できなかつたの。

それに、前にうちの子たちを助けてもらった借りもあるしね」

「それはそうなのだが……」

「椿、貴女武具を大切にする人は好きでしょう?」

「は? そりゃ手前から鍛冶師の性みたいなものだからな」

「単純に言えば、一目惚れよ。」

あんなに大事にされた防具もの見せられて黙ってるなんて、私には到底出来ないわ」

「?」

「貴女も鍛冶以外に目を向けないとダメね。」

問題が山積みなのは重々承知してるけど、目下の課題はあの子をより強くすること。

もしかしたら私たちだけじゃなく、このオラリオ全体の窮地を切り抜けられる逸材になるわ」

「主神様がそこまで言うのか?」

「最も、それが皆の求める光とは異なるでしょうね」

第37話 少年、修羅の道へ

——聞こえる、怨嗟に満ち足りた嘆きが。

何故死なねばならないのかと。

何故我々がこのような理不尽な目に遭うのかと。

——聞こえる、全てを賭して総てを呪う慟哭が。

怨み、呪い、憎み、怒り、殺してやる。

この命助かる見込み無しとなれば、何もかもを道連れに冥府の狭間へと落ちよう。

望んだ覚えのない死を与えようというのなら、貴様らへにも等しくそれを与えよう。

——聞こえる、焼かれていく罪なき者の声が。

報復だ、必ず貴様らを同じ目に遭わせてやる。

奪われたのなら奪い返す。

殺されたのなら殺し返す。

この憤怒と深い憎悪を薪とし、復讐の業火を舞い上がらせる。

——聞こえる、一人の少年の叫びが。

お前たちの代弁者は自分であるのだと。

「アイズ、そつちはまかせるよ」

「うん、任せて」

短いやり取りで互いのやるべき範囲を正しく認識する。

先程のミノタウルの戦闘で周囲に位置するモンスターたちに勘づかれたようだ。それもそのはず、先程の戦闘もとい今のラジエルの戦い方は少々派手すぎる。

爆炎を轟かせ、悪戯に熱を放射するため嫌でも周囲の注目を集めやすい。だが、少年にとっては好都合。

大義名分で殺し尽くせる相手が無尽蔵に湧いて出てくるのだ。

【迅速かつ派手に殺し尽くせ】

「うん、いこう」

左右上下に飛び跳ね、荒れ狂うモンスターたちを置き去りにする。

枷が外れ、定期的にオツタルと修行を行っているラジエルは、その強さを更に一段階引き上げた。

目に見える体力や敏捷さだけではない。

持ち前の技量を以前より磨き上げることに成功したのだ。

やり方は至つて単純。

修行で、文字通りオツタルの動きから見えて盗んだ。

力や体格を真似ることは出来ないが、その偉丈夫を影から支える技能は例外だった。

より早く打ち込むために必要な動作とは。

より効率よく壊すためにすべき事とは。

より行動を最適化するために捨てるべきものとは。

昨日の自分より強くなるためには、やはり鍛錬を積み重ねる他ない。

冒険者として強くなるには戦い続けられそれで事足りる。

だが、少年の目指す境地はそこではない。

人であるが故に、人として本来歩むべき道を極める。

いつか近いうちに自分の主神にそれを話さなければならぬのだが、今は置いておこう。

今はこの滾る炎の赴くがまま力を振るう。

この身がたかが数時間の闘争で満足する筈などないのだから。

「クハハッ、やはりか！」

俺が戦いを積めば積むほど、その在り方はより近づく！」

上層の敵など狂化してしようと相手にならない。

現に奴らは少年を全く捉えられていない。

攻撃を下す反応を取る前に背後から首を落とされる。

距離の目測を誤り棒立ちとなった個体が軒並み沈められる。

視認する以前にその命を刈り取られる。

その有り様正しく死神の所業。

いくら時間をかけて懸命にその姿を追おうとも、モンスターたちが視認出来るのは赤い閃光の名残だけだ。

絶え間なく湧き、無尽蔵に襲いかかってくると予想されたモンスターは最早数えられるほどにまで減った。

「これで終わり。」

弔獸戯我——飛燕音叉ひえんおんさ

「全く……見えなかった」

「久方ぶりだ、はしゃくのも無理はないか。

……ほお、これは悪くない」

「あ——あ、アレ。

なん——れ」

目にも止まらない直進移動のすれ違いざまに敵を八つ裂きにする。

決して捉えることの出来ない小さく素早い燕の前では、あらゆるものは棒立ちし、その最後を知覚できないまま命を絶たれる。

そして、それは少年にとって僥倖か、はたまた思わぬ不運。

彼にとって魅惑的とも言える道が拓ける。

黒い人格がその様を見て狂喜するが、何とかその場をやり過ごすため堪える。

これよりお楽しみ時間が待っているのだ。

それこそ悪戯に燃え盛るものではない。

堪えに堪え、時が来れば爆発すればいい。

だから、今だけは鎮めよう。

「縦穴、一階層で見るのは珍しい。

どこまで続いているか分からないけど、少なくともここよりは深く潜れるよ。

でも基本は使われないかな、油断して全滅なんてよくあることだし……ラジエル？」

『『反逆せよ』』

「っ!!？」

だから故に、起爆剤を起動させた。

激しく揺れ動く炎は、その種火を強く揺さぶり、その在り方を変える。

少年の呟いた一言で、乾ききった空間が更にその水分を減らす。

岩の一部や瓦礫が砂と化し、熱気が齎す上昇気流により砂が舞い上がる。

視界の悪い砂嵐の中心より炎を渦巻かせて妖しく輝く二つの紅い光を見て、アイズは戦慄する。

景色が一変すると同時に、その姿もまた先程とは別人のそれとなった。

徐々に全貌が明らかになっていったその先には、先程と変わって豹変した表情に赤黒く染まる瞳、常時焼き焦がすような熱気を吹き出す悍ましい魔力^炎。

悪戯を思いついた悪戯鬼は、隠すことなく人に向けるものではない恐ろしい笑みを浮かべる。

縦穴に視線を注力しながら、アイズを見もせずにあっけらかんと言いつつ。

「娘、ここまでの同行ご苦労だった。

だが、これより先我らは別れる。

オレたちはその穴の先に用ができたのでな、貴様がこれ以上オレたちに付き合う必要はなくなった。

踵を返し、このまま街へ戻るがいい」

「待つて、貴方は……一体誰？」

それに目的は一階層で肩慣らしだけのはず」

「クフフツ、そう堅いことを抜かすな。

娘よ、いつぞや誰かが口にしたな。

ダンジョンでは何が起こるか分からんと。

予定通りに事が進むことなど珍しいと。

ましてやここ最近のダンジョンは酷く不安定。

何が起こるかなど最早誰にも予想出来ん。

ならば、運悪く縦穴に落ちたとしても何らおかしくはあるまい？」

「そ、それは……！」

「オレたちは意図せず不運にも崩落に巻き込まれ深部へと落ち、その結果中層に運悪く放り込まれることとなろう。」

そして、救助を待ったために現状維持として周囲の危険分子を排除するのもまた当然の帰結。

なればこそ、あの女との契約は違えていないことになる」

それは詭弁だとアイズは言葉を発することは出来なかった。

この世のものとは思えない姿を前に畏怖したからだ。

荒野にて佇む、炎を司る恐ろしき鬼の姿が、この身体を縛り付けている。

身体はおろか、言葉すら上手く発せられない。

「そんな顔をするな、貴様に何ら落ち度はない。

納得がいかなければ…… そうだな、救援でも募るがいい。

数刻の後に報告し、何処へやも繋がっているかも知れん縦穴に対し、自分だけで探すことは出来ない」と。

時間をかけて人員でも揃えるがいい。

生憎と時間が惜しい、少しでも横槍が入るのを遅らせればそれで構わん。

オレたちが戻らぬと知ればあの女も業を煮やすのぞな。

なるべく精鋭を、大勢の冒険者を集めて欲しいと公言すればいいだろう。

何なら素知らぬ顔で何も知らないと言にしろ」

「で……… 出来ないよ、そんなことっ」

「言つたはずだ、気に病むことはないとな。」

案ずることはない。

オレたちは何も死ぬためにかの深部へと赴く訳では無い。

この矮小な焚火を天にまで轟かす業火へと昇華させるには、夥しい数の敵^敵を焚べねばならん。

雑兵では物足りん。

燃やし甲斐があり、尚且つ質の良い敵^敵こそオレたちの求めるもの。

我らの悲願を成就させるためには避けて通れん話だ」

死ぬために落ちる為ではない。

更なる力を求めるが故に仕方のない話なのだ、目の前の彼はそう言った。

力を求める姿勢としては間違っていない。

自分もそうだからこそ、数多の強敵相手に剣を振るい続け、更なる舞台へ上がること
を急かしていた。

だが、目の前の黒い影にはそんな眩しい向上心のようなものは欠片も見受けられな

い。

もつとタチの悪い怨念に酷似した妄執のようなものだ。

好敵手や眷属たちと切磋琢磨するような輝かしいものではない。

それこそ、自分に関わる全てを根こそぎ焼き付くさんと猛る焰の如し。

迂闊に近寄れば、その飛火はたちまち自分をも焼き尽くすだろう。

だからこそ、アイズはそれ以上前へ進むことが出来なかった。

「我らには時間が余りにも足りない。

なればこそ、この千載一遇の機会をみすみす逃す訳にはいかぬ。

脳裏にチラつくゴミ共を始め、あの猪武者を……ひいてはこの下らん現状を生み

出し傍観を決め込んでいた世界そのものを焼き尽くすため、ここで足踏みする訳にはい

かんのだ」

「あ……………っ」

「それがお前の前に立つモノの正体だ」

小者のような妄言であると、愚か者が抱く虚言であると、馬鹿者が嘯く大法螺であるのなら嘲笑に値しただろう。

しかし、目の前の少年の眼にはそれらが欠片も存在しない。

渦巻き揺らめく炎がそれを証明する。

自分はおろか、このダンジョンすら直に飲み込んでやるという亡者の嘆きのようなど口ドロとした黒い感情。

対象にへばりつき、跡形もなく焼き殺してやるという執念が確かに感じ取れたのだ。だからこそ、この足は彼から一步引いてしまった。

恐れを抱いたのだ。

敵意を剥き出しにして襲いかかって来るモンスターすら平然と受け止めていた劍姫アイズ・ヴァレンシユタインの足が、これより先に進むことを本能的に拒絶している。

「お前が抱くもの、それは人間として至極当たり前の感情だ。

恥じるな娘。

恐怖を知ったのなら、その足は大きな前進を望めるだろう。

ヒトが抱ける闇の実態を垣間見、それを知った上でお前がどのような道を進むのか興味が出たが、生憎それを見届ける時間すら惜しい。

この邂逅が、お前にとって得るものであれば良いのだがな」

「ま、待って！」

「ではな、劍を握るか弱き姫よ。」

焼き切れぬ縁であれば、また合間見えよう。

それまでその命、精々取り零すなよ。

フハハハハハツ!!」

止める言葉を探している合間に、彼は意気揚々と縦穴へ飛び込む。

耳に残る不気味な笑い声を置き去りに、何処へ続いているかも分からない死地へ嬉嬉として飛んでいってしまった。

アイズは迷う。

彼に関係する者にこの事を伝えるか、自身も飛び込み後を追うか。

力を求め戦いに赴くか迷っている自分がいるのだ。

「私は、どうすれば……」

少年を見送った後、リユーは一人買い物袋と悩みを抱えながら街を歩いていった。用があると言ったのは本当だ。

つい先程まで、武器の整備をするためヘファイストスの眷属の元を訪れていたのだ。ただ、急を要する程のことではなかった。

彼の師との会話のすぐ後に、ラジエルとどう接していけばいいのか再び迷いを覚えてしまったからだ。

あの時誓ったことに嘘偽りはない。

だが改めて彼の凄惨な過去を知った今では、自身の身の振り方が今まで通りではないかと考えたのだ。

甘やかすのもいい、今まで以上に愛すのもいい。

持てる力全てを使って彼のために尽くす道もまたあるだろう。

目を背けたくなる過去を塗り潰すような温もりで包み込んで、年相応の生活に差し込んであげたい。

きっと危険は付きまとうことになるが、自分がついていけばそれも不可能ではない。

そう、以前まではそう考えていた。

たがりユーは知ってしまった。

この世の悪の側面、悪い夢のような出来事を中心にいた彼の話を。

いつの世も、世界は無情に残酷さを突きつける。

その責め苦を受けるのは、いつだって力の弱い弱者たちだ。

英雄譚のような存在が近くを通りかかれば、ラジエルの運命は大きく変わっていただろう。

でも現実はそのなにごくもない。

現に少年は世界に対して絶望し、失望と憎しみを抱いてしまった。

本人に自覚はないだろうが、心の奥底では理解している。

変異種のゴライアスとの戦闘で、リユーは理解している。

行き場のない怒りと憎しみ、世界に対する憤怒と慟哭。

日常でその激情が表れないのは、別人格がその負の感情を肩代わりしているから。

故に所構わず暴走することはない。

それも長くは続かないだろう。

何となく、感覚的にそう思った。

変わらないものは存在しない。

生きている限り、存在している限りその有り様は自他知らぬ所で変化させている。

だから、このままではいけない。

いつまた暴走するかどうかなんて誰にも分からないのだ。

ずっとこのままである保証なんて何処にもない。

「どうすれば」

ここにも、現状に答えを見いだせない者が一人。

繰り返し、戯言のように口から漏れ出す。

最早今日一日の中でどれほど眩いたか分からない。

自身が考えうる中で最善を幾度となく探している。

分かっている。

何しろ彼の過去の触りを知ってから、癖のようにこの自問自答を繰り返しているからだ。

芽生えた憎しみはそう簡単に消えることは無い。

宥めるだけでは逆に激情を煽る。

かといってそれを許容し、破滅の道へ赴く少年を見届けることなんて決してできない。

どのような選択を取るべきか、リユーは溜息と共に悪い考えを吐き出す。

「いつぞやの顔つきに戻っちゃってるよ、リユー」

聞き慣れた言葉に、反射的に顔を上げる。

俯き項垂れていたリユーに声をかけたのは、自分にとってかけがえのない家族のうちの一人。

金色の髪が稲穂のように優しく揺らいでいた。

それだけで誰が目の前にいるのか分かる。

アストレアファミリアの面々を率いる代役を担った、たった一人の親友。

世話焼きのお節介、我らが団長代理だ。

「もう、リユーは本当に生真面目なんだから。

悩むとすぐここに来る癖、まだ直らない?」

木々に囲まれ、街の喧騒から隔絶された自然の広場。

以前ラジエルに教えた場所がここだ。

戦闘になるなんて思いもよらない事態に発展したが、基本ここは和で血腥い世界とは切り離された空間。

戦いを繰り返し、摩耗した心を休める優しい居場所。

エルフとしての本能が、自身のことですら一杯になるとこういった場所を探してしま

う。

ダンジョンにあるセーフティエリアのとある場所もそうだ。

中でもあの場所はアストレアファミリアの面々が気に入り、死する時はここで眠りたいと口にするものが多かった。

そんな憩いの場所を求めるリユーの癖を、団長代理のリーヴアはきちんと見抜いていた。

「リーヴア、私はまた分からなくなっていました。

つい最近ようやく一区切りつけ、踏ん切りも着いたというのにまたこの体たらくです……」

「……………」

「頭では分かっています。

彼を、ラジエルをこのままにしておくべきではないと。

彼の心は闇に魅入られ……いえ違いますね、人が抱く悪そのものになりかけています。

心は荒みきり、汚れ、疲れきっている。

けれど、それでもその足を止める事が出来ない。

——私は知りました。

ラジエルの心が砕け、復讐に駆り立てられる原因を作ったその一夜の出来事を」

罪なき人々が惨たらしく殺され、その痕跡を無情にも炎で焼き尽くされた無惨な村の跡。

死体の一つすら残らず、思い出の一つすら灰となった。

無表情の瞳でそれらを眺める一人の子ども。

胸を締め付けられる凄惨な末路を強要された一つの現実。

思うところが無いなどんでもない。

ただ、彼はそれを形にする術を失っただけだ。

だからこそ、その内に人が抱く憎悪の内の一つを生み出した。

余りにも大きなそれは、いつしか自分の激情を代弁する人格となった。

「この世のものと思えない、とは言えません。

私たちが知らないだけで、それは日常に行われている事なのですから。

毎日常に行われているかもしれない。

その事実気づいたからこそ、ラジエルの憎しみは更に膨れ上がった。

でなければ、もう一つの人格を作り出すことなど出来ないでしょう。

——私は聞きました。

普段からでは想像できないあの子の、耳を塞ぎたくなるほどの激しい怒りを」

圧倒的力量的の差を覆し、敵だったものを踏みにじりながら狂気を振りまく一匹の小鬼の姿が蘇る。

自らを炎として燃え上がり、血の涙を流して不条理な現実を突きつける現実に対して吠えている姿が頭から離れない。

何故殺したのか。

何故見過ごしたのか。

何故自分を置き去りにしたのか。

聞くに絶えない悲痛な嘆きが、ずっと耳に残ってるのだ。

「あの子は求め続けている。

何故このような運命を強いられたのか。

自分自身が何を求めているのかを。

復讐なのか、それとも安らぎを求めているのか定かではありません。どちらでもないのかもしれないし、どちらをも求めて止まないのかもしれない。

——そして、私は見ました。

不器用なりに答えを求めて手を伸ばすその小さな背中を」

もつと強くなれば見えるはず。

そう信じて我武者羅に力を蓄え、僅かに見えた光こそが自身にとつての救いなのだと信じ込んだ。

身の破滅と、いずれ振り撒かれるであろう狂気を呼び込む厄災に成り下がることを承知で、愚直に力を求めることを望んだ。

それが、リユウの見た小さな鬼の姿だった。

「何が正しい答えか、何が最悪の事象を回避するに最適な解なのかが分かりません。

きつと遅かれ早かれ、今のラジエルは修羅の道を歩むことになるでしょう。

私がどれほど懸命に説得し、この女の身体を行使したとしても彼が足を止めることはないでしょう。

止める手立てが見つかりません。
故に、私はあれから繰り返し越しているのです」

弱々しく呟き、焦点の合わなくなった瞳が縋れるものを探して揺れ惑う。

リーヴァが見た彼女は、今まで見た中で最も危うい状態だった。

リユーもまた、答えを求めて彷徨っている。

明確な答えを示すことの出来ない世界が、また一人の冒険者を先の見えない暗がりへ落とし込んだのだ。

リーヴァは口を挟まない。

彼女の本心の吐露をただ待っている。

リユーが近いうち自分でその答えに行き着くまで、見守るしかない。

誰かの用意した答えに、本当の意味などないのだから。

「ハハハツ!!

いい！やはりいい！これ以上ない高揚感だ！

——
私は、どうすればいいのですか。

盛りついた獣かオレは！

だが悪くないぞ、寧ろ最高だ！」

「ツ！！」

「あの肉達磨とは比べ物にならない程の雑魚だな貴様は！！

焚べ甲斐のない木偶の坊風情が！

己の無力さに嘆きながら灰になるがいい！！」

「アアアツ！！」

「三本集まればだと？！

烏合の衆にも劣るただの木の葉が幾ら集まろうと、吹かれて散り散りになるのか関の

山よ！！

燃えよゴミ共め！！」

「ガアツツ！！」

「ツ！！

クハハツ！いいぞ！殺し合いとはそうではなくてはな！

一方的な蹂躪など趣味ではない！！

貴様に殺せるか！オレたちを！！」

「何という歓迎か！

ここまで総出でオレたちを祝うか！

その饗もてなし、狂喜して受け入れよう！！

生半可な量で満足させられると思うなよ！！

「ツツツ！！」

「魚風情がつ！！小賢しい！！

余すところなく捌いてくれよう！！

その次は煩わしい声を撒き散らす貴様だ！！

せいぜい余生を満喫しておけ！！

「グウオオオオ！！

フフフ、悪くない……悪くないぞ蛇め！

その二つ首撥ねて尚オレたちに追いつがれば、褒め言葉のひとつは用意してやろう！！

さあ、その薪を寄越せ！！

「フフフ、フハハハハッ！！

ああ、この痛み！この昂り！！この抑えきれん衝動！！

久方ぶりの生の実感だ！！

この死に満ちた戦場こそ！オレたちの居場所に他ならぬ！！

生死の境を行き来するこの血塗ろの世界こそ、我らが生きれる唯一の場所に他ならぬ

のだ!!!

獣共よ！オレたちの血となり肉となれ！！

その生を！その薪を！その憎しみを焚べよ！！

オレたちはその全てを飲み込み、世界を燃やす罪火となろう！！

ハハハハハハッ!!!」

——その対価として、この常世全てを焼き尽くしてくれる！！

第38話 我が憎悪は地獄をも飲み込まん

ダンジョンとは、オラリオという街の地底深くに根差す人外魔境。

富と名声という名の甘い魅惑の香りで人を誘い込み、食い殺す恐ろしき地底世界。

そこに慈悲や救いはなく、ただ自然の摂理である生と死が渦巻くだけだ。

かつて食物連鎖の頂点であると謳われた人ですら、この世界では如何様にも成り下がる。

人であるかどうかなど、このダンジョンにおいては些末な理由でしかない。

強き者が生き残り、弱き者が喰われる。

弱肉強食を如実に体現した場所こそこのダンジョンであり、不埒な考えを持つ者の命を絶つ愚者を淘汰するための世界でもある。

そこでは、あらゆる慈悲や情けは存在しない。

遍くものを飲み込み、嘲笑うかのように冒険者を翻弄してきた。

今日も変わらず、多くの冒険者達を兇戯のごとく縊り殺すのだと誰もが口を揃えるもそこへ赴くだろう。

誰かが口をついた。

それが真実かどうかは定かではない。

当人だけが抱いたただの感想かもしれない。

余裕が故に口から出任せに突いたものだったかもしれない。

ギルドがとある報告を受け続けている。

数多のモンスターが魑魅魍魎と跋扈し、冒険者に対して無情の牙を剥く情け無用のはずのダンジョンが悲鳴を上げている。

——目の前でモンスターがいきなり火の手を上げた。

ある冒険者は言った。

いつものようにモンスターと戦闘を行っていた時だと言う。

モンスターが突如発狂し、その身を炎が覆い尽くした。

苦しみのあまりのたうち回り、背筋が凍るほどの怨嗟を上げた。

その悍ましき慟哭は自身が灰になるまで続いたそうだ。

——モンスターの様子がおかしい。

ある冒険者が口にした。

モンスターの挙動が、以前にも増して奇妙なものになったと。

全てではないものの、あるモンスターは恐怖に怯えたように蹲り、誰が見ても明らかに動揺を表していた。

その身を震わせ、恐怖を払うかのように無作為に暴れる。

弱き固体は恐怖に取り憑かれ、絶叫を上げながら自らの首を掻き切った。

強き固体はその獯猛さに磨きをかけ、あらゆるものに対して無差別に襲いかかった。

自身が強化種だとか、己の性能に驕っている訳では無い。

細胞の反射的防衛手段のように、目の前に映るもの全てに敵意を抱くような有様だったのだ。

そこに同族か別種の生物の境界もない。

ただ目に映る動くものを排除する、それだけの生物になっていた。

——モンスターの湧きが明らかに減った。

通常であれば、各所から各所へと際限なくモンスターが生まれ落ちる筈。だが、こと

今日に至っては勝手に違い、至る所で冒険者たちからの情報が飛んでくる。

どう考えてもモンスターの数が少ない。

ダンジョンのあちらこちらから湧き出る筈のモンスターの数は目に見えて減り、冒険者たちの鍛錬に支障をきたしている。

通常のコボルトですら、群れを見つけること自体稀になったという。

先にも記述した通り、モンスター同士の戦闘や弱個体の発狂死などが頻繁に起こってはそれなりに数も減るだろうと、ギルド側はそう判断した。

——モンスターの意識が散漫だ。

とある冒険者はそう感じたと言う。

モンスターと対峙している時、不意に意識が敵対している此方ではなく、彼方へと視線を擲つのだと。

それも数体に限った話ではなく、どのモンスターも決まって同じ方向を注視することがあるのだと、冒険者たちは揃いも揃って同じことを口にする。

意識を取り込まれているかのように停止したモンスターは、攻撃を受けるまで動かない、近づかれるまで気付かないなどといったケースが多く、その有り様の重度さが伺え

る。

楽に討伐でき、負傷者や死亡者の数が大きく減少したという嬉しい報告の裏側、あまりにも不自然で恐ろしい出来事の前触れなのではないかと不安の声も同時に大きく上がった。

——ダンジョンの地形が変わっている。

あるLv. 4の冒険者が呟いた。

皆気に掛けることはないが、湿っぽいダンジョンの地形が所々砂化しているのだと。

更には崩落による縦穴の数も増えた。

何が起ころるか分からないのがダンジョンであるが、地形や地質、鉱石の類は基本的には変質しない。

外的要因が関与でもしない限りは、あるがままの性質を貫いていくのだ。

ここ最近どころか、今日までダンジョン内部が変化したとの話は寡聞にして聞いたことがない。

まるでダンジョンそのものが干からびているかのようだと、熟練した冒険者たちは口々に呟く。

以上までが、ここ最近にギルドに寄せられた報告である。
ダンジョンに関する情報をここに纏める。

以上

製作者 エイナ・チュール

これらの一部の報告は、新設してから間もないアテナ・ファミリアの眷属が一人、ラジエル・クロヴィスが行方不明になってから半月ほど経過した後に上げられたものである。

煌々と燃え盛るソレは、炎と呼ぶには余りにも禍々しいナニかを纏っていた。

“火”とは元来、世界を構成する五大元素が内の一つ。

全てを焼き尽くす火は本来恐れられるものではなく、土壌を援助する物質、即ち灰を創り出す。

あらゆる物には起源があり、今現在の世界にて生を謳歌する生きとし生ける者たち

は、五大元素のサイクルの元に生まれた命。

遠からずその恩恵を受け、生まれ落ちた者たちが現代に生きる人々なのだ。

破壊は、世界を形作るためになくてはならない必要な力である。

創造の裏には破壊があり、破壊の裏には創造がある。

どちらも欠けては世界の均衡は保てない。

切つても切り離せない因果で結ばれた万物の理なのだ。

——下らない御伽噺だ。

馬鹿馬鹿しい、そう炎は悪態を着く。

そんなもの過去の存在が辻褃合わせに、口から出任せに着いた偽善者の戯言だ。

炎は創造の第一歩だと。

嘲笑すら零れない面白くない話だ。

そんな偉大な力であるのなら、何故自分から全てを奪ったのか。

何故自分から全てを灰にしたのか。

何故罪無き者達を無情に焼き殺したのか。

何故、自分が燃やす立場になったのか。

何故だ、何故だ、何故だ!!!

猛る衝動が暴れ出し、視界に映る何かをただ焼き尽くす。

だが、最早何が正しいかなど知る必要などない。害を成し、敵意を向ける者であれば殺すまで。

それが幼子であろうと、か弱き女であろうと、力無き老人であろうと関係はない。諸共、我が炉に焚べるまでのこと。

そうだ、敵であれば躊躇う理由などない。

自分に仇なす輩に、その気概に相応しい対価を払ってやるだけの話だ。何も迷う事などありはしない。

殺せ、殺すのだ。

かつてこの身に降り掛かった惨劇の幕を、今一度この手で再び開ければいいだけなのだ。

やはり復讐を遂行する他道はない。

今一度、己の役目を再確認する。

どうあつてもこの世界に慈悲はなく、弁明の余地など端からない。破壊し尽くし、殺し尽くす他この心が晴れることは叶わない。

この昂る熱を冷まさせるためには、些かこの世界は熱を持ち過ぎた。

蹂躪だ、殲滅だ、徹底した排除だ。

救いのない世界など存在する理由になく、悪戯に不幸を振りまく厄災の巣窟など根絶

やしにして然るべきなのだ。

心を、憎しみを、怒りを燃やせ。

それこそがこの身を動かす原動力。

最終的にこの常世全てを我が憎悪の炎で塗り潰す。

汚らわしい悪人共の手によつて成り立つた世界など焼き尽くしてしまえ。

涙を流す者が居なくなる、孤独に悲しむ童子を生み出すことのない世界に変えるのだ。

是非もなし、例外など以ての外だ。

全てを——。

——その黒髪の子、止まってください。

嗚呼、またか。最近妙にこのノイズが頭に響く。

忌々しい、憎たらしい程この上ない。

復讐を再確認した今になって尚、ノイズが頭に響くようになった。

思考を乗っ取られたかのように視界が、記憶が別の映像に変わるのだ。

伐採を始めて、どれだけの時が経ったか分からない。

薪焚べに精を出し、心身共に充実してきた時にそれは起こった。まあいい、気にしなればいいだけの話だ。

ただのノイズ、頭を何度か振るえば落ちる。

そうだ、いつも通り気にする必要などない。

自分はただ殺し尽くすだけだ、例えこの身が――。

――どうぞラ――、ついでに――を――けて。

嗚呼、いつにも増してこれは重症かもしれない。

磨耗に拍車が掛かったか、やはり回復を優先するべきなのだろう。

いや気にするな、記憶の焼却など今に始まったことでは無い。

何も問題はない。何もだ。

この復讐に燃える炉さえあれば、他の事など些末な――。

『本当に、それで良いのですか？』

当たり前だ。この命残った時からそう覚悟していた。

この世はおろか、この命の煌めきなど一瞬。

そう、泡沫の夢のようなものだ。

だからこそ、最後に芽生えた感情に従わざるを得ない。

それ以外に、道など存在しない。

自分^{オレ}が継るべきモノは、最早その程度しかない。

例えその果てが、魂すら残せない破滅を招く結果になろうとも。

『貴方に、救いはないのですよ?』

救いなど、最初から求めてなどいない。

全てを道連れにし、諸共消え去る。

ただそれだけを願ひ、請ひ、手を伸ばした。

多くの尊き者に囲まれ、有り触れた一時に過ぐす道もまたあつたのだろう。

ごく普通の生活を送り、愛を享受し、時に唾み合い笑い合う友と共に過ぐす世界もまた、あつたのかもしれない。

だが、それは到底実現し得ない御伽噺なのだ。

自分^{オレ}を見る。ただ一つの幸せすら手に入れられなかつた哀れなこの姿を。

悲嘆に暮れなかつた日なんてない。

悲しみに打ちひしがれなかつた瞬間はない。

涙を流さなかつた時なんて、僅かな時ですらなかつた。

何故自分^{ホッ}なのかと、思わなかつたことは終ぞなかつたさ。

——だから、慈悲なんて要らない。

『その先は、地獄なんですよ？』

嗚呼、それもいいだろう。

死ぬ行く定めは、元よりこの世界に住まう生きとし生ける者全てに当て嵌る。

ならば、この果てもまた一つの解に他ならん。

死に行くのなら是非もなし。

行き着く時間が、早まったかそうでないかの違いだ。

なら、どうでもいい話じゃないか。

皆いづれ燃えて居なくなってしまうのなら、近いうちに灰になったっておかしくない。
い。

殺し殺される世界が、世界自身がそれを肯定するのなら。

自分^{ホク}は、喜んでその悲劇の舞台に立とう。

『そんなことをすれば…… 貴方は』

解はここにて定まった。即ちこれ以上の問答は無意味。

これより、自分^{オレ}はようやく足を運べる。

世界を焼き尽くす手始めに、神とやらが創りし大魔境を焼却する。

世界への宣戦布告に、これ以上の手向けの花はあるまい。

だからこそ、改めて、今一度告げる。

そして思い知らせる。

自分^{ホク}を見捨てたことへの愚かさを。

皆を見捨てたことの借りが、どれほど大きい物だったのかを。

勝手な都合で皆を振り回したことが、一体どれほどの大罪だったのかを。

もう一度だけ、なけなしの心を込めて誓うよ。

自分^{オレ/ホク}は、ゼツタイに許さない。

——はて、オレは何を口にしたか。

「……アテナ、いいかしら？」

「ああ……アストレアか。」

今日も運が良いことに、まだラジエルとの繋がりは切れていない。

搜索隊をギルドが編成してくれたはいいものの、まだこれと言った報告は受けていないよ」

「そう…… 本当に心配だわ。」

あの子結構無茶するから。

貴女も心配なのよ？まだ目の隈、取れてないのに気づいて？」

「なに。私は大丈夫だ。会えないのはこれ以上ないくらい寂しく辛いものがあるが、生きていてくれるのなら希望はある。」

お説教の準備でもして、しっかり迎えてあげるさ。」

私より、リユーの方はいいのか？」

その…… なんだ、随分憔悴していたが」

「今はリーヴァたちが支えてくれてるから何とか持ち直してはくれているわ。」

最も、表面だけに過ぎないのは誰が見ても明らかだけど、彼女は塞ぎ込むことは止めた。」

意味が無いと理解してくれたのよ。」

今日も懸命に時間いっぱいまで、ラジクんの搜索を続けてる」

「ダンジョンの動きも妙と聞く。」

この状況に乗じてヤツらも動き出すだろう。
戦争など発展しなければいいんだが」

混沌とした状況に乗じて良からぬことを企む輩はいつの世も存在する。

更なる混乱を引き起こし、自身の欲望を満たそうと躍起になつて悪事の限りを尽くすのだ。

「それに、何だか非常に気味の悪い感覚だ」

アテナは直感的にそう悟つた。

イツイルス闇派閥が絡んでくるからではなく、もつと深いところに何か得体の知れないモノが息づいているかのようなそんな錯覚。

未知にて理解の範疇に届かないものに、人々は恐怖を抱く。

生物であるのなら尚のこと、アテナ神々にとつてもそれは例外ではない。

ましてや今この身は、今を生きる人と何も変わらない神の力を封じた身体。

嵐の前の静けさにしては物騒だが、もしこの直感が正しければ、静けさなど欠片も印象に残らない大波乱に満ちた状況となるだろう。

「失礼しますっ!!アストレア様、火急のご報告です!!」

だからこそ、いつの世も存在する。

口は災いの元であるという先人が残した不吉な言葉を。

こうして闇は動き出し、光は後手に回る。

悪意の源はすぐそこまで迫っている。

振りかざされる赤い残光が、薄暗い空間を灯す。

赤々しい鮮血に光と艶を与え、鬱蒼とした光景に色を添える。

ある時は蒸発し、またある時は悪戯に縦横無尽に赤を広げる。

多くのものがその光に惹かれ、その悉くが散った。

知らず知らずのうちに破滅の道を辿るのは、何も夏の夜の虫たちだけではない。

生物であるのなら灯りに群がり、手を出してはならないものに手を触れる。

「クソガキめ!!」

「困め! 困んでありつただけの魔法を打ち込め!!」

そして、自分たちがそれを更に燃え上がらせる薪になると知る由もなく。

その儂い命を一瞬で燃やしてしまうのだ。

迫り来る風の刃も弱々しい炎も、全てを凍てつかせる無慈悲な吹雪でさえも例外なく燃えていく。

鉾物すら両断する鋼の剣、無情に敵を貫く長槍、暗殺者の如し獲物に纏わり付く影、集約される悪意の塊。

それらも総じて、その灯りの薪となる。

「デタラメ過ぎる!!」

「武器はおろか、魔法すら燃え尽くされるぞ!」

「適いつこねえ!!」

「20人は下らねえ人数で!」

「Lv. 3で袋にしてんにこれだぞ!」

「コイツはLv. 2の駆け出しなんだろう!!?」

「ひ、怯むな！所詮ガキ一人、この数で袋にすれば！」

「いぎやああアアアアア!!!」

火が!!火が消えねエ!!!

消してくれ!消してくれよ頼む!!!」

鬼が嗤う。絶え間なく響く絶叫を愉快にと嗤い、一人また一人と灰にしていく。

それもその筈、彼らに逃げ場など最初から存在しない。

決して消えることの無い炎が周囲を覆い尽くし、逃げ場という逃げ場を悉く阻んでいくのだから。

怒りて臥す者『小鬼』^{ニズヘゲ}は、悪戯に近付く者を決して逃がしはしない。完膚なきまでに燃やし尽くし、その灰を自身の血肉に変える悪しき存在。

出会ったが最後、懸命な抵抗を嘲笑いながら容赦なく物言わぬモノへと変えてしま
う。

「この……このバケモノが!!!」

その轉りを最後に、また一人土に還った。

鬼は嗤う。矢継ぎに現れてくれる獲物の姿が面白く、憎悪を注ぎ続けてくれる姿があまりにも愛おしかったから。

彼らの声に意味などない。

ただ、愉快に歪む表情と困惑する言動だけが鬼にとつての愉しみ。

それを提供してくれる彼らを、丁寧に馴るだけ。

愛おしい子に優しく愛撫するように、愛らしい動物を愛でるように等しく愛していく。

止めどなく溢れる断末魔を、お礼と受け取り全てを愛す。

無情に包み込む憎悪の炎が彼らを抱擁する。

「……………ギっ……………アアア」

徐々に遠ざかっていく声が愛おしく、とても惜しく感じる。

もつと聞かせて欲しい、もつと愛されて欲しい。

この手で、この熱で、この想いで自分の中へと還って行って欲しい。

そして、このどうしようもなく猛り狂った熱を解き放ちたい。

数百数千拳を振るったところで冷めることがない。

それどころか、戦う度にその熱は更なる波となって押し寄せてくる。止める手立てはない。

しかし、それでも鬼は構わなかった。

「水っ!!!」

誰でも、いい!!

オ、れにイ、水ヲ、!!!」

こんなに耳を蕩けさせる音で溢れているのだもの。

もつと聞きたくなるのが、人の性というもの。

芋虫のように這いずり回るソレを踏み潰す。

背中から落ちたかのような音を出して、ソレは次第に小刻みに震えて止まった。頭のてっぺんからつま先まで電気が走ったかのような感覚を覚えた。

鬼は自分の身体を抱き締めて、恍惚とした表情を浮かべる。

もつと、もつと欲しい。

このゾクゾクとした感覚を、もつと味合わせて欲しい。

余韻に浸り続け、結局ソレが灰になるまで見つめていた。

儂いモノが散る様は、見ていてやっぱり面白い。
鬼はまた、愉快に嗤う。

心底可笑しそうに、童女のような表情を浮かべケラケラと嗤う。

心底愉しそうに、童子のような無邪気さでカラカラと嗤う。

まだ、愉しめる。

その奥に、まだあんなにたくさんの目玉がこつちを覗いている。まだ、あんなに愉しめる。

そう思うと更にゾクゾクした。次はどうしようか。

脚を腕いで燃やして反応を愉しもうかな。

指先をゆつくりと削って絶叫を愉しもうかな。

喉を潰して掠れた声を愉しもうかな。

お腹を貫いて内側から燃やして愉しもうかな。

片眼を壊してのたうち回る様を愉しもうかな。

半分にして僅かに動く最後を見て愉しもうかな。

丁寧に全身の皮を剥がして苦勞を愉しもうかな。

普段見ない身体の内側でも観察して愉しもうかな。

態と逃がして安心した所を殺して愉しもうかな。

全身をぐにやぐにやにして蠢く姿を愉しもうかな。

ああ、どうしよう。どれも試してみたい。

どれも試して、思いつく限りの反応を愉しみたい。

きつと、もつとゾクゾクするよね。

普段から威張つてたキミたちがみつともなく転げ回る姿は、きつと爽快で愉快な見世物になってくれるよね。

ボクたちを壊して愉しんでた立場が一変して絶望してくれるよね。

アイテムを頂戴なんて言わない。

お金を頂戴なんて言わない。

武器を頂戴なんて言わない。

——ただ、その命^新を頂戴。

それさえあれば、ボクは本来の形に戻る。

「情報収集に出ていた先遣隊、23名の冒険者たちの恩恵が途絶えました……!!」
狂気は加速し、破滅の扉は開かれた。

間もなく火は放たれ、混沌とした時が訪れる。

荒れ狂う炎は厄災と狂気と呼び込み、触れるもの全てをその奥底に引きずり込む。
ならば、生きとし生けるものに逃れる術はない。

受け入れよその憎しみを。

やがてそれは、その者の愛すべき隣人をも手掛ける剣となろう。